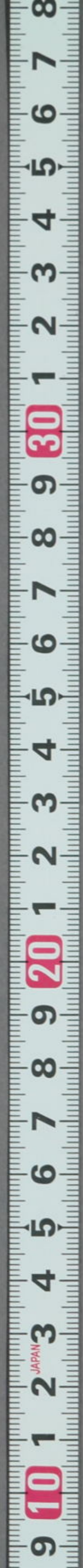


畫卷

全六卷



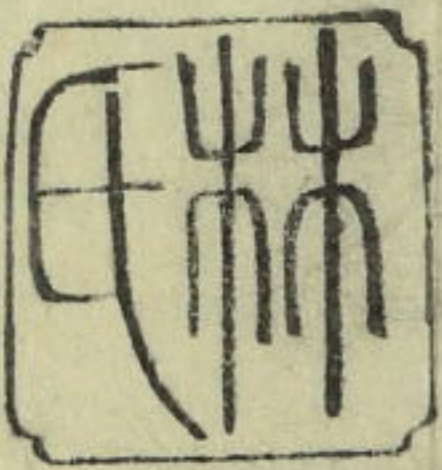
畫筌序

本朝騁譽於丹青者豈止數十家而已耶雖然歷倒衆史獨步古今者雪舟已下不足數焉若狩野法眼元信者絕妙精巧所謂畫家百世之師也其流風氣韻瀰漫乎天下

書卷之一
紙筆以為業濡墨為勒者不知幾千萬人本州佳士狩野法橋幽元者探幽齋守信之門人也奉仕邦君擢為畫師其為人天機所到素以為約今故曰繪事後素守房其庶乎予自夙齡游畫工之藝研

精於溪石霽思於山水親受習於幽元翁糜丹粉者有年于茲矣頃曾嘗中華暨本邦之圖籙為粉本自目之曰畫蓋平日師所施與已所秘傳口訣紬繹出而似罔有遺漏然非欲示之達者庶復

之庸工宜為畫道之楷範矣
只恐淺末之才管中之見難
免乎杜撰之誚也因自題教
語為之序云旨正德壬辰孟
春吉旦筑前直方林守篤



凡例

一卷首載六法三品而妄加臆見為之和解後學者訂正
之則幸甚

一所題畫論傳受之篇師小方守房常談于門人之語也
一辭固雖卑陋畫學秘要在此篇豈可不盡心哉
一畫彩之種類及製法悉記之深所畫工之秘者也
一凡山水草木禽獸蟲魚人物鬼神之類皆有真州行之
筆法雖不一定必有規矩種類各分部門而述之彩法
之序不令其先後亂之不其精詳者厭多而省之

一凡引用書又不多如圖繪寶鑑立翁畫傳圖繪宗彝本草綱目大和本州本朝食鑑列仙全傳本朝畫史聖賢像贊佛像圖彙花譜和爾雅倭漢印圖等畧撮其要以爲畫工之一助也

一凡所圖州樹鳥獸器財等之狀悉以而不要似于真矣但隨畫家之法而已

畫筌

我本邦馳譽丹青者代不乏其器雖然畫家者流各有其長與所短而未嘗見其無間然矣近代如法印探幽齋狩林寺信則胸中造化有毛髮生於物動植飛潛諸品得之心而應乎手通神之妙豈有長與短之嫌也百謂古今第一任手矣然執之前而幽之者探幽齋之門人而善畫者也林守篤子亦得其傳於此元氣以未寓思丹青多斗乾勤不傳後乃其自體寫

探函高函之為... 筆勢可保記丹... 法欲惟使世人
 志其... 憾焉守篤... 勤矣或謂... 畫
 有六法三祖... 傳藏之... 曰不... 為昔郭... 波馬... 聽彼人歌而
 言... 石季倫... 同其曲... 郭云... 不知季倫... 笑曰... 卿不識曲... 耶言
 佳郭答曰... 譬... 見西施... 何必... 藏姓名... 然後... 知... 於後... 系
 六然... 雖不知... 繪事... 亦識... 其為... 佳... 子... 復... 莫... 言... 同者... 領... 而... 之
 於是... 書... 皆... 保... 身... 丑... 小... 暑

浪華 宋任專安叙



畫全卷一

目錄

序

凡例

六法

三品

十二忌

製作指模

觀山水賦

畫論傳受秘事口訣

墨色

骨法

筆勢

習畫法

描草木法

筆法

寫形法

彩色法

畫意

地挽法

繪押朱印法

繪削子圖

繪筆圖

切落之圖

繪具製法極秘傳

畫筌卷一終

畫筌卷之一

筑前直方 隱士魯軒林守篤 編

六法

一曰氣韻生動

守篤竊ひたか按おさずるに是ハ縱まハ鬼神人

物鳥獸草木禽鳥事ことに氣きと韻いんと合あはさるる者ものは皆みな靈たま氣きと合あは

さるる者ものは皆みな靈たま氣きと合あはさるる者ものは皆みな靈たま氣きと合あは

目めと氣きと合あはさるる者ものは皆みな靈たま氣きと合あは

みと氣きと合あはさるる者ものは皆みな靈たま氣きと合あは

二曰骨法用筆

骨法こつぽうとい画えの骨こつ描えがめんと云いふは

骨こつ一いつ畫えと云いふは骨こつの骨こつ描えがめんと云いふは

骨こつ一いつ畫えと云いふは骨こつの骨こつ描えがめんと云いふは

才二より、世古より今より、或て名人の流儀を立、或る格の
筆格と分て、概難かき格、心と付て、一様、心より、
ら格と云と、格あり、又、真の筆の三、段と分お、一、大、中、小の
筆、心と能く、心と用て、作、一、心、の如く、も、畫の骨法、
工、人、と、心、一、心、一、心、の、弱、重、賦、硬、平、の、一、心、
端、多、と、格、心、一、心、一、心、の、言、格、心、述、心、味、心、
多、一、心、一、心、一、心、の、言、格、心、述、心、味、心、
多、一、心、一、心、一、心、の、言、格、心、述、心、味、心、

三曰應物寫形 此の形と物、每、好、相、應、す、
格、よ、く、一、心、一、心、一、心、の、言、格、心、述、心、味、心、
風、と、わ、一、心、一、心、一、心、の、言、格、心、述、心、味、心、

四曰隨類傳彩 此の類と色、每、隨、て、似、合、の、色、と、傳、
一、一、又、格、の、質、畫、の、真、草、行、は、同、て、格、心、の、流、源、流、
と、作、一、一、

五曰經營位置 經營、ど、り、り、の、心、と、付、て、換、格、と、様、
一、一、又、格、の、質、畫、の、真、草、行、は、同、て、格、心、の、流、源、流、
と、作、一、一、

あひしつひ三四枚めよ、指と下の枝より、さきよの枝
 地うて太きと、裏より外中倉と、忍とよん合同しこの
 水記指よ配て、又中倉と二川も、つも交て換指を
 引らる指より、よみ取めよ、糸と糸、華の無き花の糸
 仙か、と半日時の記、ぬ指よ、端の、橋の、水札、よと半、と
 上よ、水記、と半、と糸、よよ、糸と糸、世、遠、ふがと、ぬ
 半、九て、拾好、よと、指よ、目、糸、す、ら、程、管、目、糸、て
 描列、い、は、登、あ、し、婚、姻、の、屏、風、よ、忌、もの、あり、ぬ、れ
 つね、去、し、山、鶴、又、よ、外、不、言、の、数、を、世、を、意、よ、し、し
 遠、花、か、し、花、の、君、子、よ、て、周、子、の、世、よ、し、し、と、く、貴、い
 用、め、い、と、草、の、り、り

六日傳 摸移寫

六日傳 摸移寫 臨通さる人より、生繪本と、借交て、膠
 地と、あ、紙よ、吹、と、是と、膠、筆、の、一、の、尖、よ、は、是と、粉、中
 と、い、い、る、り、あ、ら、し、九、画、を、多、よ、い、粉、中、と、字、に、と、是、勢
 と、は、粉、中、と、か、さ、る、時、の、画、と、あ、と、わ、ら、し、る、目、利、も、あ、る、は
 粉、中、と、以、て、一、流、と、い、ふ、又、その、字、に、る、格、と、管、ら、り
 古、人、の、筆、跡、と、多、集、て、見、列、の、描、是、の、門、よ、し、周、く
 目、利、も、ぬ、し、初、心、の、時、の、字、よ、し、も、筆、跡、の、力、あ、る、に、か、く
 新、て、志、ま、し、る、光、沢、あ、ら、ぬ、指、印、の、は、ぬ、で、潤、く
 よ、く、あ、ま、り、て、羨、む、古、本、も、他、さ、れ、し、一、流、く、り、は、ら、り

神品

三品
 氣韻生動出於天成
 人莫能規其巧者謂之

神品 愚濫人生れて二三歳の比より畫をみて常
 の遊び戯に絵と好て描しと能く小児とて能く
 古名人の跡より行て習りし功至業熟し其若人
 是子及らば其指とて其神靈と具足は
 妙品 筆墨超絶傳深得宜意趣有餘者謂之妙
 品 能と好熟し格式と越法と能て描といふは
 能品 得其形似而不失規矩者謂之能品 吾法と
 當て格式と意へらて傳よきと師者とりよ又為人及る
 ものなり

十二忌

元 鏡自然曰一忌置拍密二遠近不分三山無氣脉
 四水無源流五境無變險六路無出入七石只一面
 八樹少四枝九人物偃儂十樓閣錯雜十一瀟淡失
 宜十二點染無法

右之翁畫傳より

制表作描摸

帝王天目龍鳳乃表と崇に儒賢ハ忠信禮義の風を
 わらば武士ハ勇悍英烈の顔と多と貴戚ハ侈靡
 容を尚上隱逸ハ清世の節と識す仕女ハ秀色佳婿乃
 態に宜し田家ハ醇醜朴野の真あり秋像ハ若如方使
 乃顔あり道流ハ修真度世の範と具以外夷ハ華を慕
 欽順の情あり天帝ハ威福嚴重の儀と明き神ハ

醜觀馳進の状と作に畜獸の勦力精神毛骨騰起
を倚小庭一禽鳥の毛羽翔るを奉り飛集の飛と雲
魚龍の游泳の妙升降此宜とと求む水は湯々
動々人をして浩然江湖の心ありし屋木は折
鬱々均壯深遠空は遠す花竹は四散乃
景候あり澄濁入向背荀條の老嫩苞葉の后之自
絲艷霽間野園蔬の葶藶咸去と出るの体性なり
古く外古人乃高論多しと云初心の者乃知る此を
故にこれと畧ん

山水と觀賦

山水と山川海人家をこと
まざる法あり

凡山水と畫に名号子のせん在里丈山尺樹村と云

人此を法なり遠人目を遠樹枝あり遠山皴なく
隱こして眉の如く遠水波あり雲と森一けその
決なり山腰の雲塞り石壁の泉塞り樓閣の樹塞り
乃路の人塞り石の三面と看す此をの決なり凡山水を
畫は尖峭もの峰平夷なりもの嶺峭壁もの山崖
宛ある者の岫石よりもの巖形圓なりもの巖山崖
と夾もの壑と山水と夾もの洞水川は涇もの溪泉
通る者ハ谷路下のお山は坡月と極く平夷なり者ハ坂
能辨別せし山水乃彷彿なりと知や其を觀る
凡氣象と看は清濁と辨(實主の胡楫と分)龍
の威儀を列ぬ多かれを列亂さざれば多し

少くす遠をと知んとあせんと遠山の水と連つこと
 得と山腰の寺と回抱し安んぶことと觀よ新居の境よ
 小橋と雲へし流るる水よ人仍り流るる水よ木あり
 岩崖の石あり根と露しと藤纏流し流るる石あり山歌
 空より水痕あり凡林木と仍しと遠の別疎平よ色ハ
 別高寂ふたり葉ありもの枝葉よもの硬松
 皮ハ饒み似柏皮ハ身よ纏出ま生ずる者ハ脩長しと心直
 石よ生ずる者ハ拳曲しと伶介古木ハ節多しと半を
 死守寒林ハ扶疏しと蕭木林より凡山水と畫よ須
 四時と接しと一春景ハ別雲消煙籠樹木隱こ
 して遠水よ藍と揉ふと堆まなり夜涼ハ別林木よ

小舟散ハ緑を平波と雲と雲牙濕布水よ近く遊亭秋景
 別水天ハ色に籠るる疎林馬欄寒よ捨つる芦河江よ
 暮る冬系ハ別地と雷と水江老樵影と雲ハ漁舟あり
 倚ハ水沸く沙平しと凍雲黯淡し酒旗孤村あり
 風雨ハ別と地と分と東西を辨し一人の滄蓋漁父
 の蓑衣あり風よてぬるハ但樹枝と看よぬる風
 あり枝葉下り雲よ雨霽と地ハ雪ぬる天碧しと薄
 霏瀼瀼山光翠と流し網と斜暉晒す暮景ハ別
 山落日と啼し帆ハ江浦よ即人人行急しと半ハ此水ハ
 と捨し或ハ煙斜し雲捲る或ハ遠岫よ雲ゆると或ハ
 秋江と吟し海星古塚新碑集法布置けよよ岐り

一紙一筆よ山龍に花雪ふく紙得ず樹根の枝を森
すくく紙得られり意と此の留る者ハ須心子云微と舎
ま

畫論傳受秘事口訣

夫畫の乃ハ言語文字と以て得る事よあり守選り
心通するよありその選りて知る者ハ皆是を言後り
得るの言語得る者ハ或ハ知り或ハ知り守一精く一
味なり故に情ととれ情學て約する者ハ皆是を文
字り得る事よ因て情識を言後を中て精一然し
知て神よ知る神靈と云る者ハ畫子の神品なり
六法三品或ハ何人の流と云ふことと云ふれれ
神品なり

あり是と上と下と又絵の傳本格式と能くも
御筆流の宜うさるものあり是と下と上と
を初心者と云ふ也より功者なりは星雲と繪
功者と云ふと上と下と能くも
妙品なりと云ふなり至人なり是は神品に畫
聖ハ生なりと知るといふも情學て精くも
畫聖と云ふなり下と上と云て又一品あり何
心は得る常と怠れたり是は神品に畫聖と云
神品なり天性は畫意と受て生れは何れ精と入
勤ても上功はありなり○或人曰陰と事毎
は粉中と用てまものあり又不可て描ものなれば

いし守義答て曰畫本と用じて毎日は我らこり
 作く描もの下子の不敏者なり粉本と用を欲せぬ
 われ描はる畫品ありといふ常人の難し唯速者
 たり者といふは固くこり學も異端は落入り強り
 名とう然と似し是學者の深く勉むや他又一種
 あり功者より上方の各別なり論ずる及んず毎日は
 粉本と用て古人の規能と遠く正るに描しと欲する
 者いこり勉むを知り古人の聖なりと悟るるも亦て
 畫のなるを勉むと自ら情望と教し神靈と探さんと
 然し者之を以てあれと功は描と必も答るる
 之と背されたり ○ 師守房曰畫の要は輕

乃一字止の故も意以て輕くかくと書て之を輕と心
 難を又なり故も初學者の畫品皆おも此を以て輕の畫
 の性なりと知しと極彩色の性なりといふは輕畫の
 こととわらるるは重畫は傳あり筆法を以て述るる
 是大なる心得しと心懸して心通するの玄妙なり
 下師曰の二 陰の體外ありよし是を陰と名とあり也
 と也 強し弱て之を靈が去て活す 墨色 墨色の
 潤より或人曰潤は自然の妙は傳あり描るは法を
 しかり也 扱て醇てあり又深墨も淺墨も筆多
 會て濁ざる極る雲とりてて當るぬあれは必也
 て佳なりなり退てあれと察るる全言

骨法

骨法

巨形のと以てより其流しゅうのまもゆるきと浮うきりし流
 けず河のまもゆるきとまへし或曰松しょうの大極たいごくは
 筆勢ひしせいとわらへし交まじひきこくと刺さひぬきこてんが
 筆勢ひしせい強つよがより弱よわなれし強つよへさあよゆる揮うて
 核心こゝんえかりす即すなはち元統げんとうて曰いはし守信しゆんしん極ごくは不ふ地ち色しき多た紙し
 多たるす紙し多た破やぶれて皺しわ多たあるは筆勢ひしせいの強つよゆ
習畫法 松しょうと筆ひしより下した松しょうとけんと思おもふとせん粉こなとて
 燒やきよして大形たいけいと些ちくとし紙しの大小たいせうを極ごくより
 よくはるゆよりゆるく燒やきよして粉こなとて軽くこくひ又粉こな
 かとんてまへし師しの曰いはし初はつめ時ときはゆる粉こなと足あ合あわす
 ま遠とほより粉こなよまへし又大たい概がい松しょうの乃のと知しゆるし

て松しょう中ちゆうの似にまんとすれを筆勢ひしせいが流りゅうて元統げんとうより筆勢ひしせい
 元げん統とうの松しょうとて初はつめの若わかくまもゆるしとすれし松しょうの
 新あらはらひて粉こなを筆ひしとて強つよむへし○畫え工こうとてし
 者しやの乃のゆるきと大形たいけいと色しきもよなり大筆たいひし松しょうとよく筆ひし
 面目めんもくの先まへ粉こなとて強つよむと筆勢ひしせいと筆ひしより紙しと地ちと
 して強つよむ粉こなとて強つよむと筆勢ひしせいと筆ひしより紙しと地ちと
 將まさらゆる筆勢ひしせいとて何なに中ちゆうも筆ひしとて松しょうの乃のと粉こなとて
 そのゆるき筆勢ひしせいとゆるきとて筆勢ひしせいの乃のと粉こなとて
 此こゝ神しんの時ときは心こゝろ持もつた松しょうの乃のと元統げんとうより筆勢ひしせい
 ○ふさだうしは松しょうと筆ひしは筆勢ひしせいの乃のとゆるきと
 ものいん持もつて紙しを強つよむとゆるきとてまへし御ごされし

妙なりとして氣が脱てわ—— **描草木法** 草木の枝葉

花などかくて叶をあらわしは少く無用の枝を削るは

拙し人紙の香も文理すくおたがう—— 古人は多く

筆もわたり尚流をそ用どとならう○草木の毛葉

と筆も口も口葉をそ使すといひて畫家よを論じは

尤俗に隨て陽教ます—— **筆法** 筆法は吳風と好く

す或は切へき所と切と継へきを絶つて此筆法のおよ氣

と付へ—— 古筆も色汀をそと並らわく筆もわたり

おそく己く紙に○和紙紙もも古人を描めくす—— 尚

若流と傳て筆もよく筆法わたり **寫形法** 物の形と

描も若生なり **似く** あらざる又生も似たりして趣あり

生より似く **似く** 常の法よりそ物生も似たりして趣

は是別法乃法傳交口缺く其門よ入して是と知くは入

くす是神人の及まざる是法とて是は生も似たりして

無事の評判とて突て用す法は唯筆勢と墨をそよ子細

彩色法

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

彩色法は

ありて用紙はあつらへた其功の者ハ此法と管筆出ても彩色
 の後廻りから必とせりひくは是皆極の事と相ひ
 此大擬其旨と相ても機は愈々不固なる意ものこ
 ○彩色ハ機は愈々す機は作て愈々愈々し機ハ此法の
 真行草と云ふ真の行書の草のまの草の草の草
 草の草の草と云ふあり大旨描にありありし法ハ一源を
 一源ハ一源の法と云ふは當流は比をむ描により彩色
 されども亦も依り一極彩色の法も軽と法とと志せず
 や法と云ふハ肝要に此法の味ひとのハ極り堅實なるも
 然るも亦も實あるて乱雜なるもたすありす唯中なるて
 法況と云ふをせざるに能くしてさつらりと流るる法のこも

くさるる一とくも不及あり時中す此の思ふと週
 へ一○彩色ハ筆と用さるる法に極るべしす是ハ塗出て
 又塗さるるわとに極て極るべしす是ハ塗出て及固くあり
 故に固くこれを禁ば筆と具と多く含ませざるべしと
 筆はけくして此の描さるるやうに大旨極る中ハ一法
 此物よくぬるべし描てハ乾き沢なく文程あつたぬれを
 極る週ハ潜馬ぬれく是ハ極る紙はよくぬれぬる
 此の筆の毛の紙はわさぬ極る宜と云ふを多し得
 肝要之 畫意 凡て法と筆と墨法をうりよりす大と
 正心本と純宗とせり極彩色の法より大はれ又摸極
 廻るべしすしめをぬ極るは彼よて極る中と相ひ

流物も三分うして一川流わいらひ影ありみぢは
 まし一物影のさとや丸巻出すくすのひ入と合すし
 白紙も換極の内なれどもいねさへ一茶本も不用乃
 枝葉と申へくはもろ方物皆あり異國の流文の如く
 大和の流は物のみしと之流は流のくくは流のさとも
 といふ異國の流は実して流く風雅うたへ是家朝の
 是必にばさるる工なり大和流は屋上と云て序中一を
 流にもがまの函右今子起一發明なり我探出流
 又千景子秀て奇妙と出たり **地挽法** 雲の比挽は雲
 と爲して二三流引へしむすれし和子かつとりとし
 てよ一永真脚は雲と拵とて一編引を流子比

引とすまら厚と出て若志手流深れむいや一浅
 くれとまら流らん合所ある草草の流はひひく子
 孔のあら極はなき一強をぬが面白く縷網の心す極
總論 流右の能畫の人力物と描よを流あり
 もわらばるる若と用く趣味と改へしとて山水ハを
 地は確としてみれと半禽獸も急くは流とわと流
 拒地の勢も亦志り置流わらさしや○本朝古今
 畫士名譽なり者多し流といへたわらに能畫のまの曲
 たりよは志りばを賞流すし一流畫ハ實に真に經
 之優流はたの草之權なり○萬景と探し流くま
 輕まし一美すれは氣の流てわくとし○凡流は何人

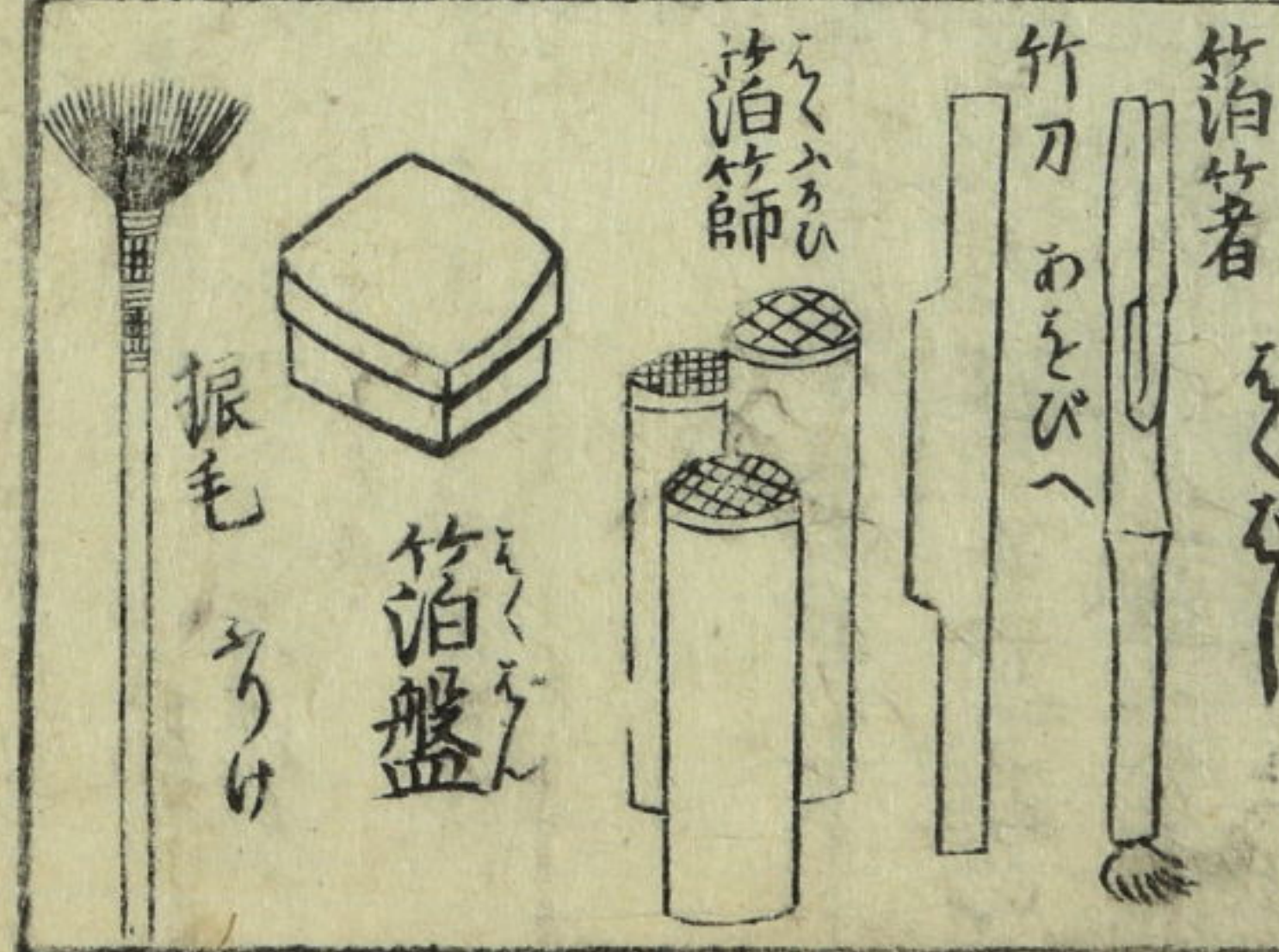
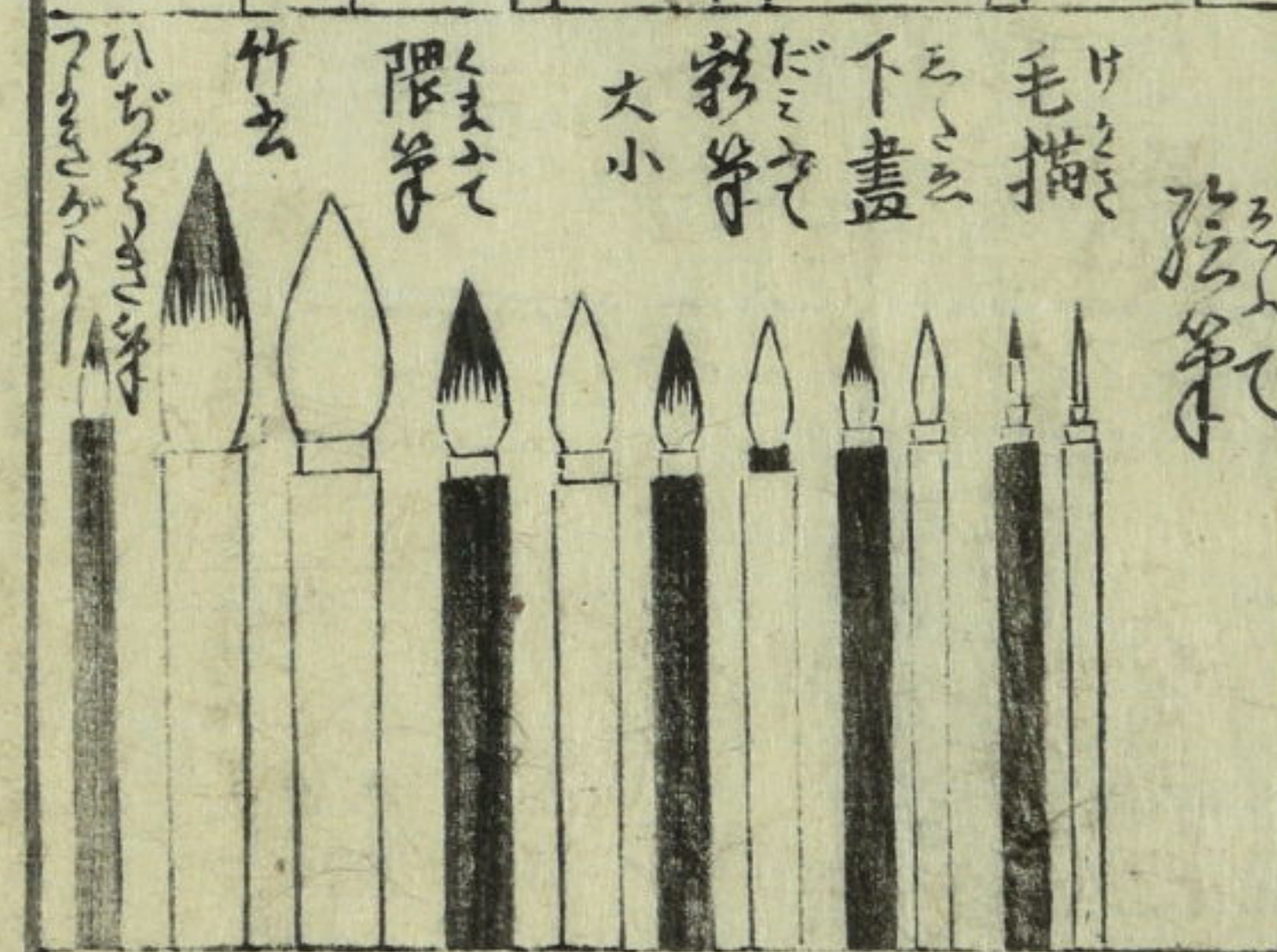
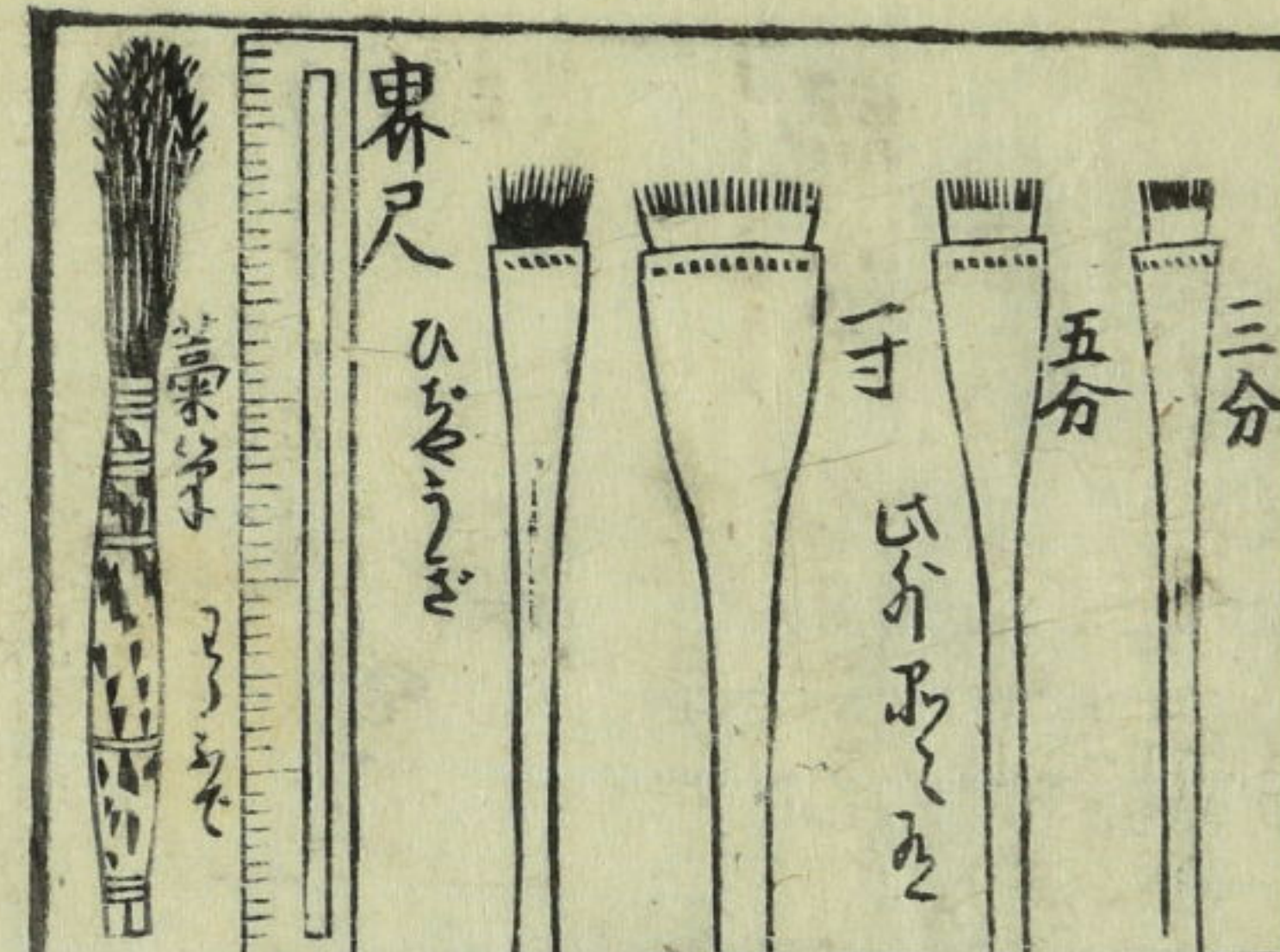
の流わどくなくとくをさとし徳との入る人この手那子
 周て風加りり流流こころり○法とあふ目的たるを
 何程若分して勤めりたなり遠くをそののりこころ
 ○悉用子生得者も古法と不疎して家遠者なる流り
 私に描く畫聖の乃ち及して異端の邪法となりて畫
 形その乃ち遠くと心り粉中と用るよ志くこれ一生得能
 畫の善をみて古法に流ひるよ夫の必神品に即し
 ○尚家子の多く朱と用るとは禁禁に朱も多し流し
 流は只このつらとす○ころころよし又聖像をこの間色と用ひる
 他振るもなひかたに流し流る○雪舟が流し下草草かと
 と板判よしと押紙よしと多しとす○土流は倭人紙を

古法眼より輕くしてまめありか依は爲用の務らふ者
 元法は修行の務らる者こととす○元法の筆の柔凡は
 日月と金銀或は黒鉛かととすのなて推身鳳凰と
 頭のみかとと皆縹網と云く流る高流よふれと禁流し
 ○鷲の流し眼を流し流るて中より師曰はし流の流し
 わり流し匠匠ふらとぶこととす○松榮は不意利なり流や
 間下工の筆も似たりと云ふこととす○師曰畫社と云ふ
 や顧愷之陸探微張僧繇吳道玄これこれと云
 ○衣笠守昌は子守房れ法を羨稱て云雲よち流し
 寄守人物の勝ると云ふこととす○松の茂枝中より守昌云
 年月公と用し必より人押朱印法流し朱印と押し流し

の都合も成らんあつたに下は弦の及ば押へし高く押とすれば
 後水とわけて高し押を高くうり敏も響るに但下の終
 付る方もいやくし刻はしうと月の明かりよの

繪碓子

二分三分より
 六寸より



切流之器

碓子

微塵 探砂子

小山椒

大山椒

松葉 又和とも云

大石と方寸分ハ 一寸五分 小石とい方五分

畫具之制法極秘傳

緑青 必緑青は石の細いより出る畫史曰得るの申より
 撰ひしるの製法ハ先緑青と掃多し入て膠を加へるの
 乳本よを控おし研て又この濁水とふる學知へる
 底に貼て捺と紙を一敷緑青といふ又是れは紙に
 執難て納て底に付と二敷緑青と云又此清水と云
 おの礫子入て壺一敷日とるくこの流るの時清水と控
 下子付るるとも候日は乾て捺と白紙と云こ又次くも

かりかてとる一は研子は傳を強く久しく搦る白く
 かり故よ少し研て水とて又水も糺も入て研と投十五
 寸魚一ハ膠と入つてハ膠と粘と増て緑色の細末を
 と引出さめて搦る子細くぬと攪と攪攪てなよハ
 熱湯と次て膠とてか及又白緑礫を入る水と少も棄
 ずして搦る子細く研りり志うずして搦る子新水
 と入す色む濁水多成く白緑神は攪之液て攪子
 時ハ白緑すくぬくはまも白くハ緑と用時ハ四ハ
 納て水と入と浸て次ハ膠と濃者ハ餘鏡入と血と
 側て等と投一晝と塗へ一〇愚曰緑を色者
 魚ありま白と一して色とあく光あると良とハ又ま

黄少して墨と多さハハ研て目やも搦る多田の紙ハ
 外ふくよとと

二番緑青 製法ハ己よあよ述る是ハ紙をハ紙と
 黄少し一〇強者と塗術 せんは紙とて墨と紙
 液くわり次ハ二番をせなり又一度わハ緑とくと
 ぬるこ終と濃多入て等膠を交てぬるハハ
 さらとよ化の粒と行りハ搦と以て墨と搦
 黄一〇黄少しの時ハ化と黄の汁とぬる
 紙と二番と黄少し黄少しの葉かハ黄の
 割曲ととるとハ緑とから紙葉のすく知と黄
 糺ととらとせぬとせとゆとらとらとら

白練 草木の根葉とわり又蒸とす之初製す
時ハ熟湯とて攪とくわく干野をこし

緝青 之の制法ハ蘇者ヨ同一攪と濃合て用也
ふれと摺て群青と出以蘇者より白練と出以

大田氏曰粉中ニ指と入て入るより候指ニ指ハ真の
緝青不灰ハ花緝青也 凡緝青とぬるハ初法とぬる

淡緝 畫史ニ白者俗云群青と是ハ緝青塗の括或
衣裳なりしとゆり或ハ草中ニ用也

花緝青 礬石と燒てつら乾と云摺て攪と合て用也
銀朱 本草ニ石亭脂と水銀とと合て作ると云摺く

名と入摺を合て用の上ニ膠のりとと黄ととゆり

ハ漢朱の色同一カクす和む

朱黄色 人面の作きり利也

朱墨 朱と墨と合て他尚流ハ丹と合と膠とわいせす

黄丹 鉛と硫と合て作ると云候研て甚細末より時

あおけ入て摺り膠と合て候

丹鼻 丹子粉と合て用也肉色の赤も入り

肉色 丹子粉と加ふ。朱とぬるより肉色とわり丹

と塗リ凡ハ朱と丹と合てわり上ハ朱とぬる一名淡紅

生燕脂 一名綿胭脂 立義畫傳ニ調脂とわり唐より

あることをとがり草の汁とも云燕脂とも云深

古絵とつり血子入て箸とめて器てとことい月

不一用又炭火の上よ墨乾すもよ一

墨透脂 生多しに墨と加へ膠といはず

生透脂 蛤粉かひんを生多しせいたにた加ふく別後紫むらさなり

透脂 蛤粉かひんをた蘇す陽やうと加へく化くわ細こ搗た膠か入い

透脂 臭く多たししにた蛤粉かひんと合あ膠かと加く

胡粉 三種ありこ白堊びやくわ大たいごごししと云い是こ去く之こ胡粉こをまい

若搗たうのて多たと少か記か加く粘ねりる膠かと加く夏月なつづき必かなす

くくとくぬぬれれ一い曝ばくすすと用もちてます

藤黄 唐たうより有あるる海藤樹かいとうじゆと切きて煎煉せんれんして作つくると也

雌黄しじやうハハ山さんれれははわわずず四し人にん名なと加くて搗た之こ墨ぼく搗たとい

藤黄具 志し多たししはは蛤粉かひんと合あ膠かをま加く

藤黄具 褐くわ 志し多たししはは墨丹ぼくたんと合あと

靛花 藍あい澱たいと乾かららしし帛さうをま包くて水みづをま投なぐぐといくく蜜みつを

原汁げんじゆ知ちるる多たと膠かをま入いれ

浅葱 靛あい花けららううはは蛤粉かひんと合あ膠かをま加く

草緑 志し多たししはは膠かをま合あい

ららうう多たと壞くわ緑りよくとい多たと老らう痛うとい粉こなをま加く

黄土 志し多たししはは膠かをま加く

黄白 志し多たししはは合あとい加く

黄白 志し多たししはは合あ又またはは黄わうといりりとい茶ちやとい

紫むらさ 志し多たししはは焼やくてい作つくるとい又また去くるるといものものとい源げん

しよ云より搦てあとの終を加ふ

紫去臭 ちりちり粉を合膠を加ふ

紫去褐 紫去のちりちり粉を合膠に加ふ

と合はぬはちりちり粉を合膠に加ふ

雲臭 粉を合膠に加ふ

雲臭

墨臭 墨を合膠に加ふ

褐 丹と黄と合膠を加ふ

しよ云よりとく

合臭土 土を合膠に加ふ

青鶴色 白濁と黄と合膠を加ふ

金翅鳥色 白濁と黄と合膠を加ふ

肉色 粉を合膠に加ふ

紅色 先のちりちり粉を合膠に加ふ

紫藤色 肉色と合膠を加ふ

濁色 痰色 生色 金を合膠に加ふ

金泥 粉と膠を合膠に加ふ

ちりちり粉を合膠に加ふ

粉を合膠に加ふ

膠を合膠に加ふ

墨を合膠に加ふ

土を合膠に加ふ

塗へ——又茶を塗もよ——或は友葵の具或は皮を
又丁子の葉湯濃して朱少友葵申入てぬるもよし
黄膠 朱と藤葵と合膠を多く加てぬる
銀泥 銀粉をけしつる法金泥と同し蛤粉膠ぬる
して沈と塗る

雲母 搗て朱と膠と加へ白梅白菊の上よ朱分て之と朱
銅青 朱と藤葵と云本草匯編と銅と銀とあり緑生してより

晒乾とよく搗て水と膠を合と又水乾して候もよし
銅白線 銅線と蛤粉を合と膠を加し

芙蓉膠 牛乳皮を煮て仰る若くかく透通らるはし
朱を浸し煮て諸の強をよ加し○晒膠の方冬月よ

膠と器よ納也上よ二雷と多く糖之枚日昼雷乾て朱
とたり膠がふて朱をぬると乾し貯て用ゆ
明礬 透るるよ——考に生を粉りして朱礬水は
時よ用ゆ

○守篤曰凡乾のふと研用るよ餅煉と云とありん
神に乾研とて能く搗て朱をぬるし入て研ぬると
うらめて朱をくふよ朱と漆を研る

畫彩補遺

石膏 研て朱を乾と分て三種とん頭青二青
青は雄一種石膏堅くして碎へる者あり身垢とみ

少許強入るれど使研細うして泥の如し

朱砂しゆさ 丁かくら辰砂しんさより紫の者むらさと用す

銀朱ぎんしゆ 白の朱砂しゆさをたんと銀朱と以てふれよ代

珊瑚末珊瑚のま 唐畫の中より程紅色久を磨て使せしるあり

鮮あざやかなること朝日乃如し宣和內府印色も亦多此と用

雄黄ゆうわう 各處の法に朱砂と同し畫に黄葉と人衣ひとぎに

用也他金の上うへに用ると急ぎ金牋きんせに雄黄とつけられん故

月の後あとの焼て慘色あざやかとせしむ

石炭せきたん 此程少々の中なか用す松皮しょうひと搗て細研松皮及ひ

乳金にゅうきん 此をこれと用也

全泥ぜんじより牙は二指と用て周まわりこは摩こす搦

傳粉でんこな 蛤粉かひんと角かく膠か過し研細あり石いしと用也或ハ聖石灰も可也今ハ松皮と用也

調脂てうし 甚と粘ねりよつとせざらん石いしを洗せんふ

藤黄とうわう 華は常じょう花かとつかれもの名妙めいせうと樹じゆとくくよよ花は水すい

を墨の肉にくよ入て枝幹えだかんと描えがふ便べん蒼潤そうじゆんとせしむ

赭石せつせき 此物このものと色いろ麗うるはしものどねくれ製せい法はつ石いし緑

と相あい

赭黄色せつわうしき 藤黄とうわうと赭石せつせきを加ふ

老紅色らうせきしき 銀朱ぎんしゆと赭石せつせきを加ふ

蒼綠色そうりくしき 草綠そうりくと赭石せつせきと想おもへ初雲はつうんのいろをます用也

畫學子道統相傳 並 自家傳來

僧如拙 九州人也 住相國寺 僧周文 號春育 住相國寺 小栗宗丹

狩野正信 同元信 世號嘉眼 祐雪

直信 號松榮 州信 號永德 孝信

法印守信 號宮内卿 探幽齋 法橋守房

小森俊春
大田守章
林守篤

畫筌卷之二

目錄

漢山水 和山水 墨繪山水 雪中山水

真山水 山水 以上 真水 行水 草水

波 飛泉下向浪 瀑布勢

瀧勢 川流勢 青海波 池水紋 水 以上

四時 花部 梅 躑躅 桃 海棠

櫻 棣棠 紫藤 月季花

櫻草

雜兒

牡丹

碎葉

土筆

蔓青

同墨繪
以上春

米囊花

蜀葵

燕子花

睡蓮

蘆

石竹

桃花

萱草

百合

山丹

以上夏部

蓮花

秋海棠

黃蜀葵

鳳仙花

牽牛花

菊花

槁葉菊

淡紅菊 白菊 黃菊
雜菊 紫菊 菊蓋

木芙蓉

蘭 并墨繪

浮藍

桔梗

木槿

龍膽

胡枝

野菊

芭蕉

芭

楓樹 以上秋部

枇杷花

南燭

水仙 真行州

山茶花

茶梅花

万年青 以上冬部

描諸木大意圖

諸木降枝圖

岩石之圖

四時通用

描竹法

竹之圖

東坡竹圖

檀芝瑞竹圖

松

同茂枝

新羅松

蘆竹

吳竹

燒又竹條

下州

苔

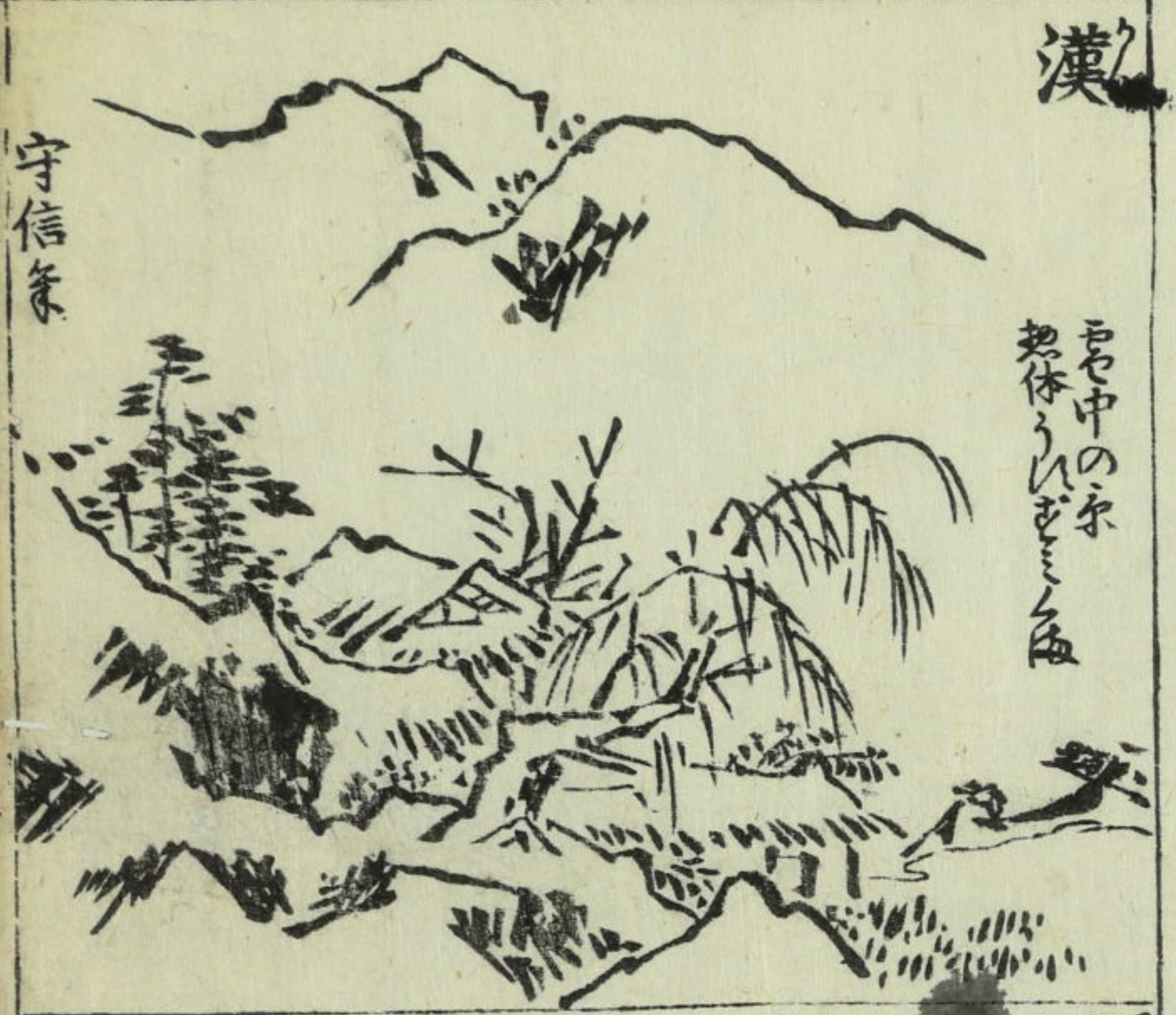
畫筌卷二目錄終

畫筌卷之二

筑前直方

魯軒林守篤編輯

漢 君中の系 憩休ういざしと後

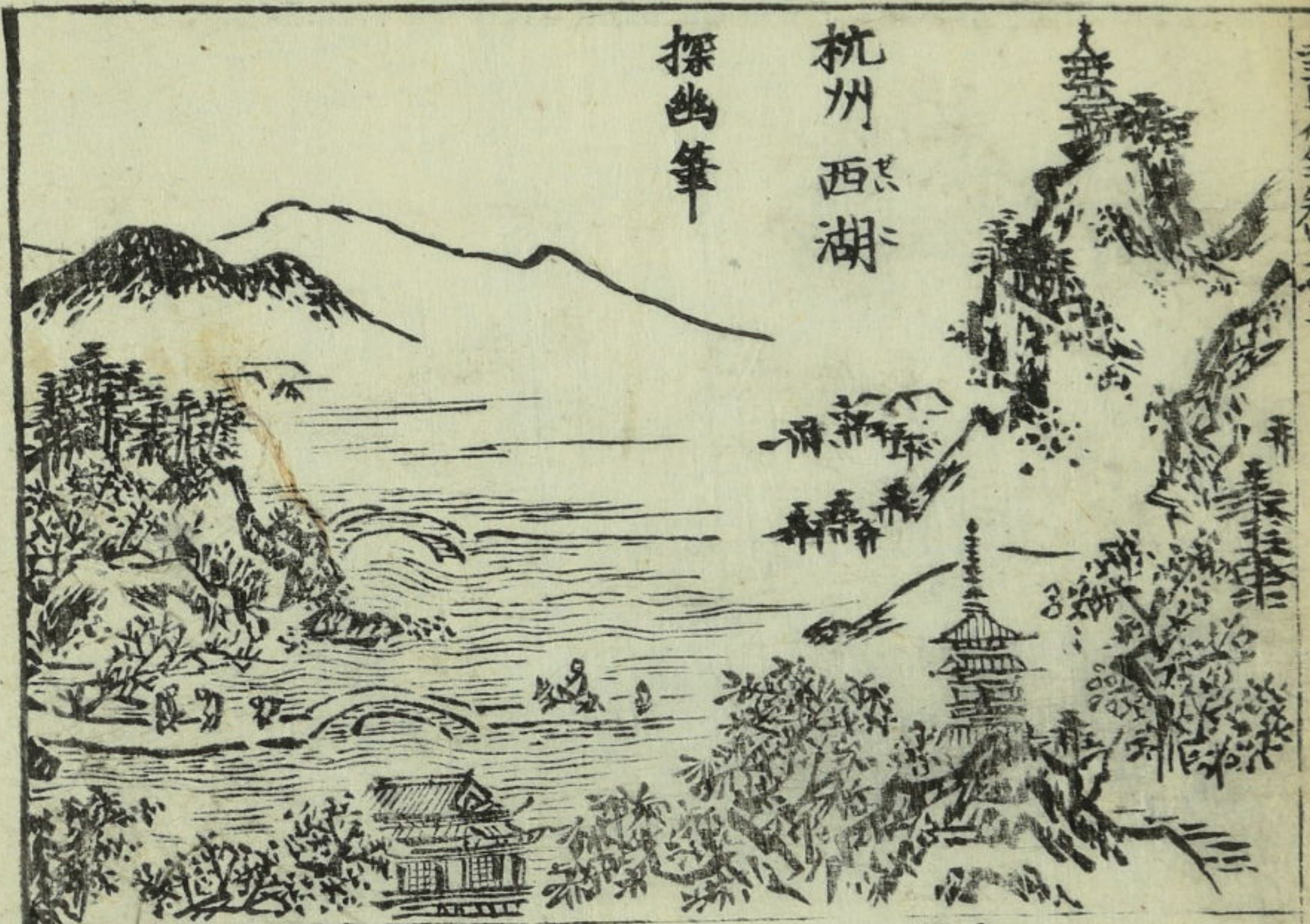


守信系

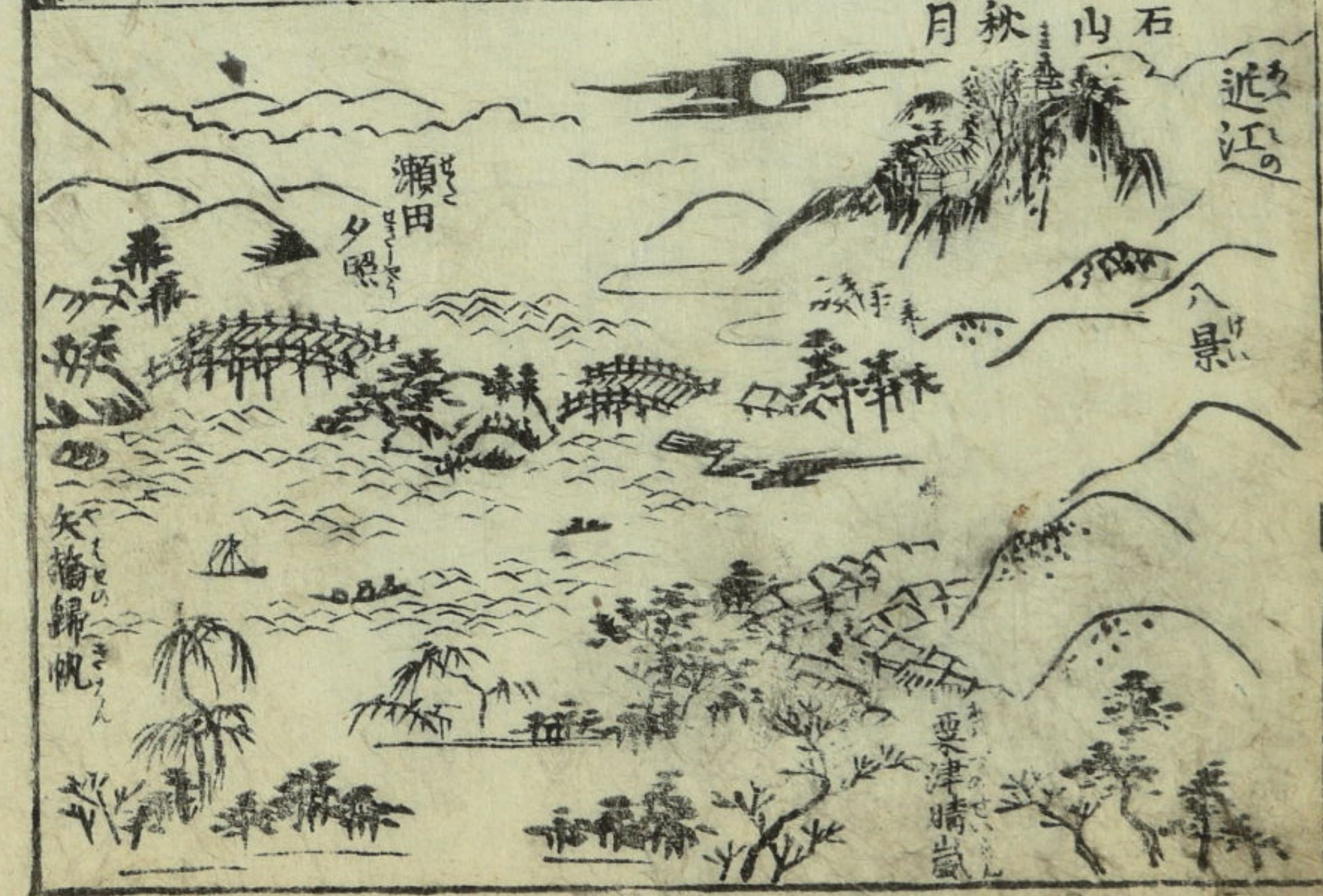
倭 横之甘

守修

杭州西湖
探幽筆



石山秋月



近江

八景

要津晴嵐

矢橋錦帆

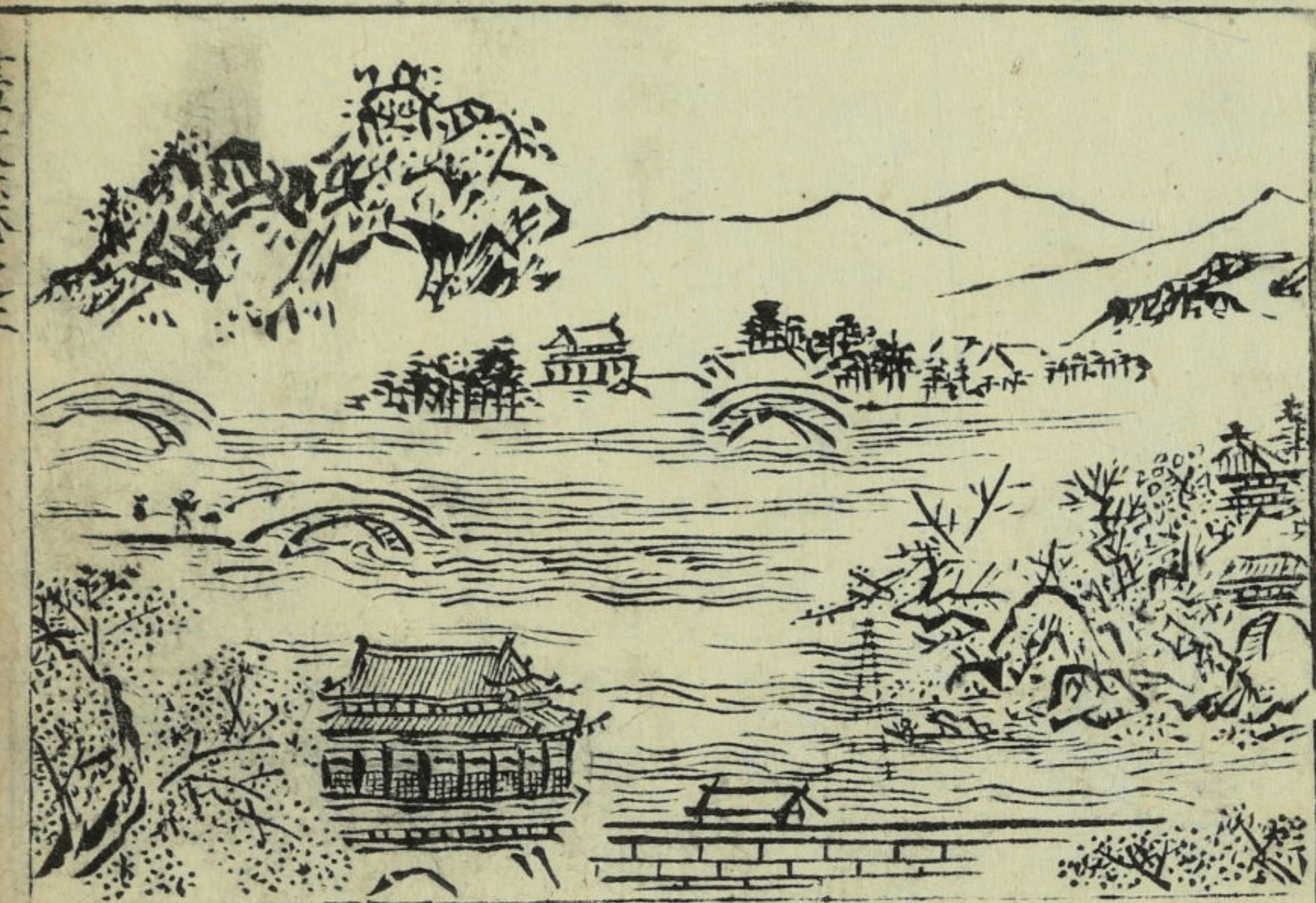
瀬田夕照

辛崎夜雨

堅田落雁

此良暮雪

三井廻鏡



此良暮雪

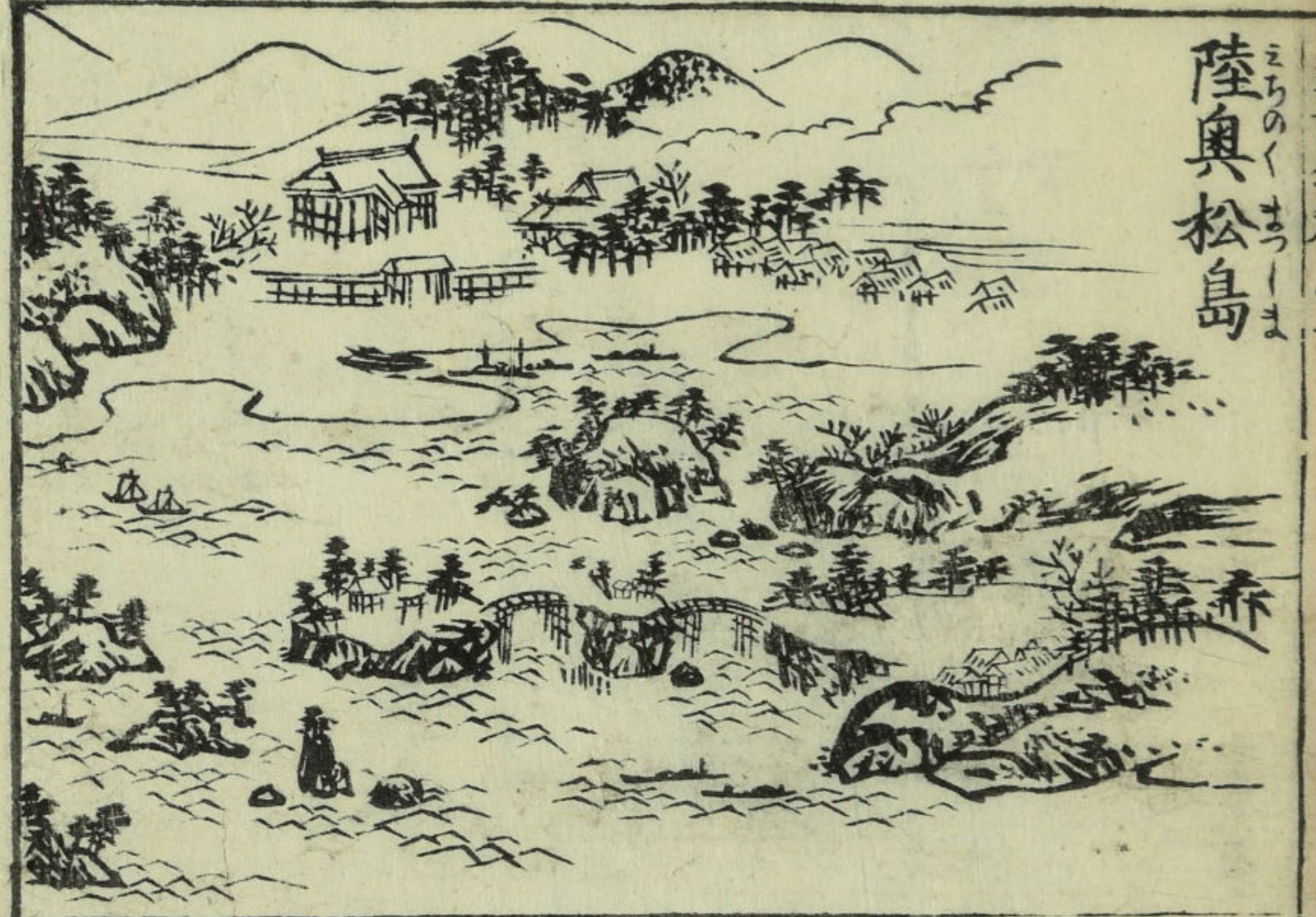
三井廻鏡



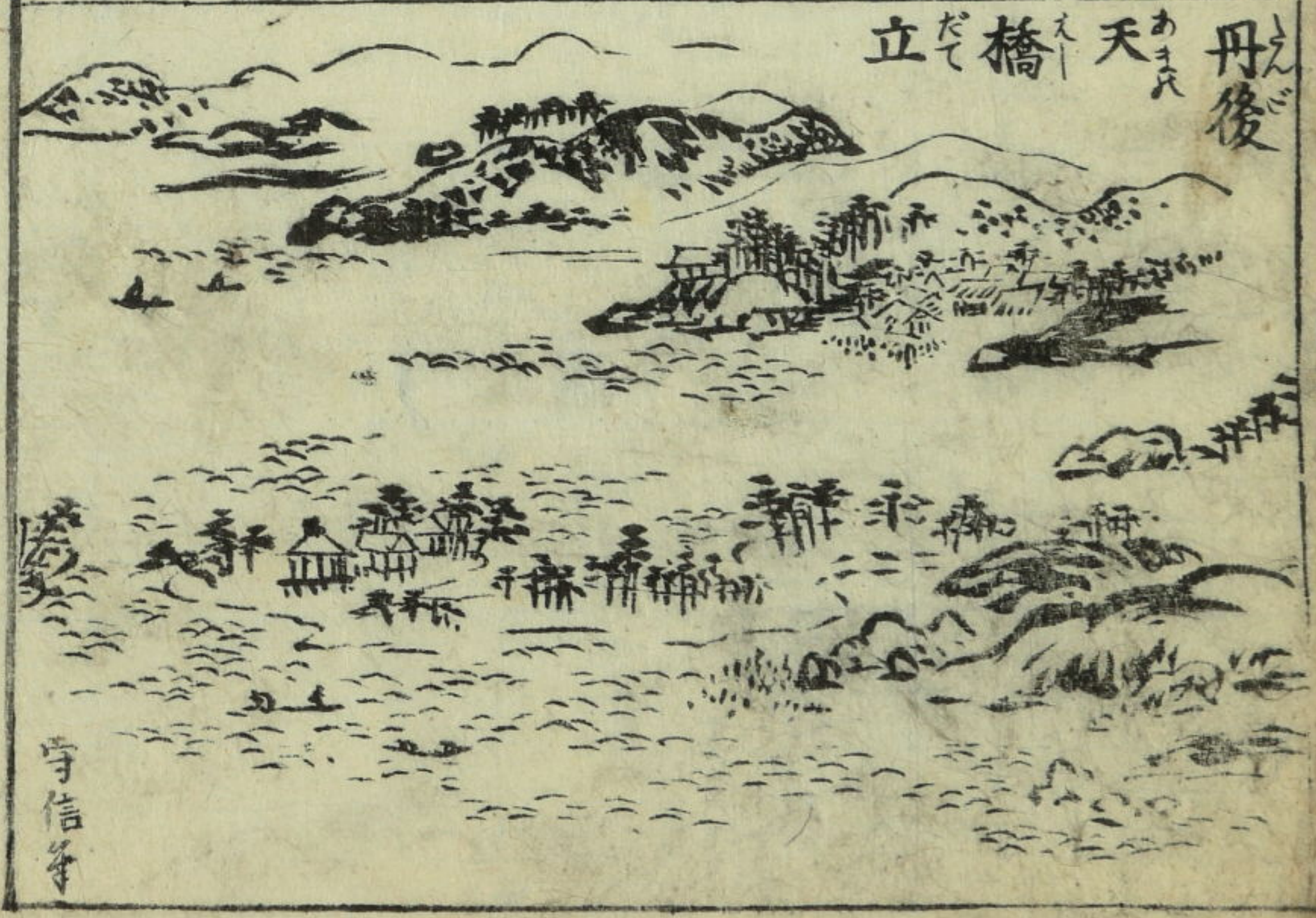
守代等



陸奥松島
むつのかみま

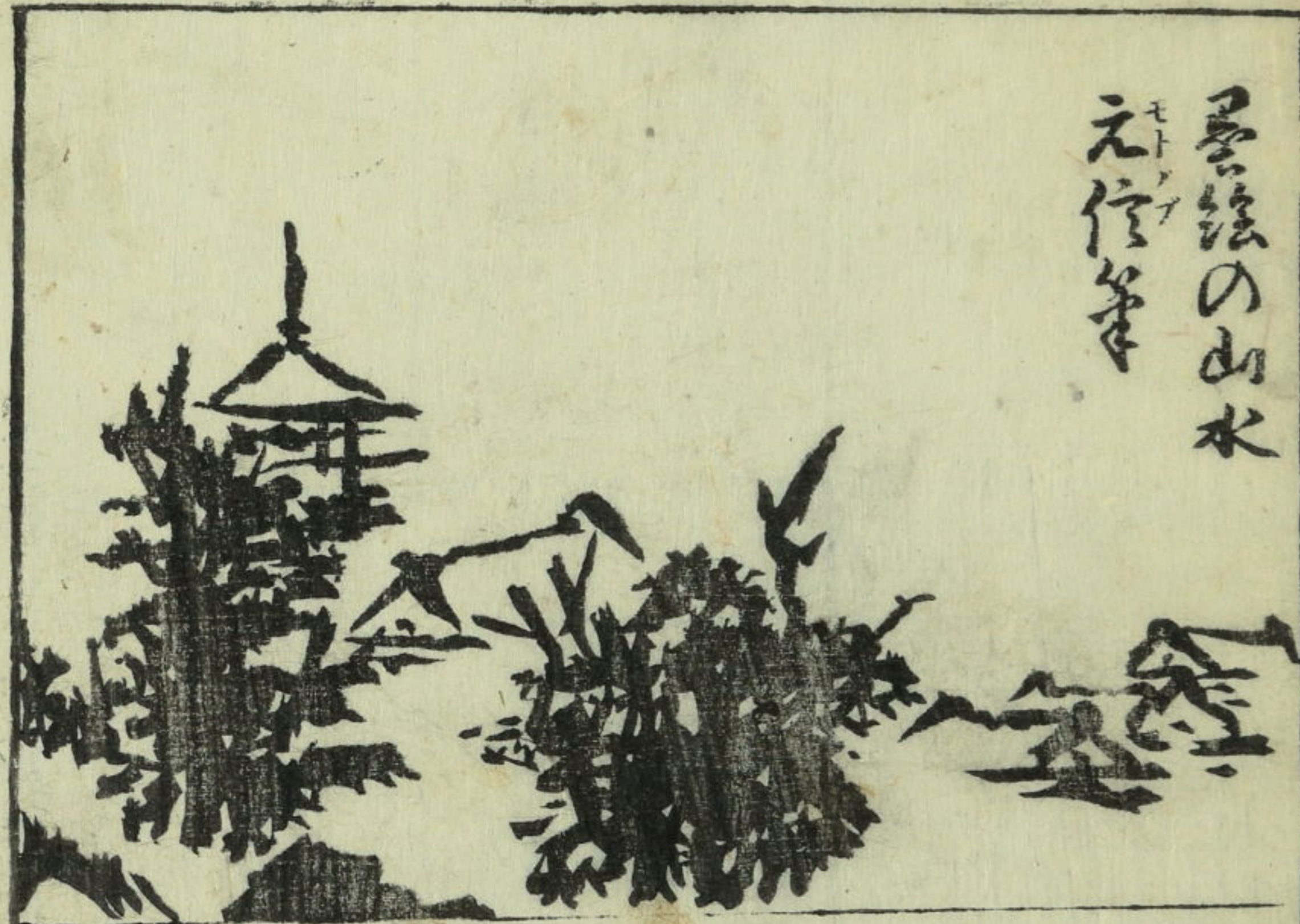


丹後
あまの
 天橋立



守信等

墨法の山水
元信筆



守信筆

北引建仁寺
をとりて
墨才也



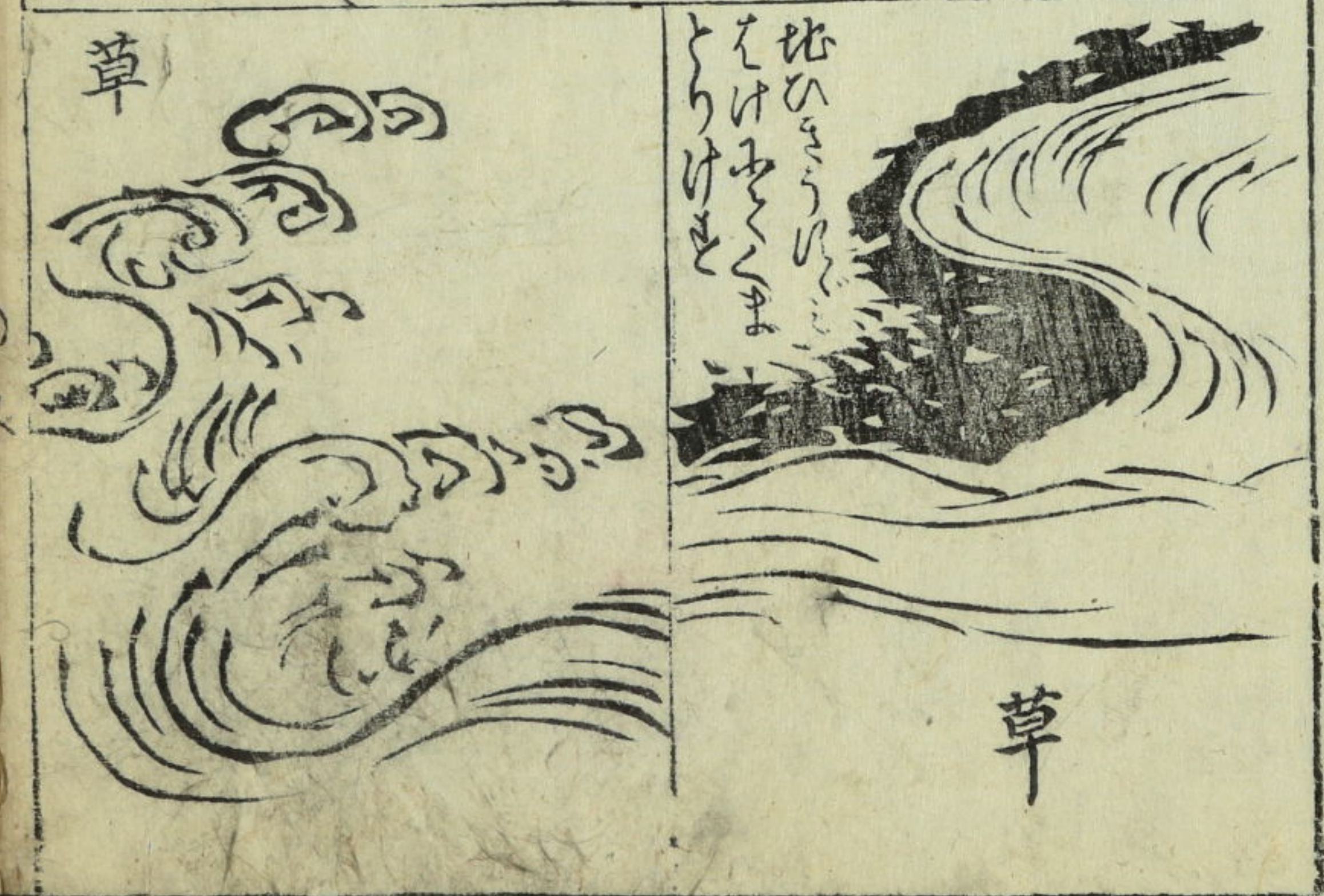
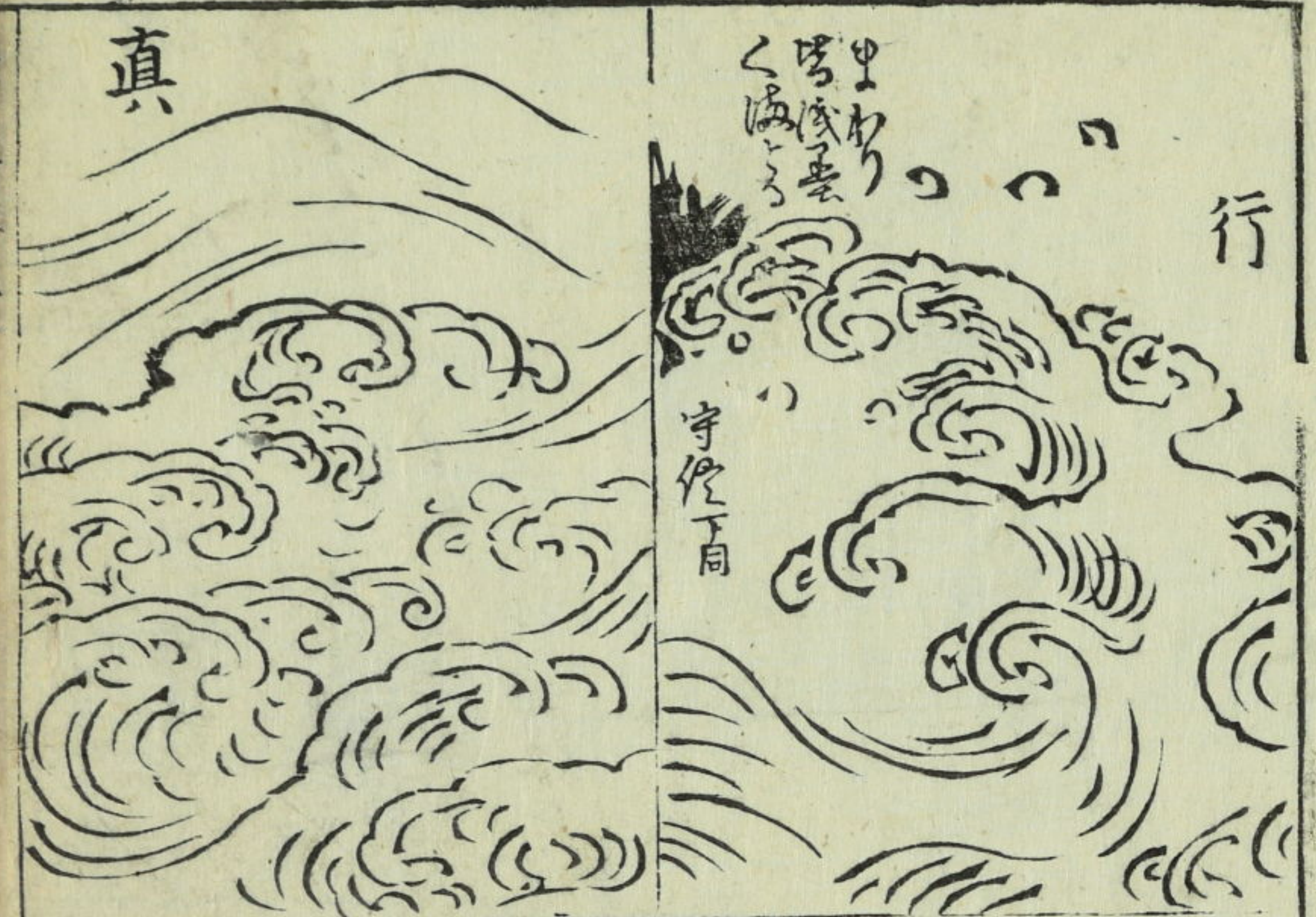
真山水
墨の山水

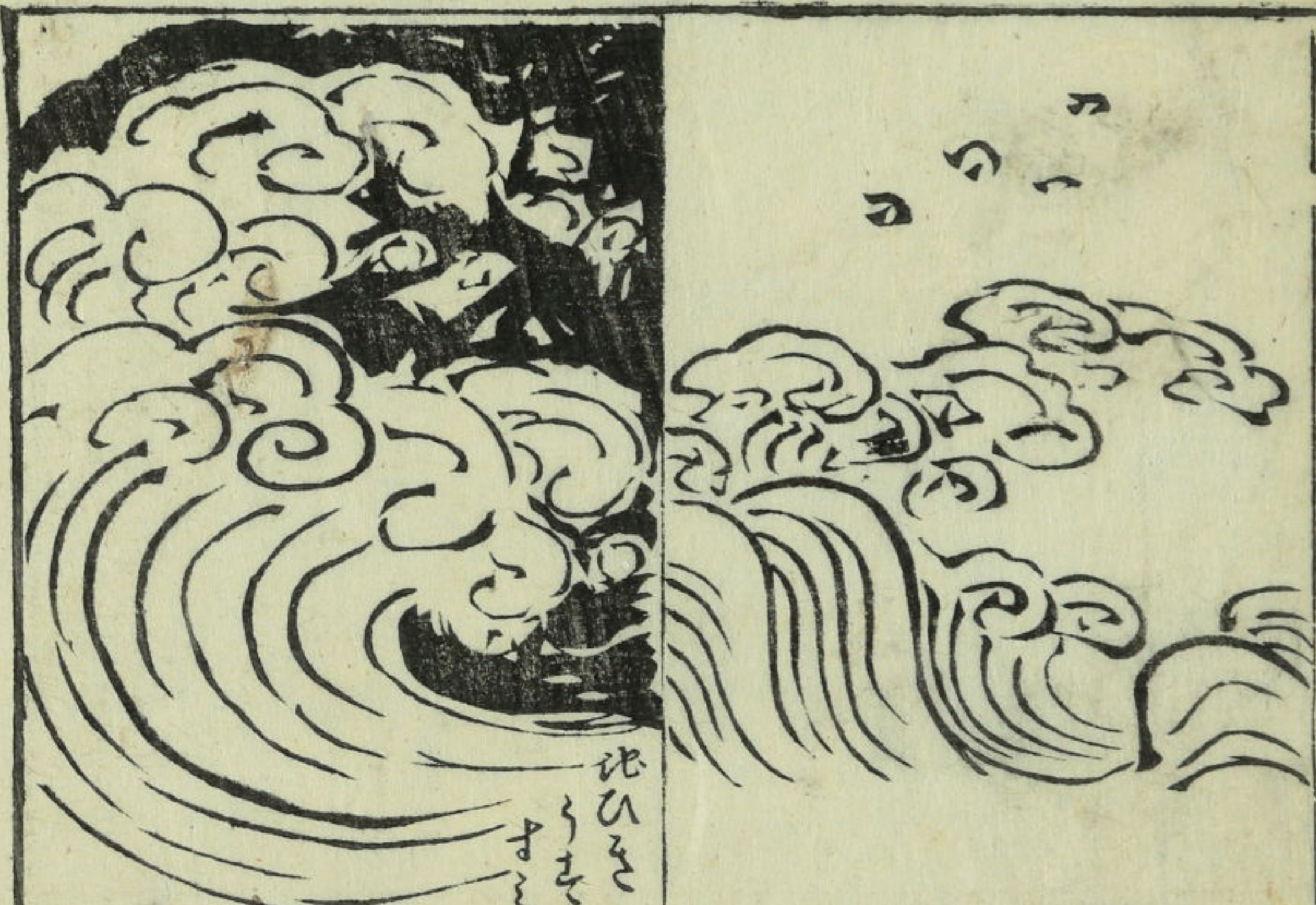


守信筆

水

名のこら掃く波ものなれど深心と有へし。まこと強し陰工かこの
 去形を好し体およこ極彩その畫よ緝書とゆ皇金流成とふに
 て波れ文を去へし常に乾澱を淡らると引へし水の深きま
 いや又淡彩中彩木の絵よこふん筋をせざるもよりま
 筆に胡粉と引い重しく極しまかつる法よこふんと引い
 わさやうに電起て煙師曰池も流水かとも隈くれ海とて
 袋れ曲とりとる早し只これ絵の中とてよくさる深きく
 熟極とこふなりし常奔るるう良し大極ありと見よし凡
 質強の真行草小筆とて應ゆる色にまへし深きれは
 淡なれと志まへし筆をれ統てわく濃くす淡くすると要とん

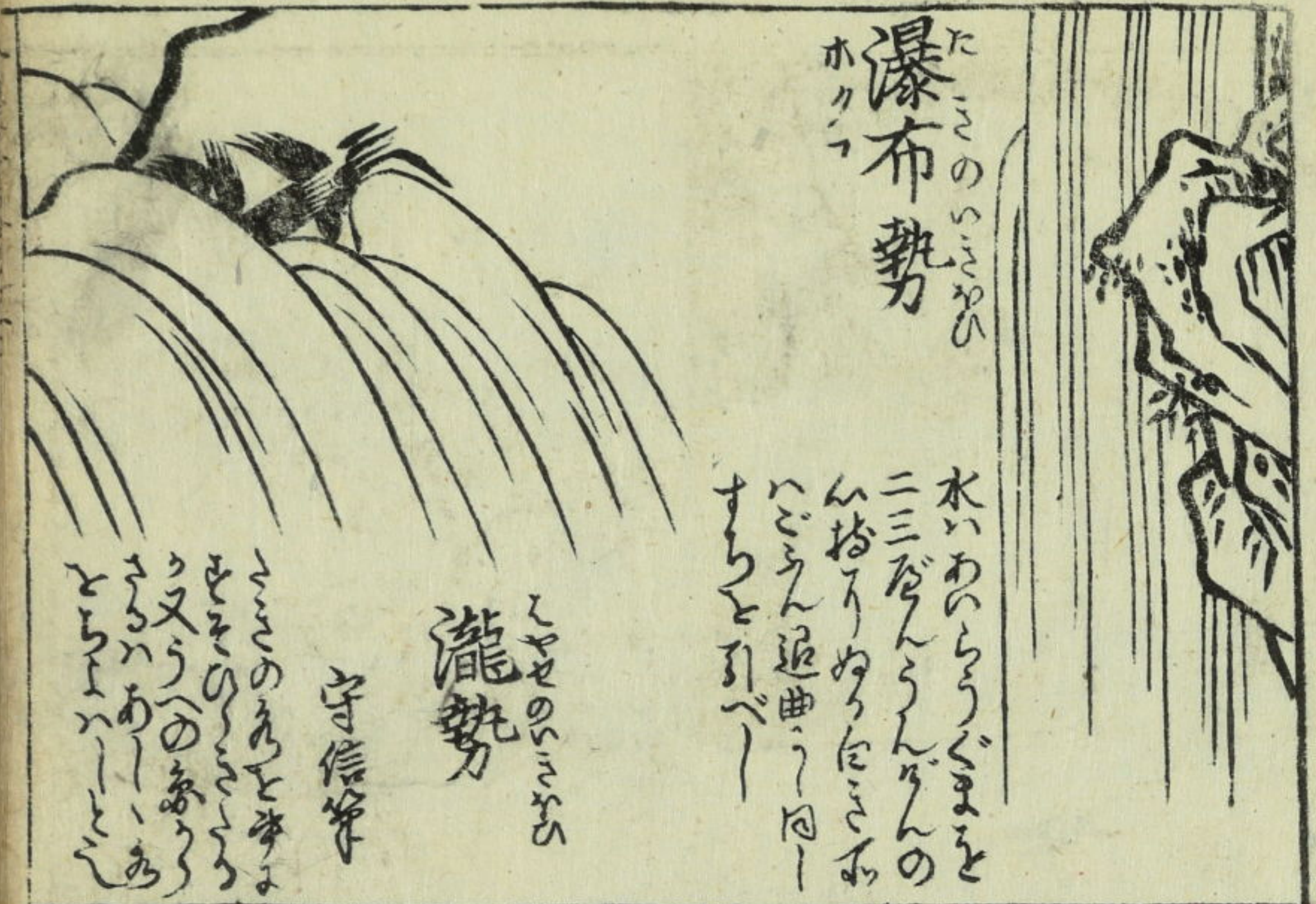




比ひそ
うま
すこ



くさくさ
ひよき
飛空下の向流



たこののいさやひ
瀑布勢
ホククフ

水いあいらうくまを
二三ぞんらんがんの
いぢりぬうはさあ
いごらん返曲う回
すらと引べー

しやせのいさやひ
瀧勢

守信筆

くさくさ
ひよき
すこ
くさくさ
ひよき
すこ

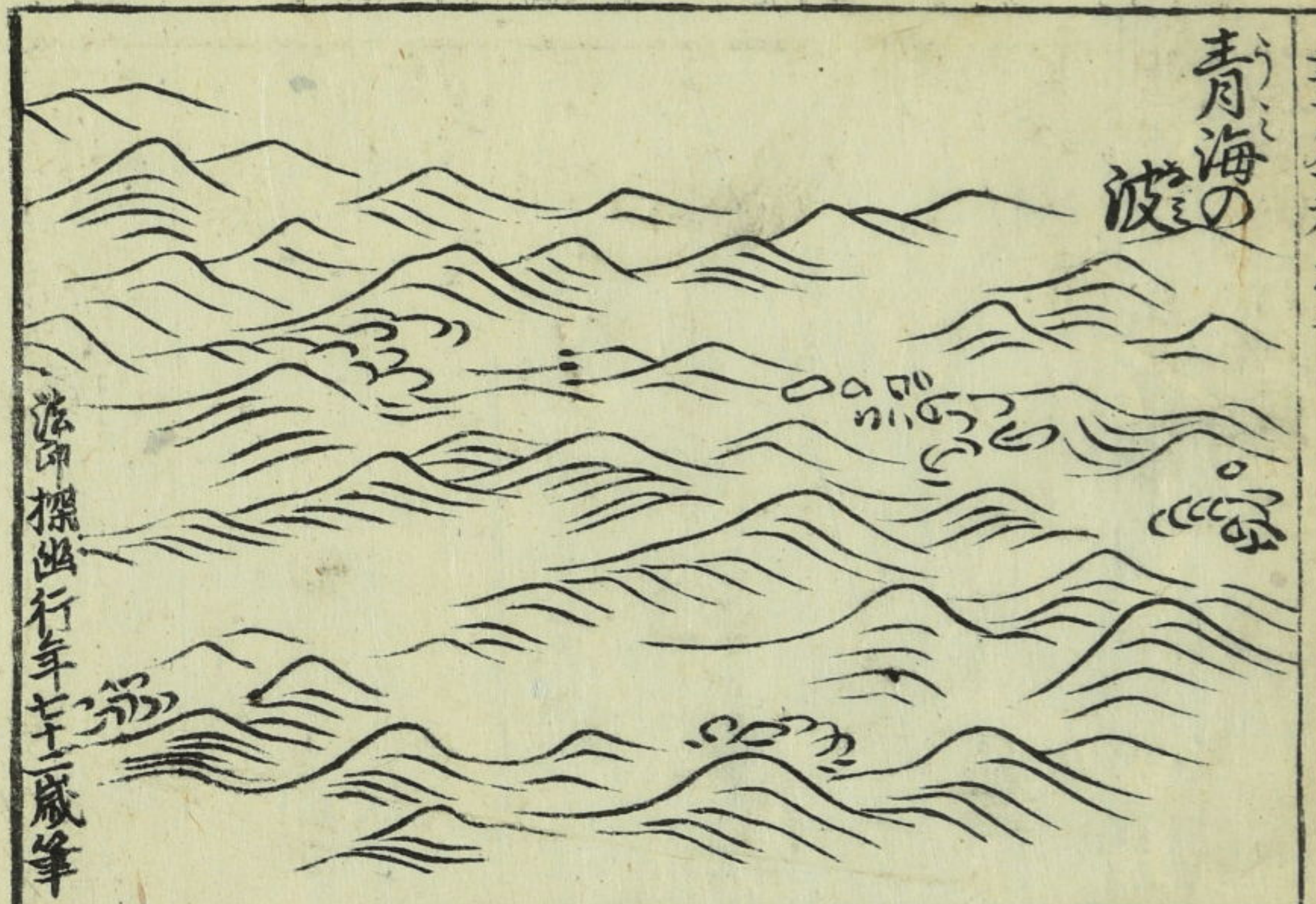


くさくさ
ひよき
すこ
川流勢

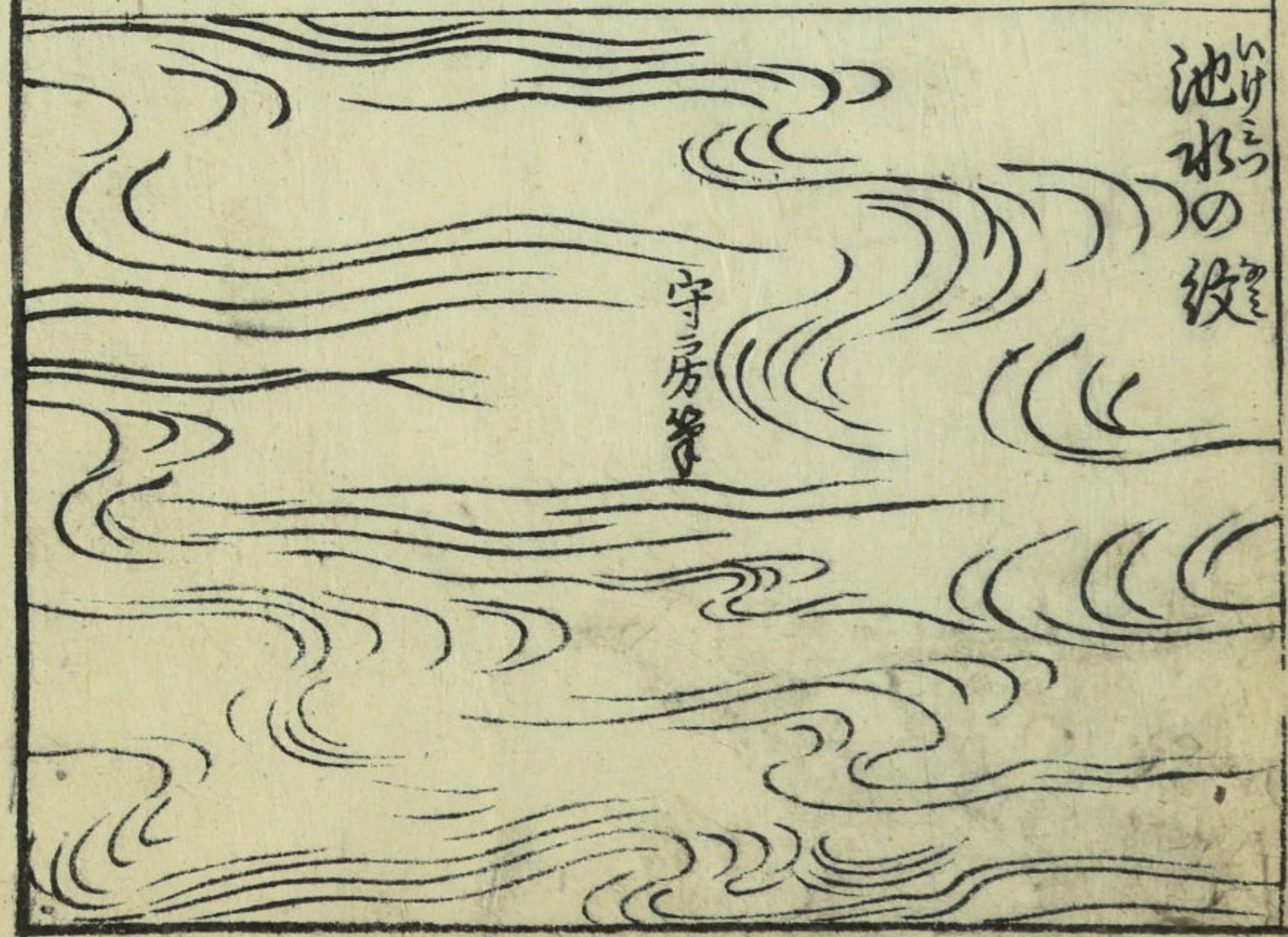
くさくさ
ひよき
すこ
川流勢

守信筆

青海の波



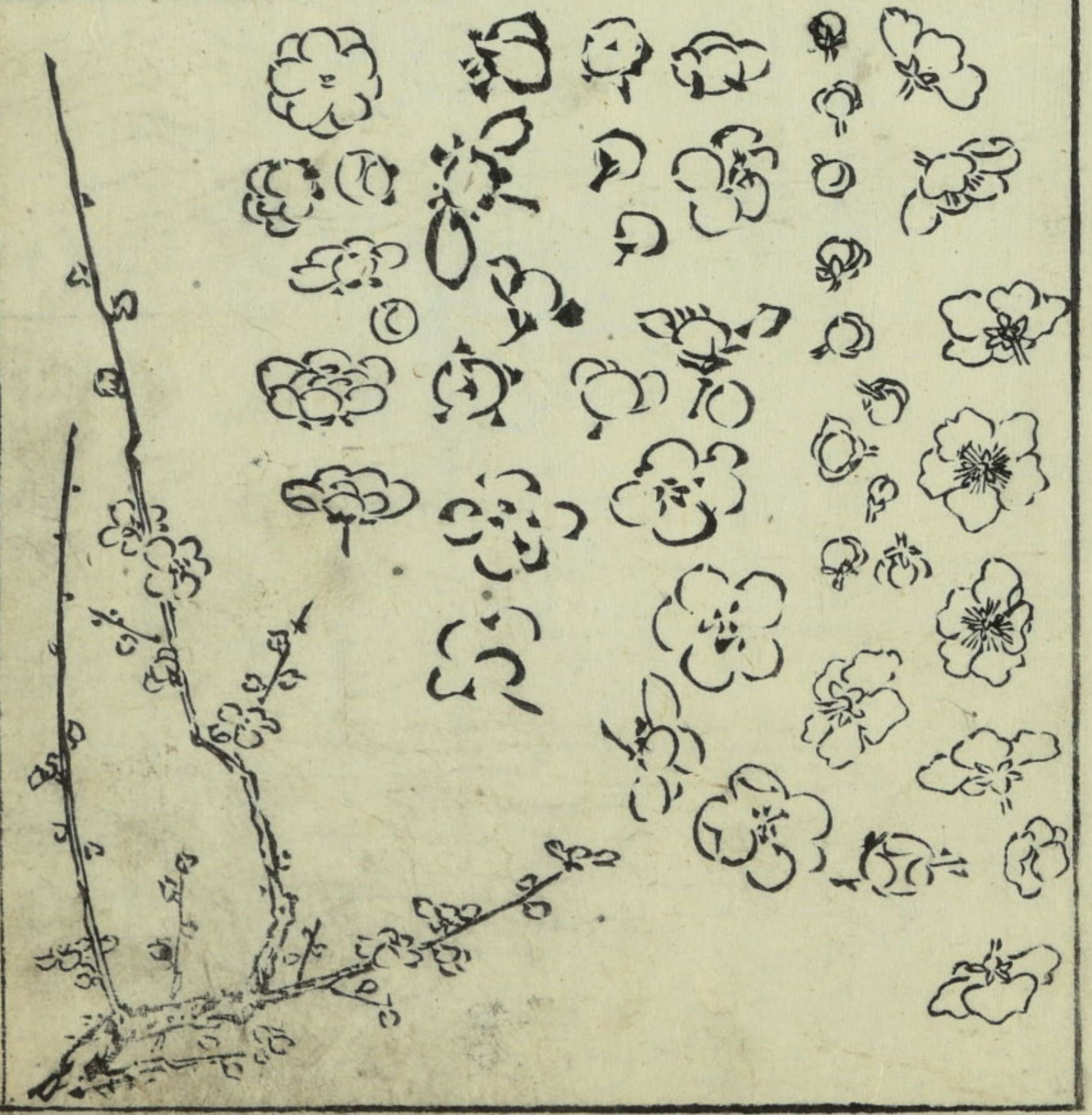
池水の紋



四時花部

春

白梅之白緑々々
没骨之浅ぬり粉
にて端と括取と
五ヶと冬と春と
ゆり曲と消と
是の氣に脱て
花中の又完へ白
柳汁よて括花
葉の



少人量いどんつきて花葉とぬる
 和よ去へ白線おいらう合葉土かどうすぬる末す
 小枝らひと汁塗成の葉汁朱書あつて出入せり
 行きてとまは先陰のどやゆりてか初にす
 塗をうとととみまき描ととと扼は皆淡をみとぬる
 瓣と肉色ふて浅波骨で瓣とに中の方より生多
 いて退曲より其外は白松も同一苞へ葉とぬり生多
 小源と包ととと○紅梅貼立花ハ墨紙用とて肉色
 ちく花瓣と描起仕まると存同一色葉の対ハ同一から
 花の生多の具ちく波骨ハ生多ふて花れ中の方より曲より

海棠花

花の生多の具ちく波骨ハ生多ふて花れ中の方より曲より

躑躅

守信筆



紅色肉色
 ぬる朱め
 生多ふと
 上の一瓣の
 同つと
 他葉は都て
 かくてぬ

桃

種類



花の生多ふとすくまうぬり生多
 曲中の方より花れ中の方より曲より

櫻



花の生多ふとすくまうぬり生多
 曲中の方より花れ中の方より曲より

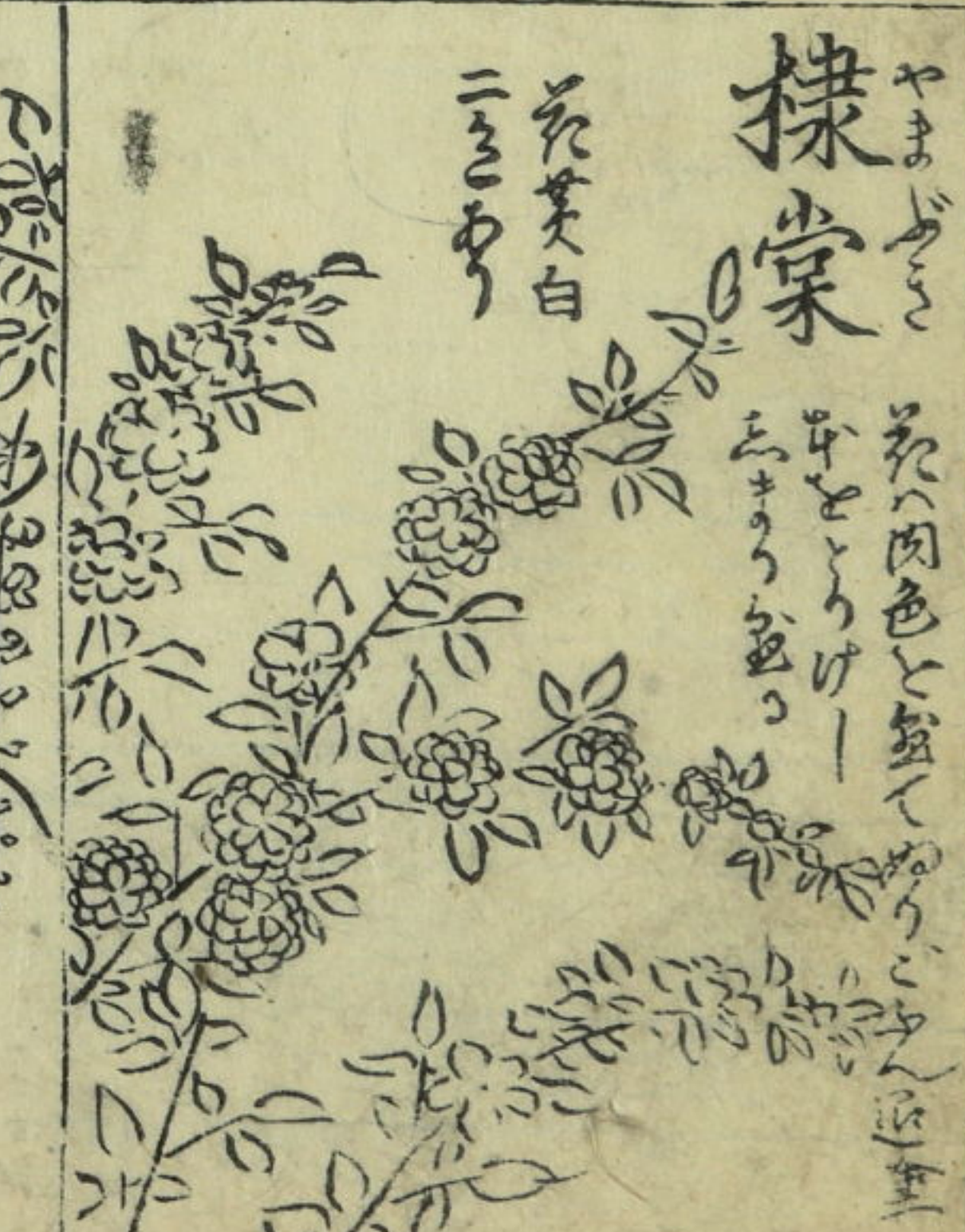
海棠



出... 花... 葉... 茎... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...

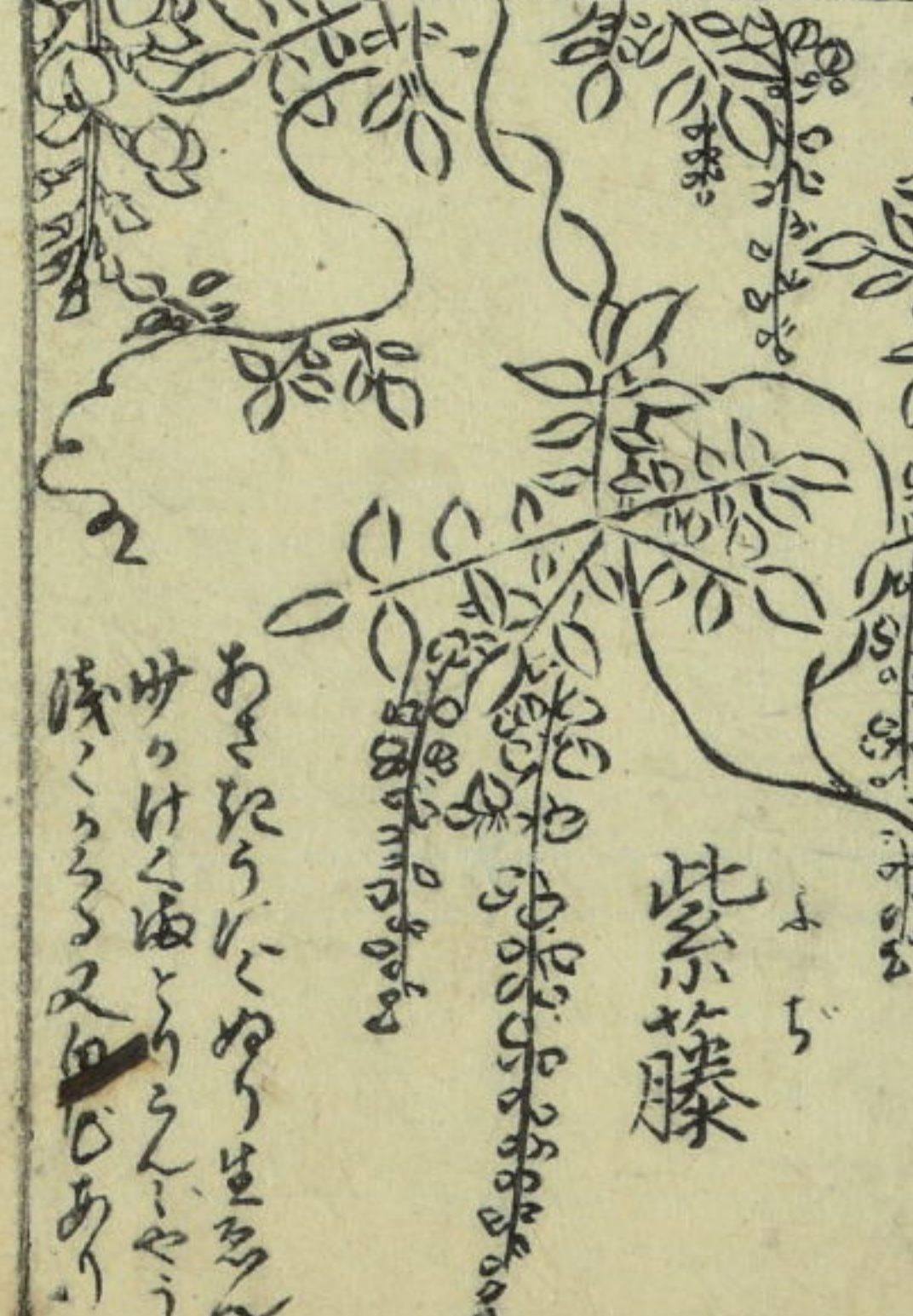
櫻花

胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂...
 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂...
 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂...
 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂... 胡粉... 脂...



梅

梅... 花... 葉... 梅... 花... 葉... 梅... 花... 葉...
 梅... 花... 葉... 梅... 花... 葉... 梅... 花... 葉...



紫藤

紫藤... 花... 葉... 紫藤... 花... 葉... 紫藤... 花... 葉...
 紫藤... 花... 葉... 紫藤... 花... 葉... 紫藤... 花... 葉...

月季花

ハ下... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...
 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉... 花... 葉...

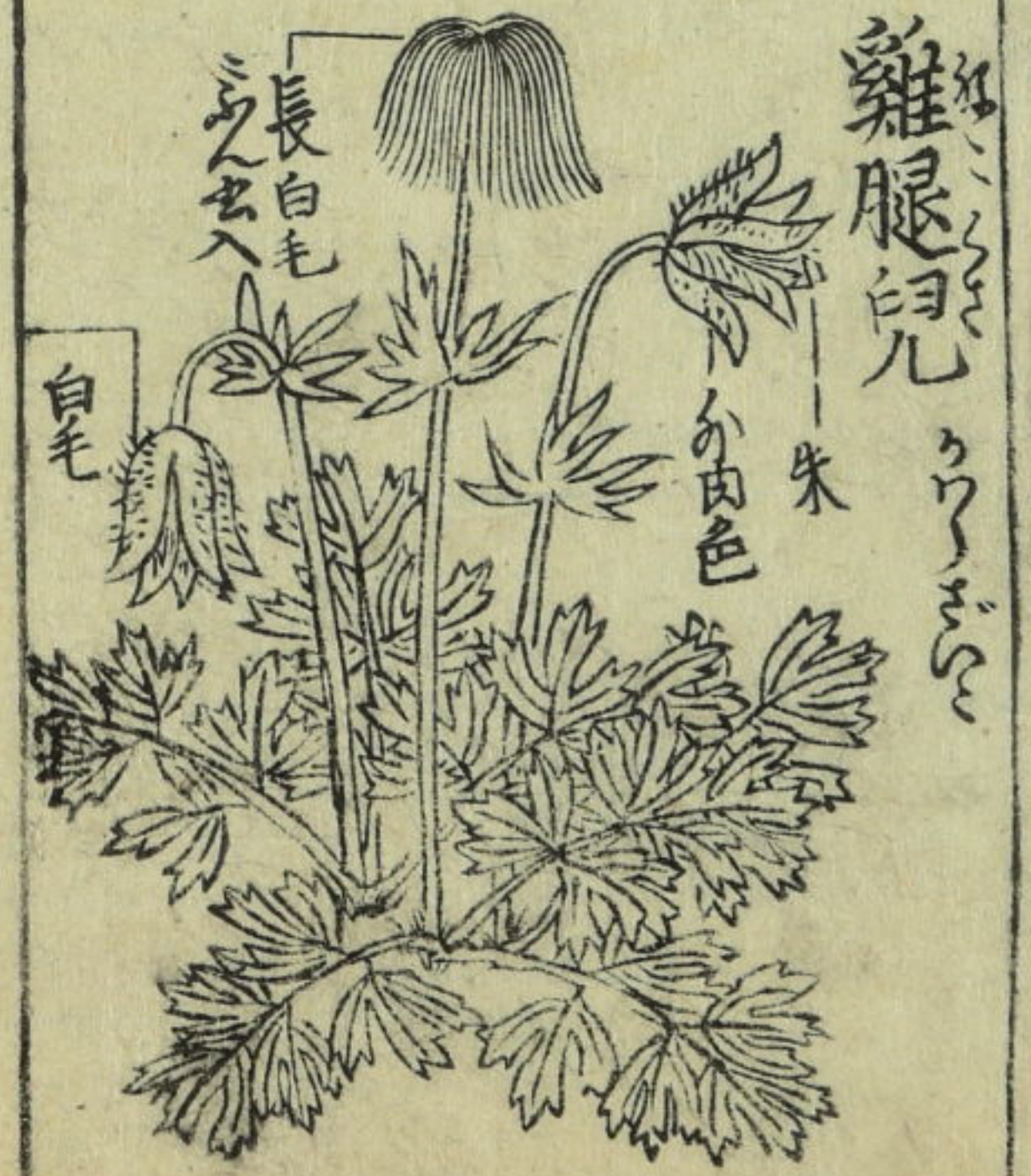


月季花

月季花... 花... 葉... 月季花... 花... 葉... 月季花... 花... 葉...

探出...

去一又不成毛邊紙よ虫よは生無
 び花と澄くと去染の甚深哉す
 深液虫より由（び虫）と一筆物と
 云凡一筆のなげ物（び）と難
 然大袖（び）者（び）上功（び）終（び）と
 眞筆（び）の陰（び）物（び）者（び）も似（び）世（び）易（び）
 て似（び）とたり（び）上（び）巧（び）よあ（び）と人（び）ぞ
 描（び）とあ（び）る（び）浮（び）沈（び）ト緩（び）と彩色（び）
 此（び）應（び）ず（び）加（び）減（び）の深（び）秘（び）が（び）あ（び）る（び）色（び）の
 もの（び）之（び）固（び）く（び）に（び）柔（び）か（び）く（び）に（び）伸（び）ば（び）れ（び）ど
 雲（び）あり



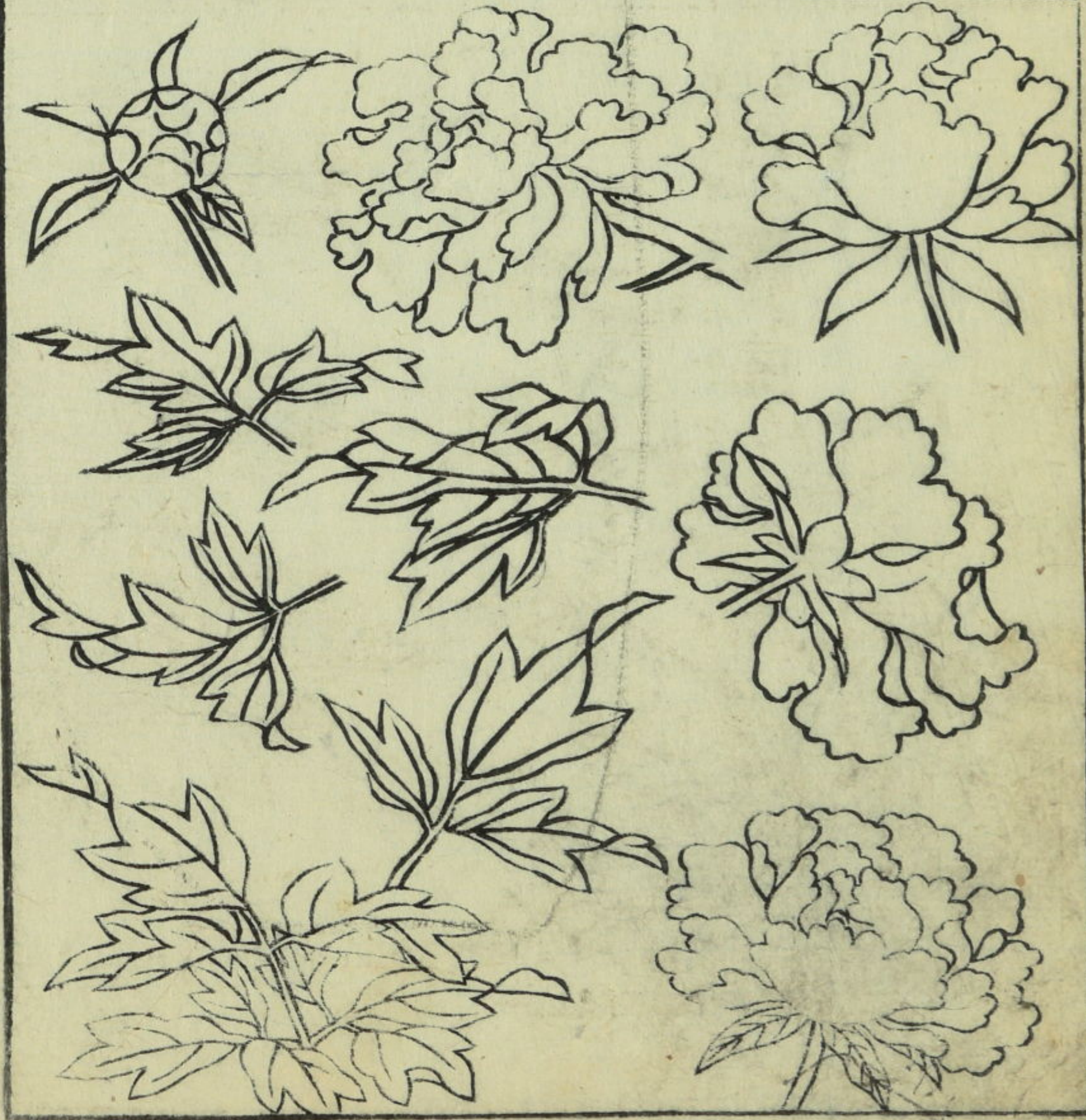
白牡丹ハ白保塗

ありあけく落發
 塗粉粉退ぬり隈
 五消心ハ白保塗上
 に花黄と掛実ハ白
 縁ぬり生多ん括心の
 園ハ心ハ肉色
 ○浅紅牡丹調
 具彫り又上とあり
 しゆる生多んハ二
 三度ハ花増とあり

法印守信



返張ぬ清○緋牡丹
 丹肉色塗又塗
 此丹に朱を加塗
 又朱をて彫り上
 殺ぬを調脂ぬ
 三篇くぬれ出む
 湯と丹ぬ返ぬ
 とも○葉は老の如
 緑青とぬり割ぬぬ
 外の方に塗ぬぬ
 けに此の葉の本の葉は皆四
 角の葉にけすやうに
 このうらに



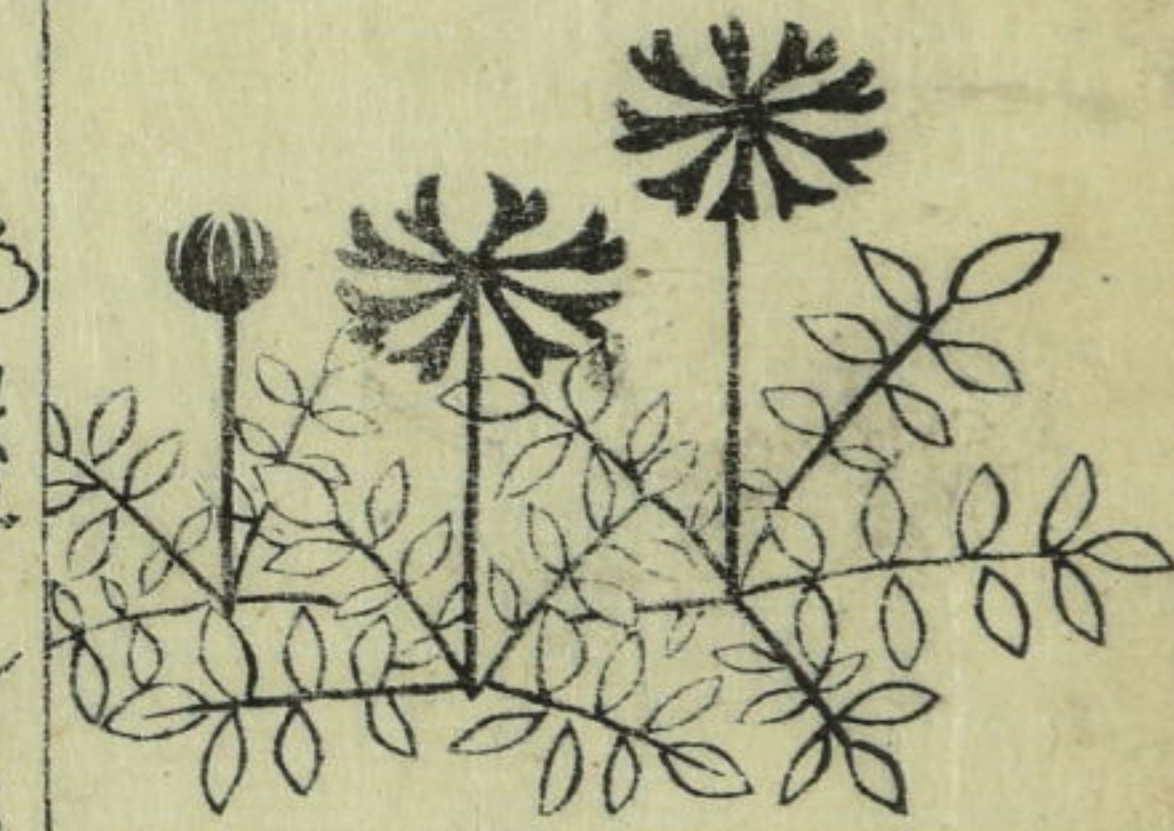
又根は小く叶は
 必と描肉色とぬり
 合葉玉とかけ重ぬ
 ぬ割曲より同筋虫
 一枯ぬぬ白緑にて
 莖と引へ他中
 の方より線まを
 けし彫りぬりし
 本は墨うこれ上
 朱をみ淡色へ



牡丹全體之圖

碎米薺

淡紅白あり
生あんしぐれ
立生あん去へ
えん勢白い
付立あいらう
すし



葛蔓青

葉と白縁
のりて二
緑の白色
多と以て塗
是秘傳の中一條
あけくたんと名つけ
てくまとうりゆゆすけ

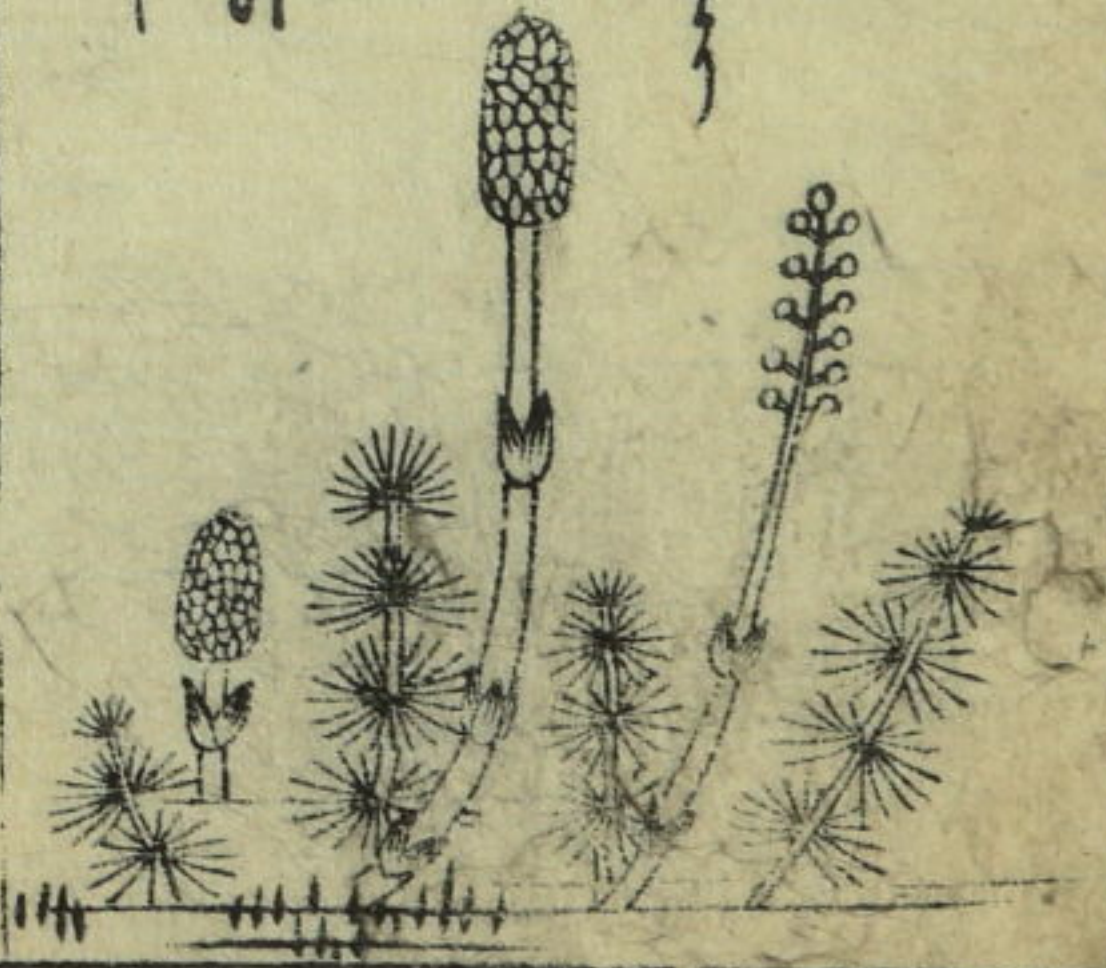


苦緑
曲

根じん白六
貝生あんド
姜汁かと兼
りらゆし

土筆

肉色付立ち
白六女し付
ごらんつさ
朱すし中入
杉菜の黄汁
よて怪去へ



かぶら

吾陰



夏

米囊花 單白
むらさけ千葉のお
白多ふあり

蜀葵

花の木種は似く

源紅淡紫白

單子葉のなる

燕子花

紫白黄淡紫

数種あり又四時



小方守義

花用あり比と淡葱ふてぬり生
多ぐ淡之由より緝青から白
ハナハ方去らんに女曲とぬ又白也
ハ淡多し此節あり 九んきの
石竹

單瓣とふと石竹と云千瓣と云
洛陽花と云瞿麦といふ石竹の
とくも紫えに貼立まする朱胡
粉潤脂をよて描むのふに生え
此花と入る葉は緑と若緑守房曰
心写と細く葉小く云い弱て

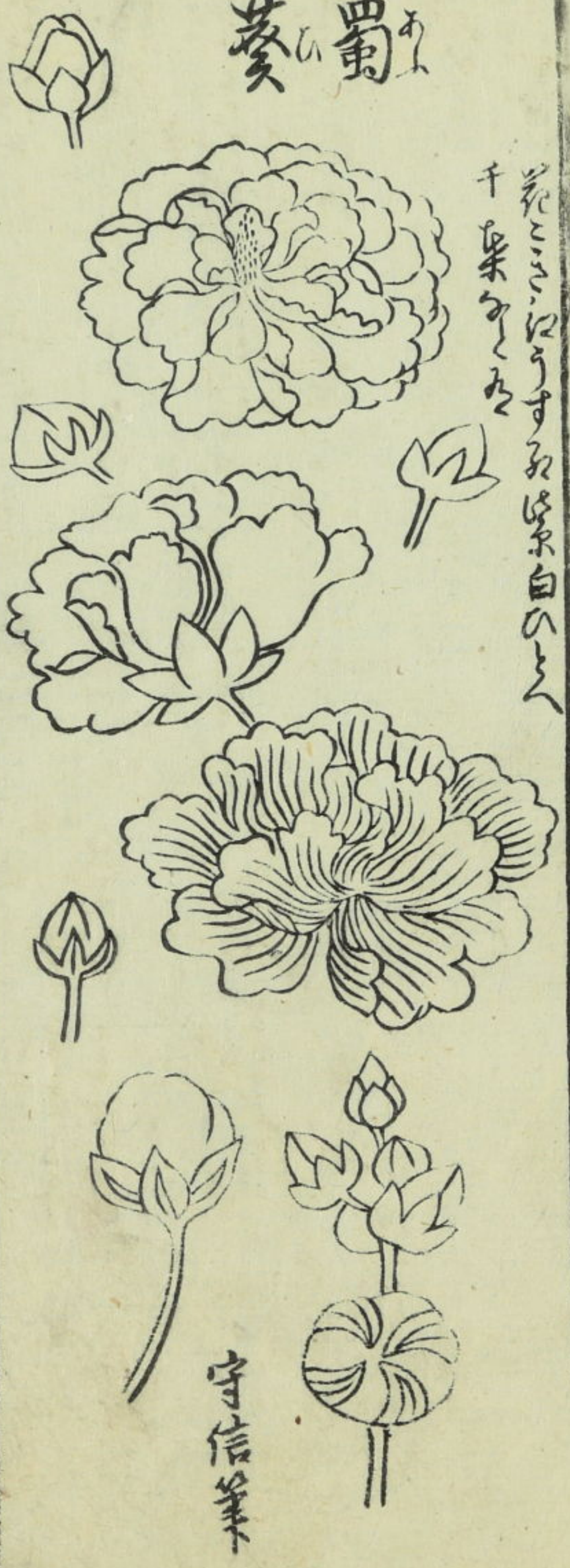
睡蓮
花は白六や
すわりと丸
ふて 葉は
二ん編く
わりあけま
う白六生え
淡勢くゆ



蘆
葉は海
う白六



蜀葵



花は白と赤と云ハ生る所の
千葉あり

守信筆



花うま色と云ハ生る所の
花は白と赤と云ハ生る所の
花は白と赤と云ハ生る所の
花は白と赤と云ハ生る所の

まより花葉あり
あてははる事
ぬり合はる事
ひと合はる事
ひと合はる事

只淨太きくわたり

と云へしむふ紫白

赤斑爛單千り

拖花

花六出色白單

又花小うて千葉

ある水拖と云也

萱草

花と丹具と菱黄

中加へて彫り面

ハ深なり背ハ浅肉

うさげら



色の知ぬる内の方生え下はくせとら

隈に外ハさき付ハ白線す

草汁少加ぬる葉縁ぬる葉汁割曲

とありて同まらとむく也

百合

花白一〇卷丹 莖より七葉

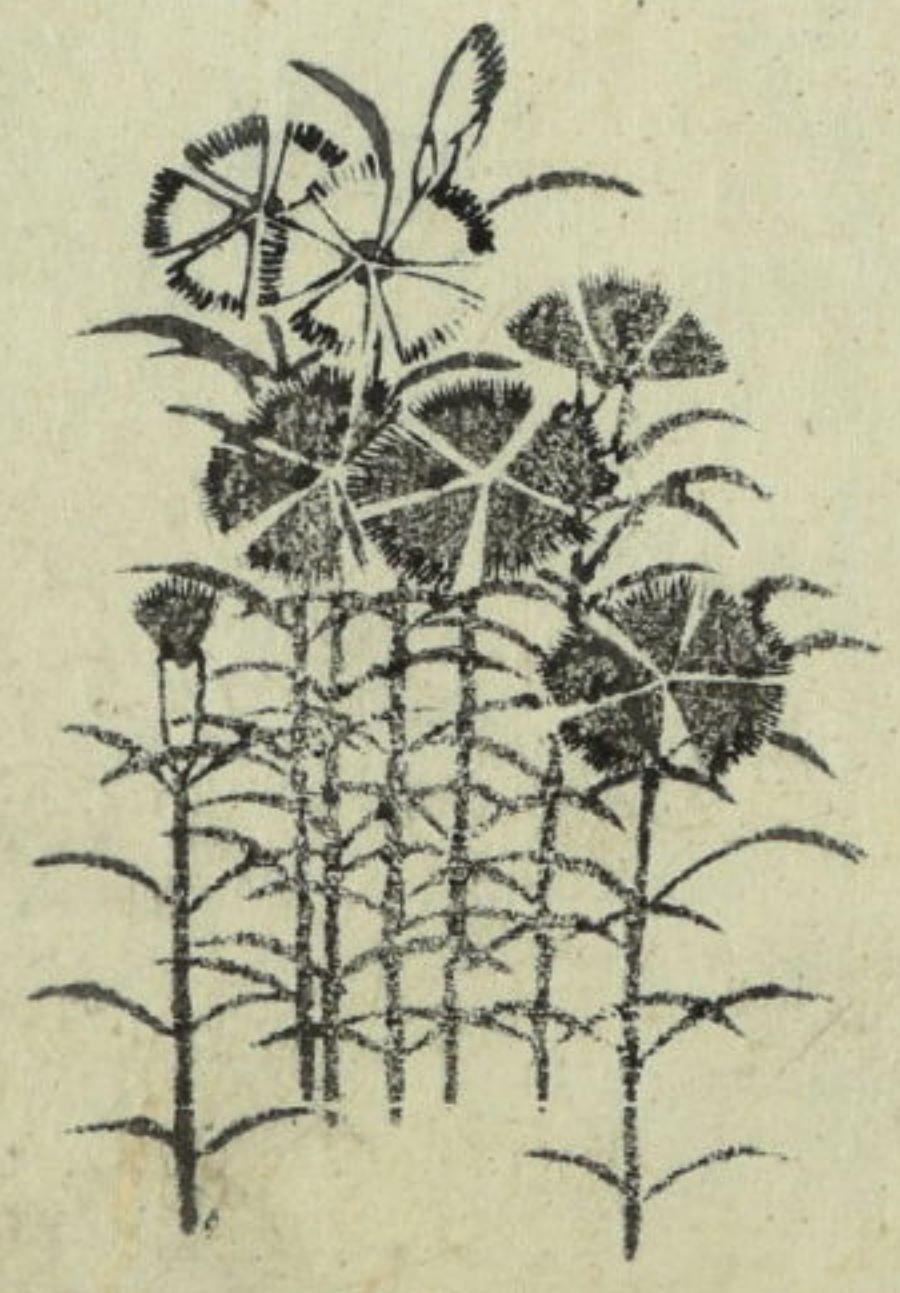
のるに実と生し紅黄花と花上

黒斑の點あり肉色ぬり朱生邊

〇山丹 五月に花とひらく又細

ゆり有む深紅色一〇鹿子ゆり

生多下此を調脂と海同星と云也



秋

蓮花 花は紅白粉紅の三色を
 花心黄鬚有り花弁を生かす
 白色れ其あく塗花さ地の赤
 生かす淡曲より出し同前と
 訂へし外の方にて是は粉紅あり○
 師曰蓮の花は甲斐さうさう
 さうれと下らば必やうくはあこ
 ちさく描し心くは葉は陰より出
 魚一蓮房は白緑具はとぬる葉
 汁と以て星と作ら又星より外



面よか退て周と
 皆ぬる蓋はとん病
 葉は白緑のさぬり
 緑きぬる若緑よ
 て葉と訂さるさ
 退て葉汁あぬり
 濁る曲よりけは組
 葉等此時定葉
 汁あたの如く
 後縁青紙より又
 不地毛透紙よ雲



畫子の初に指と以て紙を抓皺
と他人刷毛は淡墨は深て又一方
おは深すと貼てさうと去筆に
深すと合へ細と輕去へ又破
葉れ処の葉筆にて吸へ凡
情あり畫の白線ぬる墨汁枯村を
不とつくりり

秋海棠

びたの正保の比神と唐より長崎
來り

黄蜀葵 畫家よりせんといふ

さうのたう
花生あん下を
桐脂くはれ出
花瑞とらん
さそい



莖白線節は生あんさうい葉の
さうて常れ

藤黄具して彫り
或は没骨表の方ハ
さうりてなれ方よ
つ画に生一花場
より粉粉みく還
隈も裏も同一位
肉のありな黄をに
てまらとひさ外ハ
粉粉さく引心は生
あん下に辨れり
おとすー 如此又

とろく



あはれ

あはれ

その中に深きまで、及び蓋の縹と引給粉わく星と作る

横六調脂まで石竹の花形にや

鳳仙花

花のま紅白紅白お交もれ入り

お黄お白あり

牽牛花

花淡蒼濃蒼緋色白赤を有

菊花

黄菊志よりれぐと塗中に朱の黄

色あり周れけり毎瓣ご文通塗曲

わのねこ



わさぐり



表の方

裏の方

實の方

元けす又まごうのく上よま
○朽葉菊 肉色
て膨り又上よ色
中に朱の黄と塗
周に消暈とを
斤とにかけ方より
隈を出し只村に
まゝ一巻く曲れを
重花楊より給粉
返らぬ正中に生え
り周れけり黄



中の刺曲上

中ハ下の方

条ハ深

すみの花ハ

かけ明粉にてまじらしたる ○ 淡紅菊 綿脂の具と作りぬ
 又挂中より綿脂と液作り周にけし花場よりこえ退曲の中に生え
 塗白りぬけ粉粉より細とひく ○ 白菊 淡粉粉ふてぬ 白粉あり
 深より退ぬり曲ぬよりと引 ○ 黄菊 花黄のをばぬりより
 海周よりこえ退回筋 但去こえを ○ 緋菊 肉色 肉色
 挂をぬりより米を以て作り塗又一層かけくまんたるに調脂と
 作り周よりけし瓣とに作り調脂のぬぬぬし花場より丹にて
 筋よりさす ○ 紫菊 綿脂と作りぬりて塗調脂のぬぬぬ
 より加粉のより ○ 菊れ藍 白緑ぬりぬりこふんと以て星と作り
 次より黄とぬり幕ハ白緑諸花皆同ト生え下はく括し 括し
 ハ黄土具ぬりて合黄土少曲より米をみより括しとぬぬ 括し

木芙蓉

調脂具白色と
 合せて彫塗又上
 に一層かけ生
 態脂のぬぬぬ
 肉ハ作りぬぬ
 外ハ作りぬぬ
 花場よりぬぬ
 深より綿粉の物
 みぬりぬりに
 と入るぬぬに



生明子

三つへ退曲より生
 多しみくちと引
 外ハ餘物也引
 裏とわらうし月季をぬか
 ずと引し蜀葵の如く
 四の生るん曲ハ引んぬ
 葉ハ緑者たのし
 刺曲も鮮に且直ハ
 わし少及張村
 に柱すべし○白む
 ハ白緑をよふん退
 ゆり曲ぬ回とら
 と引へし



もくふよう
 花ハ紅千葉單十白千葉單
 黄たふもめり

筆法大居士

下の方

おひわりのくまの上の方



蘭

花ハ去さうは淡
 ゆりかへは生
 多しみくち
 とらと多



同

墨畫

花ハ淡



浮菖

花ハ去さうは淡
 ゆり生
 多しみくち
 とらと多
 又白
 上の方



桔梗

花ハ去さうは淡
 ゆり生
 多しみくち
 とらと多

木槿

紅白
單



胡枝

和文
菘菜

生白あり
生ふん
付立りし
生ふん
入ふん
ふん
ふん



龍膽



わさねめり生ふん
ふん

野菊



しめり生ふん
ふん

芭蕉

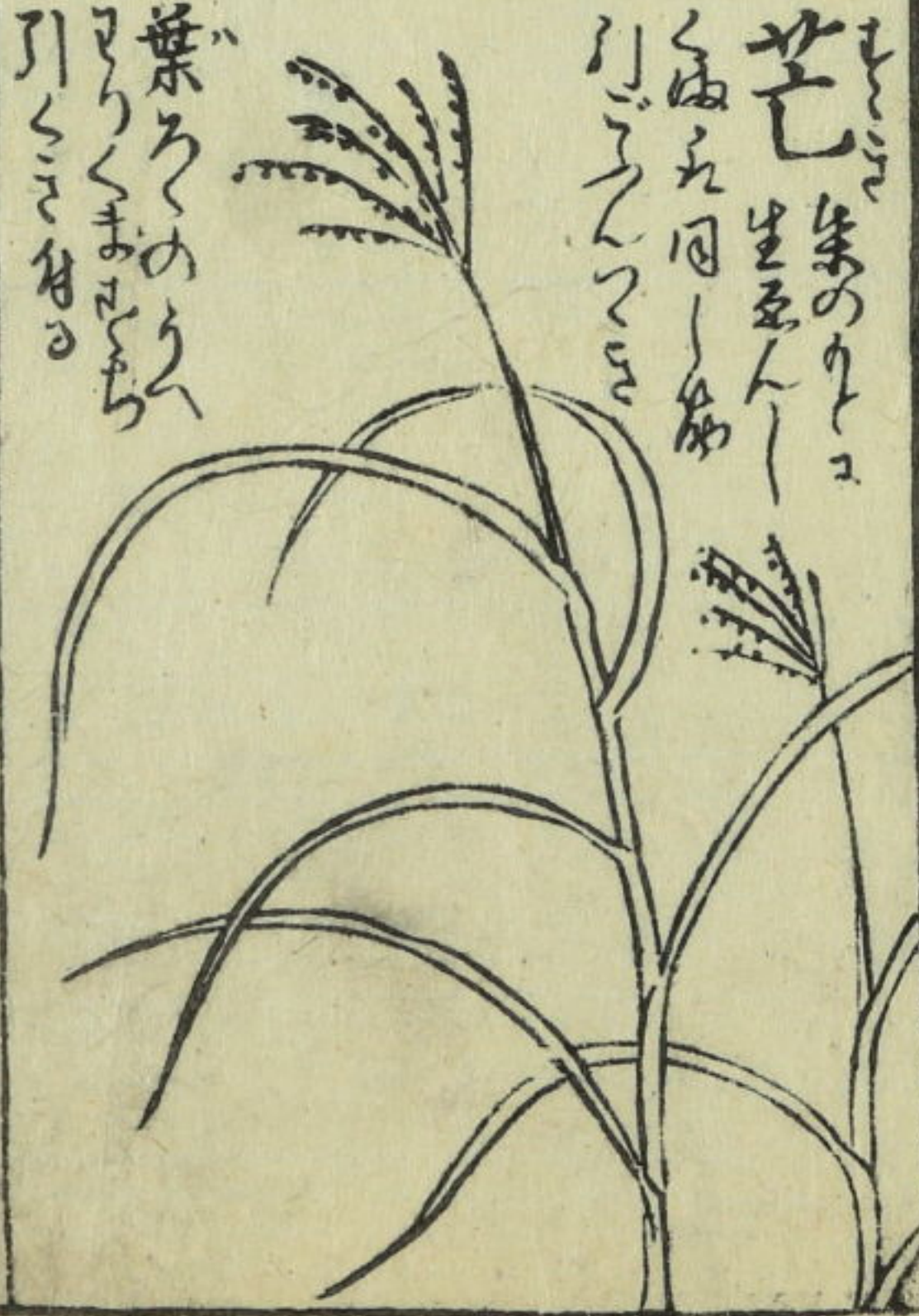
緑青常の
わさねめり
ふん



古法畢元信筆

芒

葉ろくめり
ふん



楓樹

わさねめり
ふん



冬

蘆

冬一花の如



枇杷花

枇杷の花
冬一花の如
冬一花の如



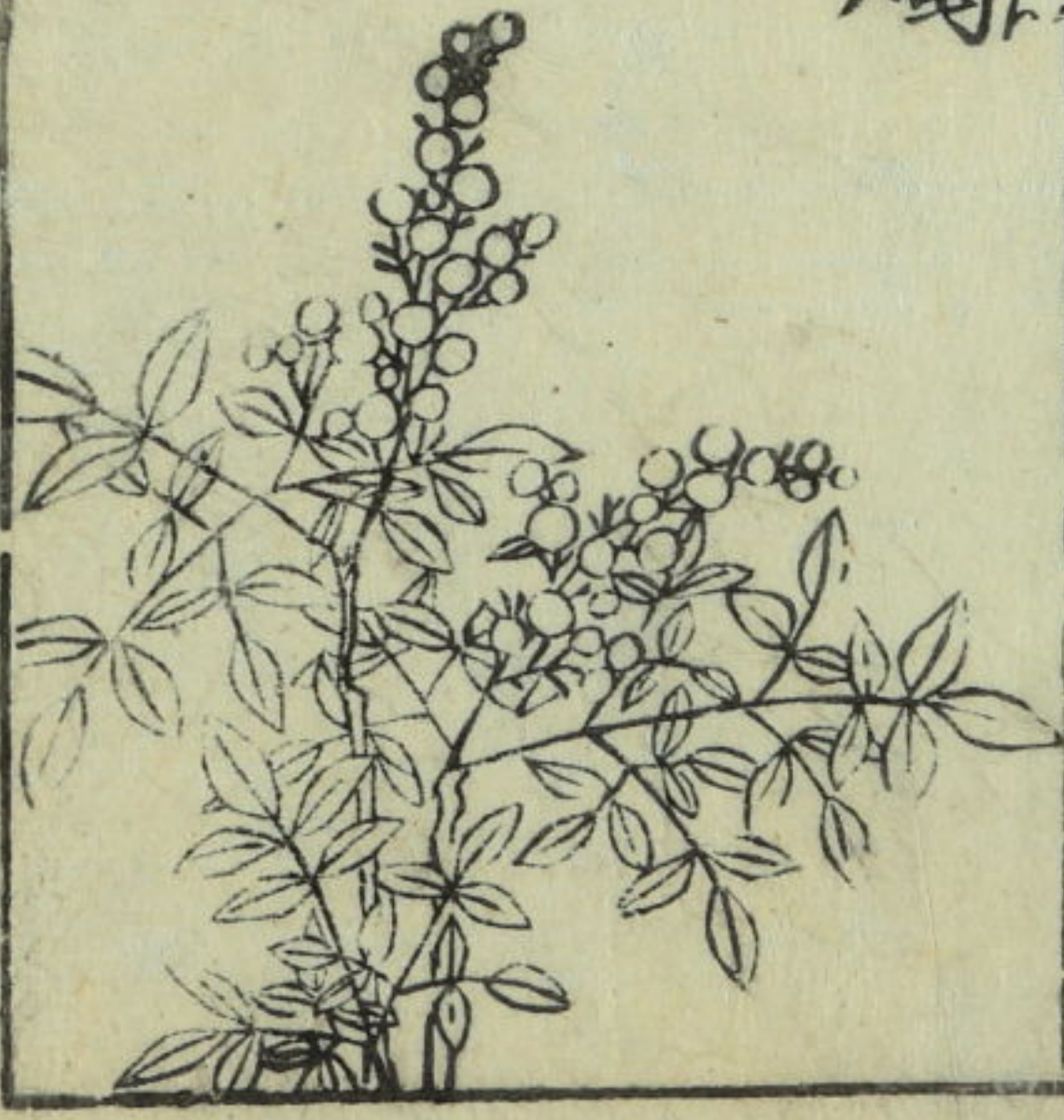
蘆

秋一花の如



南燭

南燭の花
秋一花の如
秋一花の如



水仙

水仙の花
冬一花の如
冬一花の如



行中彩

同

水仙の花
冬一花の如
冬一花の如



草淡彩

同

水仙の花
冬一花の如
冬一花の如



真極彩

同

水仙の花
冬一花の如
冬一花の如

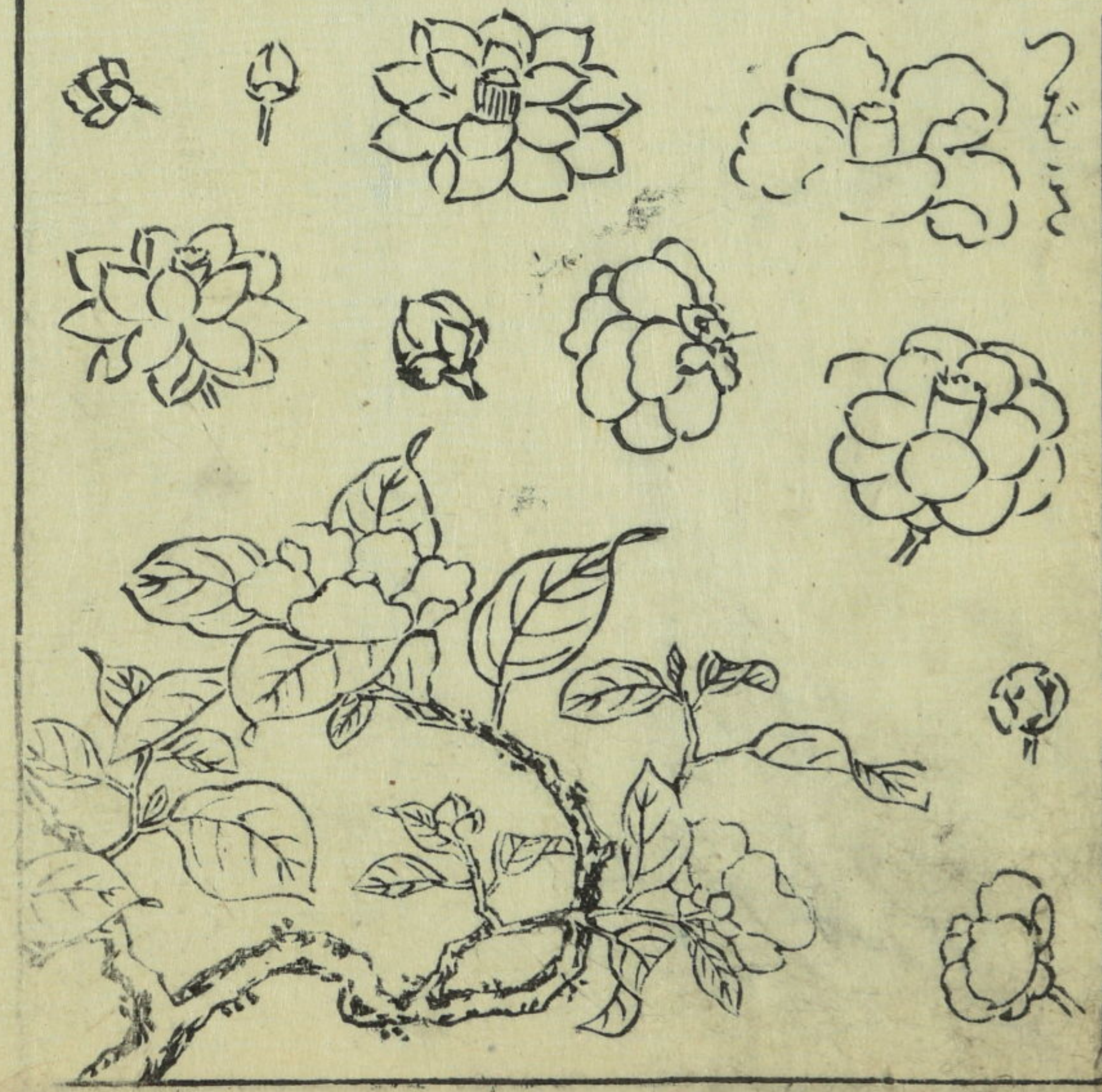


墨絵

白六
草汁曲
水仙

山茶花

日丹 肉色
 彫塗又一層なり
 朱と以て彫塗又一
 層塗りて生多し
 にく曲とをわきま
 加のぬしを上に曲
 とは右(左)の
 外(内)かみのぬし丹を
 増しり退めりし
 陳(海)の(遍)地錦



生多し其は彫塗又淡一篇
 ゆりて中の方より調脂のぬし出
 給粉退曲をぬし
 緑青の上割曲をぬしと引は
 汁ハ藤葉を濃くと毛の切ぎ
 彫塗以てはらりと塗し
 魚骨のぬしをぬし
 蓋ハ肉色
 心(星)形像
 氣は脱(わ)くこと

茶梅花
 花白
 海紅花
 淡濃二色
 冬より春
 真紅なり



身畫法の大事
 氣流の秘訣也

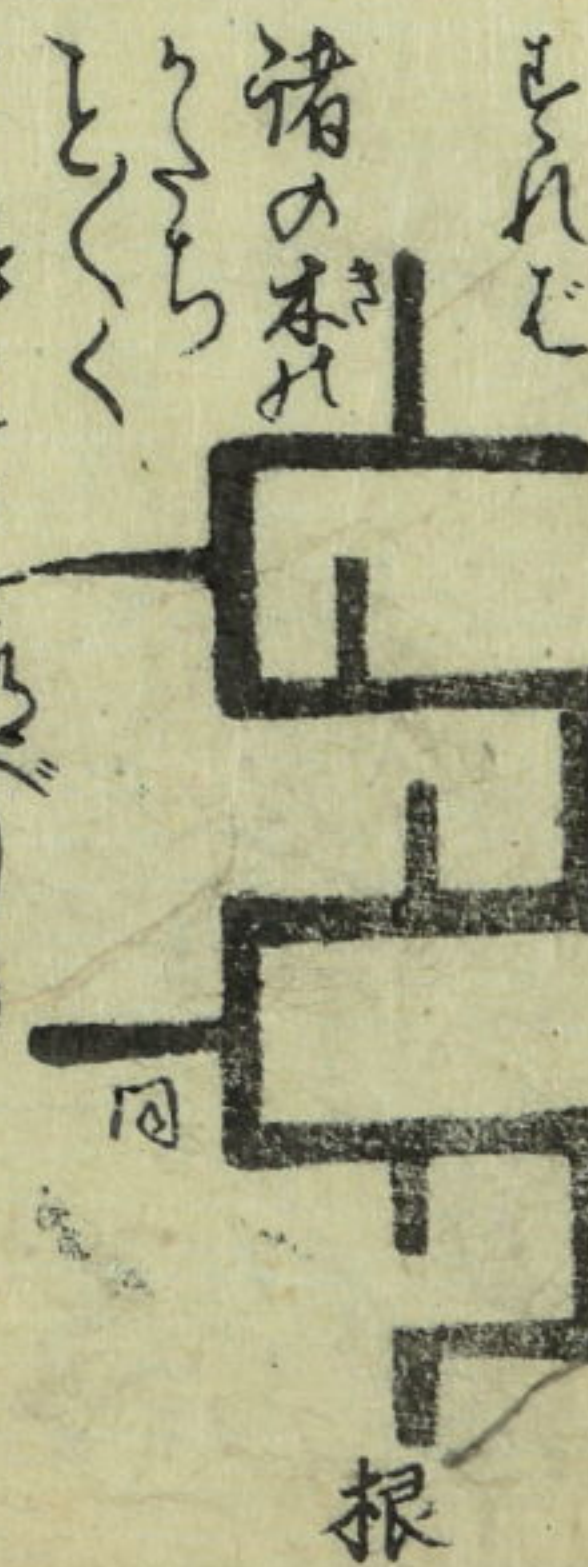
木 隆枝 並石之圖

岩木の類として描かざれば
物なりて宜く心を刺す
木と描く大意あり能く
表と裏と交てあはるんば

一變



此圖のうららとんりよるん
千變万化
臨機應變
とれど



二變

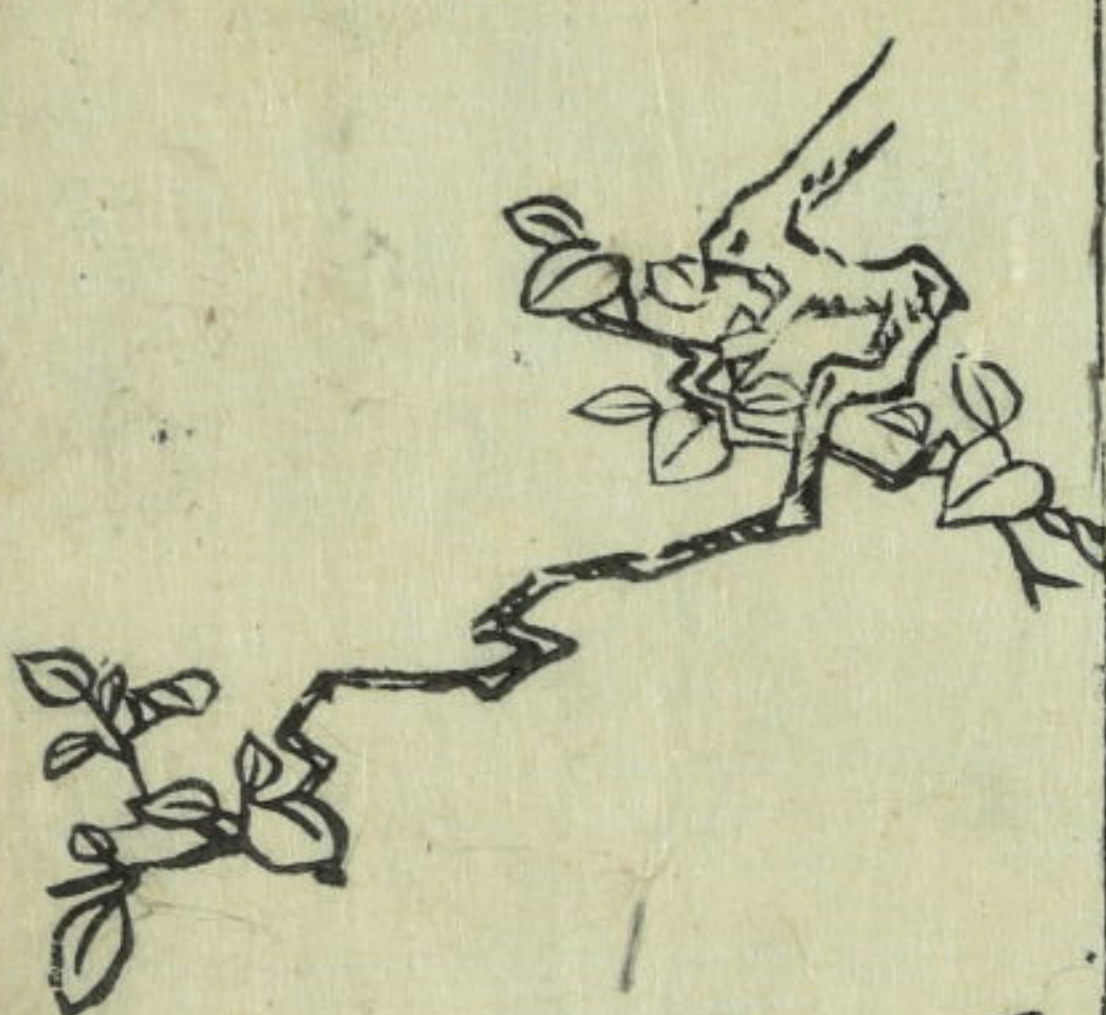
千變万化
とれど



守房筆



同右

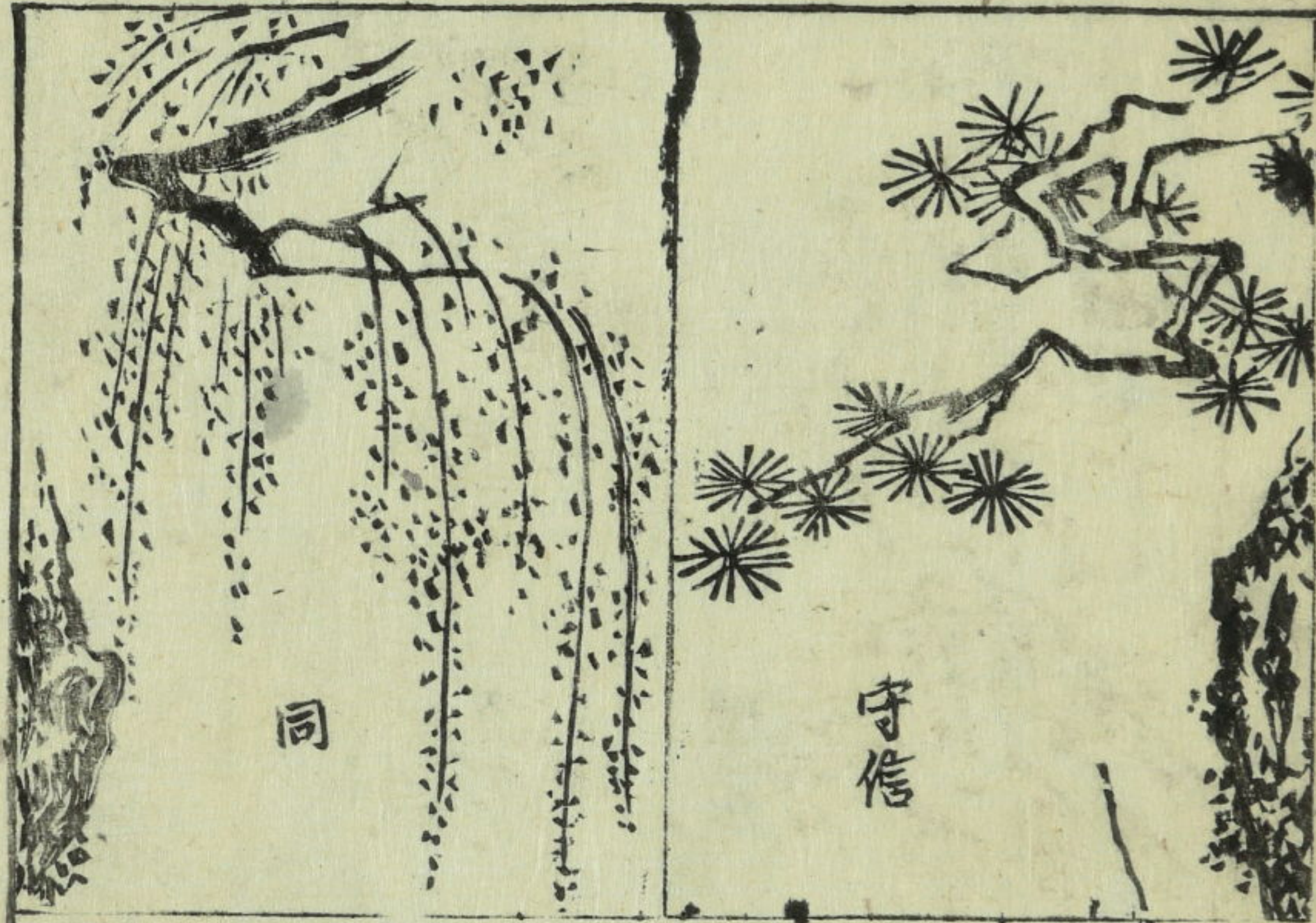


法印守信筆



同右





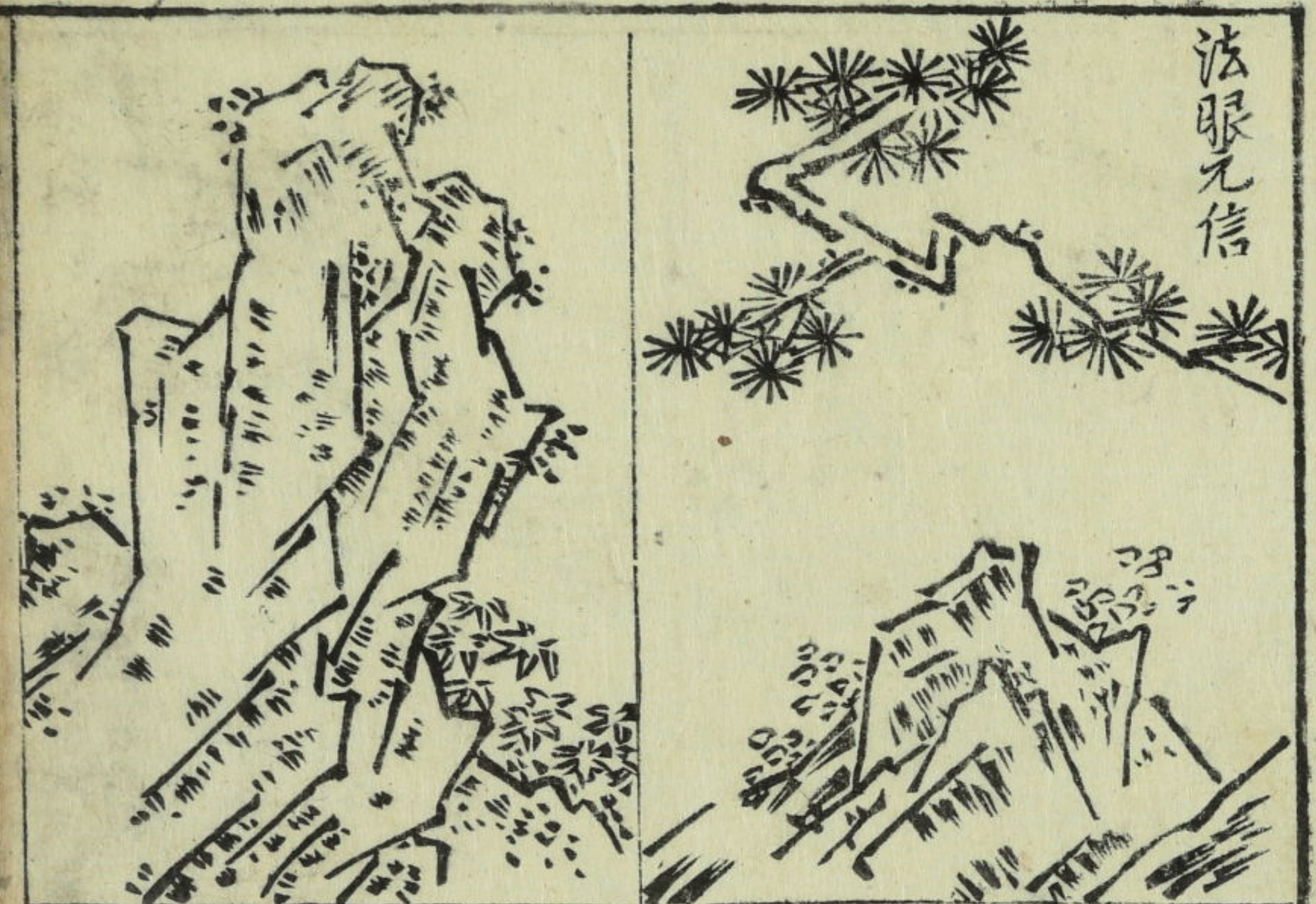
守信

同



同

同

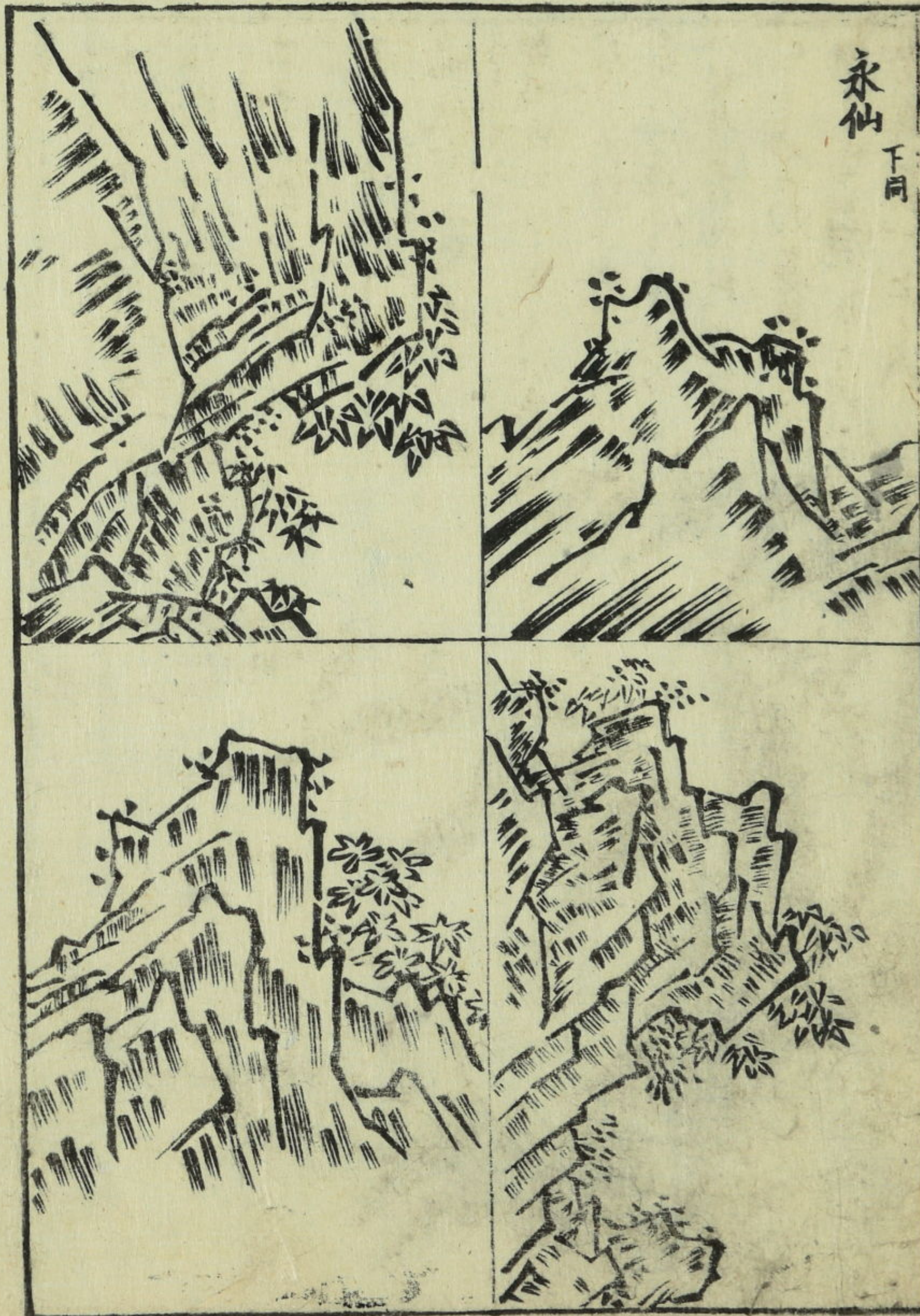


法眼元信



同上 以下皆同

永仙 下同



竹之畫其體用有
 陰陽淺淡錯節高低
 右幹左幹細分鶴爪
 葉聚散稚子老梢
 飛孤燕二蚕能首四魚
 麤且尖之平尖大段小段
 右之竹也決其竹
 志尤八病所三才圖會
 八種畫譜圖於宗景
 檀芝瑞之風 竹之竹
 東坡之竹上



東坡



探幽筆



檀芝瑞



守信筆

松の茂枝



守信筆

草の茂枝

〇七二

四時通用

松まつ 和松やまつの樹たけ體たいは紫むらさき土つち具ぐに墨すみか加かへてわりの墨すみと墨すみみく墨すみ起おこし又朱しゆと淡うす墨すみと大おほ畧りやくと描かいて後のちとらる又神かみより淡うすすみより墨すみとて後のちは朱しゆすみもも粒つぶしてはし但真草まのくさは依よりかひりる松まつの葉はは草汁くさじゆに全體ぜんたいとぬり白緑しろきより次つぎぬり二三篇さんぺんもぬり上うへて又下したの方かたは茂枝もえだより方かたと草汁くさじゆ



上川

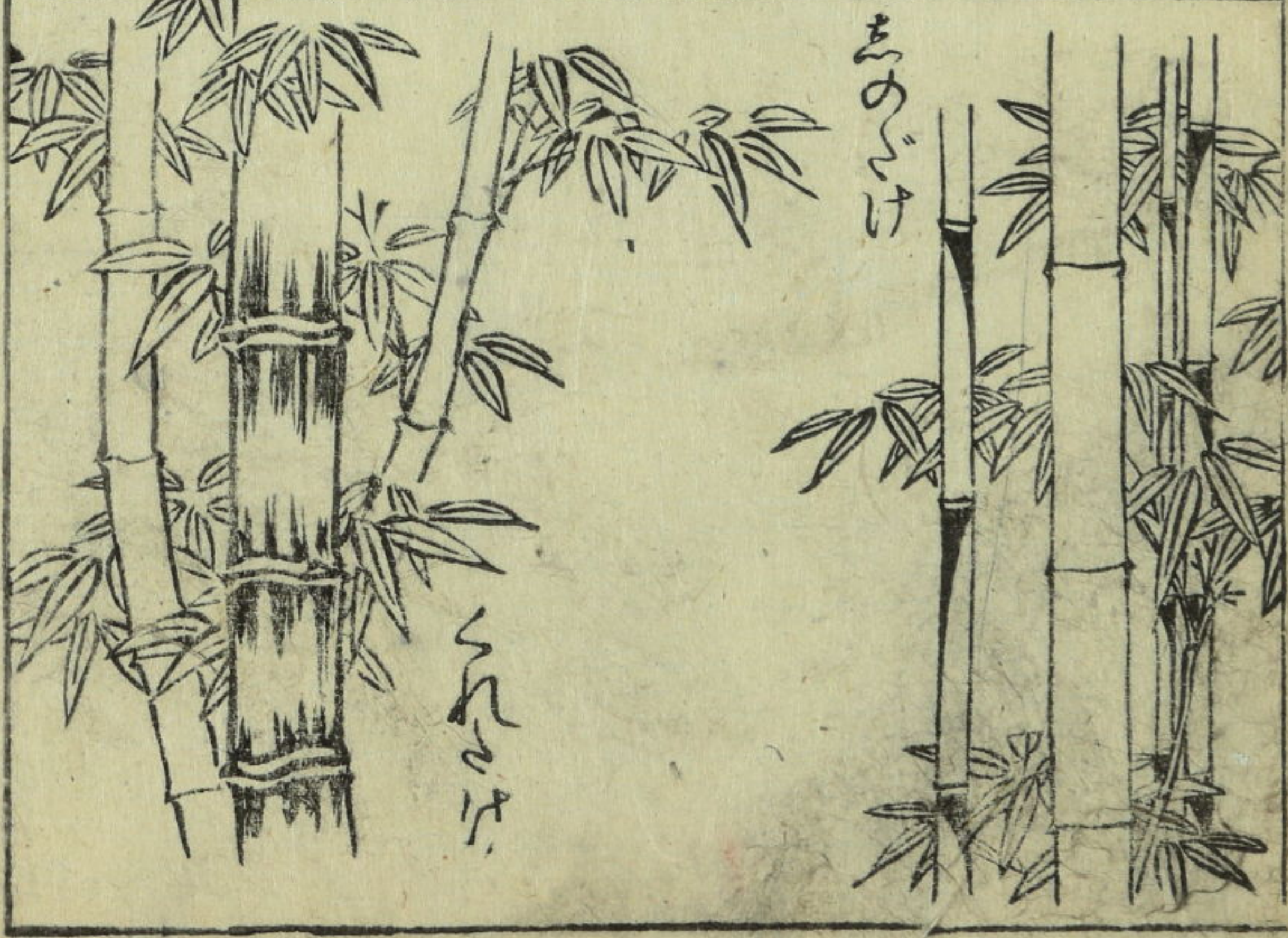
はく曲まがりて葉はが紙かみとすりにち緑きより白緑しろきは白しろとてあくく或者あるは緑きより墨すみか加かへ雪中せうぢゆうは松まつのこみんふて葉はと墨すみか加かへるも面白おもしろく師し曰い葉はの事ことは葉はの莖くきと倒たふる直ただま引ひく葉はは支し方かた入いて支し方かたの引ひく遠とほひをけり後のちより墨すみと墨すみか加かへるも面白おもしろく如ごとく兩ふた楹えいの心持こころもちとす古畫こゑの松まつ多おほく松まつの茂枝もえだ甚た描かくたもの之これ畫ゑ學者がくしや者ものふく心こころは月つきの如ごとく

新羅松

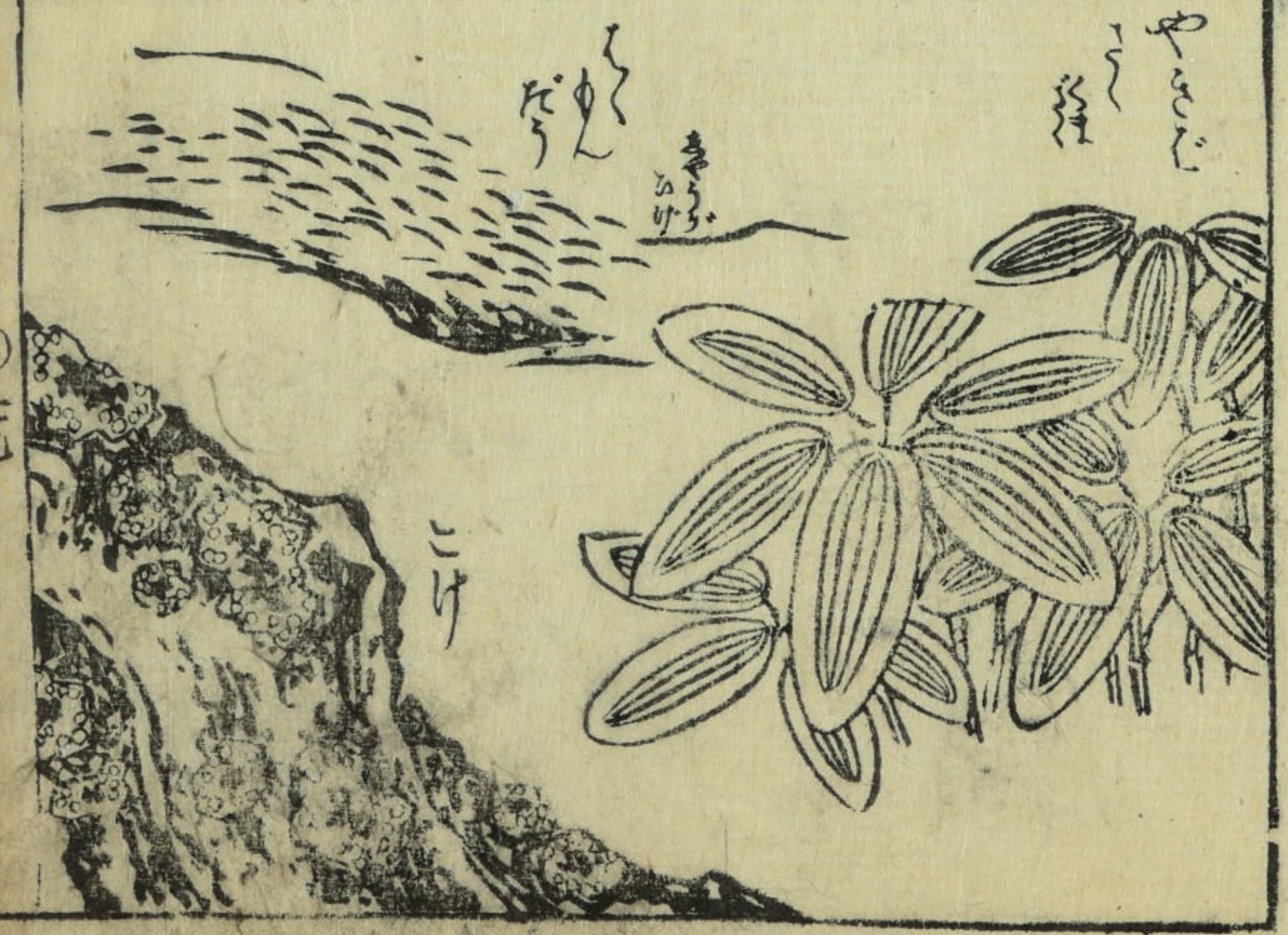


丸木の根は揺るる

葉といや、かぬ梅よ、かへ老緑
 とや、淡志と、中、以、竹、点、之、画、江、流
 一、瀾、伸、さ、さ、さ、い、石、下、申、深、り
 塗、て、は、深、茶、緑、と、成、く、身、入、又、墨
 か、さ、た、死、水、も、死、に、少、死、茶、と、身
 心、浮、沈、あ、ら、せ、て、ト、沈、
 一、枯、葉、の、不、合、
 又、上、に、緑、青、の、桂、
 春、時、心、の、名、緑、と
 中、に、白、緑、を、六、か、の、如、つ、く、
 四、む、り、ふ、か、さ、に、ほ、く、ぬ、梅、よ、ま、
 蘆、竹



籬、ハ、黄、土、具、と、塗、朱、す、と、淡、
 括、又、と、ら、と、引、さ、外、の、あ、の、じ
 吳、竹
 緑、青、と、ぬ、次、る、草、汁、と、灰、で、節、の、す
 之、事、と、三、分、や、と、過、て、曲、を、た、
 又、合、す、一、と、
 上、に、淡、下、に、深、上、下、同
 色、も、せ、さ、か、梅、子、粒、と、さ、や、に
 塗、
 藤、ハ、緑、を、上、と、中、の、方、紙、苦、緑、
 一、總、曲、と、れ、と、ト、と、と、ま、ち、を、大
 剛、ぶ、ら、ぐ、と、描、画、一、と、こ



燒又條 畫此よりと黄土具をぬり墨なるを緑青にて
 わり又草汁を中と幾通をわけてぬり下は緑青をいけて茹
 小用也一これ草汁の上は白緑や墨と作志をいけて合
 て乾まぶ一周の黄を此処の合黄土はつと挂る
 下草 花を陰中に必しも下葉を描て陰のトはす之を
 乾とわひあつてはむる之は嫩緑と引く老緑や中入成り
 葉の処は合黄土を引て朱墨と本入るこも
 苔 樹や石をこに苔を引くこと大切之多時いやしお時
 墨を引て乾まぶ一〇真の苔はと緑を塗周は粉粉を
 以て墨とつくと乾らトはは枯ひらひ疎密は乾むのんわり
 畫筌卷之三終

畫筌卷之三

目錄

| | | | |
|------|-------|-------|-------|
| 運筆 | 彩色總論 | 鳳凰 | 高麗雉 |
| 錦雞 | 丹頂 | 小鴛 | 大方目 |
| 秋鷄 | けり | 鶴秋鷄 | 白ひよどり |
| なをけり | 白ひよどり | いろつぐも | ひよどり |
| 頬白鳥 | 傍ひよどり | 深山頬白 | 香瓠揚 |
| らやゆり | 鳩 | 雉鳩 | 斑鳩 |

畫筌卷之三 目錄

項小鳩

白鳩

猶子鳥

鸚鵡

白鳩

碧鳥

杓鳴

鸚鵡

白鳩

都鳥

駒鳥

すくも

馬鹿ぐみ

葦葎

田舎沃

頬黒鳥

文鳥

鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒

ぬか

黒鶺鴒

鶺鴒

曹鳥

背黒鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒

秦吉了

青鶺鴒

加鳥

鶺鴒

黄鶺鴒

むくま

出天子

ひま

桑鶺鴒

むくま

黄鶺鴒

三光鳥

靉春鳥

志とと

蒼鶺鴒

喉紅鳥

鷹

くま

鶺鴒

山啄木

雀

白鶺鴒

白鶺鴒

鳥

鳩

鳥

雁

朱鶺鴒

めじら

あひげ

小めんこ

ちか

相思鳥

ひから

五十から

ふから

書筌卷之三 目録

一

入内雀

鶴

善知鳥

風鳥

志ひ志ん

たんこ

紅羽雀

菊鳥

紅雀

赤志志ひ

虫食

鷓鴣

鴈

かともめ

鶺鴒

山鶺鴒

蝶

蜻蛉

虎

馬頭

馬

馬の馬

猿猴

兔

雀

紅魚

鰯

鱖

雞

金魚

貝類

龍

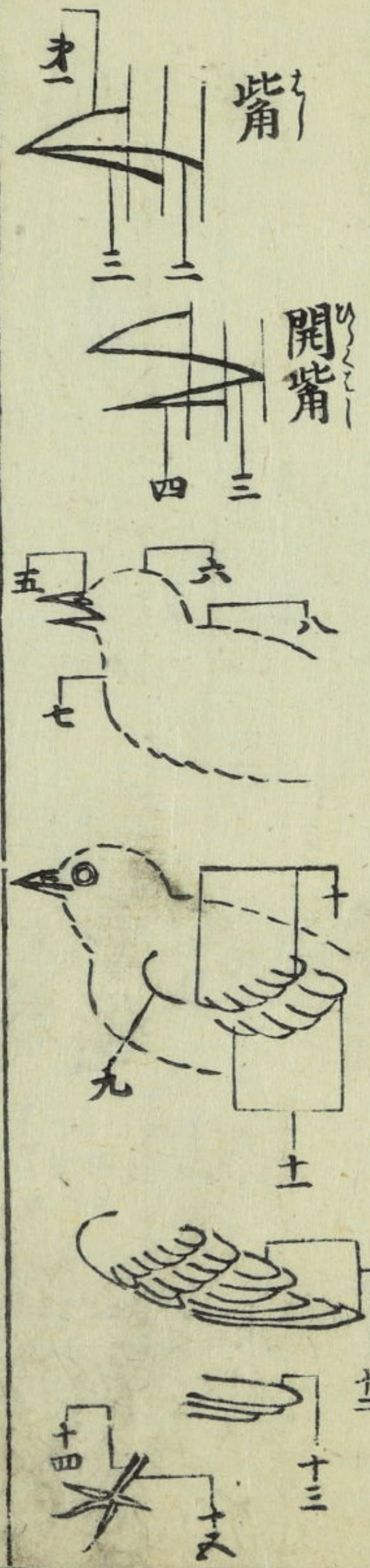
畫竹全卷之三

筑前直方

魯軒林守篤編輯

運筆

画法運筆定法なり只時々脱んじたりさしあふふ又字を同くす
松とも初筆のこめ界その要とありむ又一定りなむむるうらけ



彩色總論

凡諸鳥ハ皆統の比と黄土具と白色よりあき淡れとぬる
黄色より紅くあきふく一深き色ハおりのく早く墨加
くしてわし、質繪ハ墨淡描画一深き色ハ圍刀にて



徐行勢



鳴行勢



後圖勢



前圖勢



右飛勢



左飛勢



飛鳥復勢



枝上勢



飛する勢



右飛勢



左飛勢

禽鳥

鳳凰 雄ハ鳳雌ハ凰此鳥四口あり
 赤多ハ鳳青多ハ鶯黃多ハ鶺鴒紫多
 ハ鶺鴒白多ハ鶺鴒○嘴と冠ハ肉
 色朱のくはえ項首の尖毛ハ緑青なり
 紺色の描入ありハ勢ハと入ハ眼の中
 二ふんハと曲ハ鳥情ハ雲月のあり
 淡墨頰喉及ハ胸腹ハ黄土とくハ
 毛ハ朱ハ雲但胸より以下朱墨の
 章ととと二ふんの毛ハ背と有緑青彫塗
 曲ハ若緑ハと章とととふんの毛ハ又ハ
 重朱ハ羽あり朱乃曲ありて彫ふん保
 呂貼子ハ白ハ二ふんの珠三四と連角弓
 羽ありカハ黄土具あり朱墨と以て
 中ハ具と活て周とわり圓點と作れば

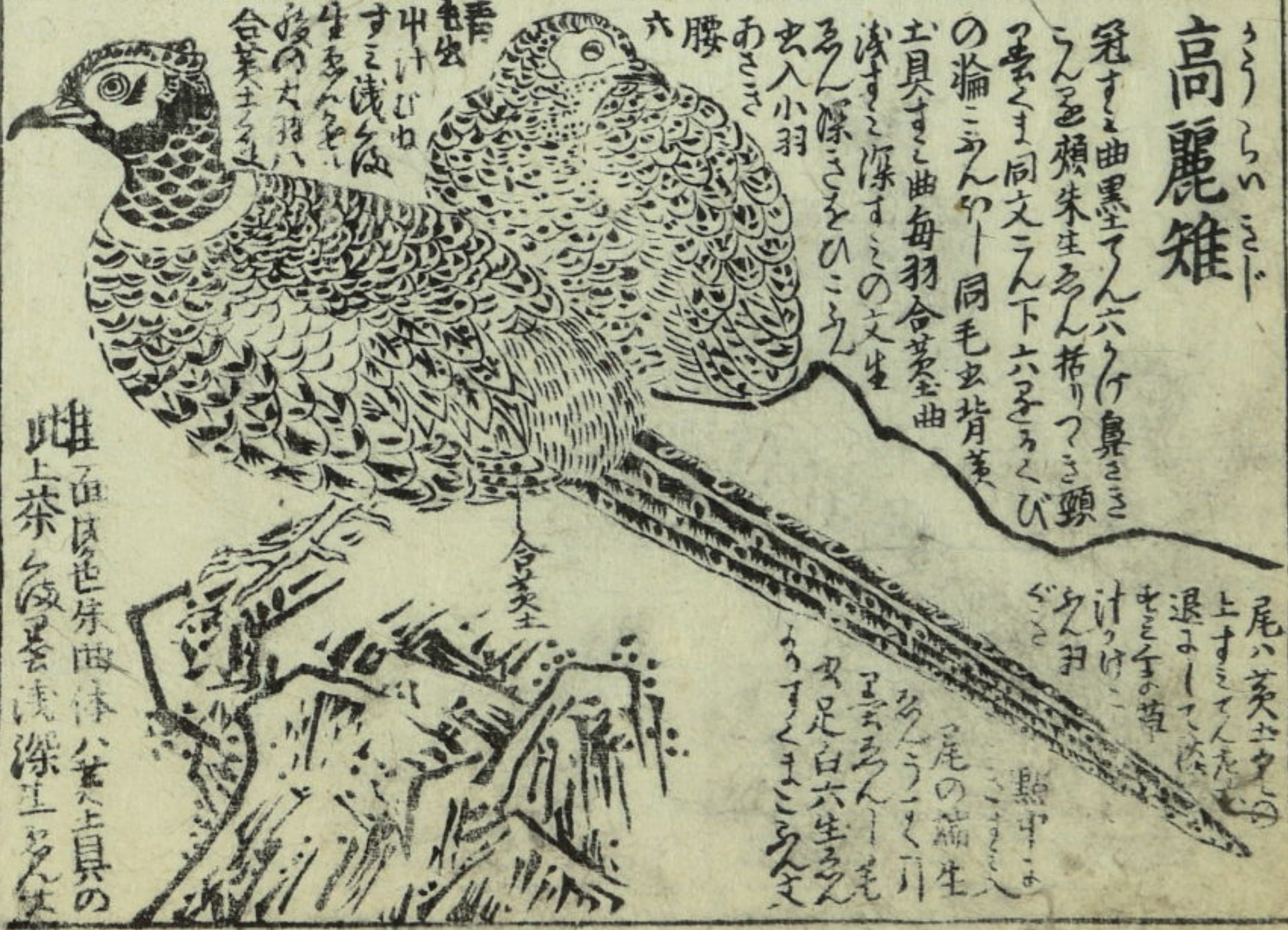
鳳凰

宮内卿法印守信筆



玉の中及び羽乃背ハゴウんぐ由俗云保呂黒曲ニふん毛サ七翼俗云羽外ハ黄土内ハ白み右いつ並も羽莖ハ金泥尾の根乃上の尖毛ハ頭項孔毛と同彩尾ハ長ニ二川と朱を善みて半所々ハ黄黒短尾ハ長尾の左右より濃墨を以て描ニ尾の末ニこれ系路あり狀柳核乃ハ一藤黄具彫り朱を以て周とつる

長尾ハ圈の朱を以て鳳の彩色一定なり大概之の右ハ師守房之



高麗雉

冠ハ曲墨でん六ヶ鼻ハ黒く顔ハ朱を以て描ニ頸ハ白く下ハ六ヶを以ての輪ニふんハ同毛ハ背黄土貝ノ曲每羽合黄黒曲

雌ハ面ハ色味曲ハ黄土貝の上茶ハ淡黄深黄ハ

錦雞面肉色生多ん括ハ先後冠ニ之同類此用ハ肉朱すこ色尖ハよりわらわ曲目ハすみ多んハうらわら頂ハ多んハくすこん黄黄ハ背ハ六ヶを以て深黄汁文羽ハ多んハ此勢ハかるハ浅すこ曲朱すこ色すこ色ハ深すこ色ハ深黄合黄土赤曲毛サ同一尾ハ黄土貝合黄土ハ肉朱すこ文羽莖ニふん抄せてハ一短尾ハ表朱うら黄土肩ハ白くわらわらうハ肉毛サ白六生多んハく由ニふん其後肉色わらわら上ハ朱深せうふんハ白く文毛也

錦雞

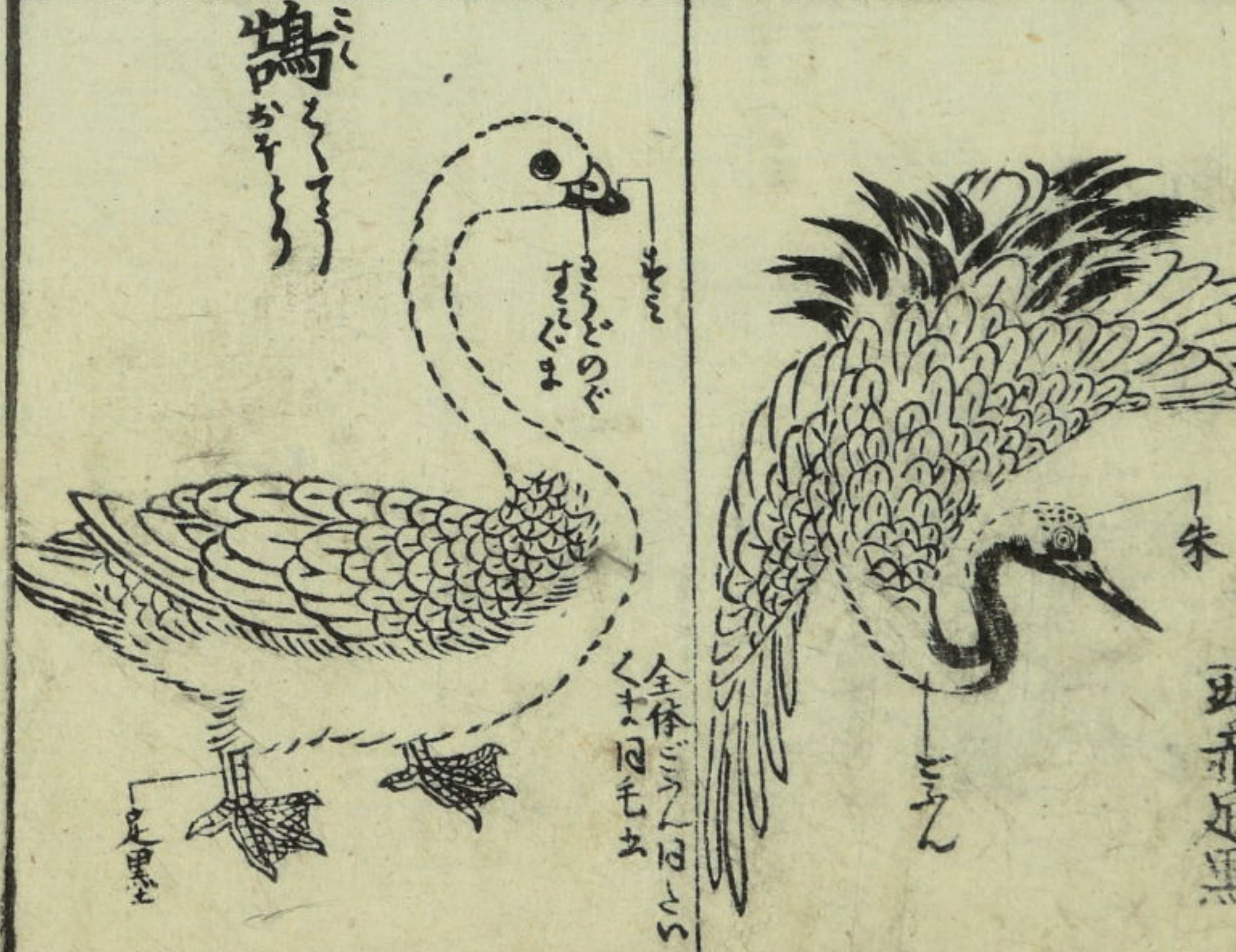


頬肉色

雌ハ黄六ヶを以て淡すこくま色ハ白く

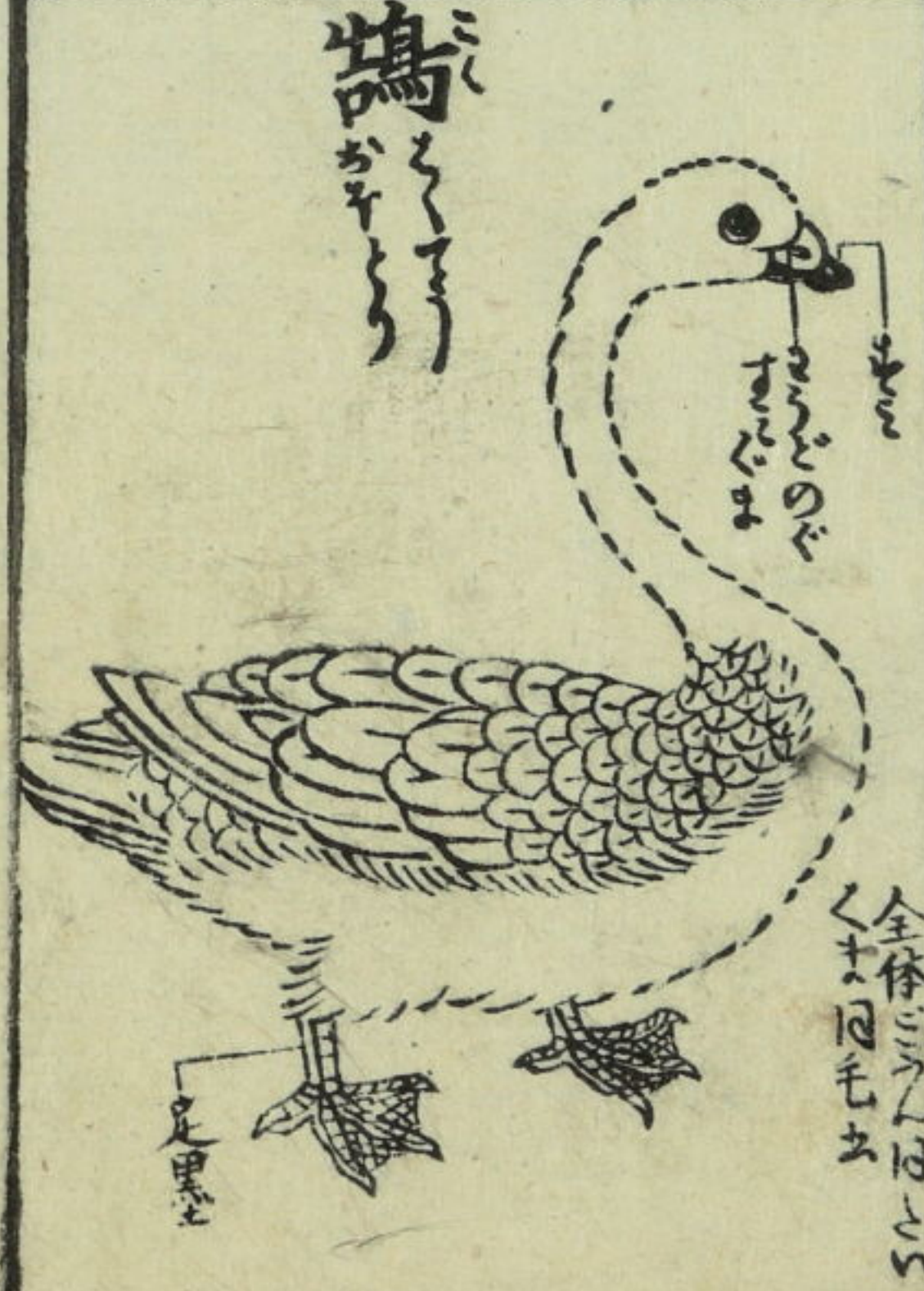
丹頂全形おつ流くこらしやり
背よハ熱曲ヶげ羽こに退曲こらん
毛云凡流の白毛のはけあり汁乃とく
身屋うん此角ハ尖乃方すみな
白流をよて流塗茶汁よて括り
曲舌ハ朱頂ハ朱 朱頂ハ法内色次り
丹頂ハ朱と合又朱三
生多んよて括り中に星喉す
ゆる深茶よて仕らる足ハ黒具
或重流ゆり深すみの文 流と深と
は後の毛こらん翻ハ上下とも曲
これ上より流けし一尾ハ白し
蓋羽ハ雲
師曰雲羽ハ泥ますてうぐとここ雲よて
才流よりうぐとこ雲と雲へしなるす
おもて交へし粉茶ハ此れととも
かきりしやうててうぐとこ
まを

丹頂



頭赤足黒

鶺鴒



全体こらん白とくま同毛云

小鳩 こらん
冬の羽ひんひ
の内冠ま
故赤りる
指衣くあさこ



白六茶汁文

秋鷄

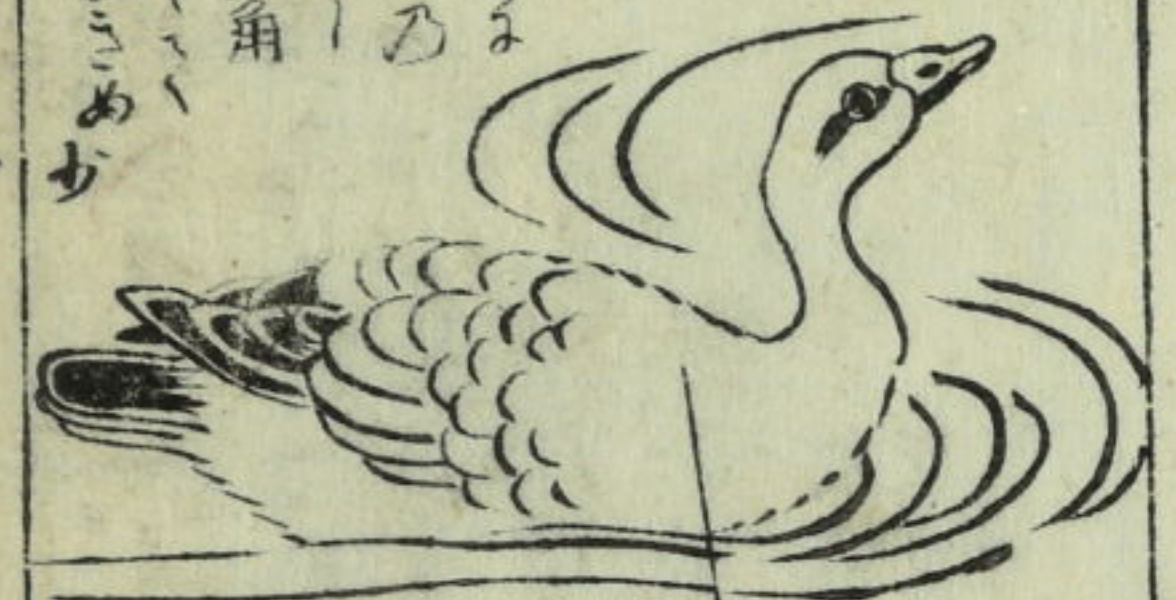
くひり
小とらん
大とくひると云



此月こらんまの上
朱すく
目も胞も朱

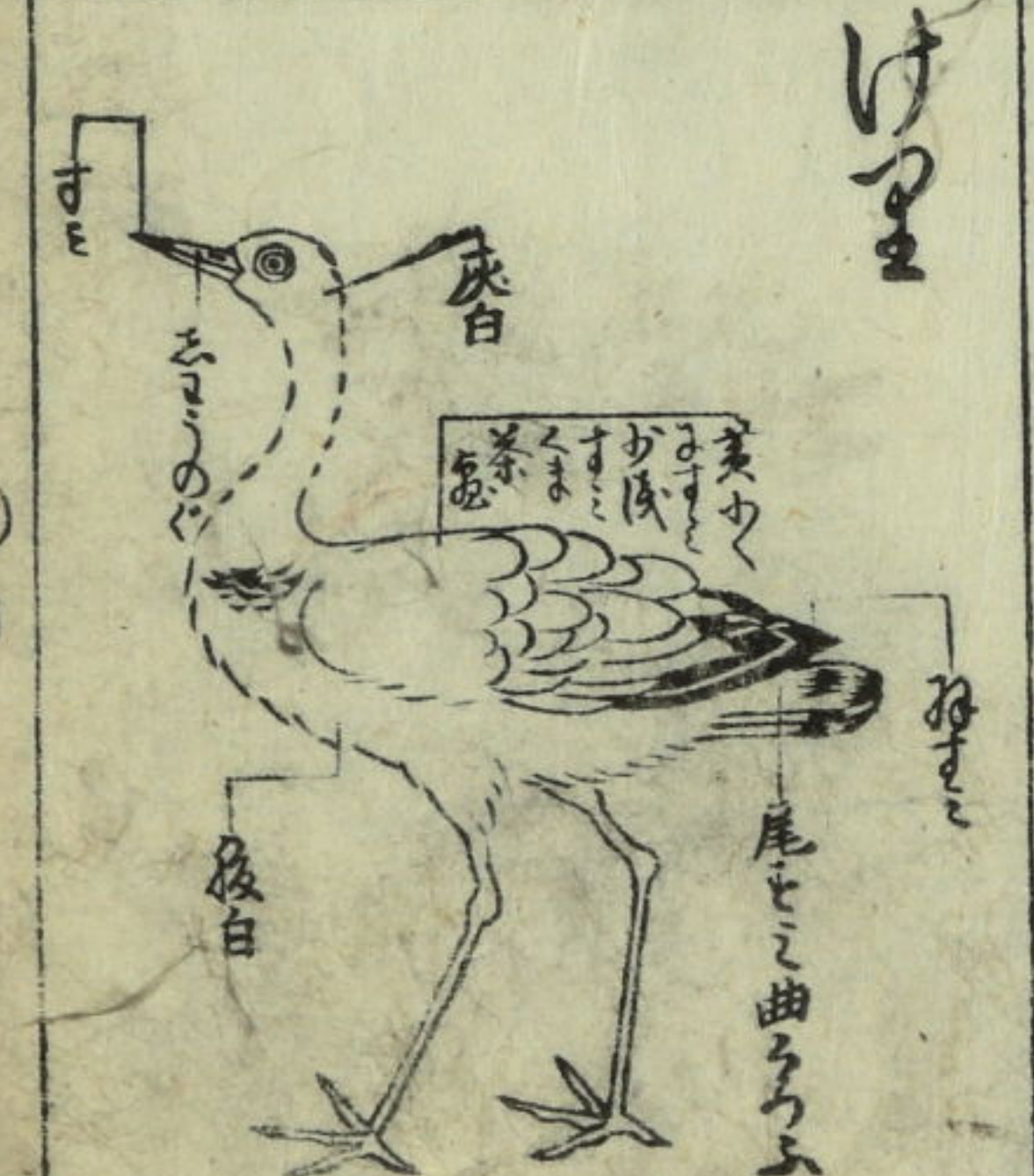
大方目

おかん
足指うつち
似てがめ
如くひろ
まらら
肉らめ
皂のお朱のこめ



こらんま白

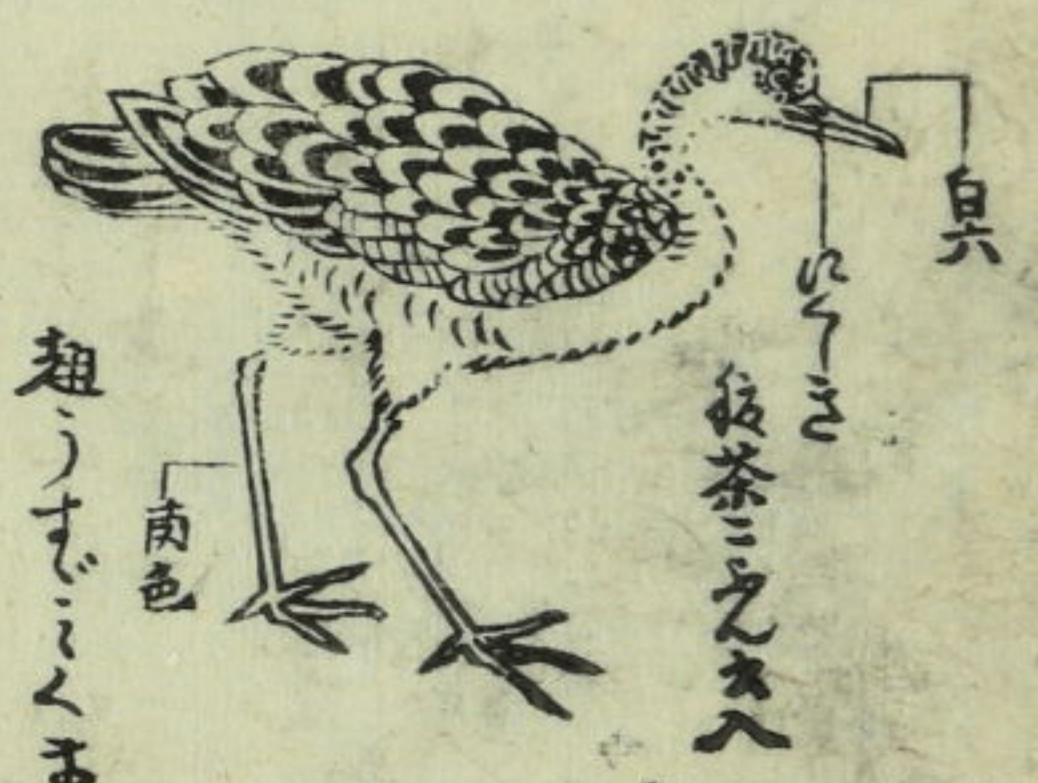
けつ



尾とこ曲らふ

鶴秋雞

大いすも云
形大くして鶴
より又つるの姿
より大し



尾茶之入
肉色
翅すくく入茶すく入

白ひよどり



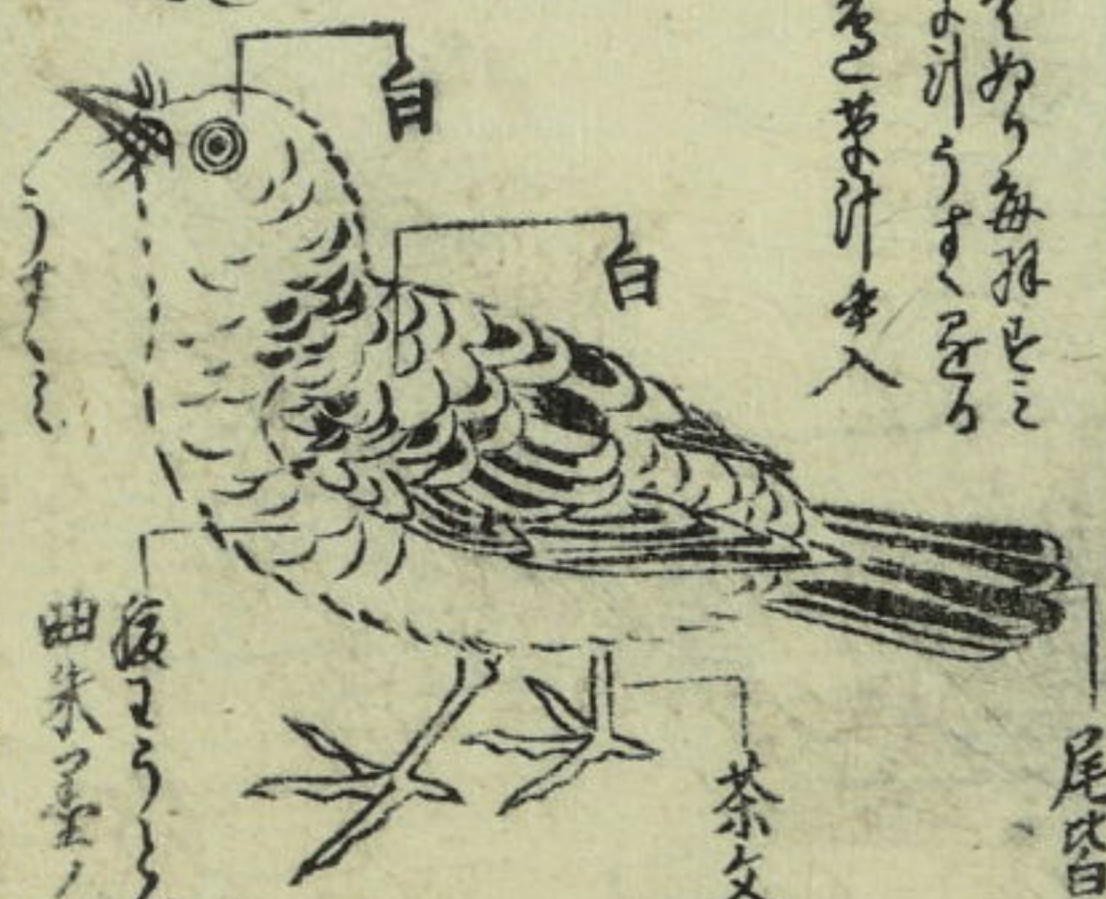
皆白也
珠ののり
尾茶ハ生色

なごりけり



淡茶
上六の
すくく入
尾茶草汁
うすくけ毛虫ニヤシ

いそぐつそい



茶文ハ生色
守信筆
尾茶草汁
後さうく合さうと
曲朱茶く上同也

斑鳩



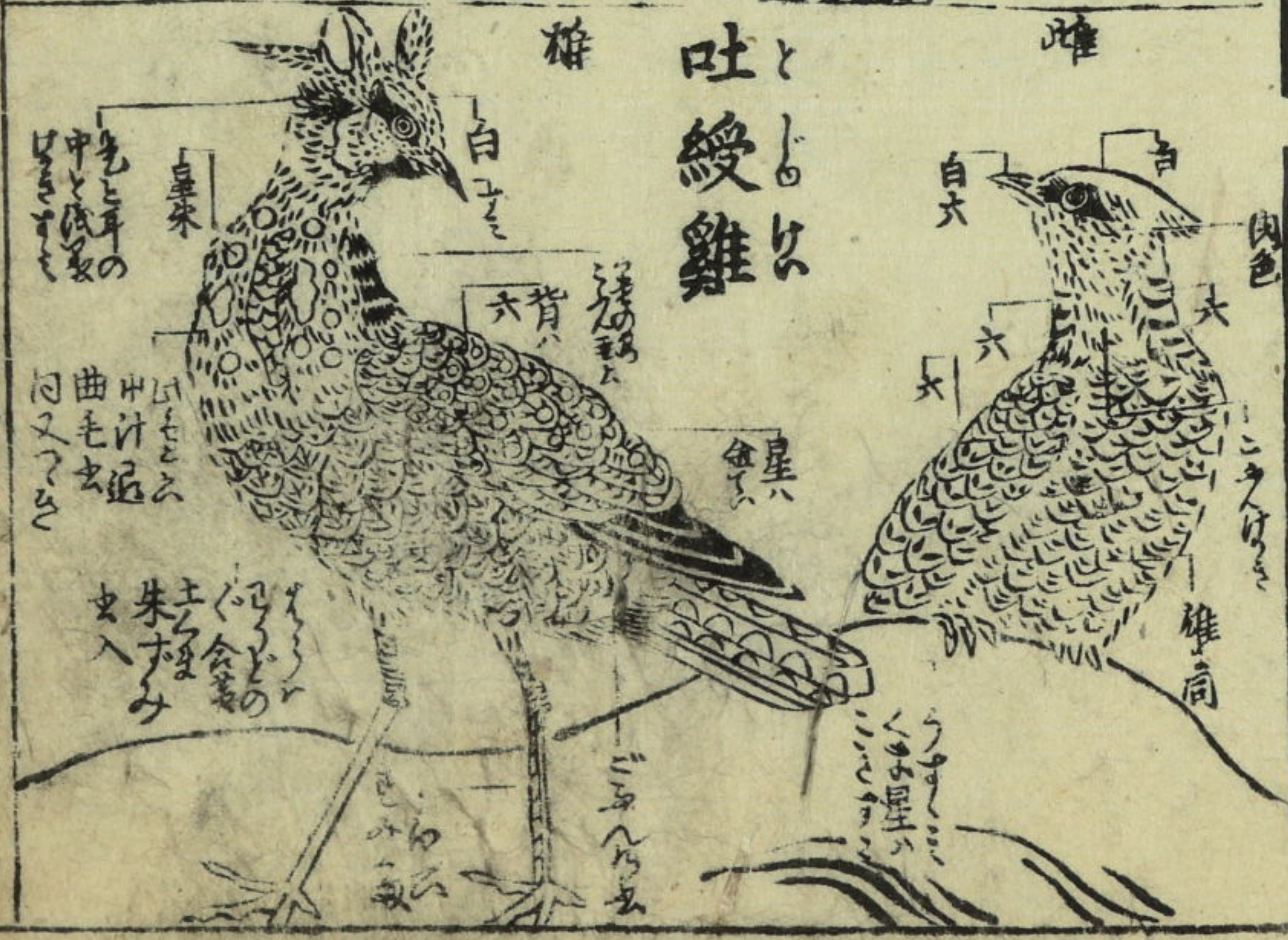
斑鳩ハ異之ニ
尾赤
朱赤
茶ヨリ上
あまのま
あまのま
あまのま

頂小鳩



淡墨生色
水込分曲
星
豆黄上
星

吐綬雞



雄
雌
白
白
星
雄同
朱赤
曲朱茶く上同也

白鳩
全并
色足肉

足白綠臭生まん
曲ころん文

鶺鴒
鶺鴒鳥之

全并
同くま

鶺鴒子鳥
守房子

合美玉
毛くま

山雀
白のうら

白のうら
合美玉

碧鳥
狀佳の羽
臆よふて

白
は月翅尾若赤
黒斑あり腹黒
黄相交て斑
あり嘴脚俱
黒
注船ハ圖と丸
又同共つ

鴨
此鳥テ中少あり
は國ハ大くや

白六
黒斑海鳥よ

鶺鴒
鶺鴒鳥

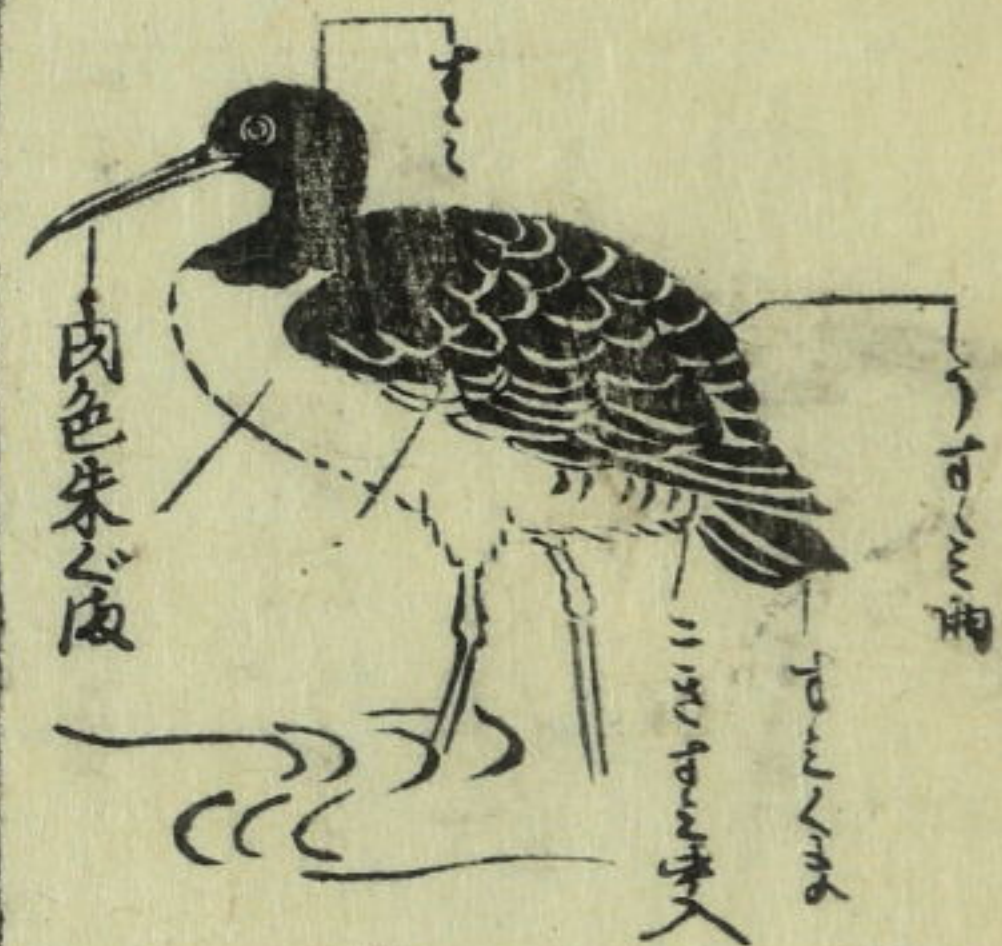
鶺鴒鳥
鶺鴒鳥

鴨
鴨

鴨
鴨

都鳥

狀々々々
背はくはく
後脚白く
嘴と豆と
赤



駒鳥

又云こはくこはく
云ものあり喉紅
らららららこはく



すがた

背ハまこの
腹ハ黄土の
面ハくす
由とりけ
朱墨くす
雌ハ全黄
土具す



黒化ぐみ

顔赤色
頸赤色
頬赤色
頸赤色
頬赤色
頸赤色



葦雀

腹白尾長
背もくはく
小



頬黒鳥

少白毛あり



田舎天

黒色あり



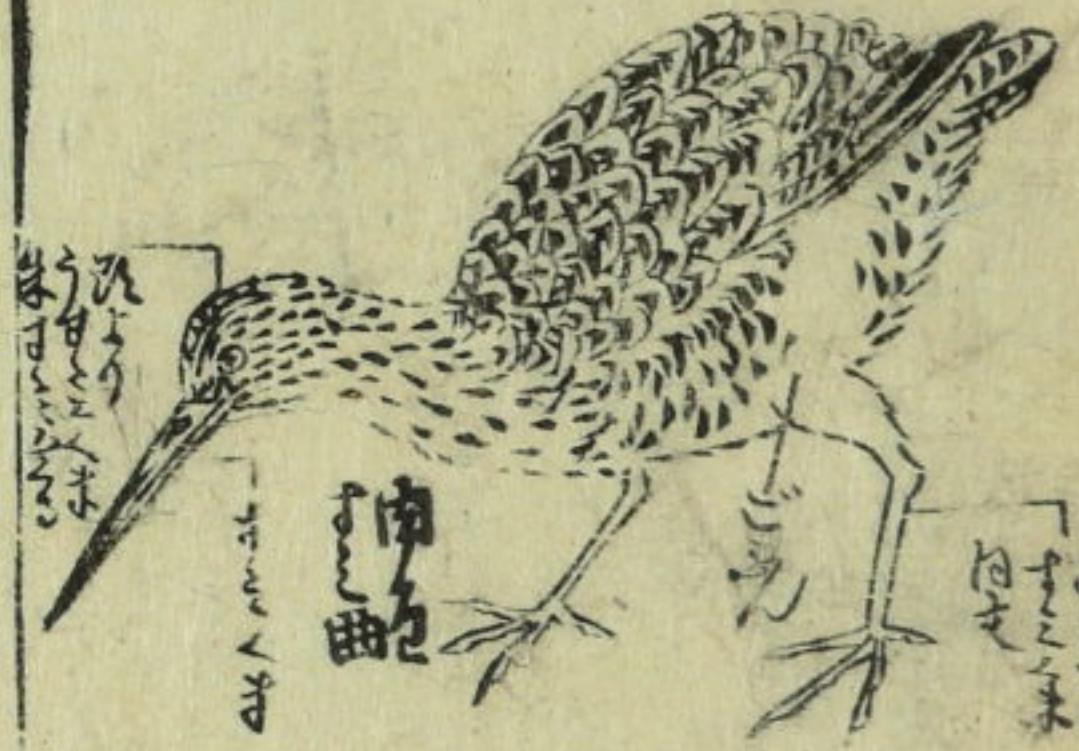
文鳥

頬赤色
頸赤色
頬赤色
頸赤色



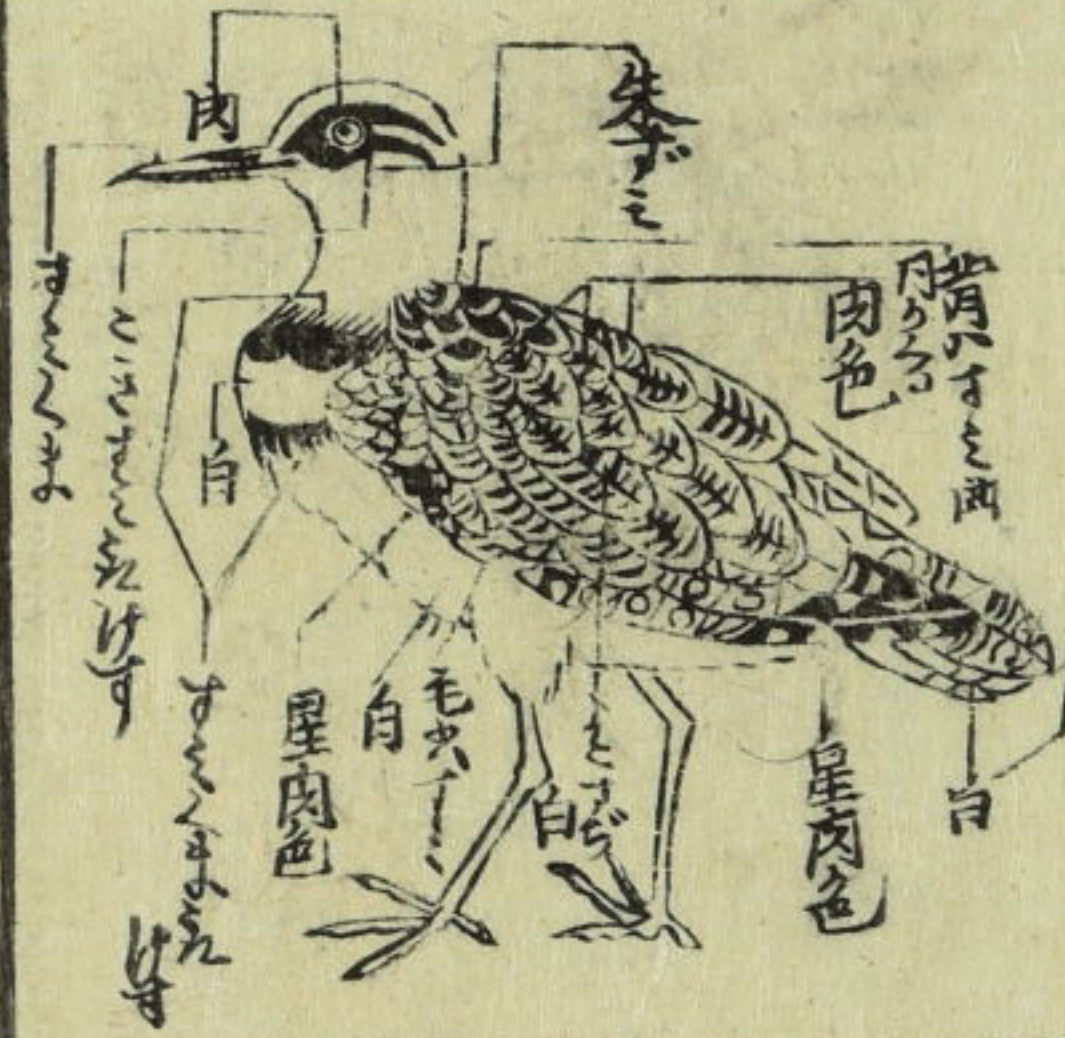
鷓鴣

大鷓鴣の如く身か
不そ衣一上此角少
短一就より長衣
毛ハくはらふ似く
斑也くハ長ク羽短
後白く尾短
胸も黄赤も斑也



羽斑鷓鴣

腹白一がと
しより羽大
羽斑赤色眼の
四邊白く羽
月紋の如く尾
淡紫赤角腔ハ
緑く黒條ハ
うら月のまじり
肉色よてがむ



鷓鴣

大鷓鴣
の如く長尾
尖嘴黒赤
疑背白腹
鳩より小なり
しつづつ
大なり



ぬか

四半雀より似て
小なり淡灰色
まじり赤
ぬかハ皮を赤



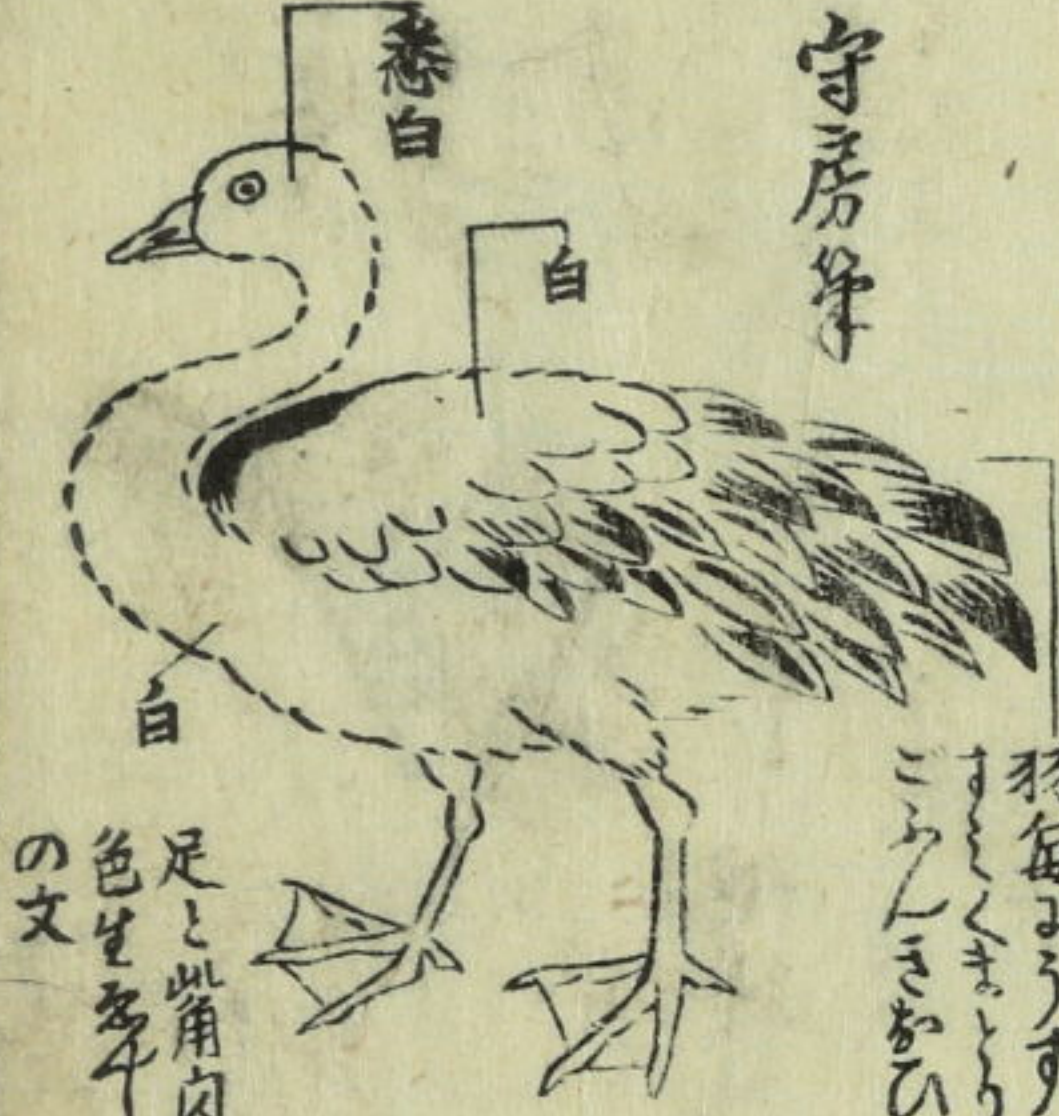
黒鶴

くろつ
白頸赤頬嘴
黒脚駝之其
俗ハ悉く純黒



替雁

守房身



蘆鳧

わ
小つもより
木乃灰色
斑毛を



曹鳥

大鷓鴣の如く山
林の川原あり
翅も淡く白
點つた嘴の赤
足淡墨餘白
鳥の巨と形
同くす



背黒鷺



目の上は紫のや
白六
目紫
紫背
くま合
美土
く

蒿雀



金辨美土のくめり淡す
曲りまきこの茶とく

菊戴



状目白く似て
小く背ハま
腹ハうす白
春ハある他時
ハる

美土具淡す
嫩緑く

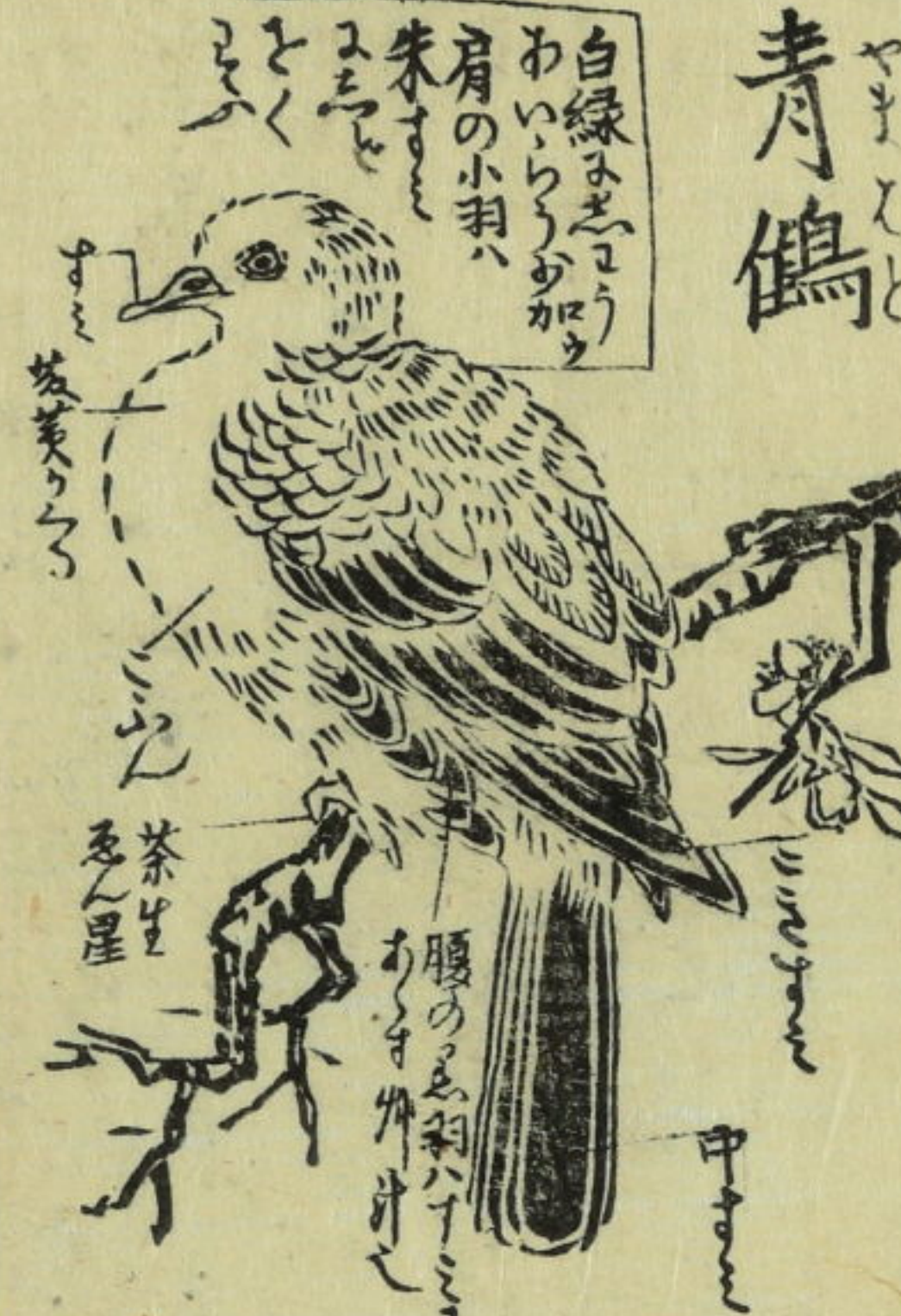
秦吉了



皮のや
さやとわり
又色白項サ
美ハるも
一名九官
丹味脚黄

美土のオカ
朱のきめくま
美土の目

青鶴



白緑
わいり
肩の小羽
朱す
く

鶺鴒



金辨
中聖
深
住

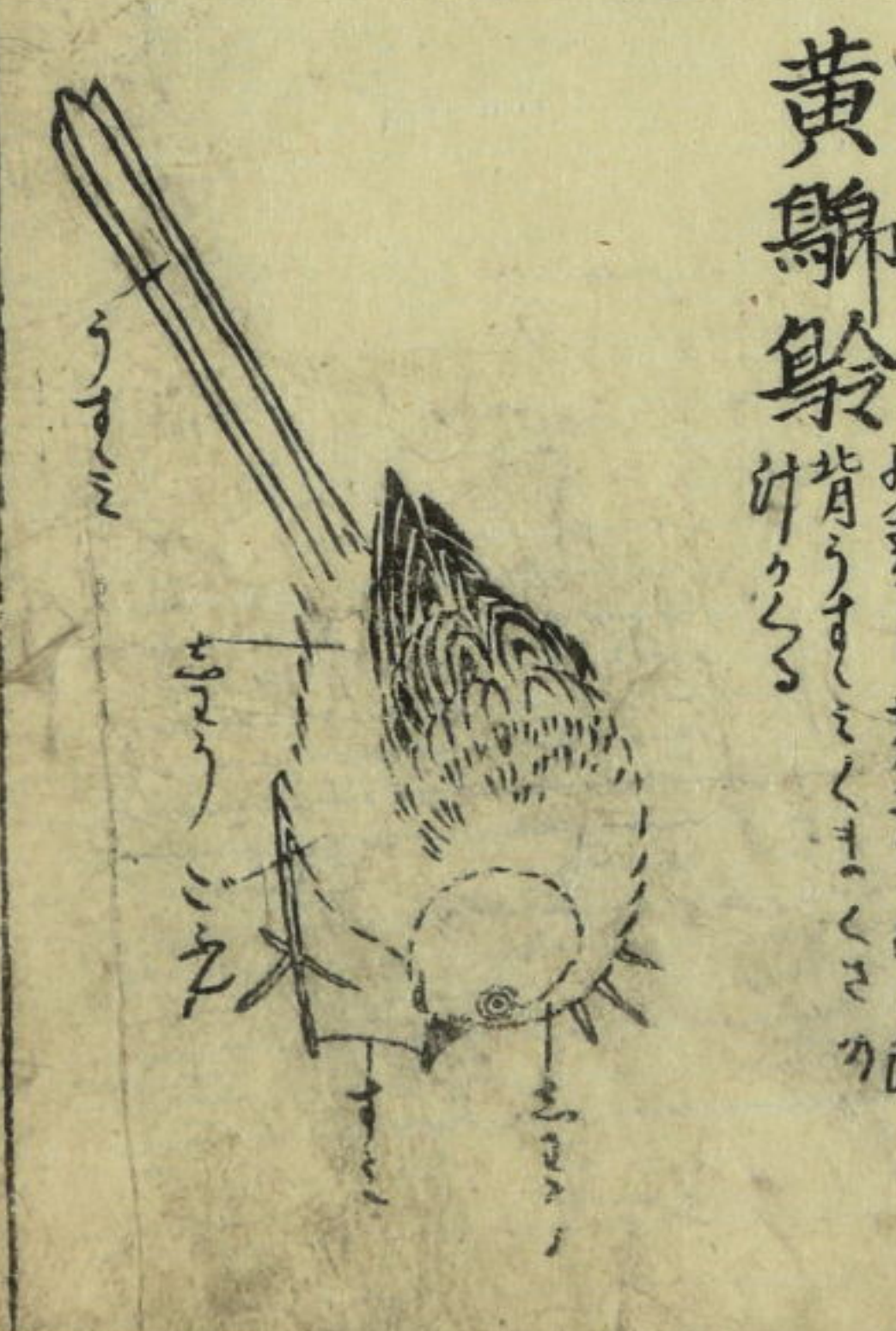
兩翼の下各白
黒あり大
斑
羽ハ

か鳥



背と胸ハ生
に丹
ぬり朱す
曲ハリ背ハ
ゆふ
毛甲
朱す

黄鶺鴒



背ハ
け

里王くむ

狀つとむ似たりき
毛多し

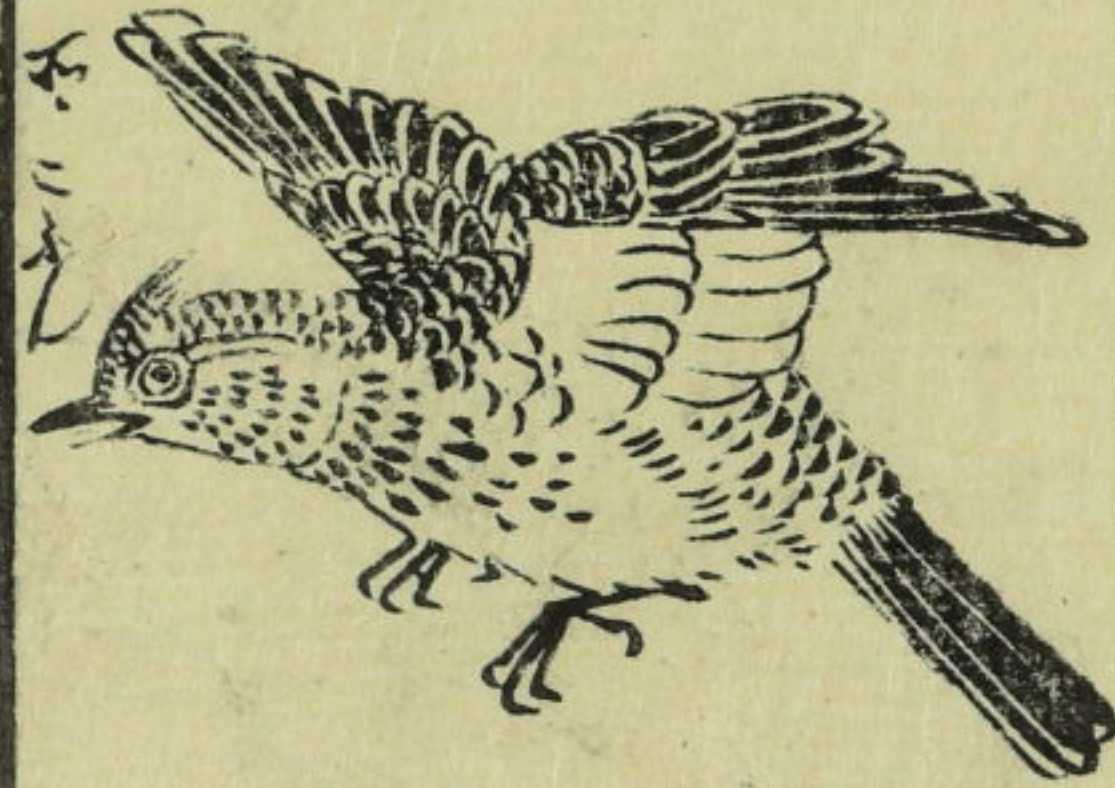


此肉色朱のこめくま全務
うすく淡茶くけゆる墨味入

類白
すく文

茶

子天告



全務黄土を
うすくくま
類朱すく紫
雀
雀し似て大
淡黄毛玉
赤斑あり

ひ王

まひとく桂より小

地ハ黄土をゆる茶うとる
既ハ少あさく北月ハ少墨
とまのハハハ
黄と加ハ
嘴足肉色



毛黄土
毛赤土
黄合泥

桑

鷹

ひをちの太く
淡黒色紫嘴
黄或淡白
全体黄土をゆるす
くま羽のくま上皆



肉色

しらきむ

大き雀
のく



黄土具朱
すくま

朱墨くも
紫嘴足肉色

三光鳥

大きの色を移あく鳥風の形



雌ハ色淡く尾短
鳩の尾は似たり

狀雀に似て五月黄褐色

黄雀

黄土具を
ゆるゆる浅
墨曲くく
をい



報春鳥

黄土をゆるり背目の
さいのけゆるすく曲
嫩緑と唇け或茶と
ましとくへ



志

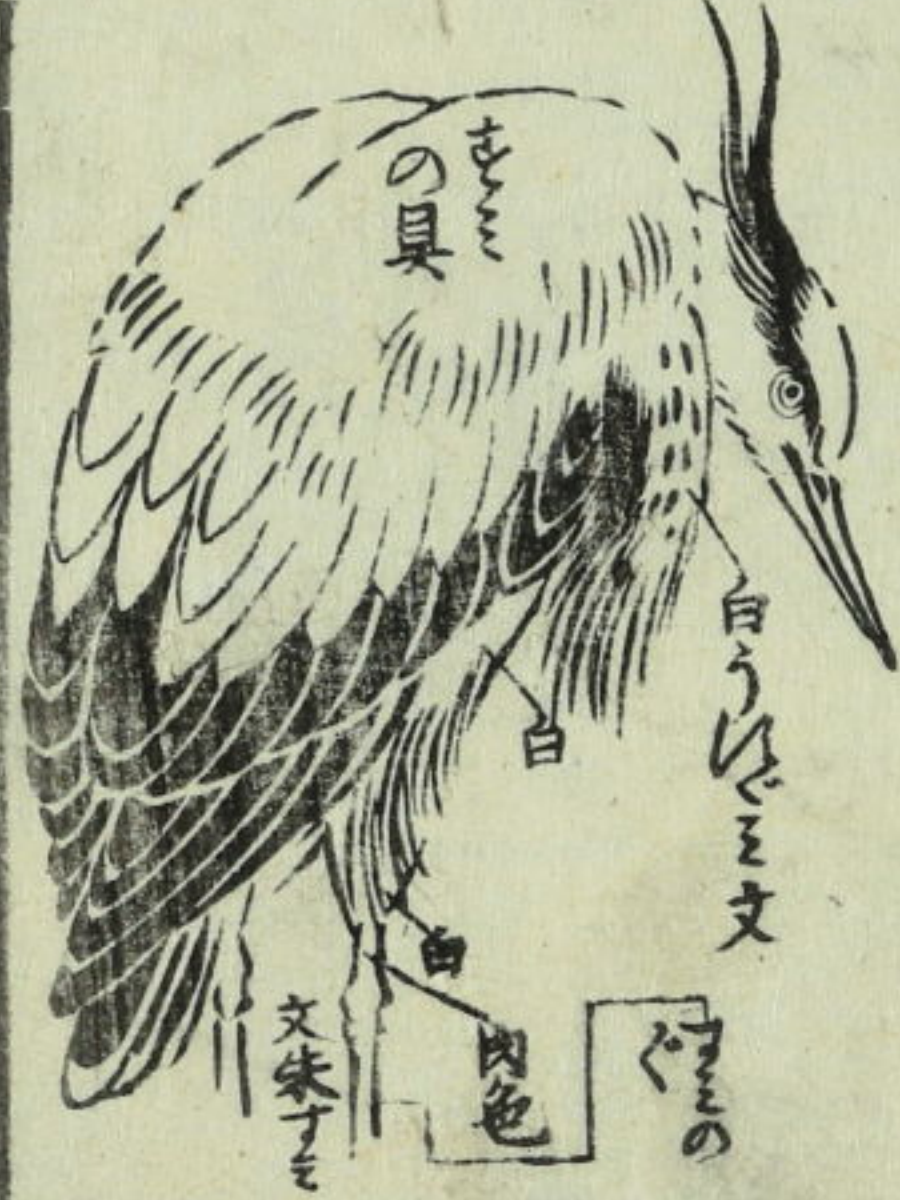
大さ雀の如く
淡赤色此角
短く尾長



其のくわ
其背朱星
くく羽尾ハ
うすくめり
赤すま
入る

大

嘴淡肉色合
目のみより
まけくは



大の翅の
地黒
此背外黒
内黄腹白
脚緑

喉紅鳥

大さつこの如く
うすくま朱



頭背灰赤色
眉白く頬白
頬下及ひ
深紅色翅
青く羽尾黒
両脇青く腹
白

鷹

背青
腹赤
脚黒



鷹の背青
腹赤
脚黒
嘴赤
目赤
爪黒

くま

志



茶うけ
下す曲
地美土を
稲金
白
淡白
肉色
文朱

鳩

其のくわ
其背朱星
くく羽尾ハ
うすくめり
赤すま
入る



山啄木

狀鳩より大
其背赤と
其腹黒
其脚青
又其尾赤



雀

其強

頭背く



白鷗 狀雉に似て甚大なり
尾の長さ三四尺
あしき



全体ニ之
淡わり深
遠塗のみ
文淡深
莖ニ人冠
墨面朱此角足
生人々文生
人後す
雌 黄土を次り
茶とくるとの
まろく処と背不
わり赤とあし
しめろ類ハ肉色朱
くは羽乃文朱す

鳩 壺松

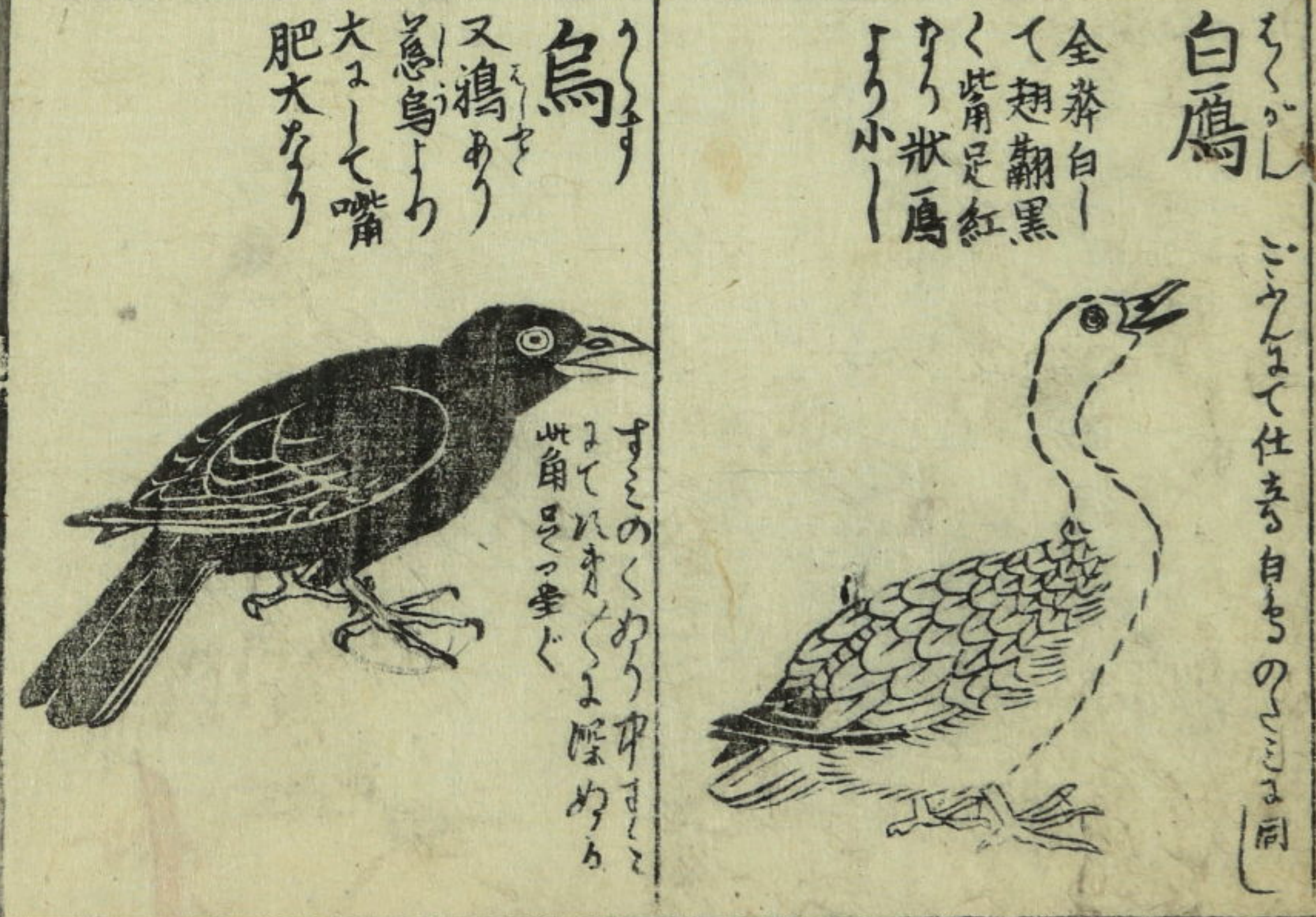


鳥 壺松



全齊とす

白鷺 全齊白
く翅翹黒
く此角足紅
かり狀鷗
より小
ミウにて仕まる自ちのこも同



鳥 又鴉あり
意鳥より
大より七嘴
肥大なり

雁



朱鷺 全齊とふし毎羽朱のさめ曲面
肉色朱のくま



狀白鷺
冠毛
紅毛
紅毛
紅毛
紅毛

らむめ



うしろの毛は白く

けひのお

大さ雀の類 頭を朱喉ひの ことすけ白く



毛は白く

こね小



全羽朱は白く

朱の目と脚は朱

うから



白く足す

相思鳥

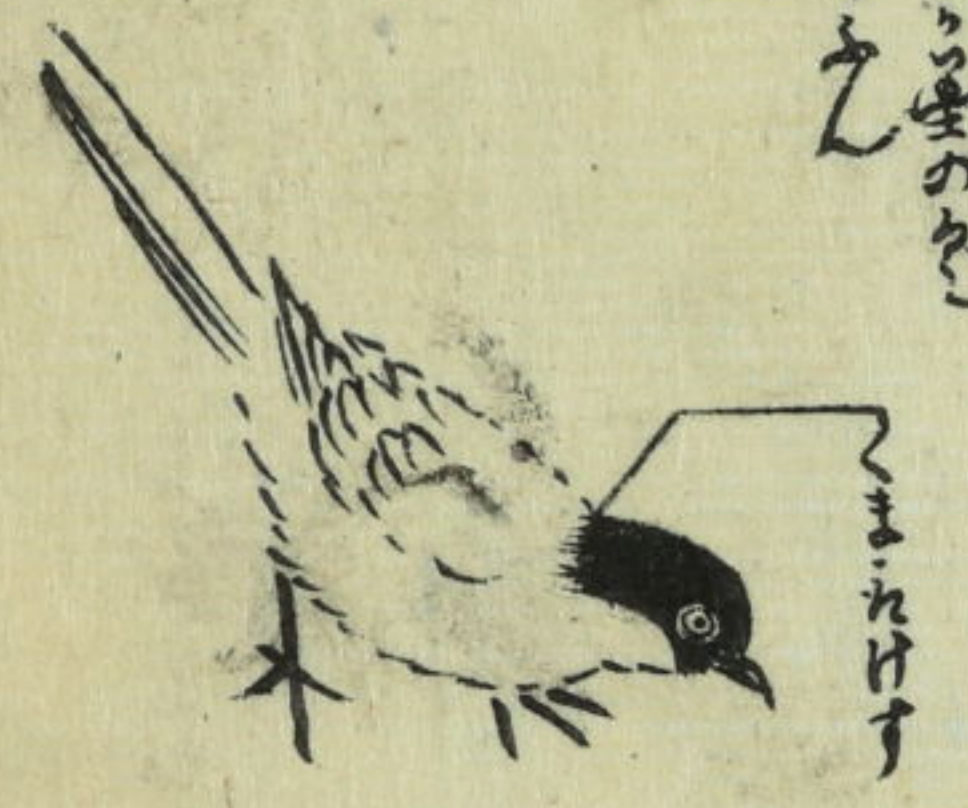
頭より背尾と 草汁け白毛虫 喉嚨尾助云々



實永年中

らがひ

せむしのき



白く朱は

らかた五

頭より背尾と 尾の朱は白く



朱の朱の

らが六



尾は白く

入内雀

改背うす
すくま
合英玉
うろねこ
すこ入
後白



雌

雄

鶯

ひつりのとり 明曆三年初て
後之
白
短尾の
赤白
長尾の
赤青
雌此尾長
足うすこま
合英玉
すくま
大ね
朱淡くく



志ひ志し

全折羽の如くす
男俊墨こま
のふ用のま
英くいの
かと末
白六葉汁
さい



大さの歌

後白うす
文こす
毛あこ

たんとく

全脊うす
すこまのぐ
つ
ぶ角す



かとりこ大さ雀の如

善知鳥

背うす
合英玉
うろねこ
すこ入
後白
眼朱す



日

風鳥

合英玉
朱す
文
後背合
朱す
同合英玉
すこ入
ふりてり
大さつこまの



紅翡翠

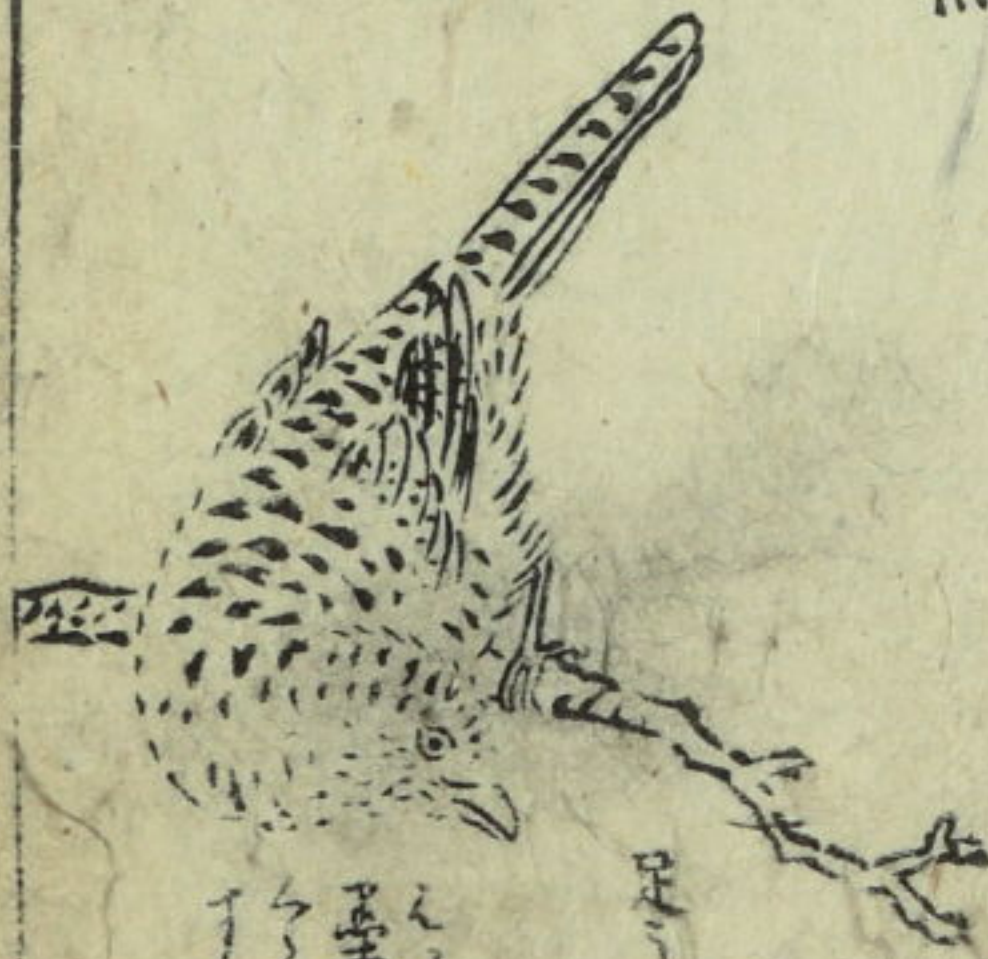
頬背胸肩と
清墨曲より生
多しけ回
毛
毎ね生る曲



足朱

牡丹鳥

全脊うす
すこまのぐ
つ
ぶ角す



足朱

紅雀



雌のど細白下腹朱のさめのむ

食虫



うらみすれ細て小く八九月

赤い



くまのうらみの
ひめあつて
ものこ

鳩



鳩のうらみすれ細て小く八九月

ひよ



赤い鳥のうらみすれ細て小く八九月

ひよ



赤い鳥のうらみすれ細て小く八九月

頬白鳥



頬白鳥のうらみすれ細て小く八九月

山深



山深のうらみすれ細て小く八九月

香琉璃
翠雀の褐色
女の色のなり



らやふり

狀は雀の大背
紺青翅尾ハ黒
上はこんき



鳩

毛多
青白
赤紫
皂緑
斑花
斑



小方守義筆

此邊うすくゆり
生えん

鳩雉



鴈
鴈ハ腰斑也鴻ハ不斑
鴈より大なる倍
鴈より小なる倍

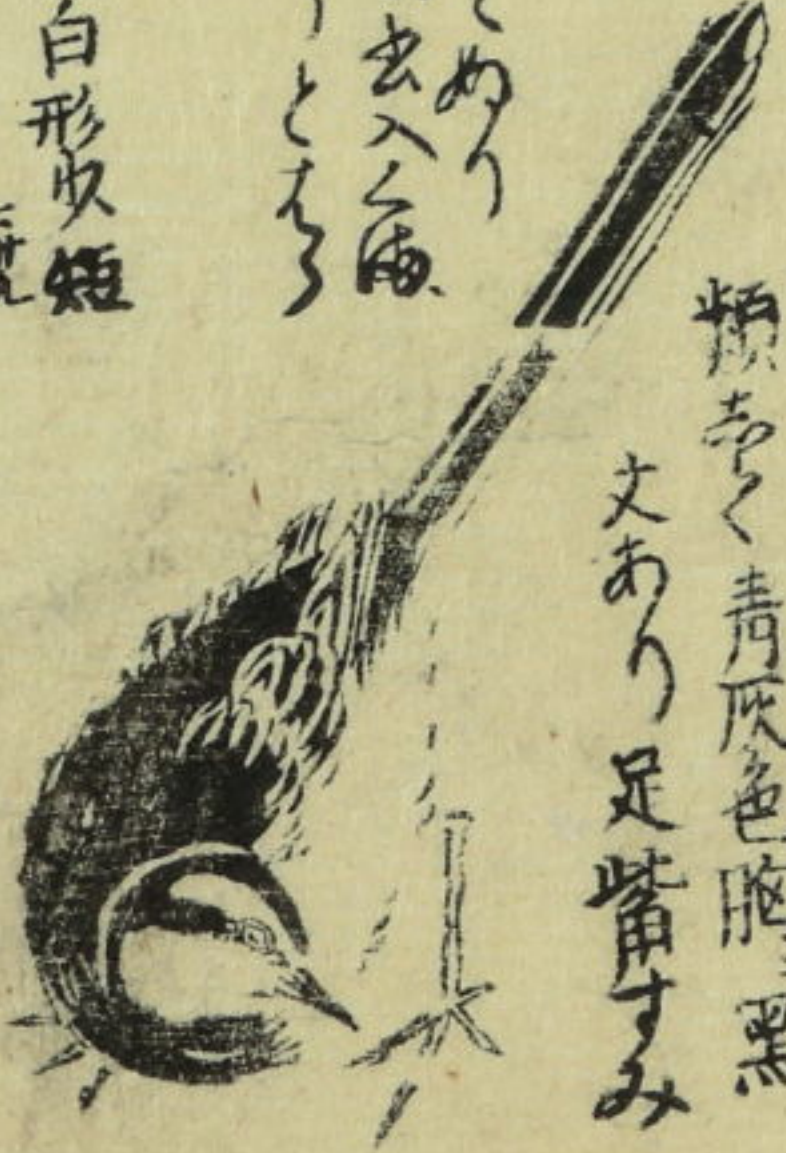


鷗
首腹白
大鳥の如
江鷗ハ小



鶺鴒

青黒く後白形收短
大雀

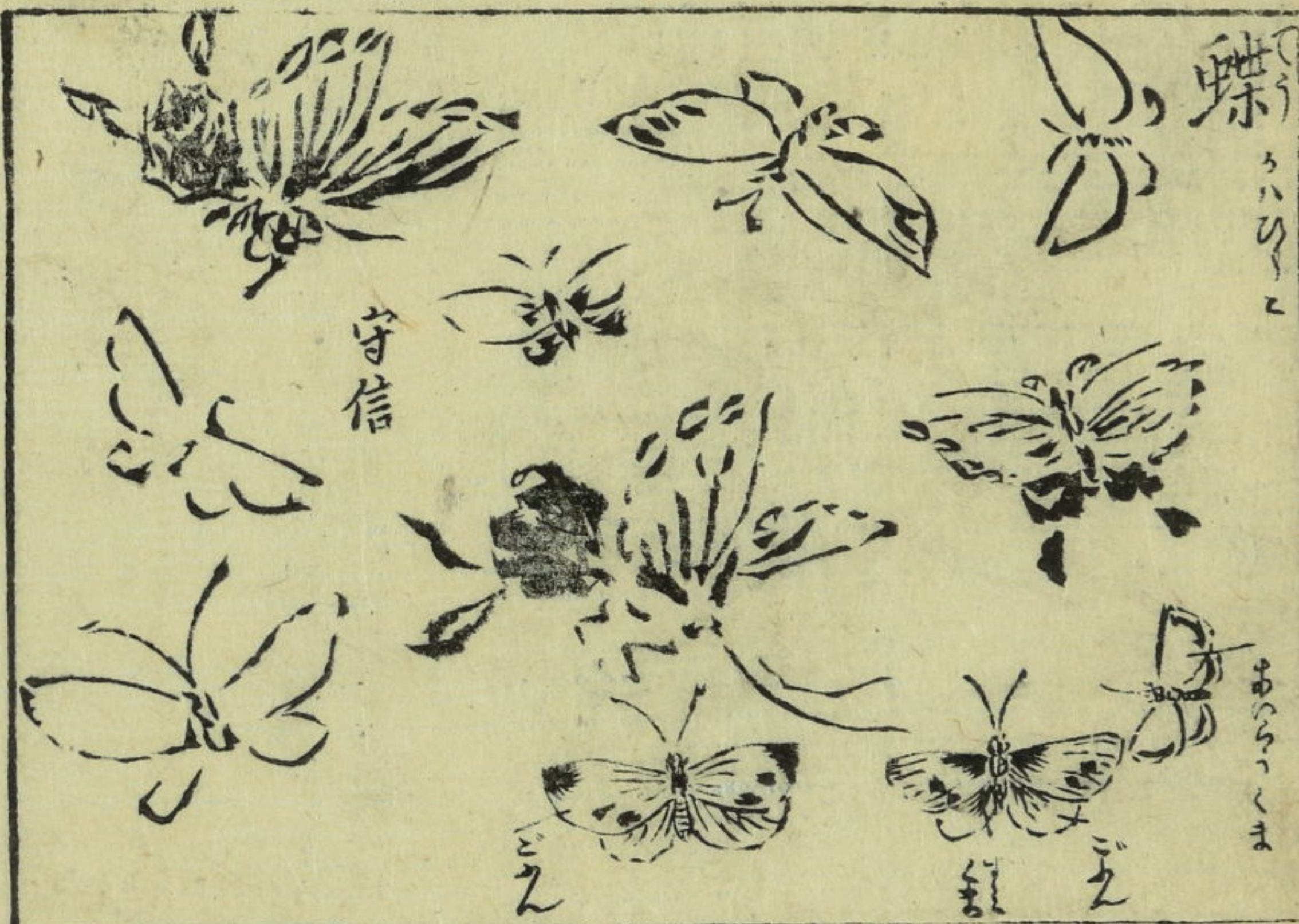


山鶺鴒



及背尾をくれぐ
淡すみろも去日
より足肉を朱文

蝶 (た) うはひこ



守信

あつらうくま

蜻蛉 (あ) つひ

うはらう
とんやう



獸類 (けい) の 類

虎 (こ)

黒白わり

合黄土ゆりくま九けしく朱をくま
毛オとくこらん申入る眉と唇の造
爪指とハニふん



探幽筆

馬頭 (ば) の 頭

同

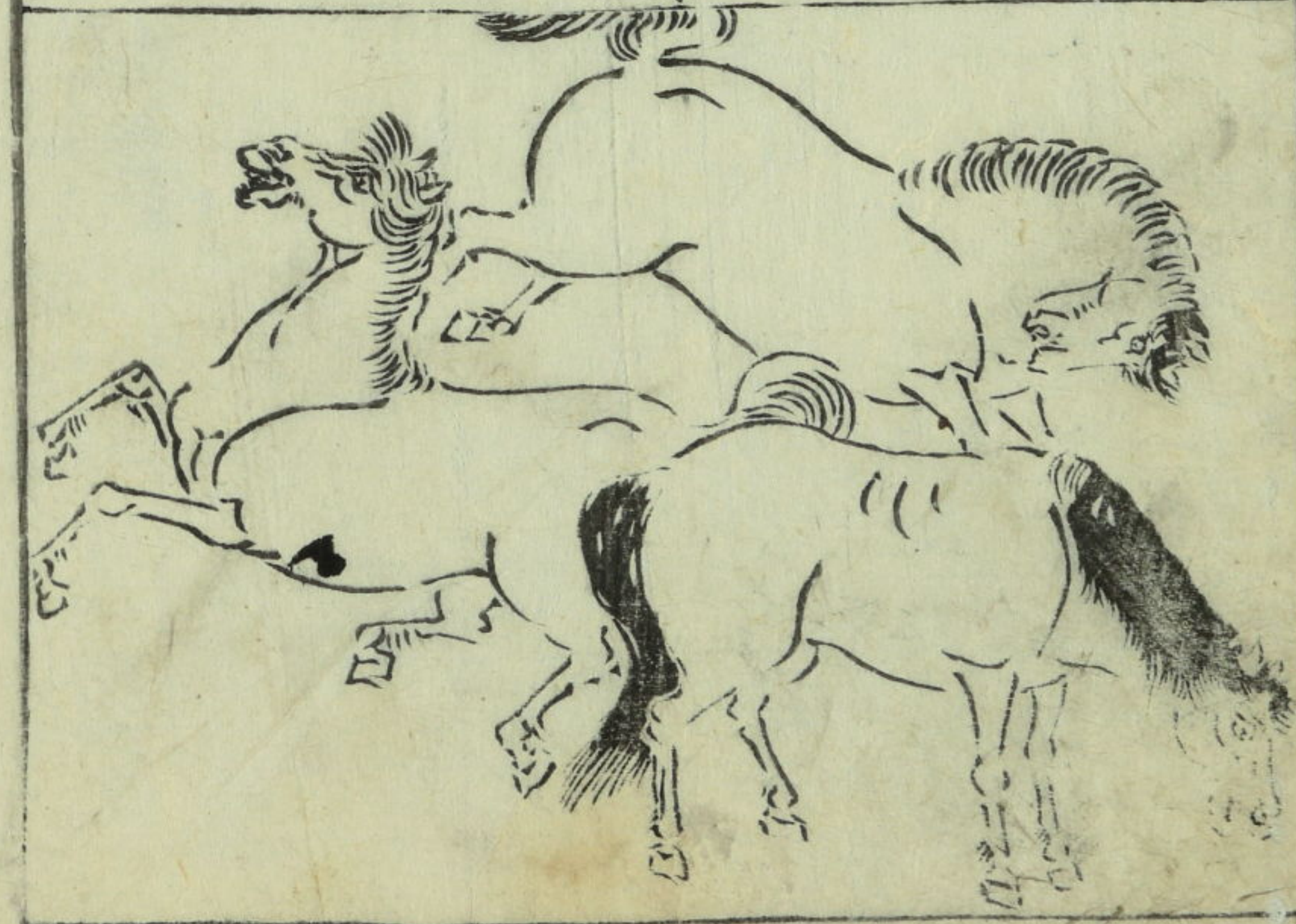
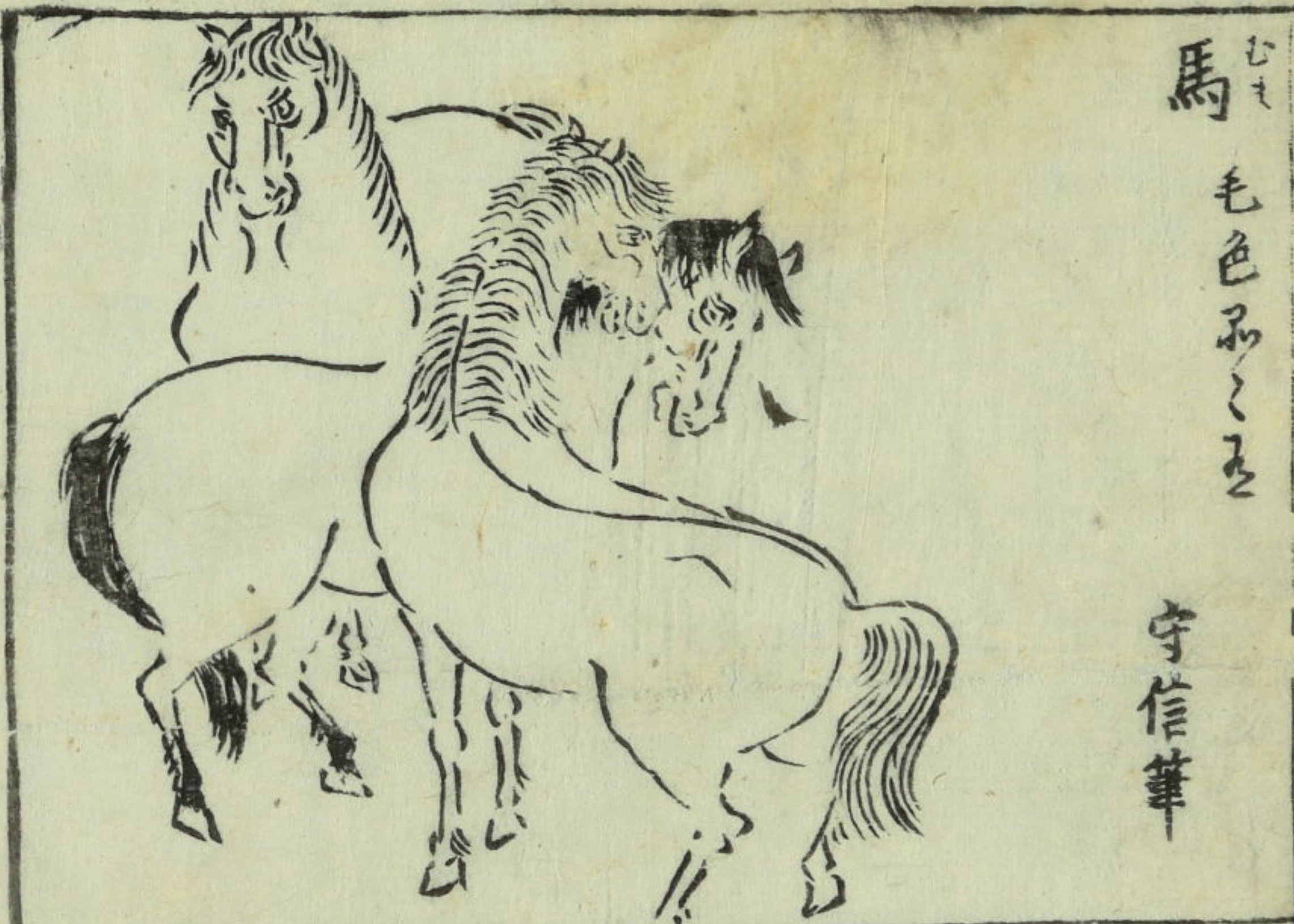


畫卷之三

畫卷之三

馬 毛色あくま

守信筆



すしあいの

馬

尾髪ハ淡

墨より

土佐筆



猿猴

面よりこころの方
くゆん毛がと全体茂
るぬり朱まこころ
毛をこころす



兔

白毛あり

此ハ富士具
ぬり朱を臺
くまよ毛を
すみ



犀

同上

探幽法印六十四歳筆

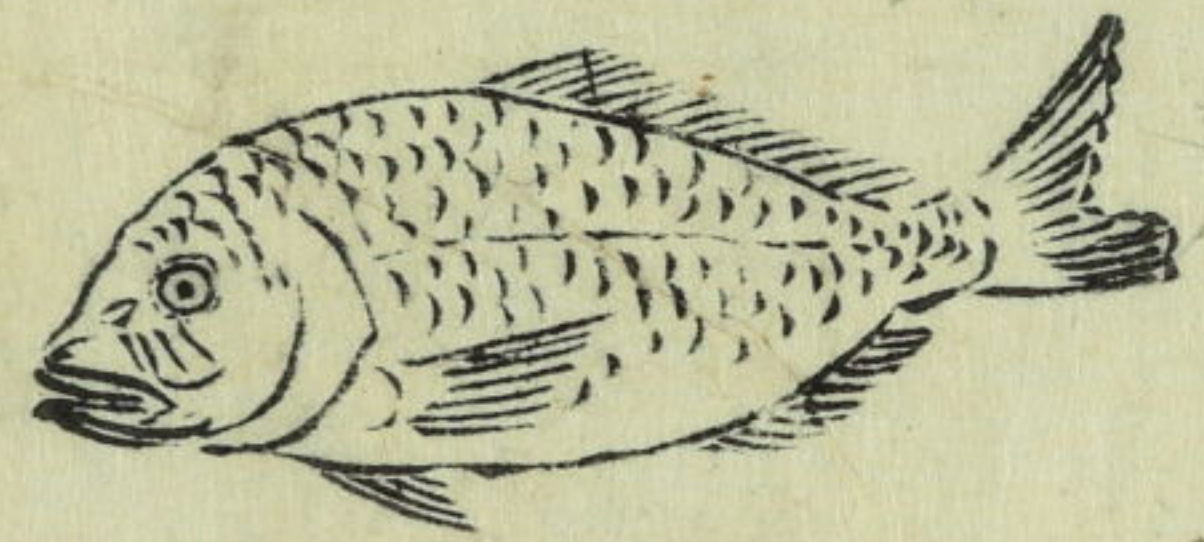


魚類

紅魚

肉色なり朱のこめぬり

守信筆



鯉

同鯉



鯪あゆ



法眼元信筆

此より源すといひ
出せし方浅すとい
後の方よりくはれ
けしあいらう浅
すとい合葉お
さかひ入ひと
尾ハ浅すとい

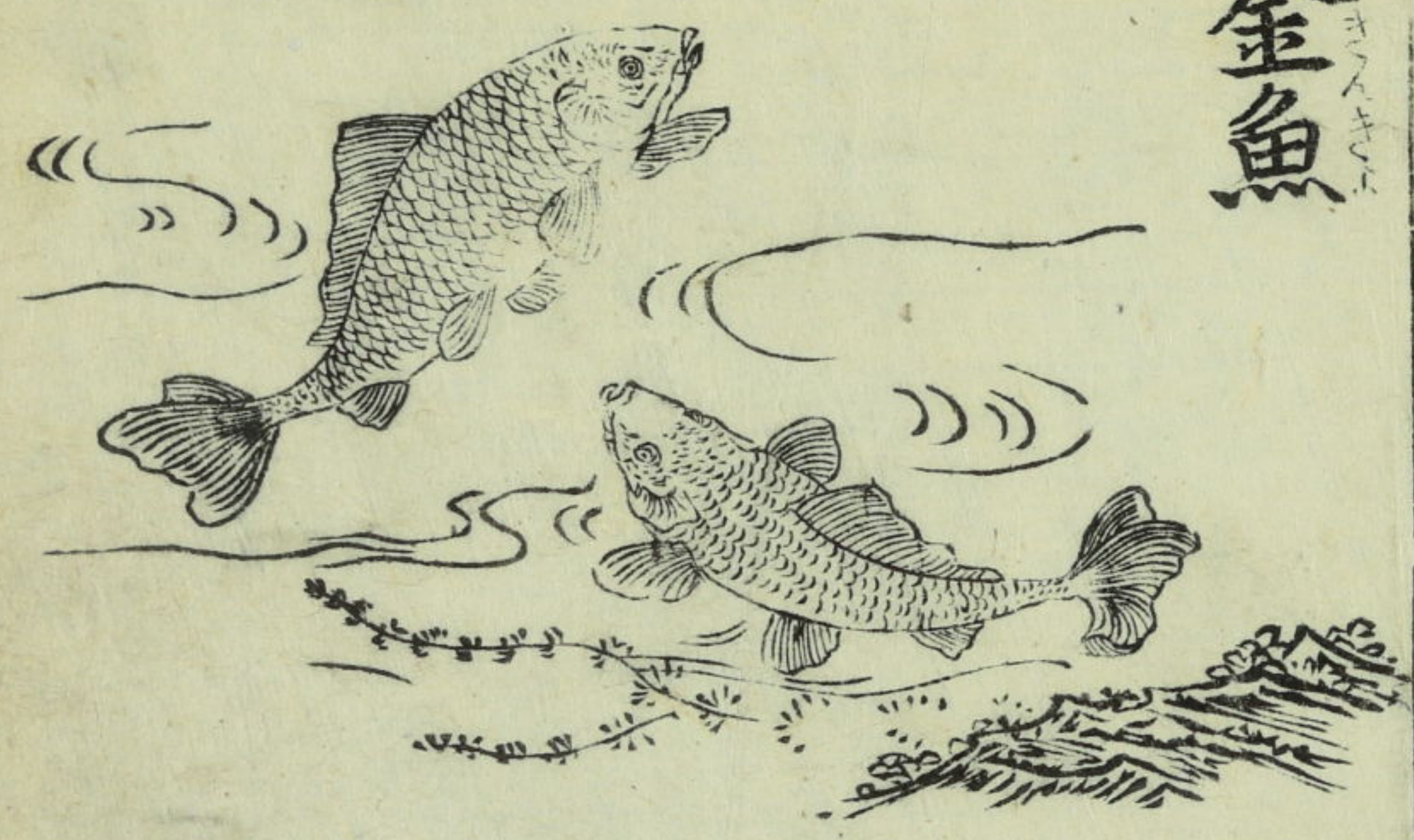
鯉こい



元信筆

此より源すとい
なりくまらけし
わしんは中葉と
後の方ハ浅すとい
短くあいらう浅
いとい入ひと
合葉おさかひ入
葉をよて格り柄
にくまらけし

金魚きんぎょ



貝類かいり

浅葉合葉土
朱すとい
と以てあらう

守房筆



龍

四足五采八十一鱗
九九之數

雲ハ合黄土よてひくも
しりくまふかーたうと
よてれけー一龍と云ん
けくたると括又は紫雲
白雲とホあり各々もさ乃
々と用てふふなる
既より世に中ずとわり
くゆれけーうろこと云り
伸雲曲後の方うす
くゆすてあいらうゆく
くつひゆあゆうすも曲
合黄土とわひ何故か朱
墨よりあつむく
くまろけと



守信筆

背ハ緑青或ハ紺青
せし下ハ朱くゆとりこ
ふんくく火ハ朱曲毛ハ
すこくまより朱墨
りく角ハ合黄土と云
朱すこくくまこあし
さゆハ腹ハ生多下
又ハ朱くそくゆ



龍

雨之凌
雲之
仰之
九之



畫筌卷四

目錄

| | | | |
|------|-----|-----|------|
| 伏犧 | 神農 | 黃帝 | 堯 |
| 舜 | 禹王 | 湯王 | 文王 |
| 武王 | 周公 | 孔子 | 顏子 |
| 曾子 | 子思 | 孟子 | 周子 |
| 程明道 | 程伊川 | 張子 | 朱子 |
| 歐陽永叔 | 韓退之 | 邵康節 | 以上聖賢 |

畫筌卷四目錄

〇九二

馬成子

王慶

安期生

莫月鼎

李八百

呂洞賓

白石生

浮丘伯

張果

麻姑

何仙姑

劉安

尹喜

孫登

梅福

蕭綦

黃初平

東方朔

苗龍

琴高

丁令威

武志士

老子

重陽子

鐵拐

彭祖

蝦蟇

盧敖

控鶴

欒巴

慈童

王喬

謝仲初

子英

明崇儼

上利劍

鄭思遠

羅子房

張志和

劉女

陳南

郝大通

張三才

王倪

葛由

馮長

王子喬

涓子仙人

鍾楮

蕪朝人楓

小兒樗蒲

同象綦

四藝琴瑟書畫

四睡豐于寒山拾得虎

孫晨

辛奇

閔子騫

姜詩

山谷

朱壽昌

諸葛孔明

張良

關羽

張飛

管仲 かんちゆう 董仲舒 ちゆうちゆう 大公望 たいこうぼう 伯夷 はくい

叔齊 しゆくせい 蘧伯玉 しゆくはくぎよ 蕪武 むぶ 林和靖 りんわせい

杜子美 とくしめい 陶淵明 たうえんめい 山谷 さんく 卞和 へんわ

扁鵲 へんたつ 拾得 しゆくとく 寒山 かんざん 東坡 とうた

李白 らいはく 伯樂 はくらく 鍾子期 しゆうしき 靈照女 れいしやうにょ

王昭君 わうしやうこん 七賢 しちけん 東坡赤髯圖 とうたせきぜんず

高山四皓 こうさんしごう 虎溪三笑 こけのさんしやう 范蠡 はんれい 孫康 そんかう

車胤 しゆいん 祖公 そこう 隱賢 いんけん

釋迦 しやくぢや 兒文殊 にらんぶしゆ 達磨 だつま 觀音 くわんおん

不動 ふどう 普賢 ふげん 蘆葉達磨 りよくだつま

維摩 ゆいま 天狗 てんく 鬼 おに 閻魔 えんま

餓鬼 がき 畜生 しゆくじやう 天人 てんじん 采河原 さいがわら

地獄 ぢごく 以上 淨居

畫筌卷四目錄

相傳 道統

三皇

狩野友元筆



伏犧

聖賢



黃帝



神農

A large rectangular area on the right page, divided into several vertical columns, likely serving as a table of contents or index.

八聖



堯



舜

禹王



湯王



文王



周公



武王



孔子



己上十一聖

畫卷之四

顏子



曾子



子思



孟子



周子



程子

伊川



程子

明道



張子



朱子



歐陽永叔



韓退之



邵康節



仙人

馬成子



安期生



王處



莫月鼎



李八百



呂洞賓

白石先生



浮丘伯



張果



麻姑



何仙姑



劉安



胡方東



黃初平



登孫



喜尹



高琴



龍苗



綦簫



福梅



畫卷之四

畫卷之四

丁令威



武士



老子



重陽子



鐵拐



般墓



三足のひつ

彭祖



盧敖



控鶴



後一羽鶴祖云云

慈童



樂巴



酒を笑し

王喬



謝仲初



明宗儼

冬月瓜を持



子英



上利劍



鄭思遠



羅子房



張志和



劉女



陳楠



郝大通



張三手



王倪



葛由



馮長



王子喬



淵子



鍾植



袍うすこま
きのけらる
雪舟筆
袍ろくせう下まろん冠とくつはうすま

同



探幽筆

同

守房筆

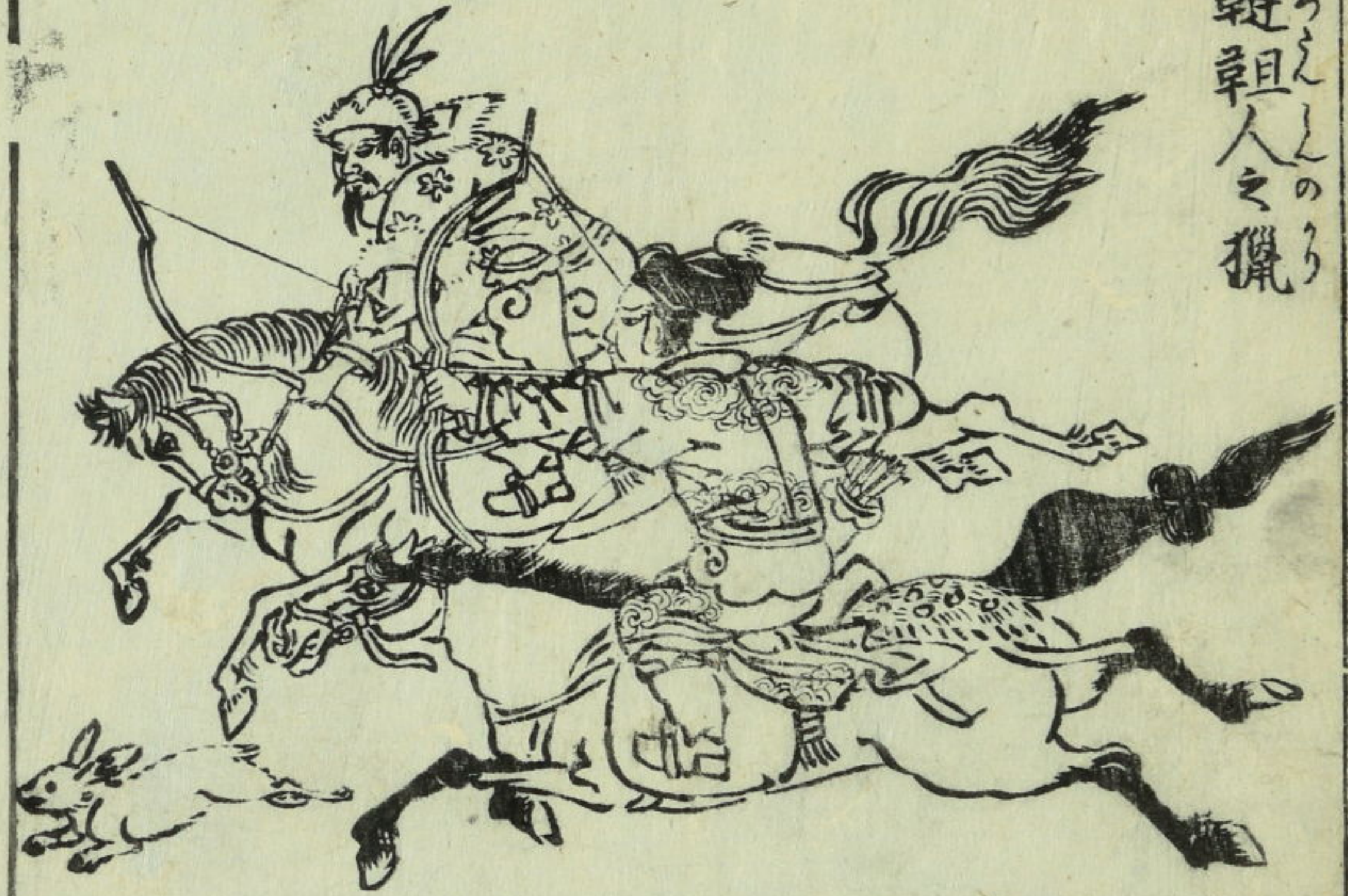


同

古法眼元信筆



韃靼人之獵



同上

法印守信筆



小兒博蒲之戲



小兒象碁之戲



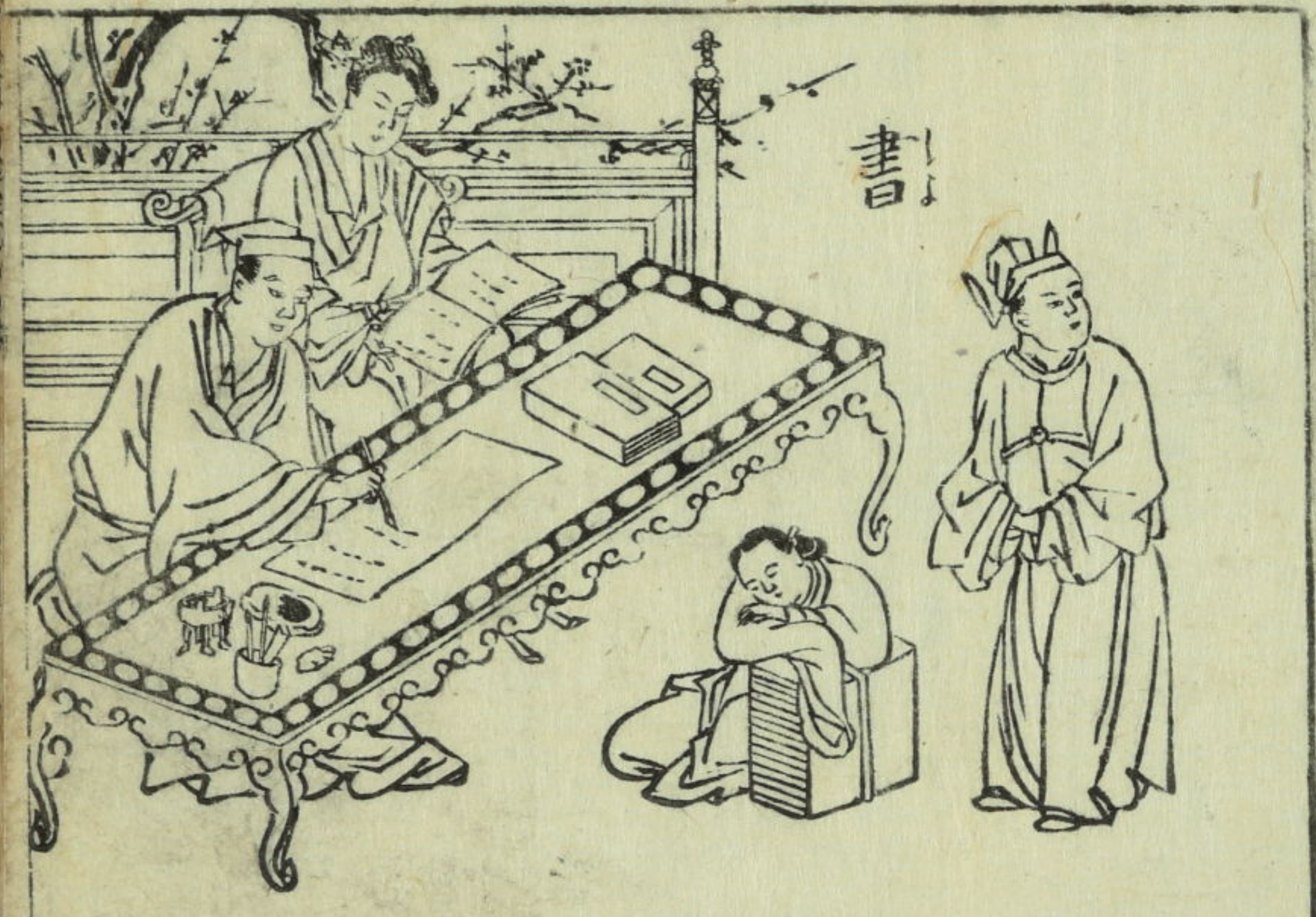
四藝

守房筆



碁

書



畫

四睡



孫晨
冬月
一
あり
臥て
且ま



辛奇

大白嶺子
虎と突ク



諸葛孔明

八月廿三日薨
壽五十四



張良



關羽



張飛



管仲



小方守義筆

董仲舒



永真安信筆

大公望



守信筆

伯夷



叔齊

元信筆

遂伯玉



法眼元信筆

林和靖



同筆

蘓武



同筆

杜子美



同筆

陶淵明



山谷



松和



扁鵲



永仙筆

拾得



守信筆

寒山



東坡



法中探幽六十五

李白

瀑布



伯樂 姓孫 名陽
善馭



鍾子期



士信光信筆

靈照女



元信筆

王昭君



安信筆

七賢



嵇康

阮籍

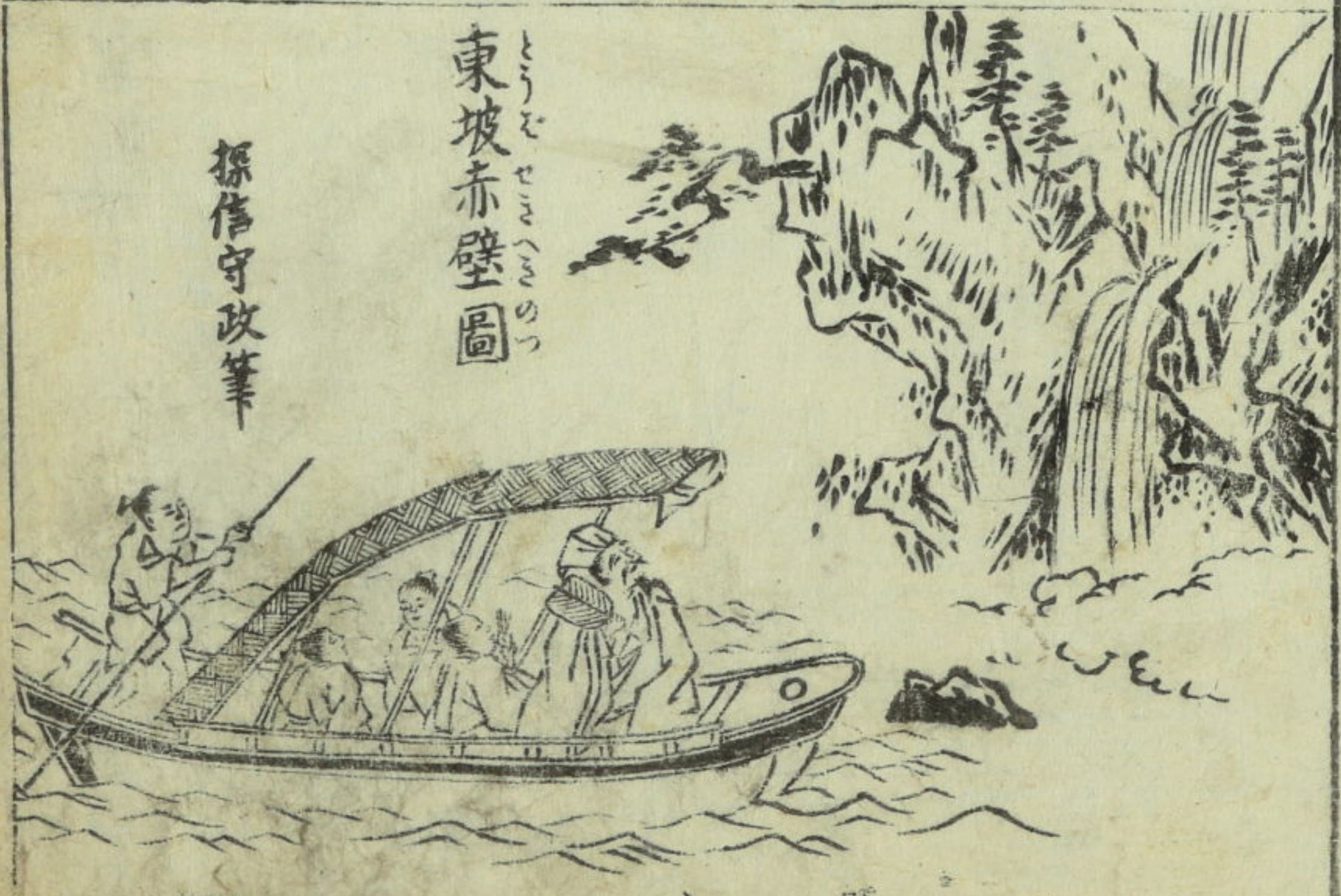
阮咸

山濤

劉伶

王戎

東坡赤壁圖



探信守政筆



范蠡

友元等

西施

白



車胤

油



孫康

雪



南山四皓

韓嬰

夏黃公

東園公

角里先生



虎溪三笑

陸修靜

陶淵明

畫

十七



兒文殊

守信筆



釋迦

出山

探幽法印六十卷

朱々り曲瓦り

浮屠

佛也



觀音

とえ



達磨

守房筆

朱々り



狙公

小方守房筆



不動



普賢



体ハ人トヤウニ又サシ
ク由ニカワラウトウ
眼トオハ左天ニ向ヒ右地ト成

白象

白六



蘆葉達磨

維摩



摺出ハ赤リ年七十五歳

天狗



鬼

五色間色と用口



閻魔王



餓鬼



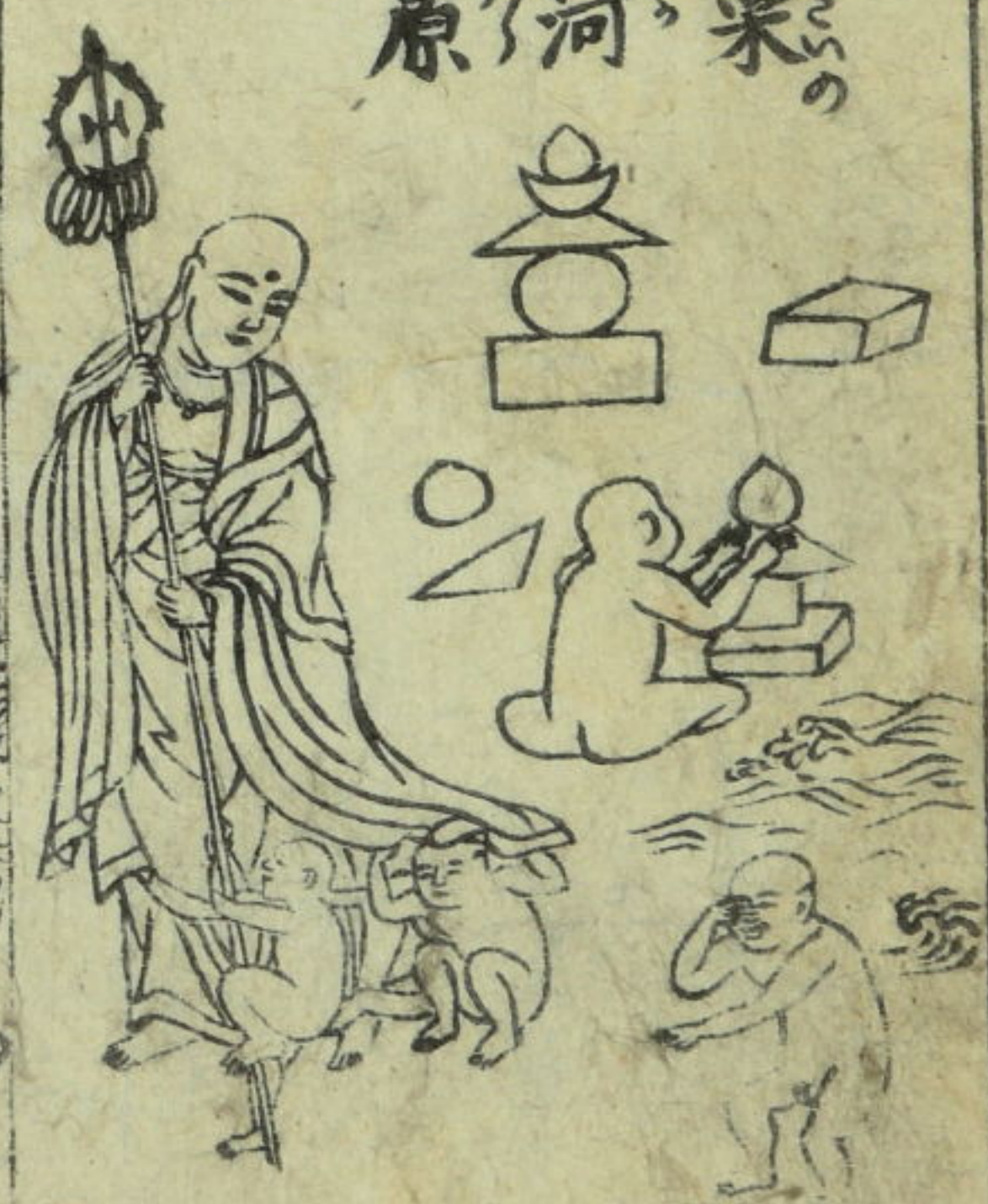
畜生ちくせい



天人てんじん



采の河原さいのかわら



地獄ぢごく



畫筌卷之四終

畫筌卷五

目錄

七福神しちふくじん

川渡布袋かわわたふくろ

和歌三神わかのさんじん

梨壺五歌仙りうのこのごうた

天神てんじん

渡唐天神わたがうのてんじん

大井川筏士おおいがわのわかし

佐野渡さのわた

布引瀑布ふひきばふ

井出玉河いでのたまがわ

夕顔ゆがわ

須磨石すまいし

明石あかし

夕霧ゆがきり

三夕さんゆが

牧笛かひふえ

加茂競馬かものけいば

鞠引まじりひき

雷公らいこう

万歳まんざい

放下ふたし

腕推之戲うでおしあそび

碁盤操いばんあそび

臙推之戲えいおしあそび

曲太鼓

相撲之圖

楠正成

武田信玄

上杉謙信

冕冠

冠

烏帽子

條帶

革帶

裾

曲領

腰被

紳

天衣

壁代

十二章

袿

袴

袴

太鼓

敲鉦

如意

寶珠

轎車

榻

笏

武者全圖

同後之圖

武具彩色法

莒蒲旗

人體并

好色春畫之法

畫筌卷五目錄終

畫筌卷六

目錄

| | | |
|---------|------|---------|
| 毛邊紙裏紙打樣 | 礬水之法 | 毛邊紙假張之法 |
| 粉本紙續樣 | 燒筆 | 裏燒筆 |
| 念紙作方 | 蒙筆作方 | 朱印色之方 |
| 箔推方 | 篩作 | 矸子振方 |
| 彫塗 | 殺塗 | 退塗 |
| 縵網彩 | 括端 | 繪帛張臺方 |
| | | 泥引之方 |
| | | 隈探 |
| | | 碁盤割 |

板描畫法

繪絹

墨

筆

硯

紙

屏風押繪

屏風緣寸法

屏風色紙短冊及畫之貼樣極秘傳

表具寸法定式

表具作方

腐粘作方

屏風張方

蝶尾寸法

緣附方

軸物卷切方

掛繪三幅一對之事

同二幅一對之事

同四幅一對之事

大橫物之事

柱隱之事

卷物結方

三幅對秘方

掛繪可入渡事

同床掛事

同見方

同緒置方事

同床掛礼

同主位客位

同掛畫掛字包法

白繪之屏風

畫筌卷六目錄終

畫筌卷六

〇二

| | | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

畫筭卷之五

七福神

毘沙門



鏡前直方

辨財天

諸天傳之

林守篤 編輯



守房筆

大黒

和云大黒王ヤ
和云大黒命



ちくまう

入字に寸朱五まくお葉のと土

壽老人



うまき
ちくま

大壽

撰出七十歳筆

福祿壽

福祿壽
老人と云
人か
南極老
星の柱



もろくちへおいら

高神
命



え

ちくま

布袋



白

布袋

川



撰出法印筆

和歌三神

倭人物

住吉



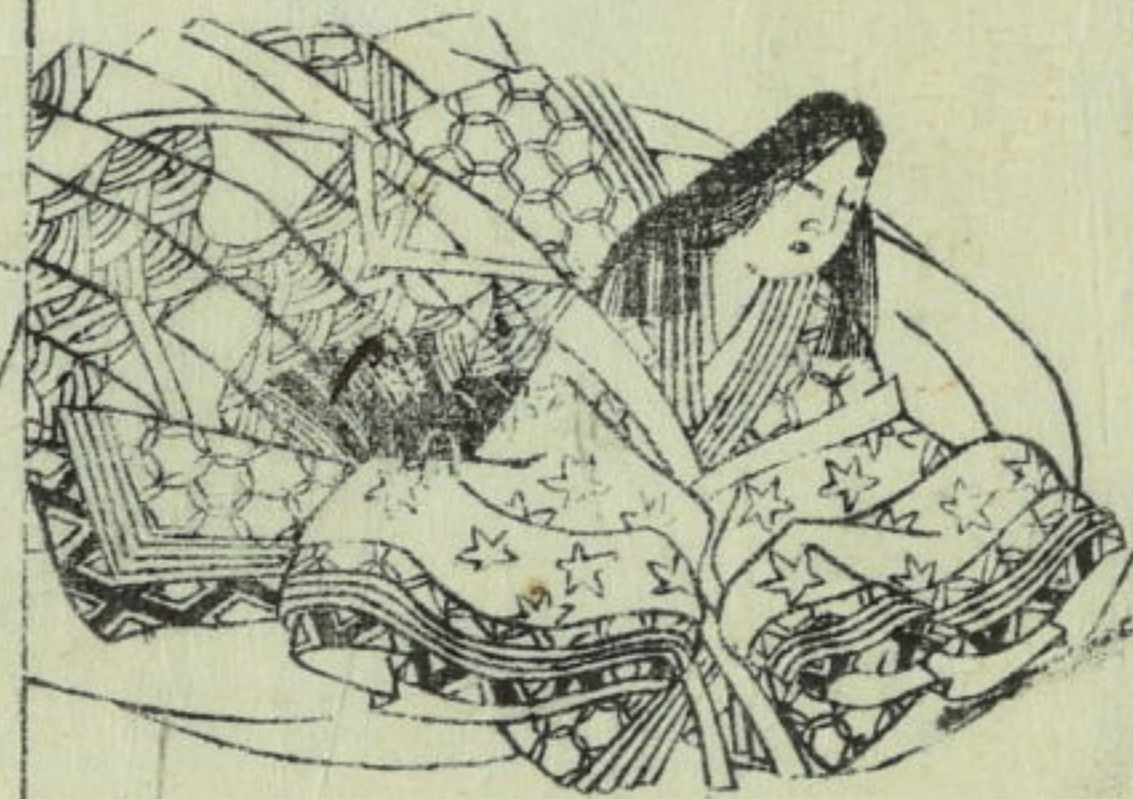
玉津嶋



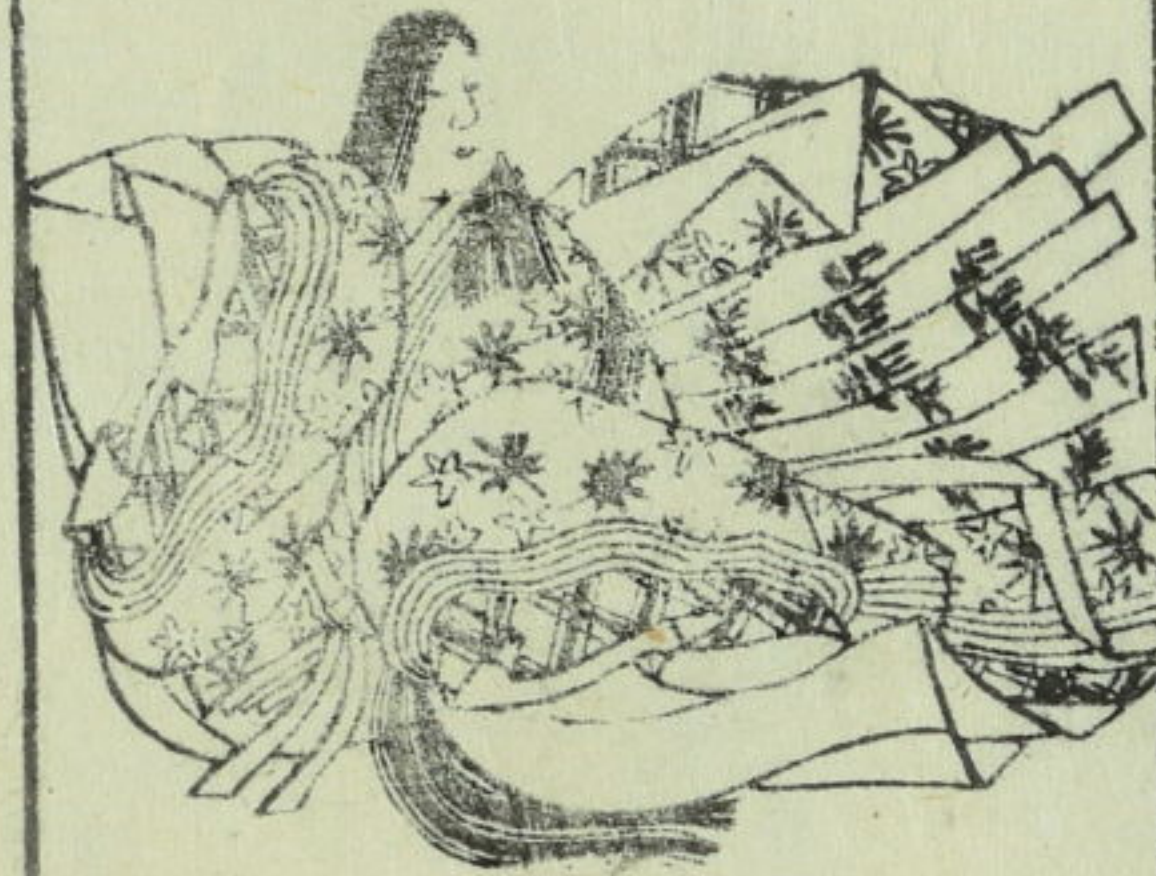
神天満天



侍内馬



部式泉和



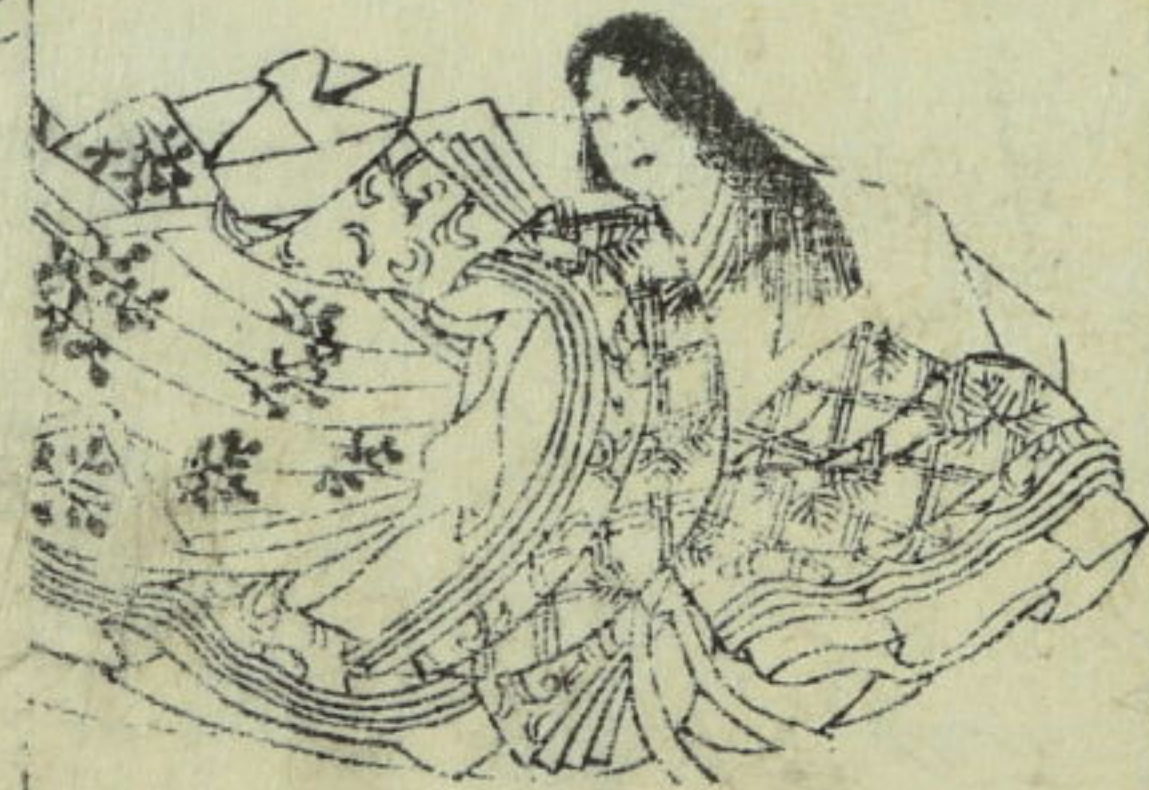
元信筆

人磨



輔大勢伊

渡唐天神



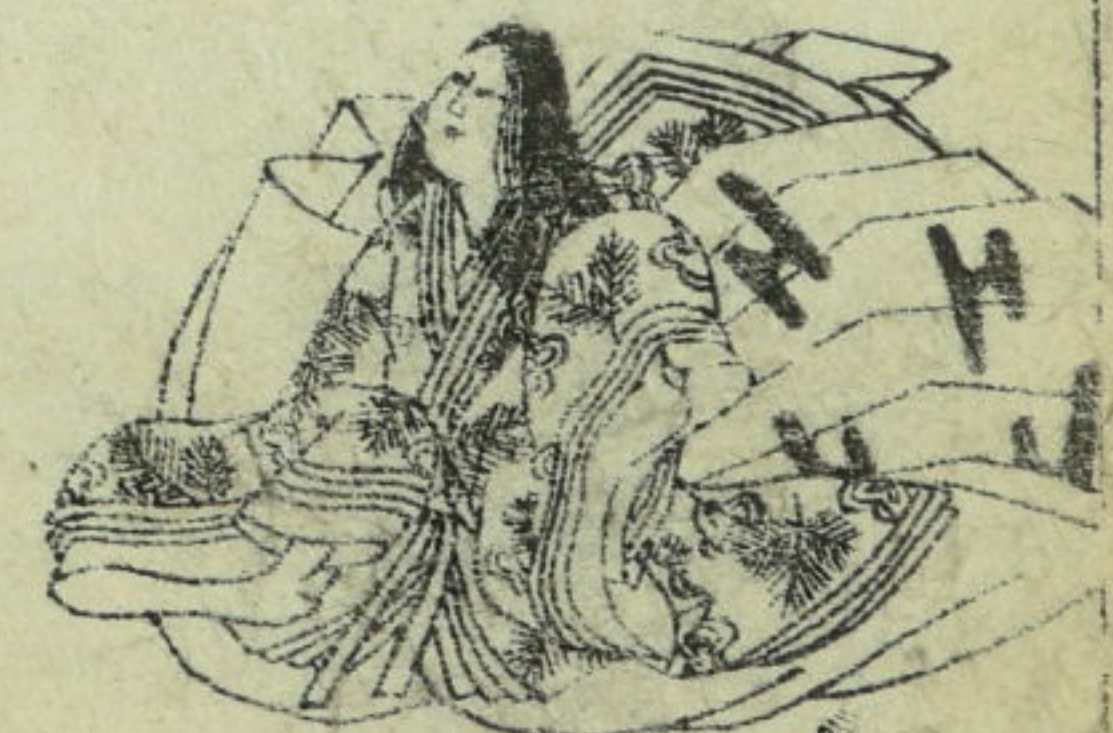
安代

部式紫



仙歌五壺梨

門衛深赤



先をいさへし、ゆくゆくをあらへ
いささうく、行の足と



守備

佐野渡



舟りてゆくは、
さるるるる
るれくえん

橋本

佐野御居



春川の院

業平

桃田橋

佐野御居

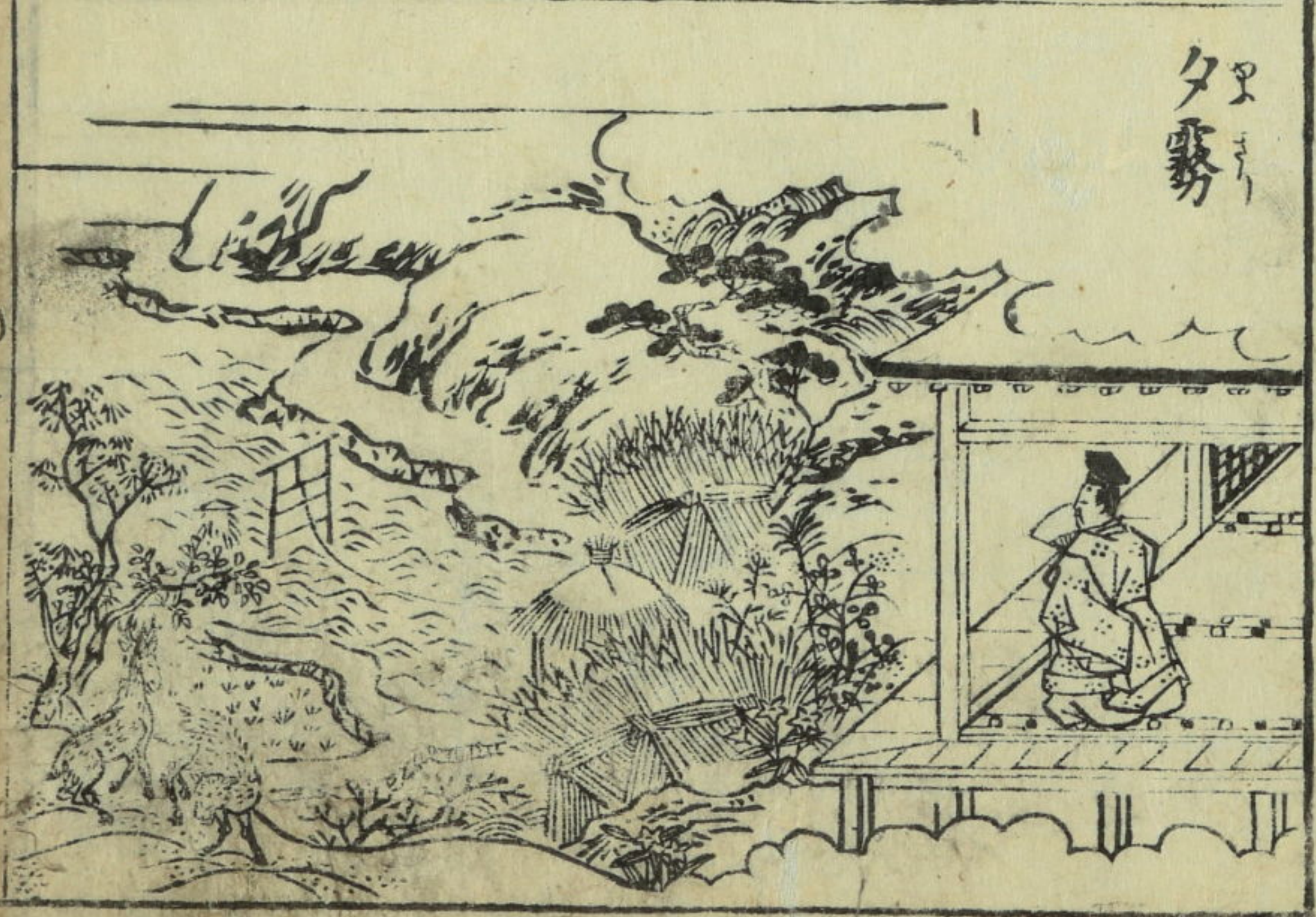


俊成

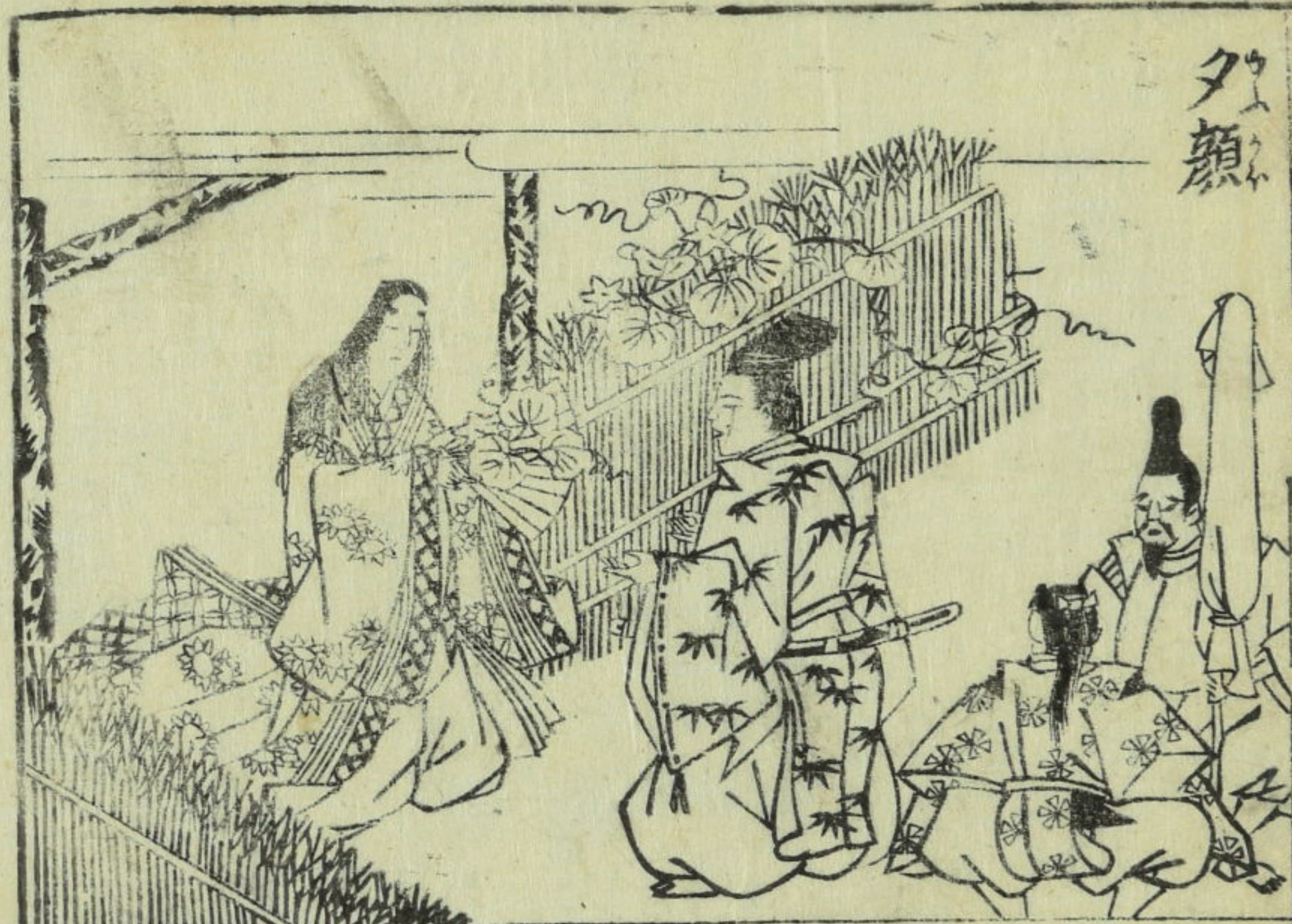
舟りてゆくは、
さるるるる
るれくえん



明石



夕霧



夕顔

畫卷卷之五

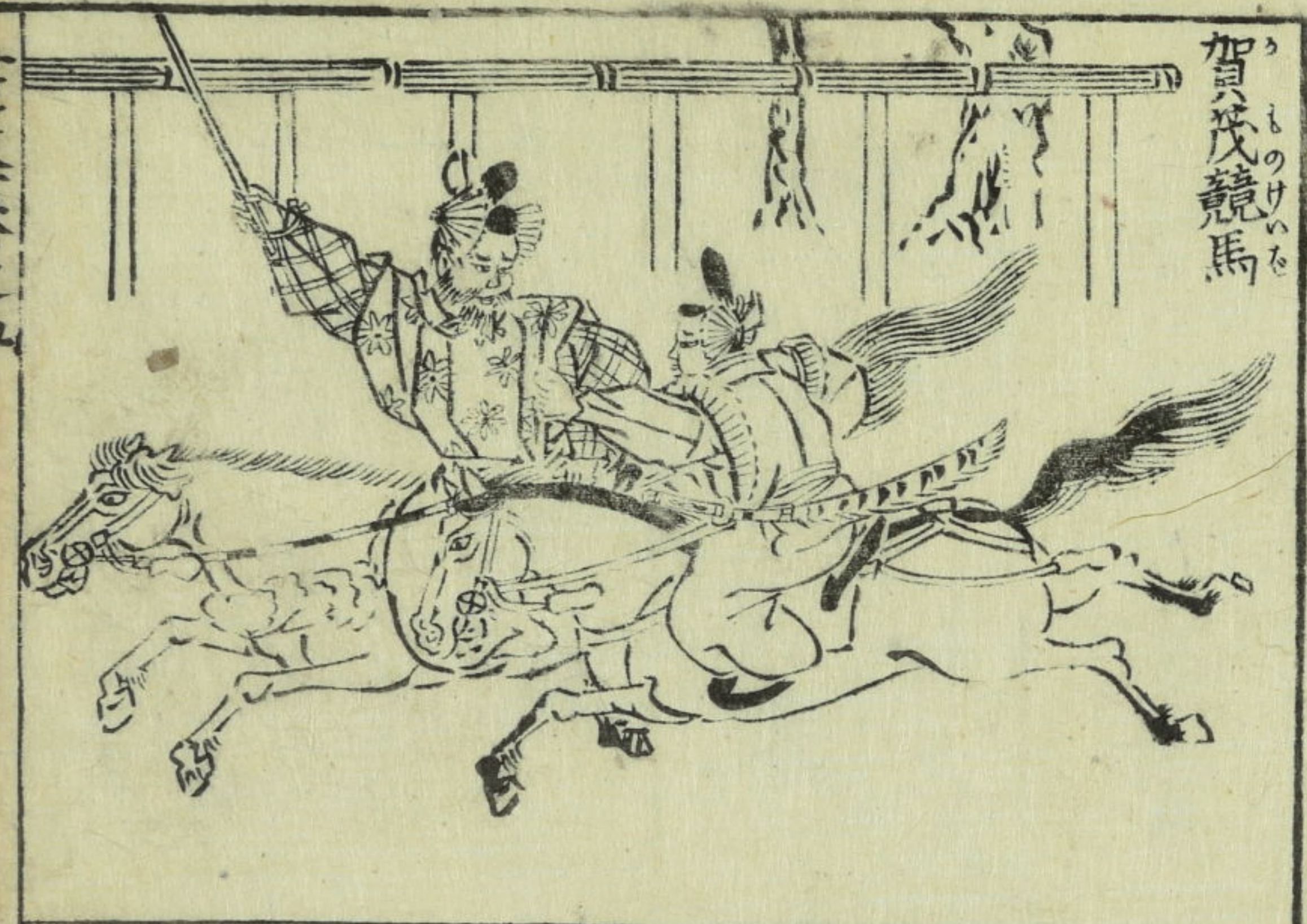


須磨

三父



賀茂競馬



朝引



雷公



土佐光信筆

萬歲



探幽筆

放下



柳栄筆

腕推之戲



臑推之戲

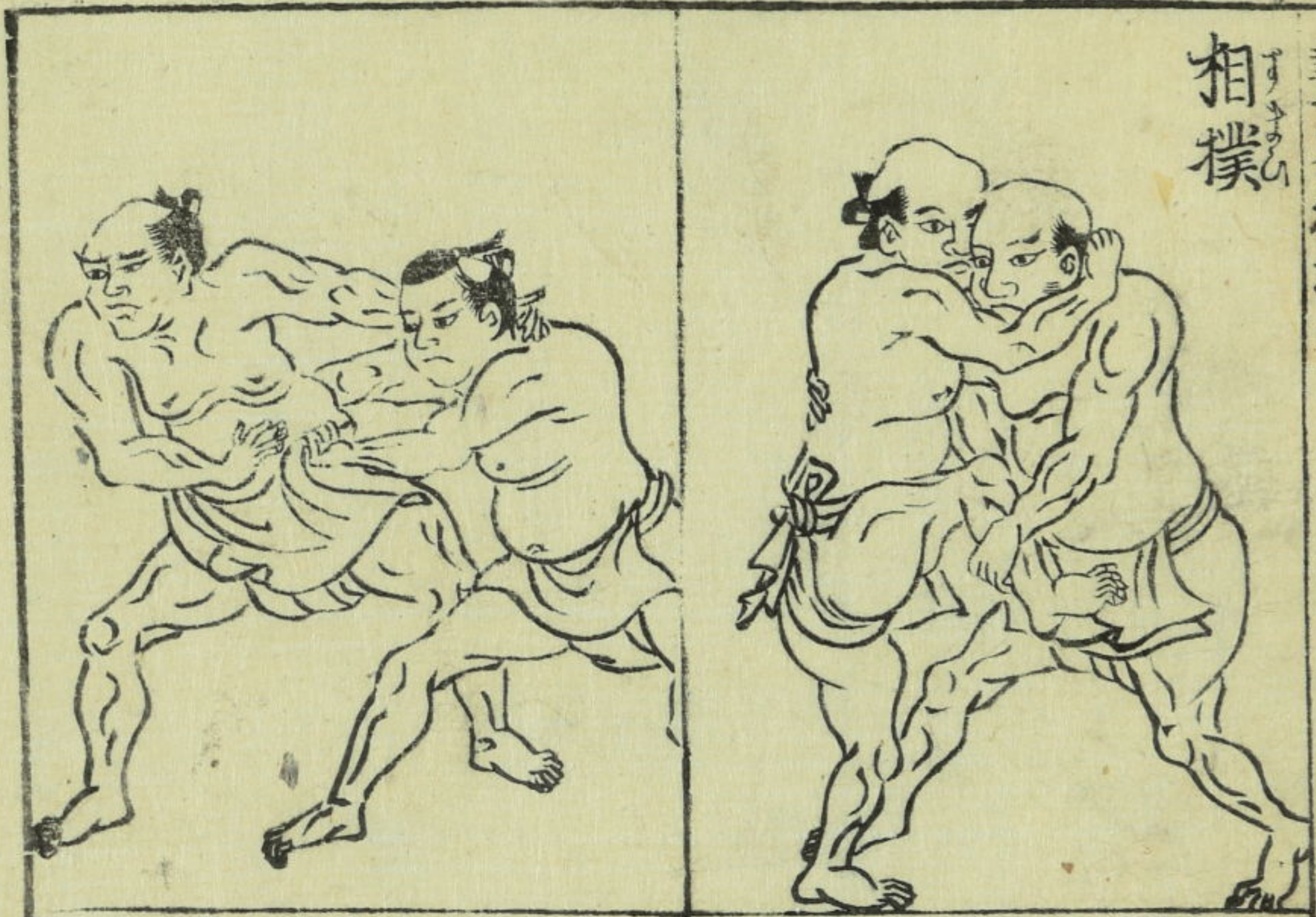


碁盤操



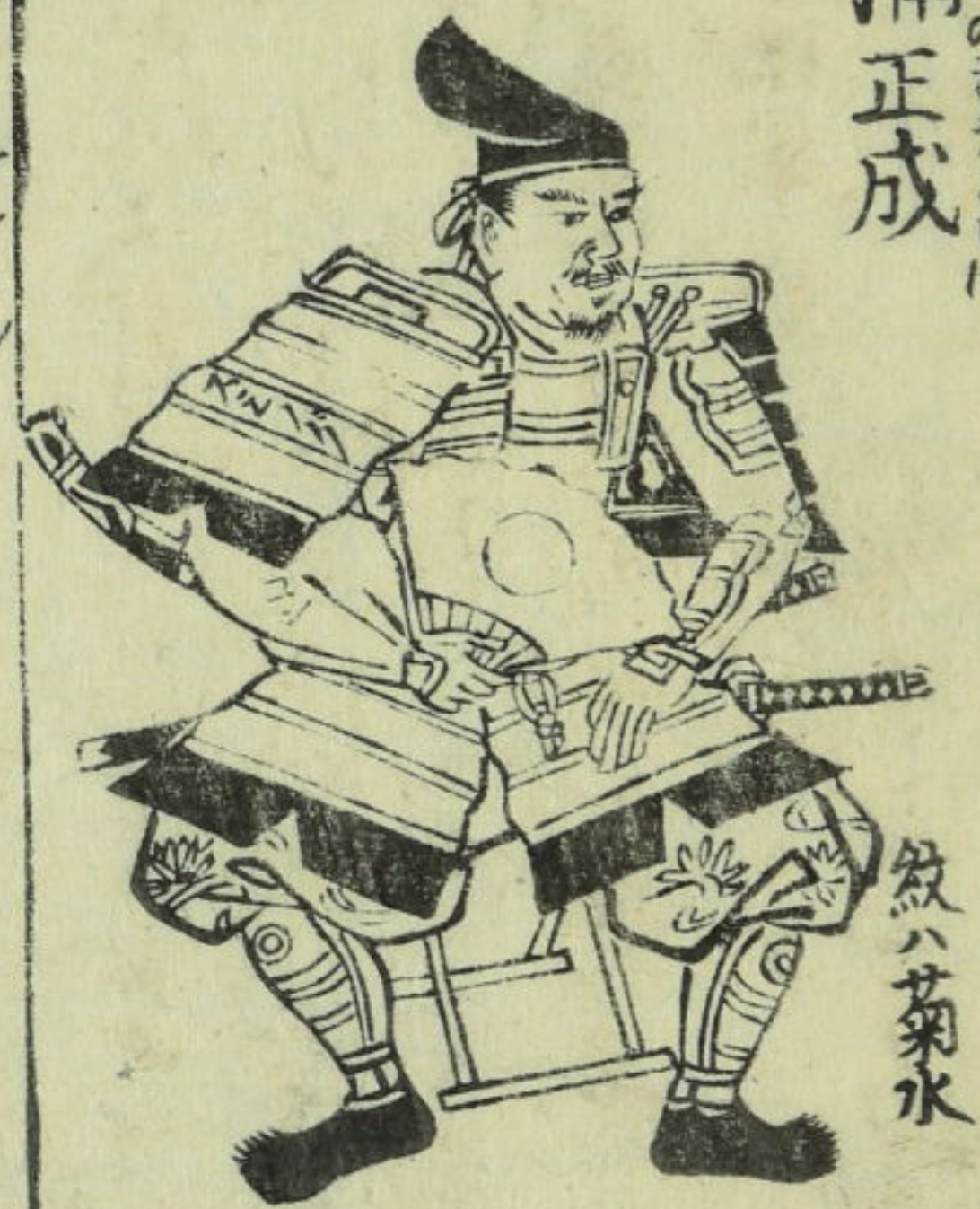
曲太鼓





相撲
畫筌卷之五

楠正成



紋ハ菊水

上杉謙信



武田信玄



紋ハ菱

大關秀吉

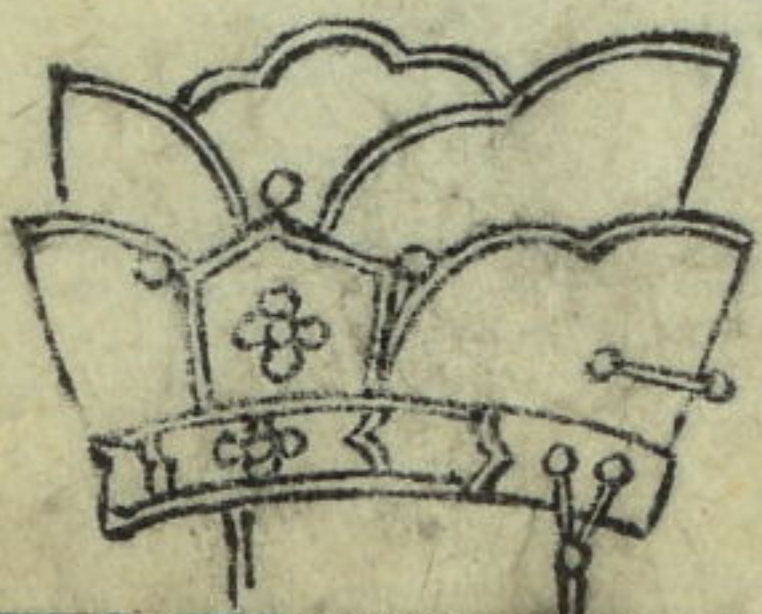
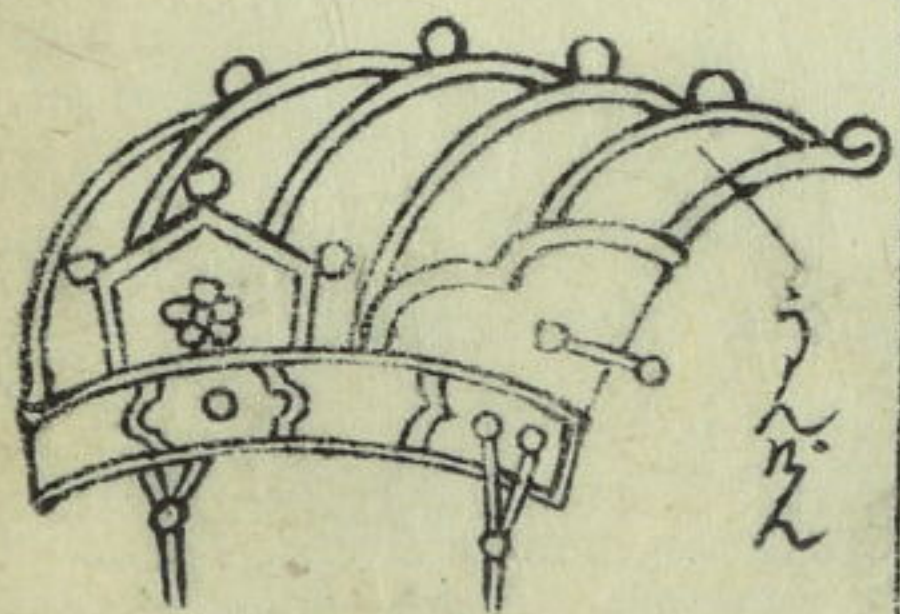
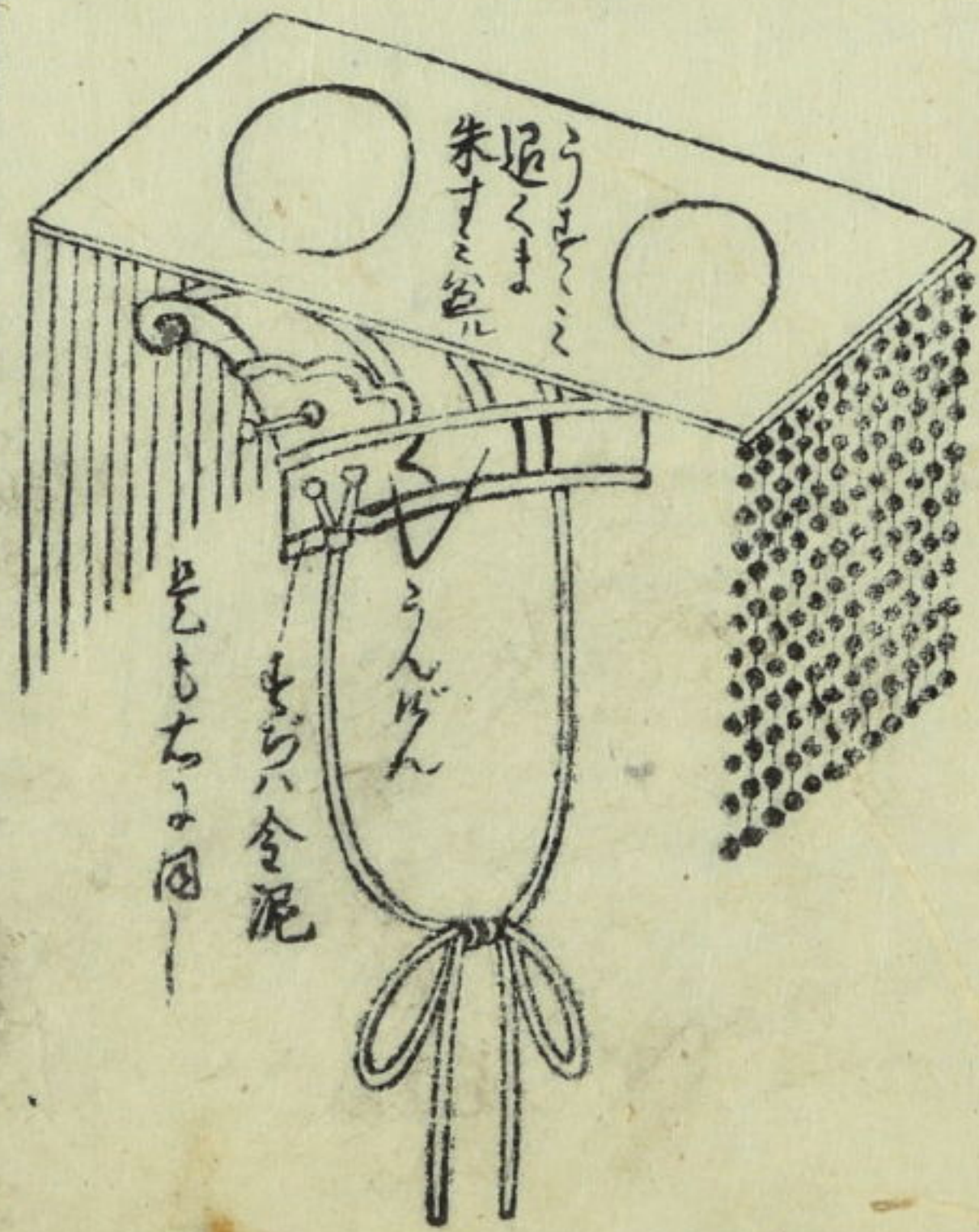


冕冠

にまのこうり

板と以て作らば及も櫛路を
造る是と流と云十有二也四時
十二月は法る礼記天子の玉藻
每流各十二玉玉の間おと一寸
流の長さ一尺二寸毫て肩に齊し
公ハ九玉九寸侯伯ハ七玉七寸子
駝ハ五玉五寸天子の玉ハ五采朱
蒼黃玄白上より七下り周
て復始ふ公侯伯ハ朱白蒼子
男ハ朱緑白流ハ古く

あらしふりし



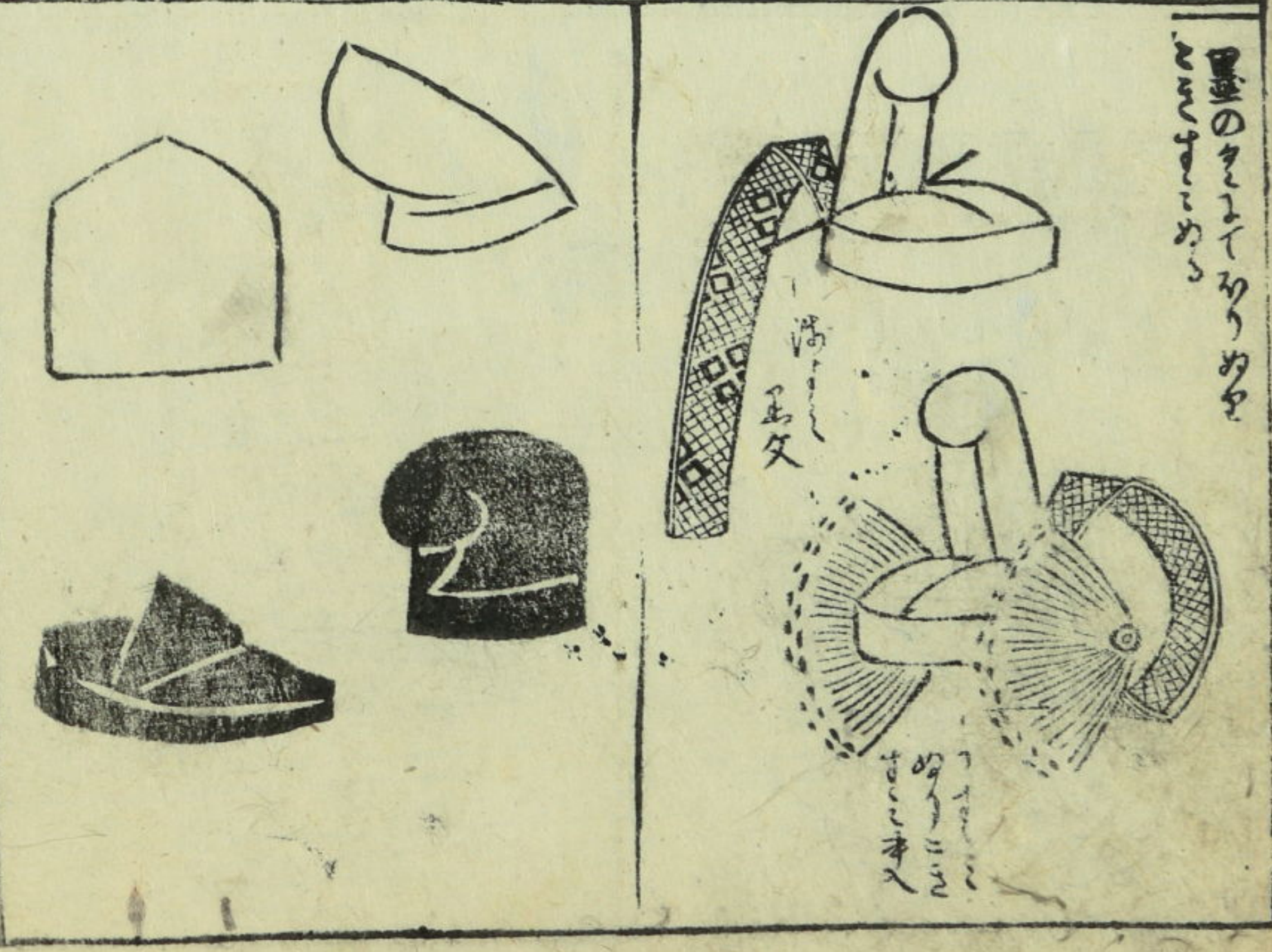
冠 日本

古ハ織物縫物等ハ天武上皇
 穿漆塗の紗冠と著以髪と帽
 物と巾子と云其後より其物を
 羅と云ふ及子室と物と櫻と云
 亦五車と掩地と緋と云色と
 貫く物と弗と云

烏帽子

紙と云製衣漆をぬる上た方
 折返とた折と云は後ハ著るこ
 右折返と五位位と云は將衣の
 時必ス烏帽ハ今世侍従位系
 の術を以て稱ふなり

墨のきよてありぬる



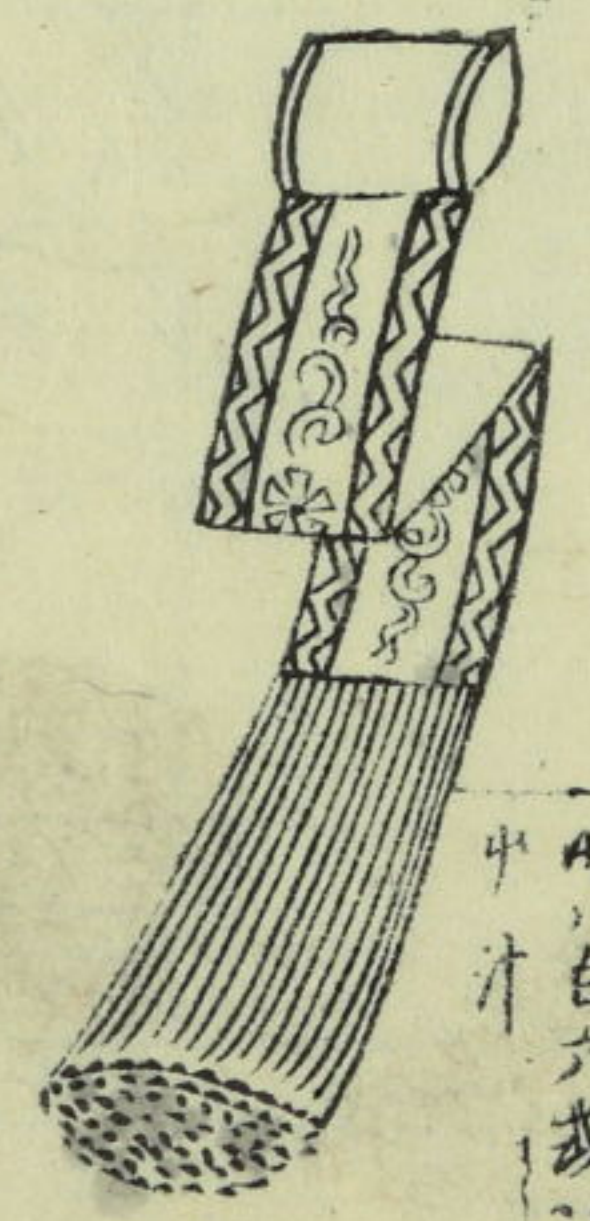
條帶 或ハ綬

畫家子平帯と云師乃曰
 申此之家の紋と云或ハ
 蔓草と云へ古畫多クハ
 緋と緑乃彩あり

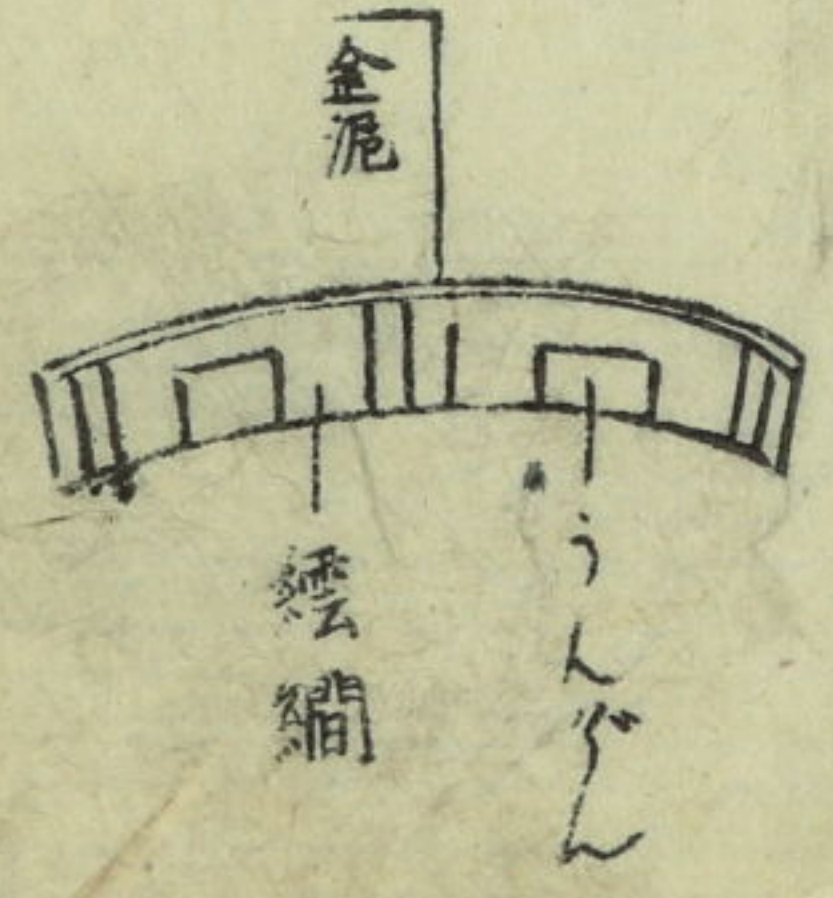
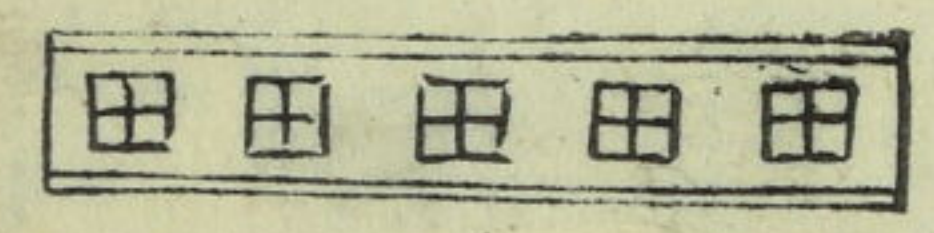
革帶

平帯ハ紐子通して帯ハ
 五平さぶの角まで四角切
 く縹つを是と稱と扱と云
 凡て公の御共ハ紐子と云

或曰金



地之の附ハ
 わさき多クハ
 或ハ金。緑の
 形ハ白六或ハ
 中才



金冠

縹緋

うんかん

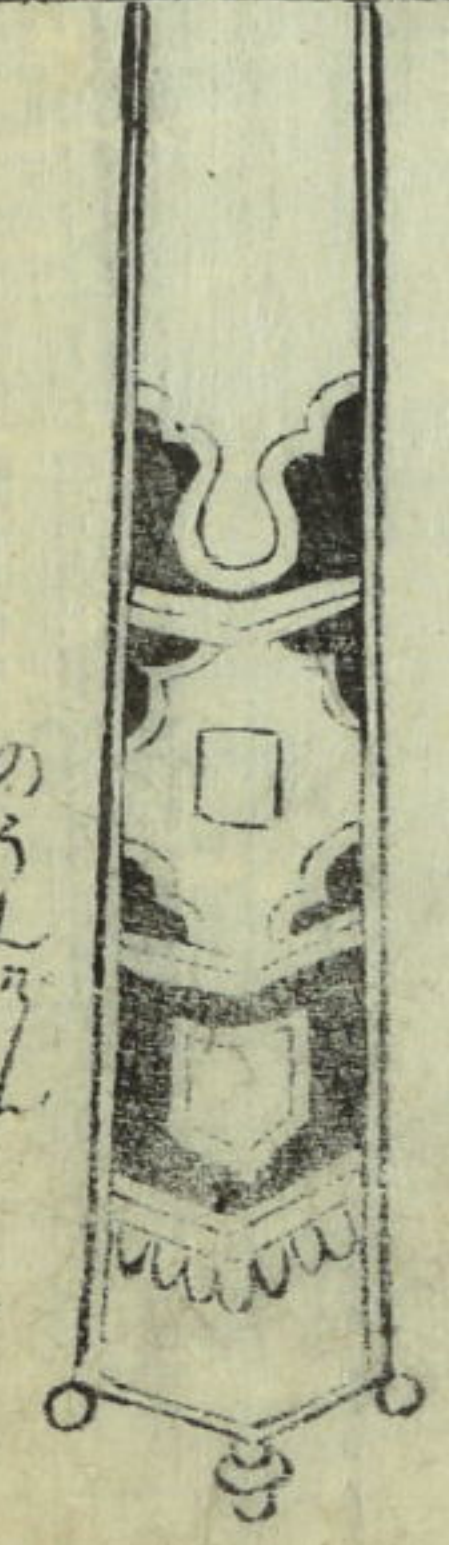
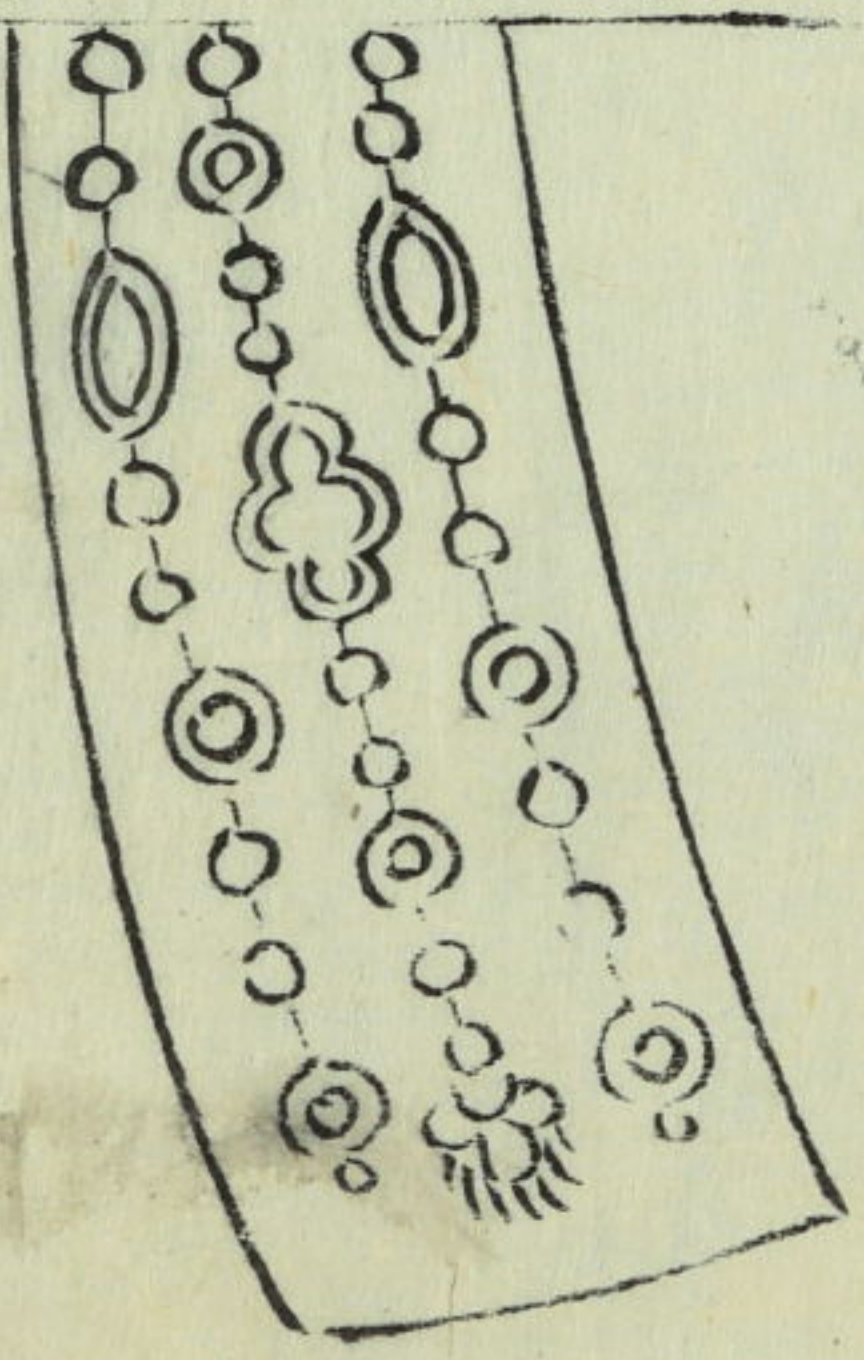
裾 さねのちり

古畫多く蛤粉と以て洗ぬり
 同く括或は退ぬり曲と重
 滑し銀泥と以て紋を畫
 して裏必ず肉色。袴ハ蛤粉
 までぬると銀泥を章と
 虫石席或ハ鳥の尾さき
 曲領 しんりょう
 方心曲領ハ三才圖繪子
 刃とくわこふん淺くぬると
 おれく
 括敷



腰極

夢齋曰今の裙帶珠と其
 上は縹く壓く塗は。羅山曰
 裾の上に繫る帯なり師曰
 白緑の具にて塗ぶふんの飾と
 ひく圈中ハ金と紺朱緑を
 をぬる
 紳 おん
 白緑具とぬり蛤粉をそくく
 茶と或ハ全泥を四色茶の汁
 還塗或ハ紺朱銀先の取うん
 けんまふし色彩色一色



天衣

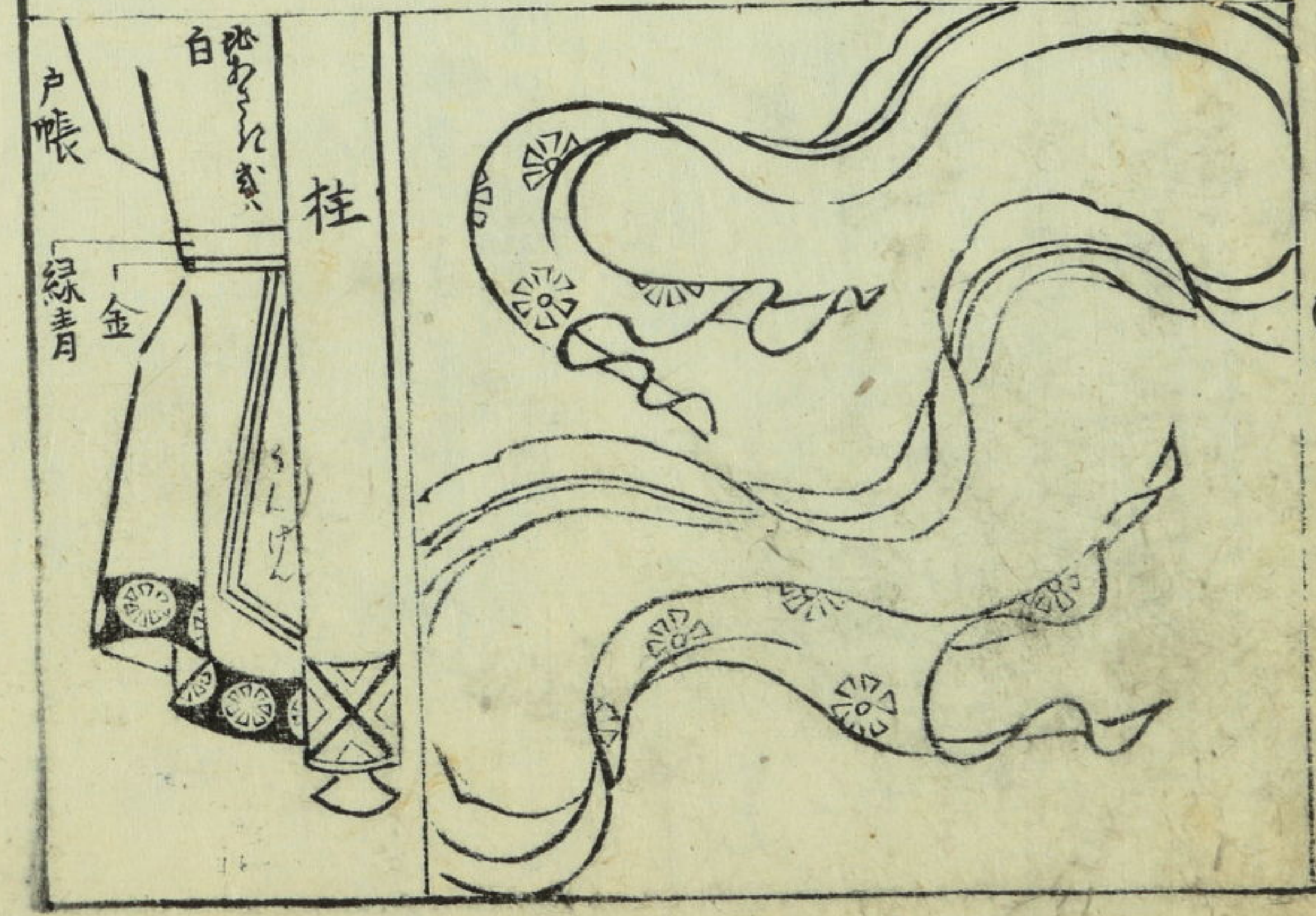
宮女或ハ菩薩等の之有ハ掛る
糸ハ分帯ハ此如ナリトイハ其
之品々あり緋緑紫土朱茶
或ハわりのけります一紋
合泥まあり

壁代

彩ハささめられる色なり
漢宮をまへりうねり
あり

日本一

あき

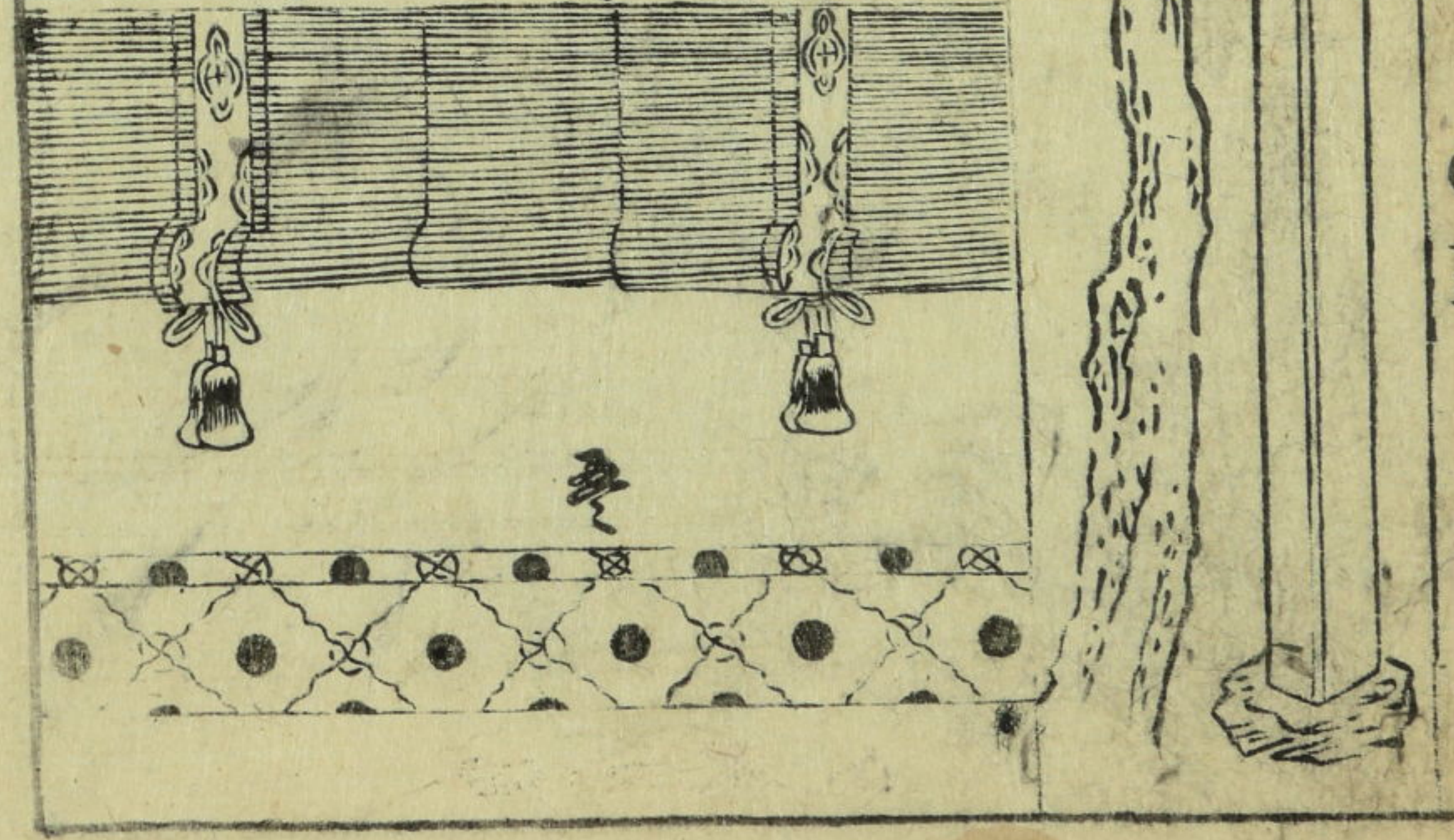


十二章

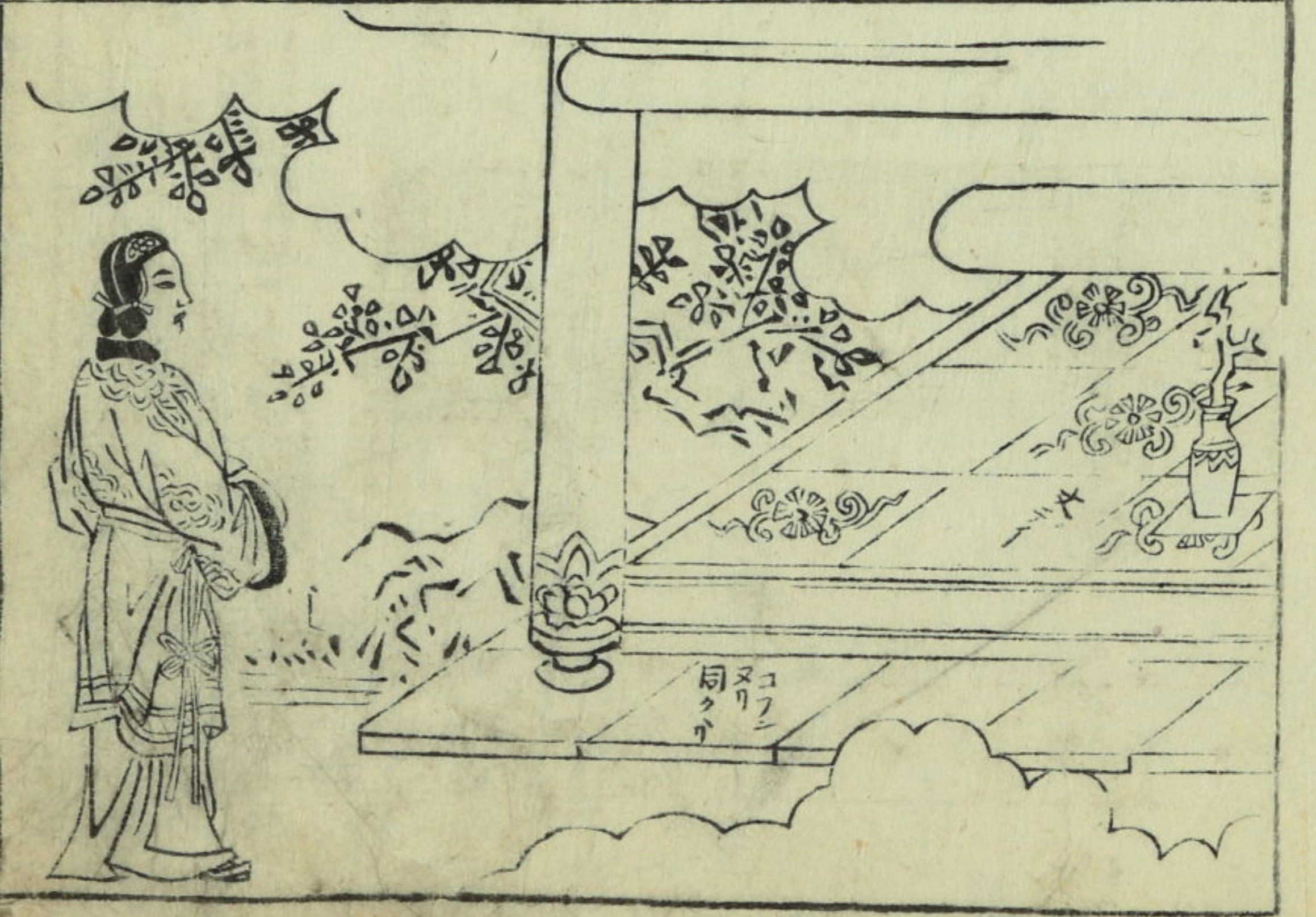
日月星辰山龍華虫雉六の
物ハ是ト衣ヲ給具序上リ
して下万宗彝藻火粉米
黼形黻舞六のハ此也
裳ハ繡其序下万と
上取今ハ火と宗彝ハ衣
○日月星辰ハ其照臨
山ハ鎮と取龍ハ變也華虫ハ
文宗彝ハ孝藻ハ水草蒙也
火ハ明粉米ハ養黼ハ断也
黻ハ辨也繡ハ絳帛と以



うつくしまとりの胡粉まじり摺
 空へ珠何とせむうんげんごに
 じつじつ○轆車比を白線よ敷黄
 女一加へてぬる或白六つり敷黄よ敷の
 加るすまを不加と比に地塗れ上よ黄汁
 とぬる紋を摺むらとにめんえりく志
 こくと挂或黄を車に浅の黄よ敷と
 是臭りぬる深の黄ぬる挽本すの
 総朱常れぬ仕立出ー帛いふんすこれ
 方法朱の両に久成へ朱公のゆけの○桶
 こふし深の黄に罰○笏肉色或黄土を



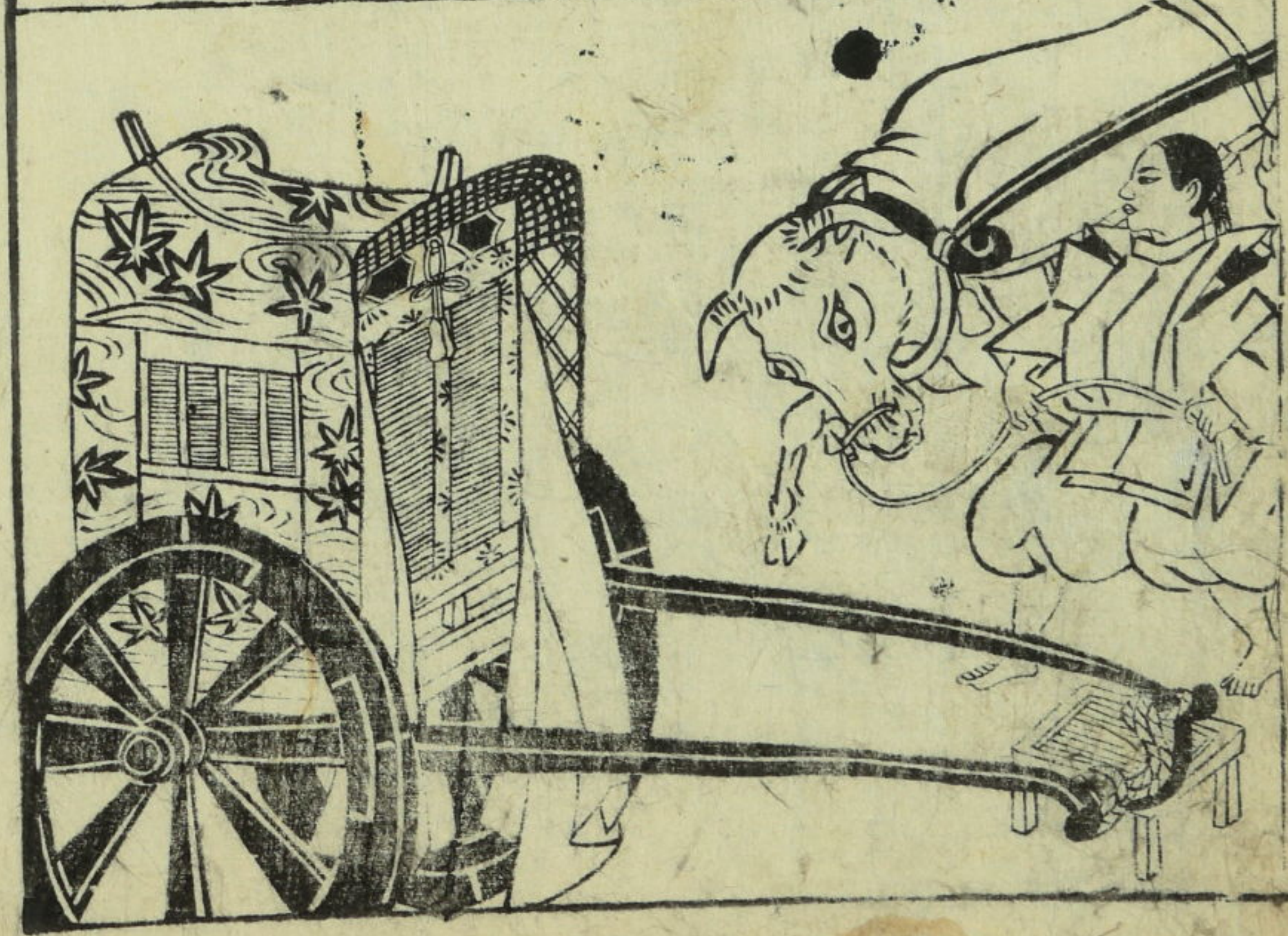
ぬる○席縁或白縁小方黄少
 加塗縁の地と胡粉まじり摺
 と或或青海波と或或はま又と
 狸狷たも○筵黄土具或合黄土
 朱すみあめめと虫こも又同
 ○葦屋合黄土の西より朱すま
 今○檐の周の點々よ以○瓦屋
 浅の黄くまねわいらう挂或纒細
 彩ぬとまー○檜皮菅朱よと
 ぬるぬり檐の方へとせ筆又の如く
 黄すますべーと○檐周の浅の黄



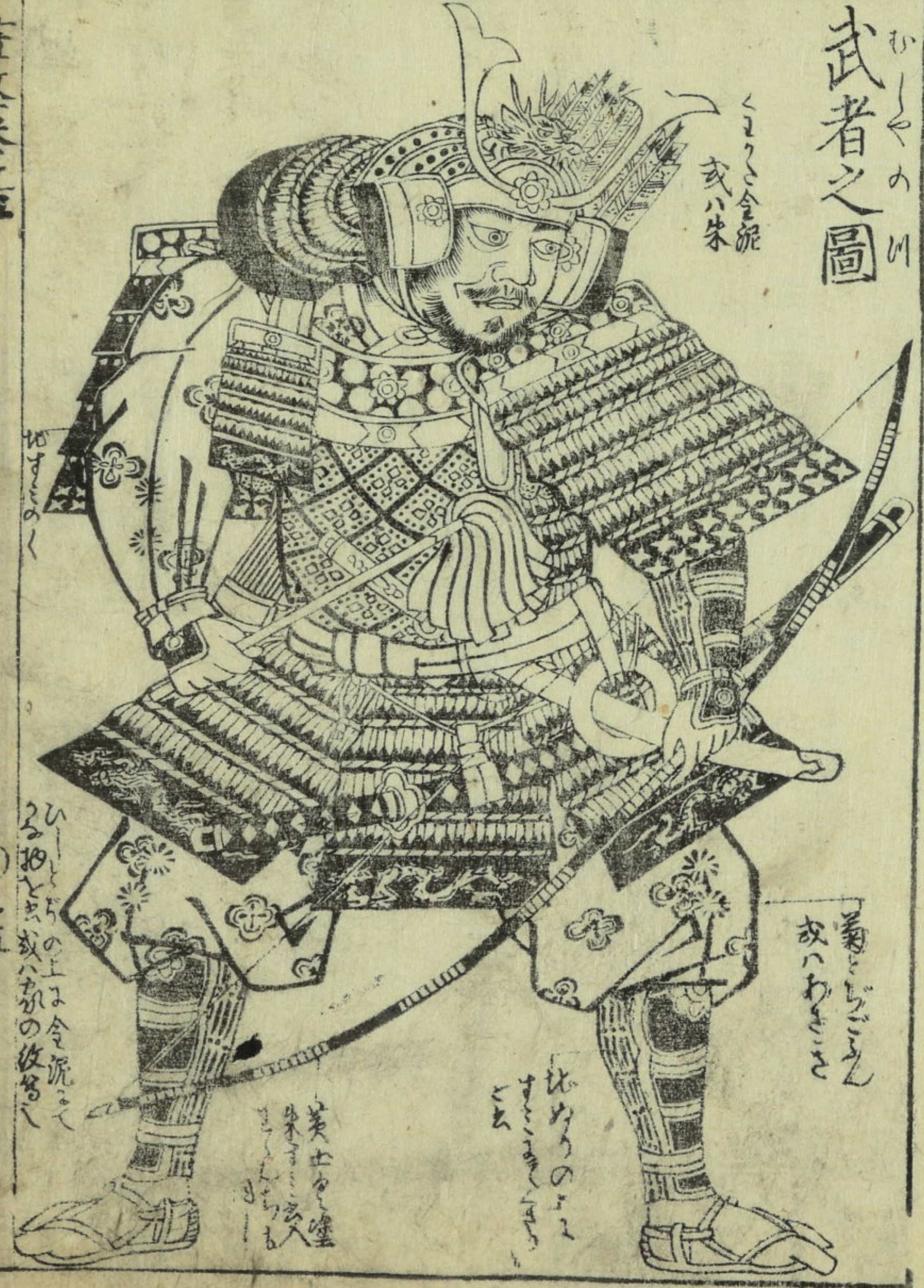
○磚とら罫はし入いれぬく去て間と隔て淺は瓦を
 とめり総括了す書き置きる或地と涉る
 葱に走くつるこにまは袋と袋を
 或はちとめり柄拵して括もり

簾

地と白六子者炭少一加へ塗て
 上よ二線を用て界入りぬく物と
 曳り或は中汁みくもとまへ一線に
 何れもも塗る章ハ木成るを外
 何れももまへ一編らる糸ハ朱に
 て所く竹第ハ炭少を用て星



武者之圖



くまの金泥 或ハ朱

着たての 或ハ朱

朱土の塗 朱土の塗

いしの上は金泥にて 或ハ朱の紋

甲冑 畫家子描之彩、所のちれ多くす。○緑まどぬり
 赤の汁、せらとと去。○緋者、よのち、成、成、群者。○朱、よの
 調脂、福も同、或全。○赤、黄、よの、乾、殿。○黒、具、よの、澤、雲
 或、福、の方、と、赤、雲、ぬり、曲、れ、け、す。○藤、黄、具、よの、福、蛤
 粉、よの、浪、泥。○調、脂、具、よの、生、燕、脂、具、よの、同、一、氣、燕、脂、具、よの
 令、泥。○丸、瀝、の、腹、ハ、革、よの、黄、去、を、と、ぬり、赤、汁、よの、紋、を
 本、紋、の、中、子、朱、緋、燕、脂、具、よの、赤、入、る、又、蛤、粉、よの、赤、輪
 と、星、ハ、ひ、と、お、ら、せ、佳。○曹、吹、返、と、眉、庇、ハ、黄、土、を、と、ぬり
 紋、本、と、一、但、一、定、あ、る、す。○筋、金、多、ハ、泥。○菱、綴、ハ、朱、と、漆
 して、作。但、す、ま、の、方、よ、
 同、一。○本、成、の、鑑、子、ハ、總、角、ぬり、庸、土、ハ、櫻、子、著、と、ぬり

○四家の外、ハ、源氏、黒、平、家、赤、原、明、矣、橘、黄、也、一、家
 の、統領、あ、れ、を、用、也。○緋、系、子、因、て、色、と、没、く、色、と、以、て、名、を
 稱、し、古、乃、鑑、ハ、た、の、脇、不、鎧、受、の、板、と、云、も、の、右、乃、脇、子
 小、神、五、と、云、
 ○緋、威、地、を、
 紅、周、ハ、名、多、乃、
 系、○火、威、地、と、
 朱、子、ぬり、小、札、乃、
 以、銀、紅、乃、系、
 ○直、緋、威、朱、子、
 一、々、紅、中、系、

武 者 後 背 圖



畫家子描之彩

武 者 後 背 圖

○系緋威 金銀の小札子取の糸 ○赤真威 小札子取
 朱糸にて萌黄糸 ○山吹威 玉糸黄糸の糸 ○金拂堂威
 金の札子黄糸 ○小梅威 啄木子為取を交る又白糸也
 おし赤糸と白糸を云成有二股の糸を白一押二股也
 浅紅梅堂二股の萌黄 ○卵花威 白糸よ廻と萌黄
 乃糸よ成白糸と白糸又上二股白糸下と浅黄も
 ○白檀威 全白檀也 ○紫藤威 紫糸と黄糸と紐交る
 ○藤系威 淡紫糸 ○啄木威 合糸にて桐麻摺也
 梅子折交る糸と云と糸と紐交る ○鵲威 玉札子取
 葱糸 ○葦草威 沖糸草にて包也 ○黒葦威 玉札
 子取糸 ○空色威 玉具足子深縹の糸 ○玉糸威

金の札子取糸 ○洗草威 鯛丸や大荒目鑄色不為
 浅葱の糸又浅紅梅の糸 ○洗糸威 惣小札の澄之又全
 小札と糸と糸 ○段と威 糸との糸と紐交る ○
 頸威 綯を草と糸との啄木にて交綴也 ○肩白威 肩
 と白糸よ成 ○肩赤威 之肩を紅糸 ○肩白裳紅 肩二
 股白糸裳ハ紅 ○白糸威 白糸一色也 ○品白威 白糸
 子取木を交る ○揚梅桃李 濁糸と白糸を交て紐交
 り威也 ○間色摧 糸色の外間色を用也 ○緋黄威
 萌黄糸にて緋啄木の糸之又白糸を萌黄糸と紐交
 ○金裳緋 全小札子取三股緋糸と糸 ○紫裳緋 也
 此糸にて裳草摺と緋糸よ成糸の所鑄と ○玉糸

紺 五羽より下二段を紺より○ 霞濃 何の色まで色
次第に下と濃と ちと介ねあるといふとくく死

違ありに

総角 色取の朱までぬり丹をすむら半は紫の半まで

主位の糖は色とりと塗同具まで半は

強腰當 黄土をまて塗朱の雲まで括とすむら半は

扇 片面の地と朱よりて金の月輪をぬり又片面の地金

して朱の月輪をすし要は丸して中は腕黄の穴を

緒の長六寸骨八寸或十六寸あり上骨の半骨より

透あり透の名を祿こまると云

繪 不釣の製作は中舞と同じくは或は白糸幣八串

赤繪の時の木地と羽の腕黄の緒乃穴とて串のふり二
寸までわく魚一筋舟の穴に串れす急より七分或一寸法
は紫草草蒲草草草乃類をび一寸三分腕黄の法は
赤緒の色定らば紫の脚のすし一長三寸六寸五分
柄より三寸二分まで法は魚一一方乃短ハ一寸二分

草草蒲旗

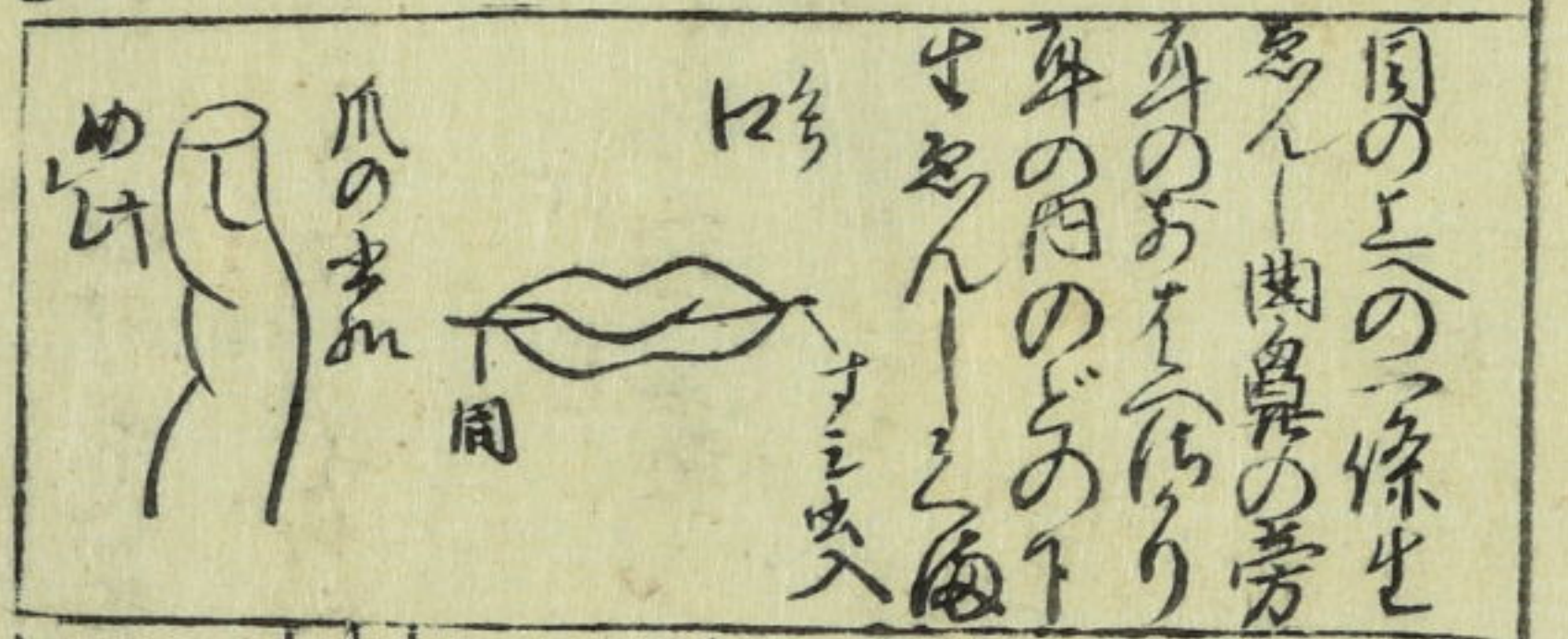
端半は尺小児の戲は旗をつるは立るとや糸帛と漆部ハ
紙より描く是と旗繪と称は先鶴亀松竹を描く鶴
は淡墨をまて虫おしんを用むとて、白り後墨曲とて
凡のわりと松馬のわとまぬく一とひは半瀾とて吉人歌と
描り一面は貝を塗はそと併合黄土よて曲より朱の雲

よくくくくくく 鎧武者なりといふ者 摺社なりと云ふ者 ぬり
札も一筆もづよ申命一 或雲を氣無脂とてぬり 或ハ
あうあいのらう雪の水陰をよそあふれ 菱餅と
始より角は孔をあけて 壺は丹を入る 是皮にあ
らうかとも外は彩のおとくす 命一筆もあふれ
つういふく

人體 好色 春畫之法

師の曰九人の辨は曲とと教と云其氣を圓と云ふん
かおたり皮膚をぬるを面具と稱はぶ 丹と云ふを
加の老人は丹を玉をよ一 申命は丹を増壯をよ粉を
よれ丹のよめよとく ぬり同くくくく 或ハ朱と云ふ

ことあり 羨かふ
ふらふ人をぬり
生るべしぬのお
とく清くてもま
つまふん 一のま
括る小四へ寄らぶ
之は丹少生 腫
が加てぬる面
くはと云ふは鼻の
胞の上下 顔か
ぬりて又深きぬり



のまねの鼻の旁 耳のたお 髪胡のあふ 起耳の内 喉の下
ゆけ 低と云ふを 髪と云ふを 目と云ふを
ぬりて又深きぬり ぬりて又深きぬり ぬりて又深きぬり

淡墨を毛と申す人をも淡くぬり厚く申入る○傷の
 顔 淡墨とぬりしを乾澱あらいをくる或は淡葱とぬる○月額
 わすれ白色○は朱とぬりしをゆりて申とむらぐらけに
 又左右の畔より雲と一色申入○月鳥珠くろたまと淡くぬりしを
 又淡くぬりて縁をぬりてその正中に眸まなこをぬりしを
 雲と一色ぬりて雲に好まぬくすれといや一鳥珠の外とぬ
 り人よてぬりし上脛うではぬりしをよて下脛ひざはぬりしを
 よ一○眉まゆ 官女かとの敷つくり眉とするは胡麻の油を
 紙燭しろうに貼て陶器敷の網あみを付て乾く筆を以て淡く
 とつけ周を掃はら消けす一○美今の面吾家の定法あり
 鼻はなかよく上脛うではぬりしをよて下脛ひざはぬりしを

ぐさには鼻の半より耳の方よあてて鼻はなとぬ
 との間も遠くぬりしをよ一○唇くちびる 肉色にくいろをよてぬりしを
 塗の如よ朱墨と掛回しくぬりしを電頭でんづの
 黄わう色いろをよてぬりしを○唇くちびる 肉色にくいろをよてぬりしを
 小てぬりしをぬりしを或は透脂とわ臭におは生なるんドクも用ゆ
 婦女の老若も随したがへて色をぬりしを異ちがひ尻しつの上より
 横文よこもん一條をぬりしを○陰毛いんもう 淡くぬりしをぬりしを
 ぬりしを細色こほいろをぬりしを○盡はげ 精液せいじやく ぬりしをぬりしを
 ○春畫はるがを必十二尾ついでぬりしをぬりしを蒸む色いろ獨斷どくたんは天子てんしは
 十二女じふににむすめとぬりしをぬりしをぬりしを

畫卷全卷之五終

畫空卷之六

雜類

紙前直方

林守篤 編輯

毛邊紙裏紙打様

先裏に付る紙を少し羽重にして浮石まき紙の端と磨切てく
 した紙の如すし一方ともよれ此して粘麩の粘よて粘く表とく
 此よたりの裏より水と少し副毛を濕き垂し又張る紙と此
 の横は幅より切用之を板の上にならしむて表と下より副
 毛よ水と付くつくと打かけ又きくと水と少し引て此初は切
 穿る紙を取て表と下に引たりしの裏より穿る紙と
 少し返りたるに粘と付副毛を粘付又裏紙の左此方の上下の
 角と擦て右腕の方に引し裏紙の表と上より横より引て

ろの粘と行する不のん室まう曲せて片々紙の表を粘と引て上下の
角とあえよ少くは神杖とたり此上は被かひけて上より水かけ
不て粘付るしび引るを時々の傳つたへ手に力お進すすみ皺しわに水より極分
手ころと粘に臭くさいと此田の面と流と粘たるを指さに引らる史
ぬいさひひらるるいと巻ませて又を流も粘入いるく流ながるり
打うちを流流ながれ化の面へ挂かけて乾かわく蓋ふたへを後のち焚いき水として日用は
依よる一他屏風乃上張かまの地とせたりと用也

焚水之方

黄明膠ワウメイカウ 十々 明あ焚い 水みづ 先膠せんカウと水中に泡かして
柔なく成なる時器物の中熱湯あつゆと今手と住するをまを膠カウの粘
より時明あの粘と投なげて攪かきまを冷ひやめて及および削け毛けまをたりしおま同どうへ

又比してぬりたる時とまき裏の屏びんは粘と付て極強きやくなり
より付て中に風を吹ふきりもよし〇たりしを数かずに水みづを合あ
完かん又紙多かみハ七しち句く席せき風ふうハ八はち句くよそよし〇又方膠かたカウ十々
明あ名な 〇圖繪ずゑは交まハ膠カウをまき焚いき水みづと一いつ冬ふゆハたしす
多くはるるかしとむし

毛邊紙假張之方

膠カウ比ひし方かたたりし表うらは水みづを引て返かへして裏うらのまじり粘と
付て又まじり中に水を引てあまよそ引起ひきおこし極強きやくは押おす水みづ削け
毛けと引て搦なりたる史他た紙かみと切きり裏紙うらかみ乃粘カウの左ひだり此膠カウの端はに
付つき入いり後のち剥むりよ是こゝより筒はと入いりや強かて後のちにらるるまじり
心を分わけし

粉本紙様

義法紙より比として堅くきりくときまき一二夜も煮くし
とけし目と強入敷伸ここれとねまに板乃とよ蓋他のり竹

焼筆

其植乃木と葉乃とく削り小と方に火と付原こいを埋うめ火を
附用ゆ又紙を包も消く之焼筆まてり法と怪く描て恰あは好
足合あは好又委く付てぬまてけ掃落ふきおとしして臺たいまて筆を
描致て后のちねまて能くくへ一畫史くわしは松まつ筆とめり捨木と用ゆ

裏焼筆

描しと思ふ法中の裏に焼筆と付て是と画紙の上うへに蓋

上より好筆こうひつにてえりバ下よりつくりりきとあはうて描く

基盤割

是ハ大なる圖と小すからう又ハ激いさと圖と大よせんともふ時必かな此
足合あはこれものこそ時彼あつも罪つひのつひり描派えがとも同く
割て其品とん合て字とこそ罪つひの寸方ハその時の大小おほは臨まひ
罪の教しよは同教どうきやうすれは是と基盤割と云地ち採と乃時なりときすか
地採ちと或ハ屏風の畫えかるとんてうれを少く紙かみを字あ字あ又ハ小を
見て大よすから底そこのちや

念紙作方

及紙あひとも面紙めんかみともをあ先ま掲原紙かてげんかみを柔やわく揉もて皺しわを耐しの燻くわん探炭たんたん
と細糸こほいと酒さけとひてあれと煉ねつたぐりして耐しの毛けをあ付けて揉もさ

紙に付て目よがし描へ紙の上は層粉の貼る方と下は蓋垂て又その下に粉本と重て竹篋にて推写しそ下り写しとて記して描し是と念推と云

蒙筆作方

猪と寒中の米淇を浸し毎日水と易く六七日は及べば鉄槌を打碎し和けて筆此管の取を擇んで芭蕉の墨陰の岩樹花葉をそそり妙なり

朱印色方

艾をよく揉て寒中の清水を曝し目よがし又ゆきて水で煮去白にかし朱と蓖麻子の油と入て交合し此朱とるの播本ありすり黄色と云て用と底を沈むると云又黄鰐尾砂

胭脂を加へる方とよし

滴推方

屏風などに滴と貼る先地は丁子の灸湯をやりそよ海粉と引て滴と貼る滴の廣より少のべて紙とより明桃の油と淡かき塗て滴の上は蓋を貼つてわらるは是とふのり引る上に推付るは滴著るを換てつふは是の一方より綿に入垂て是より推し下る時にねまき又地を灸土をやりて金の滴を貼つるをそわくは又粘と引て二をよおとす○貼滴の上は畫と本は油乳と云へ紙と表の上は熱灰とをそく熱ふふして油乳をなかり

公伯盤作方

鹿或ハ鹿の皮と利田方みちすかどの板此面子奉書紙
とのとて重そとと幸よて海を周と粘りて付利也

箱切方

箱盤の上には箱を一枚作り蓋て竹刀とみくす又字子裁
ぬきく拂ひ箱に箱を師入てあて

師作方

箱の節とま切て大中小の目をもろとてよ作蓋て板箱の
大小よ終てお魚の目乃箱よ入て振る

砂子振方

地よ海箱を引るとに砂子と師よ入てありあきを玉乾と家
時箱に或ハ古紙ヲ振毛字子紙ひころもようし(銀箱)

を押しとて子懸水とを液引はさひす

泥引方

金泥と粘りけし付て地皮とするこい時を墨の地引を
せぬとてあて

彫塗

是ハ墨をそのとてゆつて墨れとよ挂るとのよ墨と生
て彩とすりこし

殺塗

没骨とすし是ハ墨をといまだてて全体子挂て彩と
ぬきこちなり

退塗

墨色のこまよりわくり通てぬるとこ胡粉とある時必

隈捺 曲のまもも

是に彩色とよむり時わくりて一方とれ滑くこころ時と
二ふ拵たりまのあなる毫と落筆といふ

纒縹彩

是に同じくこれ弦具まで次第に濃なること初め宿女の
袖にかしる重間よりし縦に朱重間の時にし胡粉ぬり
曲りけしつまに肉色又濃肉を丹朱とわびぬるなり
何れも皆是し準じて志新會

拵器

凡此ぬりして端と拵と多の同をを利し濃の卑延と

拵るなり又胡粉のくまをいふのなるをこぼれぬるなり
濃くも深くと拵里淡くと拵らぬりして拵るなりは
○朱丹肉色燕脂具黄土具藤黄具褐びぬり
生あん一まで拵る又褐と黄とい茶もてもく新液
体出でて拵る緑青ハ草緑或ハ白緑 緋青ハ群青 胡粉
ハ同をよて拵れ

繪帛張臺方

帛代大さの紙して木とめて四角は作るこころ是は紙付の
みは是紙と藁く切て墨又墨よ飯粒とぬりこころ
帛とら付てたの紙を粘と付て帛のうへは貼てよし
乃方膠地をててすし彩色とするよの地ぬりと帛の

畫の方より盤しをぬるまはひきぬるものなり表より
よるこ地とすり耐粘のこにけれん強がうしてあり、

板描畫方

膠と丹目明石粉を水と入れて地とて下ぬりを
煮去臭よくぬる人肌をこ地と大ざらんと陰をこす又こす
おふんたう

繪絹

糸目おほくあして斤織くも活白うして襷帯ふこは
墨

絹の製法はもろいやーかす地引は用て妙し和の製法の
新ちりの新は光澤ありてよく板すこころる膠の乳

あくてあり、

筆

毛おろし根つまうて腰めつよく毛を拵て割さるよー

硯

紫石青石より長門の赤間名狭の宮河より出るよし
紙

毛邊紙の官紙を以て上品とん先おれと紙て古とら
さるものよーと先おはくは淡色赤やうおよー白きり
昔おあり拵ぶる

屏風押畫

こ下と字紙の押畫紙と屏風の一回縁より押ま

一方よりせりゆきを三つに割て上流の下と下流の上とを
他この寸分上下に加へて一様の手法に揃ふるをゆきを
部より一左右に用ひ又あはれ揃ふるに一枚入おせの方と他と
同寸ありて堅へり此方を換くするなり

屏風端寸法

五丈人の時に縁乃唐と寸七八分他小縁は小縁は
外分三寸三分と寸二寸四分人よ小縁一寸四分換三人と寸
八九分乃寸二寸七八分なり

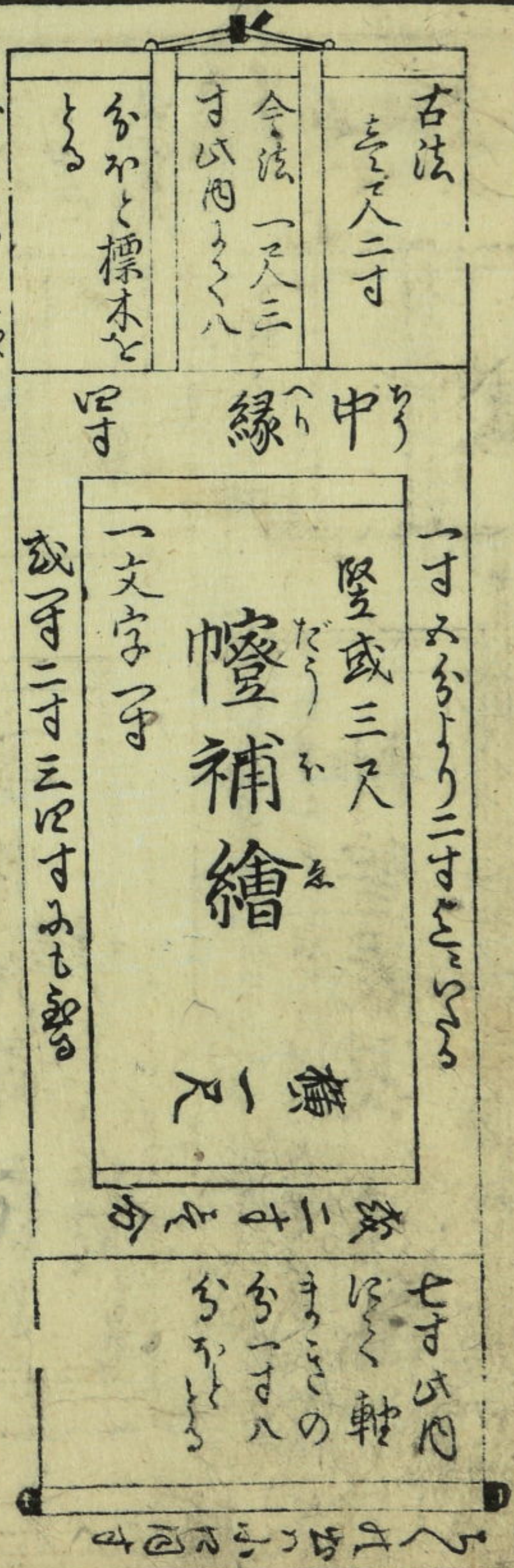
屏風色紙短冊及畫之貼様極秘傳

色紙短冊を定りけり後と定むた右と左合く押し是と
角と云四方角と定むと云ふことし又此の法なり

押を定ると云は川六ツ等もをれ下又云ふ七八半と
ゆきとゆきともひとのいおさるを紙短冊人斗方畫本
を均しまゆり色目と下れたの寸法を定めり
四寸より均しゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
四時の縁乃あらぬ御制の御陰よま草れゆき
墨畫ハ上位は推へて一六ツ之川なる画ありりるる
寸を極て遠くぬやうに寸金一と寸の中を寸と寸と
白札と色紙との寸は定むと下の寸法はとの寸
乃寸分と縁の寸と一上寸分一を加へて一と好む
の者れ大秘事なり

表具寸法定式

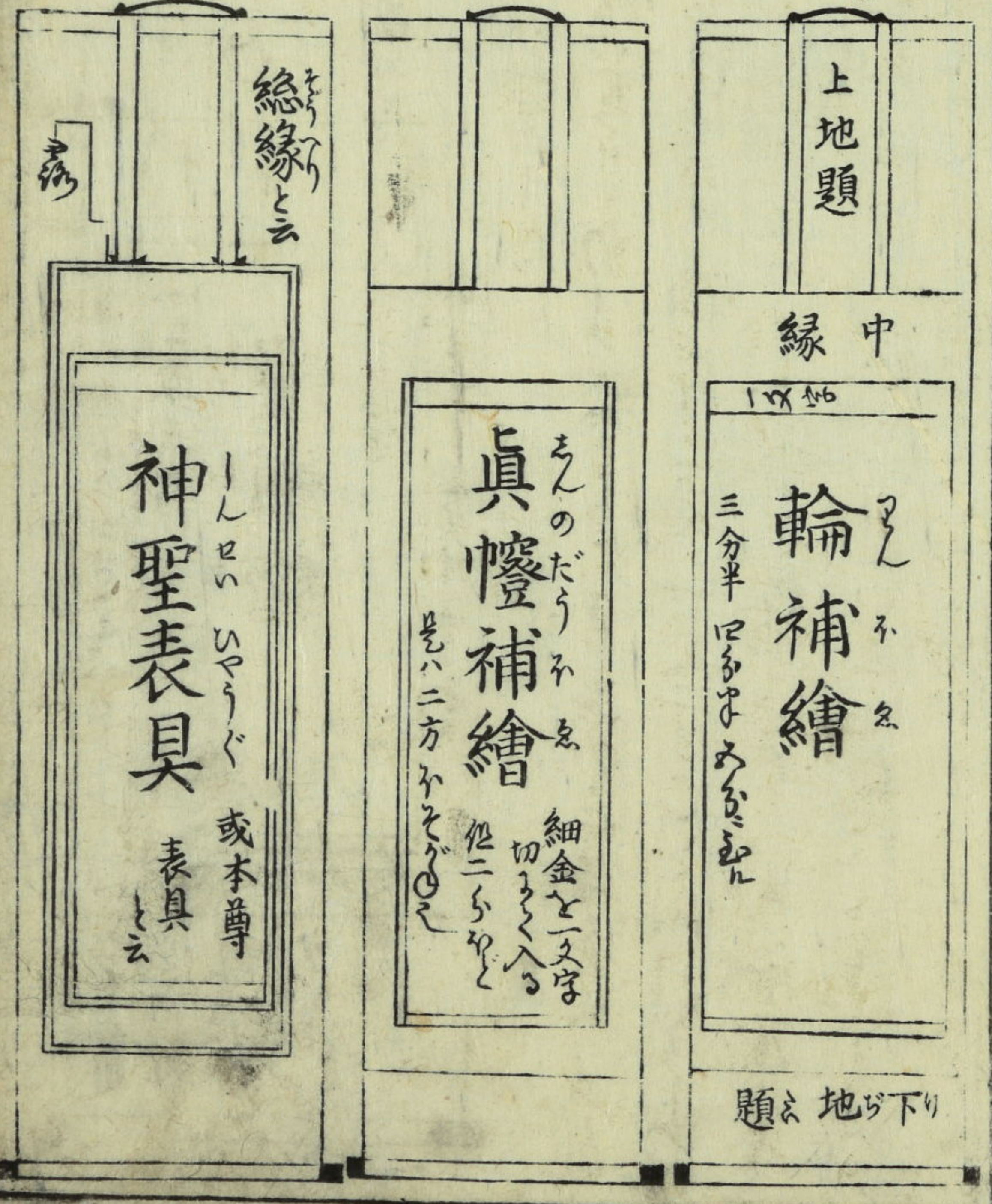
褶工之秘傳



風帯の幅六寸

絵の寸法は定まりありとも大旨換の二倍をよりし
 一文字を寸の時に伸張は寸上類三人二寸と計りて
 一分を加えて下に用ひ標本の寸を五分〇堅の伸張換の
 とたうか急と云同く換を寸五分急と云説もあつて
 驚嘆の間三ヶ所何れも同す〇堅縁おのりより作る

〇寸法は
右同断
堅へん
うらうら
つら
細金
と文字
の切ま
入る
後三分
二方細金
〇眞の表
具を
四方
細金
と云



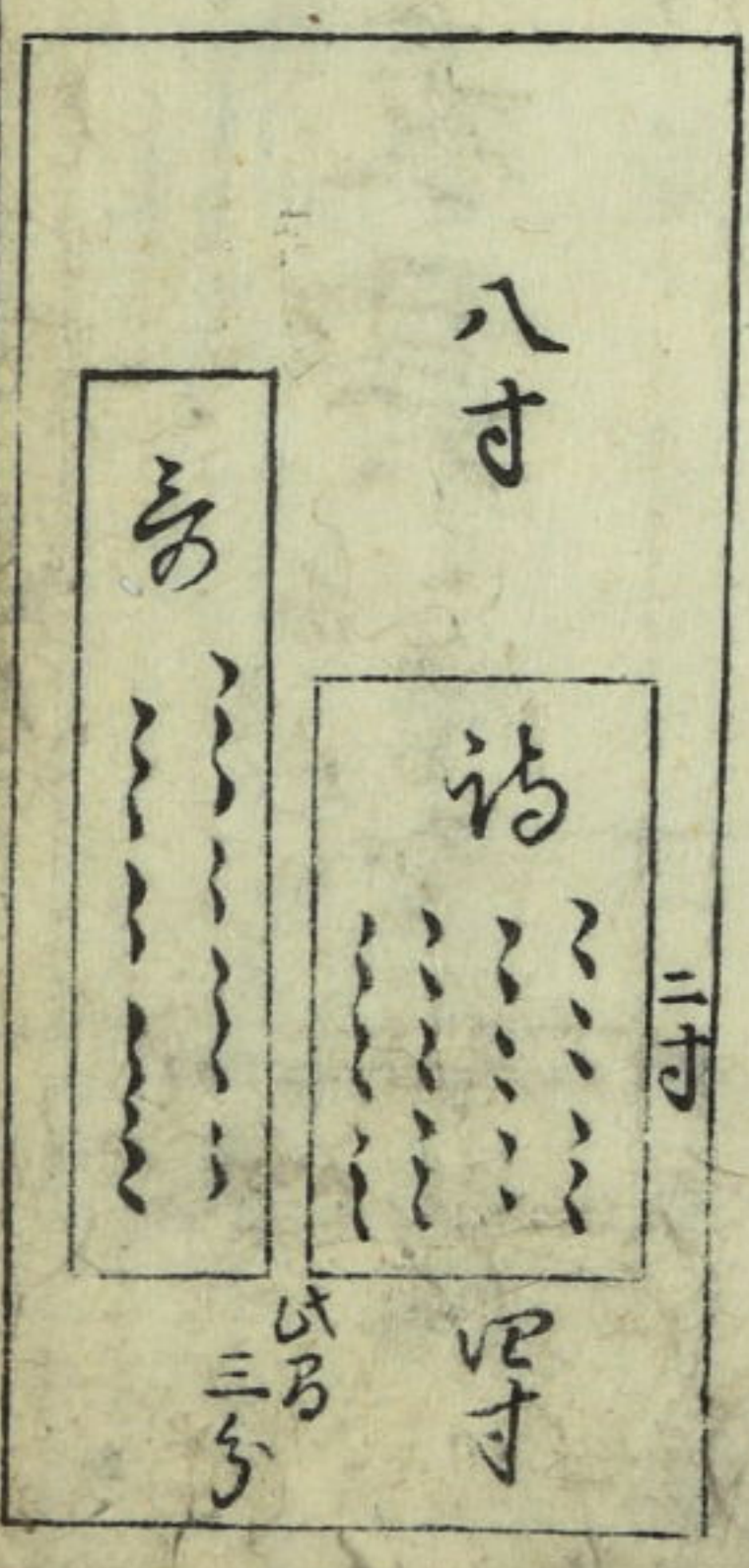
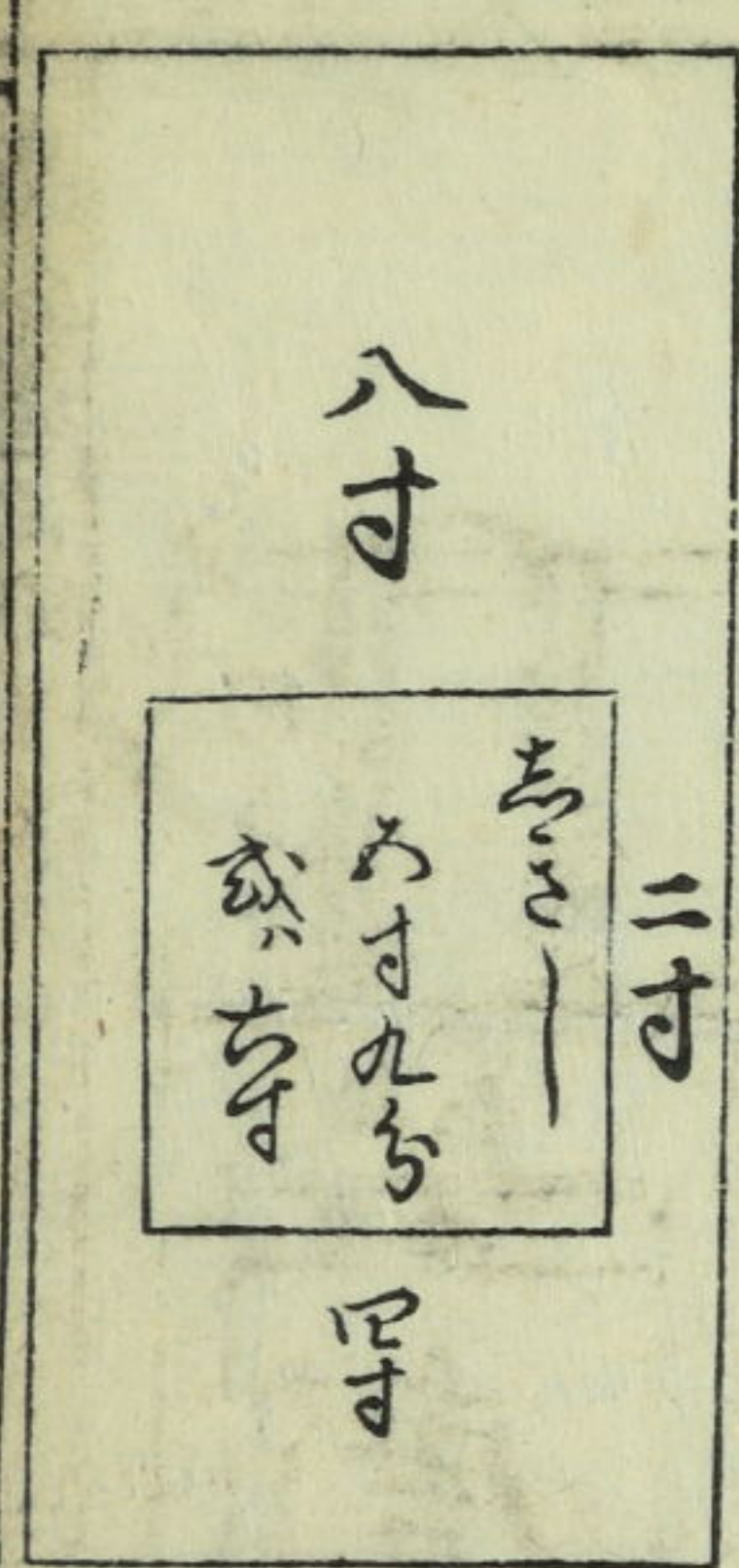
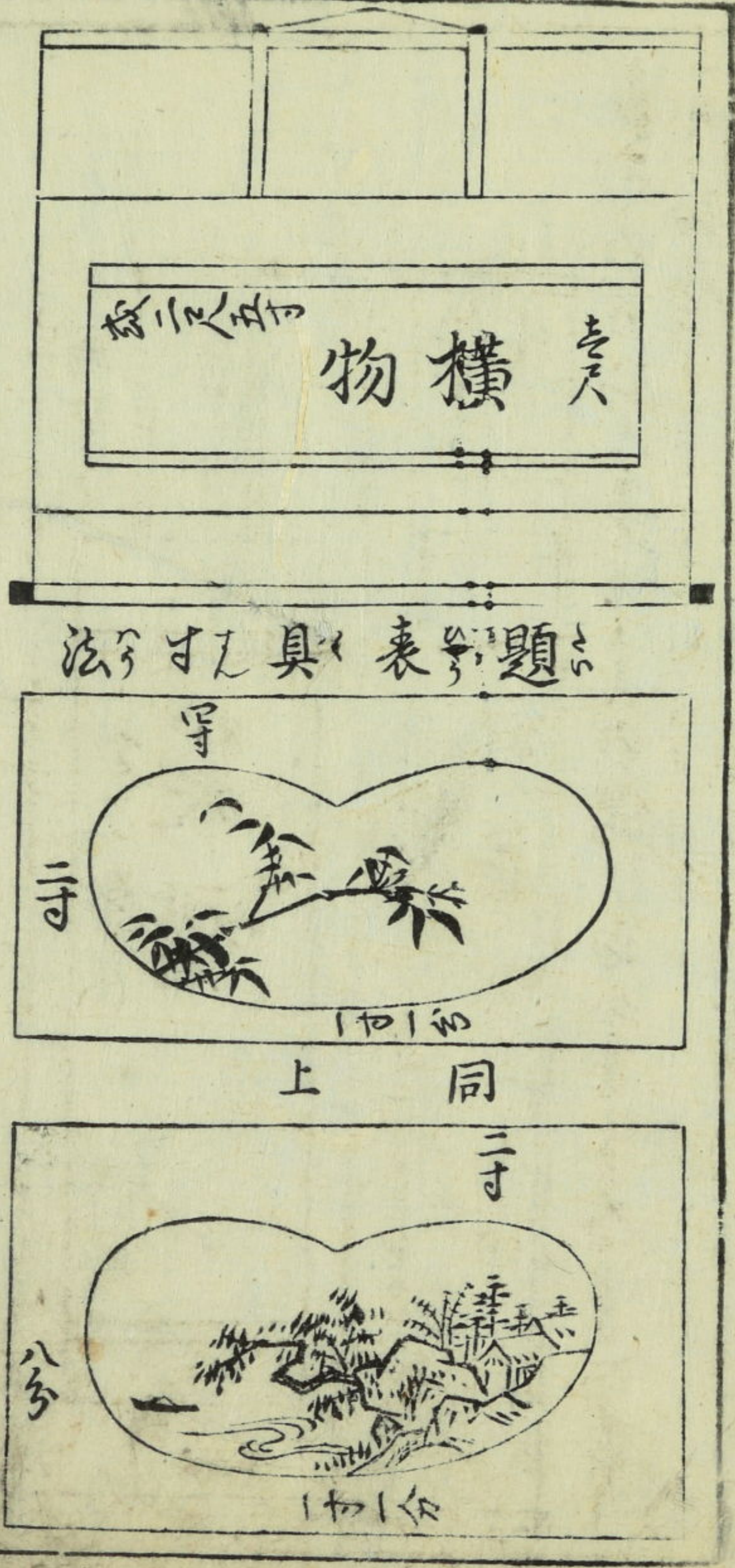
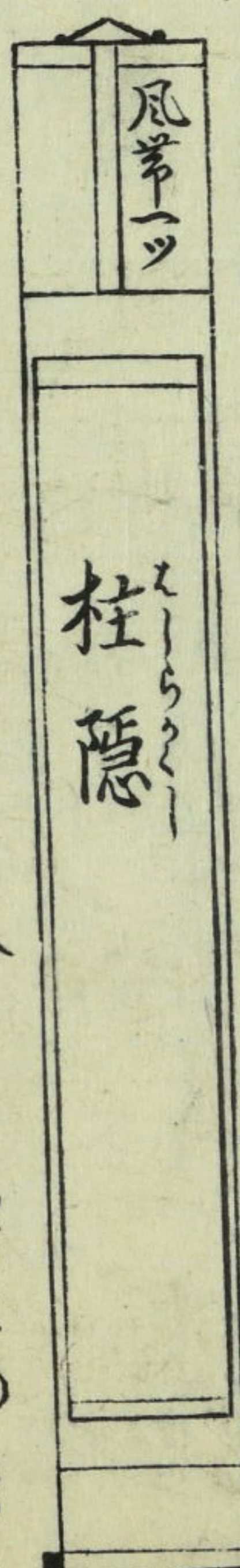
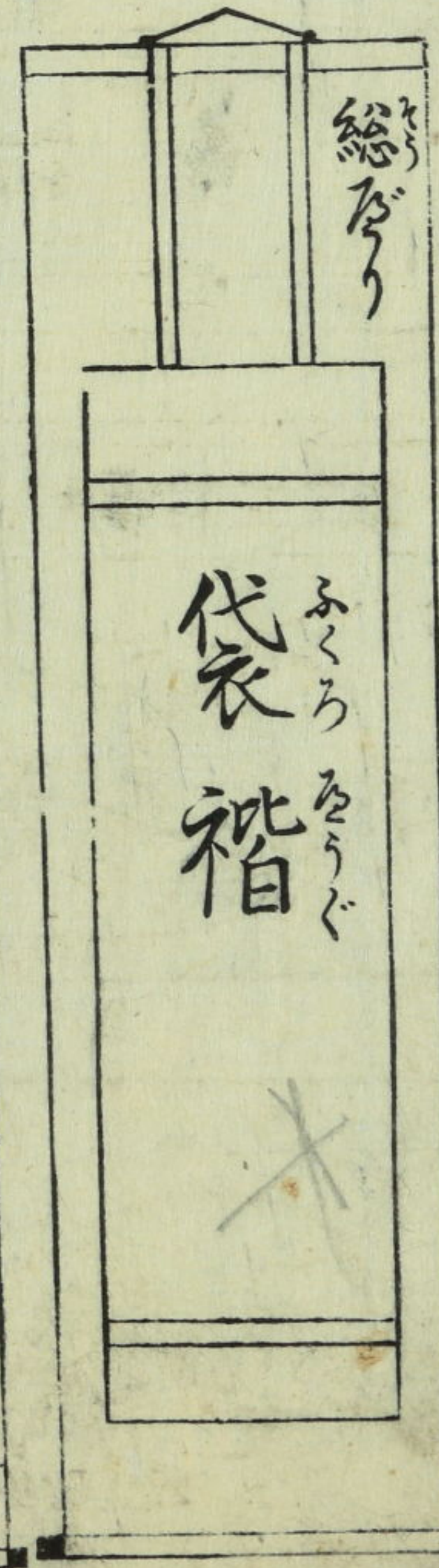
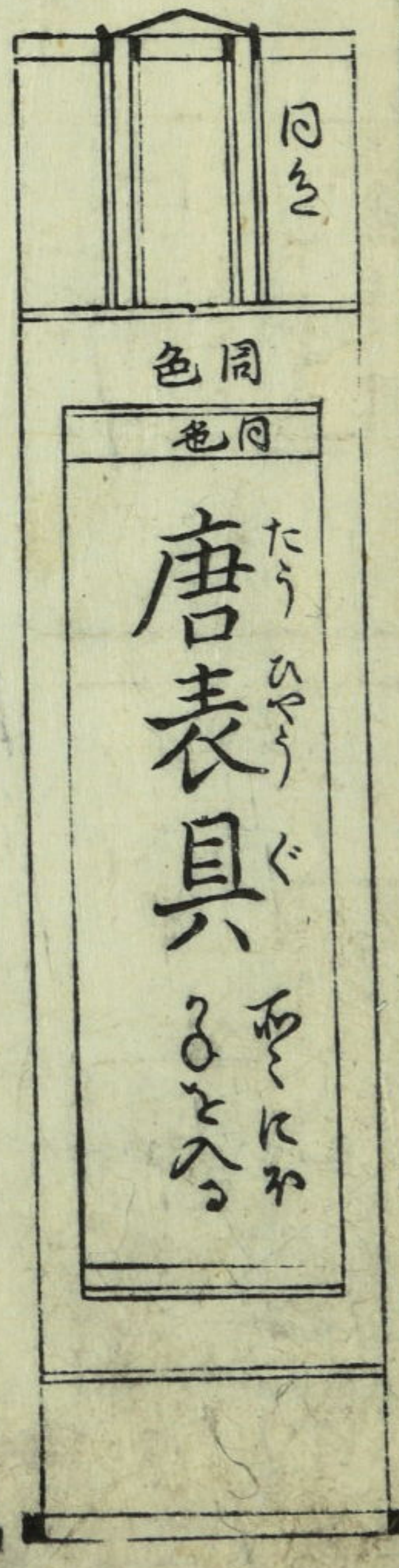
縁と云

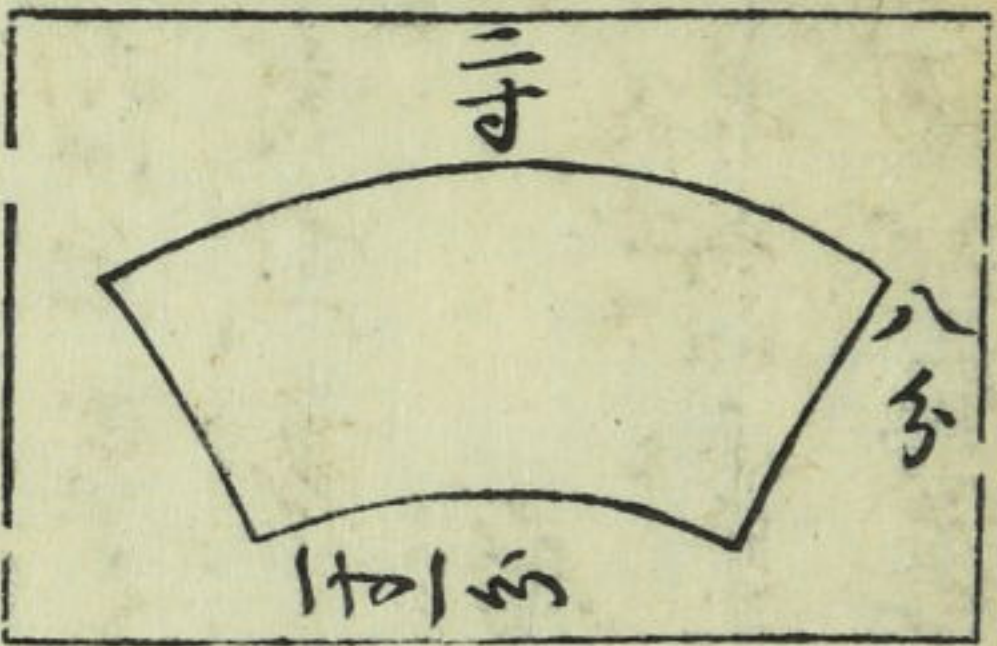
神聖表具

眞懺補繪

輪補繪

表のこの方おと多し一まの楕よ細合をこころのまかり
し細合つくるともあり





たつた寸法定式ありと云ふもかく
 らるる寸法大畧なり熱折の始好を
 以て寸法定の旨に配當してお意する
 換へてお意する

表具作方

是の紙と名を引てかり強うけ登せん紙の裏入方に
 名を付う紙を去て摺紙を用いて腐粘子と裏を
 陰の表と卵として紙強子身を離して紙とくさり
 扱一文字を付中縁又上下と付軸挾の紙をつけ

摺ぬ紙にて裏と折換て別中縁の身より裏
 の方へ引う〜風帯と付乾て後陰の裏を介に
 して紙強子付と下よ軸持の紙を付て〜
 又日と強て〜折て表端を裁て〜
 すり後子軸と標本を付て〜
 中表の時の表端を〜
 降風帯の文字と同様に
 付風帯の中縁と同様に

腐粘作方

冬月雪を去て〜
 中縁と表の〜

新紙をかきへー大幅物に粘りよく小幅にいらすと
一急用は麩室に入るなり

屏風張方

先釘とトてつご紙をてくる四角は神板と細らう
又氷むりとも一強液てぬとあ魚一はまのど響
骨と粘と付一はまの押へて指を截標つ
をすべ一板と間よとさ骨之厚きを余標ついの紙厚
いささうとと合せ紙よととれはととらと響
とささうて切は浮むりとする年むりな粘をつけ
骨まらつまば浮むりのとは表張をすべ一トの一段
をらうて屏風とささゆまてくるこねをせ乃

ととらるなりは是よて重表六用之裏は浮張の一二
筋らうて粉地とすト方ハ白聖百目墨とみみト右細
束して水まで移り粘を加へて引へ一はまこらと玉
と考て新よと摺と加へて摸と付へ一

蝶尾寸方

み尺の屏風たうんと下とみすうて中と口つとら凡
六尾より大小は依く又是なり

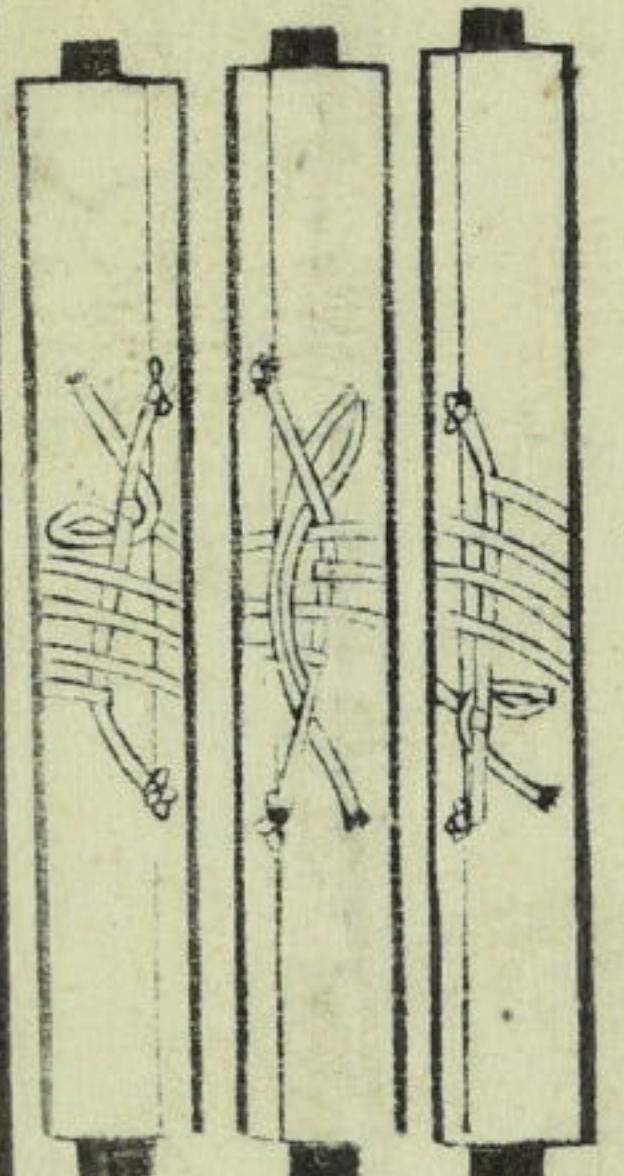
縁階方

古法の一文字通と云はせん壁を付て摸と摺と一通に
為流の留と云はすしうすと切合より故よ出合た云こ

軸物巻切方

秘傳は曰はん軸とらうぶ切うて空奥乃紙の紙のふ
 と能のふと能合を折て折目よ粘と付く軸と付く
 別は巻紙乃指子少切る紙を吹く小口と堅き付く
 軸とつ方より指入をくはう一分斗内よ押入るは
 軸の小口と目高より切る又一方もかくの如くして何
 も空方より軸本と突出引抜て是は粘と付く
 指入

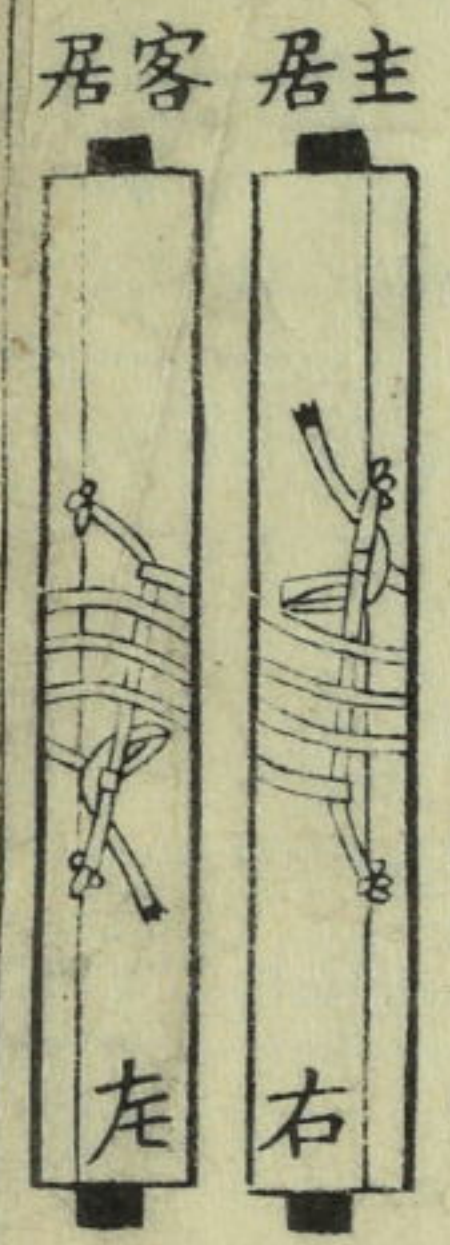
掛繪三幅一對之事



掛幅は上中下とれてを結と解
 下に置て風帯とかとわを掛
 軸と指りけ糸は挟ておあぶ

床へ入り釘よりけて軸とさうくと相ら一衝とて又
 右乃方とおの如くかけたたとかけおさかを結ハ三幅
 左乃印の方へ引へ一〇とづ一極は左方よりつ一を
 結ハ右乃方へ引候を出一たよて結ハ止るは印乃
 わる方と次また乃方とつ一を結ハたの方へ引よを
 出—右の方を結ハ止る別印の方と次は印とつ一
 を結をとら正中へ引也—印よて遠て三川也—わを
 をこの方へ引くはあよ今も同—

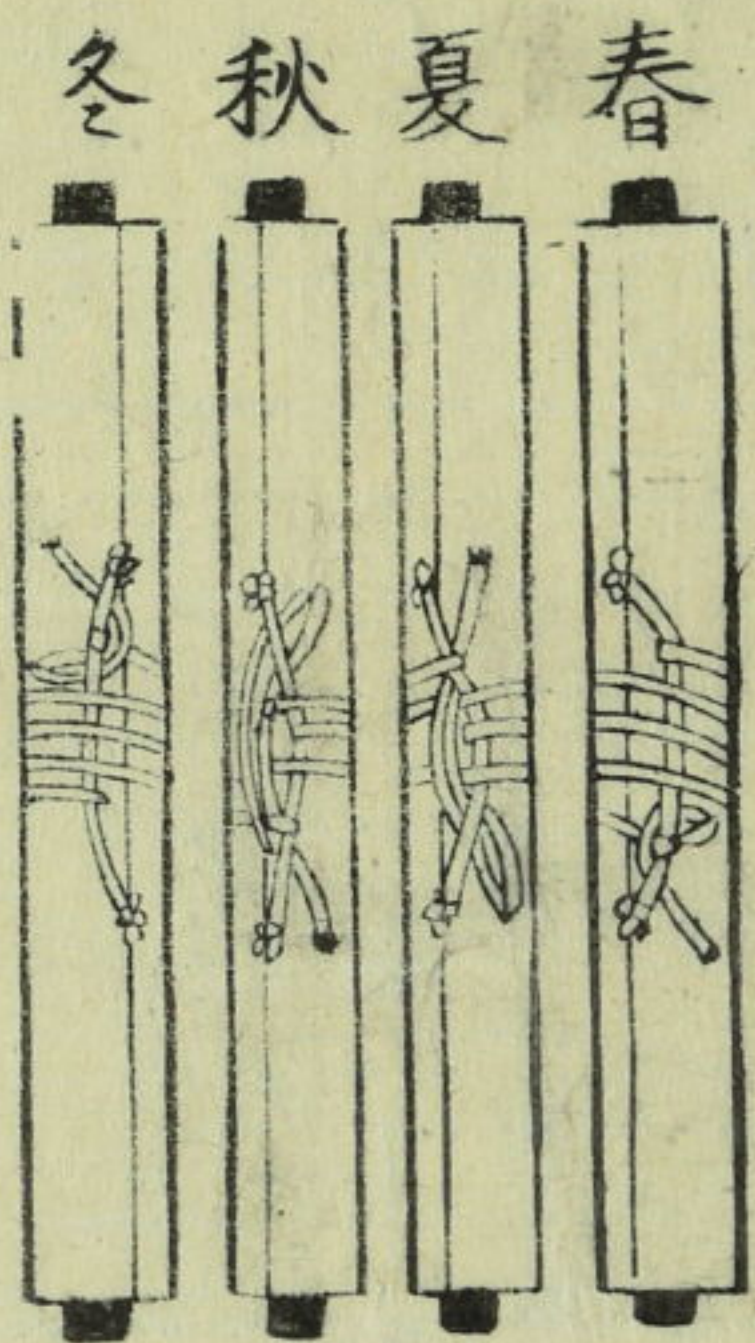
同二幅一對之事



掛幅は上左の方よりりきたは
 左此方より掛納るを結ハ印乃

方へ引へ——○こつし極ハ猪子よりをこつし——印乃方へ
流とこつしをを出——図の如く猪ハ止致た上在ま
方も同下の方へ流と行末と猪ハ被む依て致入る
た又流乃止り加とまもよと以てんたと致こ

四幅一對之事



掛極ハ中の二幅の内客居より
初め次よ至極とかけ乃服乃
客居より掛主極よて掛収こ
○こつし極ハ猪のまおより至

こつし印乃方よりを出——こつしとを収又服乃
客居をとこつし——流ハ是と印代方よりをを同おこ

此よ中の主極をとこつし——印中へまこ流を引おしとめ
わふとと印乃方へを引——此よ客居をとこつしと仕お
やう同おたり

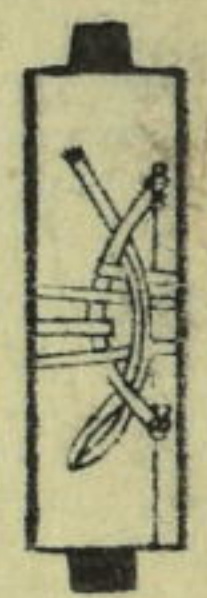
大横物之事



掛極ハ客居と
とこ風荷と

かこ掛極ハ客居と流と被極入るま中——かきと在
の旁と氣又猪子れ方と致中の方とこつし——此方
乃新よそ被合するこ○こつし極ハ是とま中——こつし猪
子代方をとこつし——此よ中とこつしとこつし致三行計也
こつし云こ巻緒止やうハ右よ家以

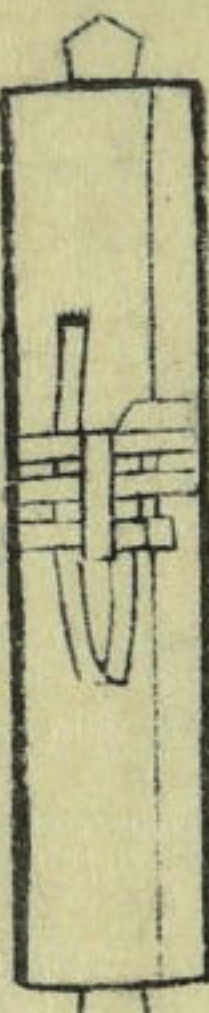
極隱之事



掛つ一ハ草一ハ幅物と同ー其處と

伸きとの同

出物結方



圓の如くならしむる處へと所と指

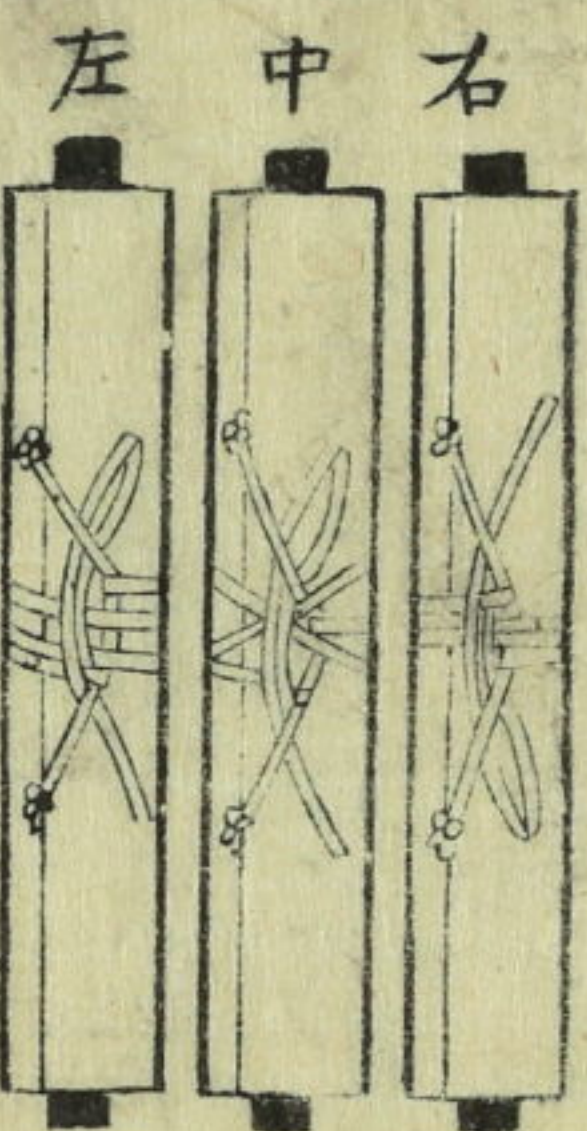
しておさへ緒を捻じ加うがれを以て押進一わなの
ことぬおよみ一節を向く引出と○まゝまゝ
を引つたるハ件の一節より緒を引かんとく
るに結を裏紙の内子の進下に至るを又好む時
緒をくくるとをすしてえれ如く考へてぬ一是しる
る一なり大抵上巻の返しは一人のおうてを

掛圖子仕せよ
ぬへ



又方緒はたの方より引

三幅對秘方



緒いたいたのちと以て引かいたる
子と以て引ぬく申さひも中なの
る方と扱は結を裏紙の進下に至る

および返さ右ハ右よ返さう又返へ七巻まハ一引ひぬき世
草ハ三巻世にけが

掛畫可人渡支

廣差よ入て伸きよ後す下よ至て巻紙の
絵のまを扱ハうとさめの方と扱ひ人の方へ下は扱は

畫卷九人の置る所ありし三幅の時ハ客位ハ南向の
吾おくして坐し

同床掛事

三幅の時ハ中をうけ次は客位次は主の同をて納る
よハ客中主より

同見方

書院ありし同を二人位と通き座せしとハ三尺中客
主と見終然

同床置方之事

絵の床北ある方に障子添くさけをうしおよし
ありし

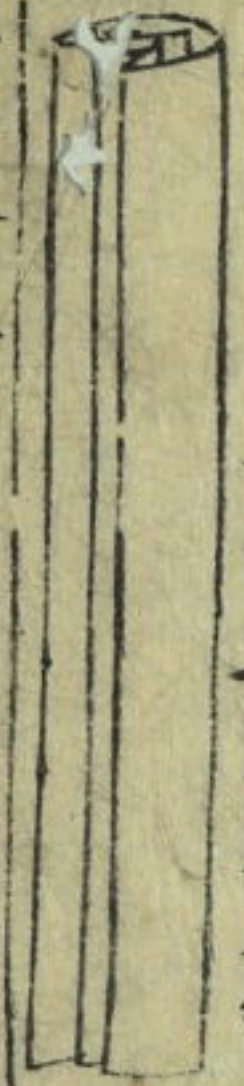
同床掛礼

床に紙を一張しとたの是を床の上まわけた
子紙を掛け折釘よかけりしと添く障子一畫と挂
時凡常飾りぬ極ます

同主位客位

たを客位たを主位と又客位よりしてんと主位
と定ことありたしと客南より入る家ハ三幅の時
南向の絵二幅の時ハ北ハ主位南ハ客位ハ南向の
是より反り

同掛畫掛字包法



紙と二をうして一方の端と折く

又外へ折出し又おの増よりとなくとて申す畫と
入る包心巾を名引くと増より大小の陰の太し陰入

白繪之屏風

嫁入の時よれを月の陰ハ鶴亀松竹或は鳥と如
粉よて描銀の拍子と月の裏摸ハ粉地子雲母と如
白一縁ハ白帛ふらと白塗より

享保六^丑歳季夏吉且

浪花書肆

伊丹屋茂共衛 同 新兵衛 連刻

